

---

# 阿弥陀仏よ何処に

ソンミン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

阿弥陀仏よ何処に

### 【Nコード】

N5114C

### 【作者名】

ソンミン

### 【あらすじ】

日本仏教の歴史において、一大変革がもたらされた鎌倉初期、法然の弟子で、後、建永の法難で壮絶な殉教死を遂げる住蓮およびその周辺の人々を中心に、愛、友情、そして信仰とは何か、を問う。

## 第一部第一章

慈円は朝早く目を覚ましたが、いつものようにひどく体がだるかった。前の日に後鳥羽天皇の催した宴会に招待されて、それが夜遅くまで続いた。少し前から何かしら体の不調を感じるがあった。毎朝目が覚めても何か頭がうとうととしているようだ。健康に自身を無くすときもあった。しかし、法衣に包まれ朝の勤めを終えると、その頃には体の血の循環が促され、精神も研ぎ澄まされ、体の力も戻ってきた。法堂から出たときには生まれ変わったように才知と元気に目を輝かせ、みなぎる活動力は、この比叡山でかなうものなし、全く天台座主の名にふさわしい、”仏教の最高権威者”であった。

比叡山を降りて都へ行くことは滅多に無かった。ただ前日は、弟の九条兼実が昨年閑白になったこともあり、続いて兄の自分が今年建久三年（千百九十二年）十一月天台座主となったことを後鳥羽上皇が目出度く覚え、宴を催されたのである。本来仏の身に仕える自分は宴会は遠慮したかったが、帝の思し召しである。断りようが無かったのである。

それにしても、宴会の席は退屈であった。七月十二日には源頼朝が征夷大將軍となり平安朝までの貴族階級による日本の統治機構は終焉を迎えようとしていることは、誰よりもその貴族たちが一番よく知っていた。それなのに！

慈円は宴に集まった貴族たちの覇気の無さに怒りすら覚えた。彼らは挫折感の塊に過ぎなかった。新しい日本をどうやって築いていくか、いかに武士階級に対抗するか、あるいは協力しつつ彼らを利用するか、そのような話はまったく出なかった。無論、兼実が頼朝と近いこともあり、うかつにそういう話題に触れられないことも理解できたが、明らかに無力感が彼らを支配していた。

弟の兼実にしてもそうだった。慈円から見れば、彼は頼朝のご機嫌取りに過ぎなかった。

慈円は目を瞑り昨日の平安京の町の有様を思い起こした。大路はまあまあの整備がなされていたが、大路から垣間見る小路の有様は悲惨そのものであった。打ちひしがれた人々であふれていた。どの人もぼろをまとい、栄養は明らかに不良で、骨と皮ばかりの有様であった。

これが帝を頂点とする日本国の都の姿とは。

慈円にとって平安京のイメージは、曼荼羅の世界そのものであらねばならなかった。秩序、平安、調和、それが帝を頂点として形成される世界、その都があつて、都を中心に日本国全体がまた曼荼羅の世界を形作る。無論、帝の上にはさらに仏がおられる。仏法があつて始めてこれらの調和は保たれるのである。その仏法の護持のために比叡山延暦寺がある。慈円の自負がここにあった。

この荒れ果てた都を、日本を仏法の加護のもとに立て直そう、そのために座主として一身を投げ打とう。そのために自分が、延暦寺ができることは何であるか。座主となった今、自分の意のままに延暦寺の僧たちは動くのだから。

慈円が、このような感慨にふけていたそのとき、襖の向こうから取次ぎの者の声がした。佐々木盛高が昨日の不祥事について再度お詫びを直に申し上げたい、と訪問に来たと告げるのである。

慈円はすぐに行くので、盛高を待たせておくようにと言いつけた。佐々木盛綱は近江源氏の首領、佐々木秀義の遠縁にあたるもので、今は故あつて慈円の下に身を寄せて、警護の頭領として働いていたのである。

源平の争乱が一段落したとはいえ、まだまだ不穏な情勢の下では、警護を堂衆の僧兵だけには任してはおけなかった。木曾義仲にはかなり手洗い真似もされた。そんな経験から、武將の者を堂衆、僧兵たちの訓練のために登用、さらには叡山防衛、警護の責任者としても抱えるようにしたのであった。慈円はそんな数多い武將達の中でも盛高の腕を高く買っていた。

彼が比叡山に身を寄せることになった経緯については周囲からい

ろいろと聞いていた。いい噂も悪評もあった。ときおり見せる彼の寂しげな表情は暗い過去を物語っていた。しかし武術に關しては右に出るもの無し、というのは衆目の一致したところであった。また慈円は彼の持つ一種独特の、虚無感を漂わせつつ、一方で人を寄せ付けぬ威圧感はどこから来るものか知りたいものだとかねてから思っていた。

そんなこともあつて、いくら武芸に秀でているとはいえ、本来叡山において一般大衆にすぎぬ盛高であつたが、慈円は座主に任じられると彼を自らの護衛の責任者に登用、さらには非常に彼を珍重してそばまで近づけることも厭わなかつたのである。

弟子が盛高の到着を慈円に告げた。慈円は盛高の待つ中庭に面した部屋へ早速足を運んだ。行くと、盛高がそこで膝をついて地面に伏している。

慈円は彼に言葉をかけた。

「盛高、話を許す。お詫びとはどういうことか」

實際、慈円はお詫びと言われて、それが何のことかも一つ要領を得なかつたのである。

「はは！」

盛高は筋骨隆々、その逞しい体から想像される通りの力強い声で返事をする、そのまま言葉を続けた。

「座主におかれましては、このたびの盛高の不始末をお許しいたできた、こうしてお詫びに参りました」

慈円が答えた。

「盛高、昨日は都までの道中ご苦勞であつた。不始末というが私には何のことか検討がつかぬ。何のことか申してみてみい」

「はは、昨日の件にございます」

慈円は昨日のことを思い出しながら盛高の話に聞き入った。昨日の出来事とはこのようなことであつた。慈円の一行が比叡山を降り、白川を渡り、都に入ってからのことである。御所への途中の道で思わぬ事態が発生した。慈円の一行の行く手に、おそらく飢えのため

の行き倒れであろう、女子の死体が転がっていた。盛高は一行を止め、至急に検非違使と連絡を取った。無論、そのままその道を通れないわけではない。物理的には可能だ。簾を下ろしておけば、車の中の座主の目に触れるわけでもない。しかし、当時の常識ではそんなことは絶対に許されることではなかった。なぜなら、死は不浄であつたし、死体も然りであつた。そんなもののそばを通ると、その者も穢れる、と考えるのが普通であつた。

「なぜこともあるうにこのように……」

盛高はため息をついた。このような事態を防ぐため、わざわざ、前日、検非違使に対して一行の通る予定の道について説明しておいたのに！

当時は都には無数の死体が転がっていた。多くは飢えと病である。源平の争乱が一段落したとは言え、まだまだ庶民の暮らしの困窮ぶりはそう簡単には改善されるはずも無かつたから当然のこととも言えた。だからこそ、より一層の注意を持って、連絡を受けた検非違使は、その道をあらかじめ浄める必要があつた。何せ、天下の比叡山座主がお通りになる道である。

「これはまったくこちらでも予期せぬことで……」

駆けつけた検非違使はつい先ほどまでは何も異常が無かつたと主張した。おそらく、つい今、その場で倒れ息絶えたものであろう。

「ともかく始末をせねば……」

盛高はすぐに死体を処理するように願つたが、検非違使は今から祇園舎の犬神人（当時の都大路の死体処理係であつた）を呼んでいたのでは時間がかかる。彼らも連日死体の処理で人数にも余裕が無いと言っているのである。

そこで急遽、御所までの道筋の変更が計画された。そのために一行はかなりの時間そこで待たされてしまったのである。

無論これらのことの詳細は慈円にも知らされていた。しかし慈円はそのことに立腹など無視していなかった。都が死体であふれていることは慈円も知っていた。

そんなものを隠したところで何の意味があろうか！

慈円にとつては、それよりも、かつて雅に満ちた京の都の今の荒廃振りがあまりにも嘆かわしく、そんな都の姿を間近にしているに違いない貴族たちの、何とかせねばという気迫を感じられなかった昨日の宴のほうがよくばど腹立たしかったのである。

しかし盛高は、昨日の件については検非違使の不始末であつたが、それでも慈円の警護の責任者として、結果的に御所への到着が遅れた不手際を詫びに来たのであつた。

「盛高」

「はは」

慈円はそれでも、忠義心あふれる盛高の姿勢に感銘を受けた。

「盛高に何の責任も無い。そもそも遅れた事、私は一向に気になどしておらん」

「はは、ありがたき仰せ」

「下がつてよろしい」

「はは」

こういうと盛高は引き下がった。慈円は盛高のこういう誠実な態度を買つていた。

「のう」

盛高が座を退くと、慈円は傍らの弟子にこう呟いた。

「都の貴族共に、一人でもあのような忠義心に満ちた者がおればのう……」

「はは、左様に……」

弟子の返事も、紋切り型で慈円はこれにも不満を募らせた。

あの者はいつかきつと何かの役に立つに違いない。

慈円は心の中でそうつぶやくと自分の部屋に戻った。今日もまた一日の勤めがある。都を、いや日本国を護持する比叡山延暦寺の座主として、一心に仏に祈らねばならない。慈円はあらためて自分の勤めの重要性を自らに言い聞かせるのであつた。

## 第一部第二章

時子は昨夜は文字通り一睡も出来なかった。あまりにショックが大きかった……。「兄上」と一声かけたかった。でもできようはずも無い。今の自分は……。

いや何よりも兄に対して自分はもう死んだ存在なのだ。いや兄に對してだけではない。今の自分は生きていても実は本当のところ死んでいるのだ。

どうしてこんな運命になったのだろう。

また、よりによって、何のいたずらか、今になって、まさかあんなところで兄に巡り会おうとは！

兄は立派に武者として立ち振る舞っていた。うれしかった。だからこそ自分の運命が呪わしかった。

分かれて何年になるだろう。兄は木曾義仲の軍に加わると言うとな父の反対を押し切って家を飛び出した。あれが最後だった。もうかれこれ九年になるだろうか。なつかしい近江馬渚での日々……。

「楽しかった……」

本当に毎日が楽しかった。ああ、あの故郷へ帰りたい。美しい湖、美しい空、広がる葦の平原。葦笛を作って遊んだ日々。――しかしこんな身となつてはもはそんな願いもやかなうはずも無い。

今の自分の顔はどうなっているだろう。川面を見ることが恐ろしく、想像すれば死にたくなる。

「……」

時子は自分の手足を眺めてみた。白い斑点は確実に毎年増えている。手足の感覚もおかしかった。髪はもうかなり抜け落ちていた。そしてあのおぞましい腫れ物が体のあちこちにでき始めていた。

長くは生きられないだろう。

こんな運命の私だが、ここ祇園社で生活を共にする仲間がいる。みんな優しくしてくれる。私よりもっと病のひどい人もいる。それ



でも毎日の仕事をやり遂げている。

弱音を吐くわけにはいかない

昨日もいつもの通りの日課の繰り返しだった。

その日の当番の者たちは白装束に身を固め、鈴の音を鳴らしながら都大路を練り歩く……。

目的は……。

死体の始末である。

一昨日のことであつた。朝いつものごとく祇園舎に検非違使からの使者が到着した」

「皆の者、明日、何でも延暦寺の偉いお坊さんが帝に会われるそう。その通り道の清めを我らに命じることじゃ」

源太　祇園舎に隣接した林の中にひっそりと存在する、ここ、犬神人達の里の首領である　が皆に検非違使からの命令の内容を伝えた。いつもと取り立てて変わった内容ではない。死体の始末だけでなく、清めの儀式が必要な場合必ず、祇園舎の犬神人が借り出された。

「そんなに偉いお坊さんであれば我らのこの身の”業”も取り除いてくださればよろしかろうにのう！」

と誰かが叫んだ。すると、別の誰かが、

「我らのような者が極楽へ往生できるとでも思っているのか！どんなに善行を積んだところで、結局、地獄に落ちるしかない運命だ！」と応じた。

時子は黙ってそんなやりとりを聞いていた。

確かにその通りだわ

時子は思った。

ただ女だからと言うだけで”穢れ”ている、極楽往生かなわぬと言われるのである。まして、――この身はあるうことか、白癩に侵されているのだ！二重の穢れである。到底、極楽往生などかなうはずは無い……。

時子はそこまで思い極めると、思わず、その目からはどつと涙が

溢れ出した。心は絶望のどん底に突き落とされた。

そんな思いで清めの仕事に出かけたのが昨日……。

あぐくのはて、生き別れになった兄を偶然目撃することになってしまった。何と言うのろわれた運命であろうか！

「元氣な姿なら、声をかけることも出来た！」

そう思うと、悲しみで心が張り裂けそうになった。 時子は悲

しみのあまり、昨日都大路の清めの仕事が終わって、里に帰ったあと寝込んでしまったのだった。

無論、兄を目撃したなどとは誰にも告げなかった……。

それにしても、いつまでもここで横になってもいられない。

仲間に迷惑がかかるわ……。

と、考えて、体を起こそうとした丁度その時だった。

「おときさん、どうだ体の調子は」

背後からの突然の源太の声に、時子は我に返った。

源太は時子がここで生活を始めるようになってから以来、ずっと彼女のことを気にかけて心配してくれている。彼は、昨日の時子の様子が尋常ではなかったので心配になり、今朝彼女の様子を見に来たのである。

「源太さん、ありがとう。大丈夫よ。少し気分はよくなったわ」

時子は源太に感ずかれぬようにそっと涙をぬぐうと、あわててそれまで外していた覆面を被った。それからゆっくりと源太の方へ振り返った。女であるがゆえに自分の醜い素顔は隠したかった。

「そうか、それならいいんだが、顔色が悪かったし、帰ってから寝込んでいるって聞いたから」

源太と呼ばれた男は普段でも覆面をしていなかった。いまさら隠してどうなるものでもない、という気持ちに彼には強かった。彼はもうすっかり頭の毛が抜け落ち、顔はごつごつとして変形し、目も充血が強く、視力もそうとう落ちていた。右手の指も2本なくなっていた。この病におかされると、神経の感覚が麻痺してしまうので、深い傷を負った時でも気がつかず、それが化膿し、骨まで犯されて

しまつのである。

左様、二人はハンセン病に侵されていたのである。 無論、平安末期のこの時代にハンセン病などという呼称があるはずは無い。

ここでは当時の人々の呼称『白癩』に従うとする。

即ち……。少しここで解説をせねばなるまい。

当時、 - 彼ら白癩を病んだものは、寺や神社の雑用係として働くことが普通だった。いや、より正確には、強制的に働かされた、 - つまり、律令体制の厳格な身分制度の下、彼らは各社寺に所属せしめられ、強制労働に従事させていた、というべきであろう。 祇園社に集落を作ったものは犬神人と呼ばれ、最下級神職として神社内の清掃、修理、動物死体処理などに働かされた。さかのぼれば奈良時代より、朝廷による救済策として各社寺に集められ、治療や施しを受けたという側面もあるが、平安時代においては彼らは朝廷の直轄民として利用されていた、というのが正しい歴史認識であろう。

なぜ死体処理なのか。 - 当時は人々は死に接する、関わることに對して異常なまでの恐れをいだいていた。それは今の時代の比ではない。なぜなら、死に関係した、“祟り”や“悪霊”の存在が、当然のこととして信じられていたからである。すなわち、死は“穢れ”そのものであり、忌むべきこと、避けねばならぬことであった。そこで、祟りや、悪霊から逃れるために、“穢れ”は“穢れた”者に処理させよう、という考えが現れたのも当然と言える。それでは穢れた者はどこに？ - 白羽の矢が立ったのが彼ら白らいを病んだ者たちであった。すなわち仏教思想の浸透とともに、白癩を病むということとは、その人の現世、前世での罪の結果、すなわち“業”の結果であると考えられた（業病）ので、必然、彼らは“穢れた”者と見なされていたからである。

そのため、彼らは、平安時代後期になると、社寺内の清掃、勧進といった勤めに留まらず、検非違使の統括のもと、都の中の動物の死体処理、さらには人間の死体の処理、運搬、埋葬という仕事を担

わされていくようになったのである。

こうして、彼らは、都を”清める”役目を担わされるに至った。見方を変えれば、都を祟りや悪霊から守ってくれる者たちともなったのである。

そんな背景から、彼らには、摩訶不思議な”清め”の力があるのだ、と信じる者が出てきたのも無理からぬことと言えよう。実際、白覆面、皮の赤手袋といった彼らの装束はそれだけでも周囲を圧倒するものがあり、そんな神秘的な力を宿していると信じさせるにふさわしかった。そして、そんな彼らの”清め”の力を当てにして、朝廷は、都の死体処理だけに限らず、彼らをさまざまな儀式にとりたてていくようになった……。

時子らが慈円座主の都へ向かう通りの清掃を命じられたのも、いつもの、そんな彼らの日常の勤めであつたのだが……。

まさか、そこで、わが兄上と出会おうとは……。

事の詳しい次第はこうであつた。

朝早く死体処理と清めに出かけた時子らは、勤めが終わると帰途に着こうとしたが、時子を含め三人は検非違使の急の命令でその場に待機させられた。別の場所の清めに向かわされることになったのである。

こうして、已む無く待機していた時子の、まさにその目の前を、馬に跨った武者姿の兄が通っていったのだ。

「……」

- 慈円座主一行の護衛兵として、- 目の前を兄が通って行く！  
あまりの突然の出来事に言葉を失って、時子は、茫然と兄の後ろ姿を見届けるしかなかった。- なんとという偶然、何と言う悲しい運命であろう。

源太は何か並々ならぬ事情が時子の身にあるに違いないとは感じていたが、この里のしきたりでもある「深入り無用」の習いにしたがって、あえてそれ以上は問わなかった。

誰にもつらい過去がある。しかしそれを聞いても、今この穢れた

病の身でもって何か手助けを出来るだろうか！

二人は暫く黙ったまま小屋の中で座っていた。

時子は混乱していた。自分のことを思いやる人が現れて、心の緊張が緩み始めた。

するといろいろな思いが時子の頭の中を駆け巡って、心は今にも張り裂けんばかりになり、頭の中は真っ白となって、時子は脱力感からその場にうずくまってしまった。

「おときさん！」

源太は、びっくりしてすぐに時子を抱きかかえ介抱した。すぐに時子は気を取り戻した。

「すいません、源太さん……。気分が悪くて……。でももう大丈夫ですから……」

時子は源太の手を振り解くと自らの力で座りなおした。

「ほら？ね？」

時子は笑顔を源太に向けて言った。

源太もにこつと微笑を返した。

「それでも、今日は休むといい……。心配せんでいい、皆のものにはわしから伝えておく……」

源太のやさしい心遣いに時子は胸を打たれた。

「ありがとう、源さん」

「なーに、礼なぞ……」

「でも、大丈夫です。皆に迷惑がかかつては……。洗濯位なら出来ますから……」

「そうか、でも、決して無理はするなよ！」

時子の言葉に納得すると、源太はそう言いつつ、時子の小屋を出ようとした。しかし出口まで来ると、ふと何かを思い出したように片手で頭を叩くと時子の方を振り向いた。そしてこう告げた。

「そうそう、肝心なことを伝えるのを忘れておった」

「何でしょうか？」

時子は尋ねた。

「どうする、いつもの坊主が会いに来ている。断ろうか。今日は帰ってくれって」

「ああ、住蓮さまですね」

努めて平常を装いながら、いつものように明るい口調で彼女は源太に答えた。しかし、今日は誰にも会いたくなかった。昨日の件の精神的打撃はあまりにも大きすぎた。

「源太さん」

「うん、どうする」

「住蓮さまにはくれぐれもよろしく、ただ今日は少し具合が悪いので会えないと、お伝えください」

「わかった」

源太は時子の態度と口調から、何かしら彼女に秘め事があることをすで見抜いていたので、あえてそれ以上のことを問わなかった。

「まかしておけ」

「よろしゅうに」

源太はにこつと笑うと再び戸口に向かった。そして戸口で振り向くと言った。

「それにしても変わった坊主だ。いつもあんたを訪ねてくる。いくらあんたのことが気にかかる、と言ったって……。ここへは、どんな事情、いきさつがあつたって、普通の人間は誰も近寄ろうとはせんからのう。親でも兄弟でも……」

そう言つと、さらに彼は続けて、

「おときさん、困ったことがあればすぐにわしに相談するのじゃぞ。――この他の連中はあてにならんからのう。おっと、誰かが聞いてれば大変じゃ。いやいや、悪いやつはおらんがのう、それでも、いざというとき頼りになるのはわしだけ。――そうじゃろ、ははは」  
そついい残して源太は去った。彼の、時子を元氣付けようというやさしい心遣いが、時子をさらに涙ぐませた。

住蓮様、わざわざ会いに来てくださったのに、本当に申し訳ない。少し時子に時間をください。少しだけ時間を」

時子はそう自分に言い聞かせると、装束の準備にかかった。

周囲は次第に騒々しくなり始めた。いつまでも悲しみにくれているわけにもいかない。そろそろ支度をしないと、――今日もまた、いつもの”清め”の一日が始まるのであるから。

### 第一部第三章

慈円のもとに法然から手紙が届いたのは天台座主に就任してから1週間にもならない時だった。それには法然の弟子の証空をしばらく預かってほしい、そして天台三大部を学ばせてほしいと依頼があった。証空の詳細な履歴書も添えられていた。

「これは、これは。さてどうしたものか」

慈円は戸惑いを覚えた。法然は確かにかつて比叡山、叡空のもとで学んだ天台の僧であった。当時その博学さについてはかなうもの無しと言われた天台一の智者であった。しかし、……

「のう、法然が叡山を去ったのはいつのことか」

慈円は傍にいた一人の大律師に尋ねた。丁度昼食の後であった。仏教修行では食事も修行の一つである。食事中には話せない。慈円は座主就任後、延暦寺内の多くの僧と、修業以外の場でも語り合う機会を作ることに努力した。昼食の後のわずかな時間も例外ではなかった。

慈円自身は自らの仏法への帰依は何人にも劣らないという自負を持っていたし多くの者もそれを認めていた。だからこそ座主として選ばれもしたのである。しかし、彼は九条兼実の弟だから出世したのだ、というような風評も一部からは聞こえてきた。齢わずか37歳での出世である。無理も無い。慈円もそこは心得ていた。

延暦寺内での彼の地位は揺ぎ無きものとは決して言えなかった。純粋な仏法修行の場所であるべき比叡山の中にも、権謀術数が渦巻いていたのが現実だった。いつ座主の座を追われても不思議ではない。野心に溢れるものが次の座主の座を虎視眈々と狙っている。姻戚関係、朝廷内への影響力、様々なことが比叡山の中での力関係、人間関係に影響していた。

そこで慈円は、自分の地位を確固としたものとするためには、山内の情報収集こそ肝要、との思いから、普段から広い比叡山の中を、



ここかしこと巡つては、階位の上下関係なく、上は大律師から下は一介の修行僧に至るまで、多くの者と談笑をするように心がけたのである。無論、彼の元来の話し好きも手伝つてのことではあつたに違いないが。

今日は西塔に赴いていた。ここは念仏僧らが多く集うところである。法然もかつては、ここを修行の中心としていた。そこで一人の律師と談笑していたところに、法然からの手紙が舞い込んできたのであつた。

その大律師が答えた。

「法然様がこの西塔黒谷を下りられましてから、おそらく十数年になるかと思ひます」

「そうか」

比叡山を捨て専修念仏の道に入つた法然が、急に自分にあててこのよつな手紙を送つた真意を慈円はつかみかねていた。慈円は彼に尋ねた。

「昨今の法然の都での動き、そちはどう考えておる」

突然の問いに、彼は一瞬戸惑いを見せたが、しばし考えを整理してから、

「はは、4年前に後白河法皇の如法経の儀式に先達を務められましたからは、法皇様の覚え目出度く、昨年は法皇様に往生要集を講義されました」

と、慈円に返答した。

「そんなことは周知じゃ」

慈円は形式ばつた返答しか出来ない弟子たちにふがいなさを感じた。見ると、傍らにもう一人別の律師がいた。何か言いたげな表情をしている。慈円は彼に問うてみようと思つた。

「どうじゃ、そちは、何か考えがあるか」

座主からの直々の問いに、彼は驚いた様子を見せたが、沈黙していた。律師と座主では地位に開きがありすぎる。考えがあつても即答出来るものでもない。そのことは慈円も承知していた。慈円はし

かし、彼の表情から、『本当はこの者何か言いたいことがあるに違いない』、と察すると、

「かまわぬ。無礼講じゃ。仏法修行に議論は大いに必要なこと！思ったこと、正直に話してみい」

と、再度彼を促した。

慈円から促されて、彼は、戸惑いながらも、最後には意を決して語り始めた。

「座主におかれましてはすでにご存知かとは思いますが、……」

「なんじゃ、申してみい」

「はは、法然様の唱える専修念仏の教えは、今や都におきましては上は、かつては法皇様、また法皇様亡き後は関白兼実様、ほか多くの公家、また洛中の庶民、はては河原者にいたるまで広まっております。その勢いは相当なものでございますし……」

隣にいた大律師の表情が一瞬凍りついた。誰もがそのことは知っていた。しかし、比叡山の中にあつて、慈円の機嫌をとろうと必死の者たちは、慈円の機嫌を損ねかねない、都での法然人気の話など、彼に発言する勇気など持ち合わせているはずが無かった。

慈円は率直に語るこの律師の顔を見た。律師は慈円にまじまじと見据えられ、一瞬たじろぐと、そこで発言を止めた。

「おそれいます。少し言葉が過ぎたようにございます……」

慈円は改めて彼に問うた。

「名は何と申すか」

律師は即座に答えた。

「はは、隆寛と申します」

年のころ40半ばであろうか。精悍な顔つきは仏法への帰依への真剣さを物語っていた。一方で、慈円は彼の鋭い目つきと、先ほどの彼の発言に何かしら天台仏教の現状に対する批判が見て取れるように思えた。

おもしろい、彼に語らせよう。

慈円は隆寛に向かって言った。

「隆寛、確かにそちの言うとおり。今の我ら天台に欠けているものは、まさにその現認識の甘さじゃ」

座主自らの天台への批判に、場が静かになった。

「念仏は法然が自分で考えたものでもなければ、法然だけのものでもない。ここ天台でも大切な修行の一つとして位置づけられておるう。であるのに、何ゆえ、その念仏を天台に求めず、今や市中の一聖にしか過ぎぬ法然に求めるのじゃ。それも都中の誰もが」

自由な議論の場であることを改めて認識出来たのか、隆寛が意を決して発言した。

「忌憚無く私目の考えを述べさせていただいてもよろしいでしょうか」

隆寛の言葉に、

「ふむ、よろしい。何でも申してみよ」

と、慈円は答えた。

場に緊張が走った。なかなか座主に忌憚無く意見を述べるなど出来ることではない。

座主の機嫌を損ねるようなことが無ければよいが。

誰もがそんなことを考えていた。しかし隆寛はそんな周りの心配をよそに、少し間を置くとゆつくりと自分の意見を語りだした。

「私目が思いますに、法然様の唱える専修念仏は、法然様なりに長年の仏法への求道から導き出された結論でございます。ただ、仏法を知らぬ一般衆生から見ますと、難しい教理、戒律が無く、非常に受け入れやすい、誰にでもすぐに理解できる、わかりやすい。聞いたその日から実践できる。したがって、世の乱れた今、極樂往生を願う人々が救いの手段として専修念仏へと走るのも無からぬものと考え所存で……」

法然の都での活躍はこの比叡山にも当然あまなく知れ渡っていた。慈円も当然承知であった。しかしいくら天台出身の僧であるとはいえ、今は比叡山から離れ独自に専修念仏を勧めている。しかも彼は念仏以外の行は余行であり極樂往生には役に立たないと言うのである。

る。慈円には、しかしこの専修念仏の考えは受け入れられなかった。一般民衆には受け入れられるかもしれないが、仏法を習得しようと志すものの修行の道としては邪道ではないか。――しかし一方で法然が、特に後白河法皇に重んじられた事実は重く受け入れざるを得なかった。

「うむ……」

慈円は彼の発言を黙って聞いていた。

何かが今の天台仏教にかけているのであろうか。とすればそれが何なのか。年毎に勢力を増す法然の教団は天台の権威を侵すものとして内々批判の声が強かった。しかし先の後白河法皇、また関白九条兼実、と時の権力の中枢から絶大な信頼を受けていた法然を公然と批判することもまた出来ないのが現実であった。無理も無い、兼実の弟こそが慈円なのである。法然を批判することは兼実、後白河法皇を批判することにもなりかねないし、慈円が天台座主となったことも兼実の影響があるとすれば、慈円への批判にもつながりかねないからである。

しかし一方で天台の僧が法然を公然と弁護することは自己否定にもつながりかねない。

この天台のかかえるジレンマを、慈円は、天台座主として十分理解していた。この問題の取り扱いを間違えると自らの地位をも揺るがせかねない。

慈円は自分から持ち出した議論であるものの、いったんこの問題はここで打ち切るのが賢明と考えた。

「わかった。忌憚無い意見受け止めておくことしよう。有意義な席であった。これから意見を聞きに参る。真性我々は帰るでしょう」

「はは」

弟子の真性を促すと、慈円は席を立った。

二人は廊下に出た。12月の比叡山は寒さもひとしおであった。足元の廊下は凍りつくように冷たい。その廊下を歩きながら慈円

は真性に問うた。

「真性……」

「はは」

真性は長く慈円の下で修行を重ねており、慈円はその熱心さには一目置いて、多くの弟子の中でも特に目をかけて可愛がっていた。「真性、あの隆寛というもの、なかなか率直で気骨がある、のう、そちもそう思わぬか。」

慈円からの問いに、真性は一瞬戸惑いを見せたが、

「はは、実に率直な意見であります、天台を守る立場としては、素直に領けぬ面もあるかとは思いますが」

と、慈円に返答した。

「ははは、まことにそうじゃの……」

慈円は、真性の卒の無い返事を聞いて、自身高揚した気分を少し、落ち着かせた。

「ともかくも、たいへん結構な議論ではあった。ところで、そち自身はどう考えておる。今の法然らの動き」

「はは」

真性は少し黙って考えた後、慈円に返答した。

「私めが危惧しておりますのは、安樂房らの動きであります。すでに座主におかれましても耳にされているとは思いますが……」

「六時礼賛の興行か」

「左様でございます。」

慈円は自分の思いの内を言い当てた弟子を満足げに思った。

「真性」

「はは」

「少しそちと話がしたい。あとで私の部屋へこい。――六時礼賛、まさに、それよ。わしが一番に気がかりなことは……」

慈円はそう言つと歩を早めた。足元に、さらに強く凍りつくような寒さが走った。空を見ると雪がちらつきだしていた。

「今年の冬もまた寒い冬となりそうじゃの……」

また、この冬、多くの者が凍え死ぬに違いない。　慈円は雪が降るのを見ながら、美しき都を取り戻すために自分が果たすべき役割の大きさに思いを廻らせていた。

「さて、どうしたものか……」

慈円は法然からの証空の留学の依頼と、一方での法然門下の弟子たちによる六時礼賛興行の動きと、錯綜する法然教団の複雑な動きに、どう対処すべきか思いをめぐらしつつ、外の寒さから逃れるべく自分の部屋へとさらに歩を早めた。

## 第一部第四章

法然の下に慈円からの返書が届いたのは新しい年を迎えてからであつた。弟子たちが取り囲む中、手紙の中身が読み上げられた。

「このたびのお申し出、しかと承り候」

手紙は簡潔であつた。法然が大きく安堵のため息をついたのが周囲のものにも聞こえた。

「証空」

と、比叡山への留学が決まつた弟子に法然は呼びかけた。返事の内容には誰もが満足していた。しかし、天台との間に生じつつある摩擦が、これで一気に解決するわけではない。法然自身がそれを一番よく知っていた。

「はは」

法然はほかの弟子たちにも聞こえるようにと意識したか、いつもよりは大きな声で言葉を続けた。

「証空、やれるか。天台の修行はきびしいぞ」

証空は法然とは反対に、ほかの弟子たちに遠慮するかのようにやや小さい声で返答した。

「はは、証空、若輩の身ではありませんが、法然様の名に恥じぬようにお勤め果したい所存であります」

「よろしい。準備が出来次第出発じゃ。叡山の冬の寒さはひとしおじゃ。準備に怠りの無いよう」

傍らにいた信空が、すこし間を置いて法然に言った。

「このたびのご措置、まことに賢明なものと存じます。彼が慈円座主のもとで学ぶことで、天台の我ら一門に対する風当たりも和らぐでしょう」

信空は、比叡山において叡空のもとで、本来、法然とは相弟子であつた人物である。しかし叡空の死後は法然の弟子となつていた。そんないきさつで、法然門下では最も古くからの弟子となる彼は、

比叡山を降りて以後、法然一門内において、事実上弟だ子たちのまとめ役となっていた。

信空に続いて、感西が言葉を続けた。感西も法然のもとで古くから念仏を学んでいる弟子であった。彼は平安朝の官吏登用試験にも合格した秀才であり、法然は彼をまことの子のごとく、たいへん可愛がつていた。

「まことに、まことに、私もそう思います。証空は若いが賢く、学問の歩みも速く、慈円座主も、このような人材が我ら一門の中にあることを知られば、巷に流れております我ら一門に対する悪い風説もすべて根拠のなきことと理解してくれましょう」

法然は満足そうにおおきく頷くと、軽く目を瞑った。

齢60歳の法然であったが血色もよく、円満柔和な相は確かに人をひきつける魅力を持っていた。しかし、目を開くと、見開いた目は眼光するどく、並々ならぬ闘志を内に秘めていることが周りには見て取れた。

法然はおもむろに口を開いた。

「ところで、住蓮、安楽らの六時礼賛興行の試み、いかがなっておりますか、誰か詳細を知らぬか」

信空がすぐに答えた。

「法然様、その件ですが、実は今日、住蓮にこの場に来るように申し渡してあります。法然様へ今までの経過、ご報告奉れと」

「そうか」

「もう、そろそろ来るかと思えます。もうしばらくお待ち願いたく」

「わかった。――彼らが引導時（注：現在の京都東山高台寺近辺）で六時礼賛興行を始めたのは昨年十月であったか」

「はは、仰せの通りでございます。うわさではかなりの盛況ぶりです。中に入れぬ人が表に溢れているとの由でございます」

「ふーむ」

法然は大きく頷くと天井を見上げた。



さて、ここでこの「六時礼賛」について若干説明を加えておこう。

六時礼賛とはそもそも唐の善導が著した書物である。長文の詩と言って良からう。この世の無常を嘆き、心より阿弥陀仏を礼賛し、極楽往生を願う内容である。

安楽、住蓮らが念仏の功德を多くの人に知らしめたらんと、これに節をつけ歌とし、興行として行うようになったのは、もともとは建久三年、八坂引導寺においてその年の春に崩じた後白河法皇の追悼供養にこれを奉納したのが始まりと言われている。

唐から日本にこの書物が輸入される際、その節までは輸入されてはいなかったようである。おそらくは声明の節にあわせて、最初は歌われたものと思われるが、後になって、安楽がこれに我流の節をつけたようである。というのも、安楽はもともと後白河法皇のもとで北面の武士として働いていたおり、今様を愛する法皇に感化されて、当時の大衆歌謡の旋律を覚えこんでいたものと思われる。

その旋律にあわせて、この六時礼賛の詩を歌うことを思いついたのであった。美声の持ち主で歌唱力抜群の住蓮がこれに加わり、二人の音楽的センスが相乗効果をあげるにいたり、都の多くの士女がこれに酔いしれ、専修念仏の信者となったのである。

そして、その中に少なからぬ数の小御所の女房たちがいたことが、後日の建永の法難の遠因となるのであったが……。

法然は、しばしの沈黙の後周囲に問うた。

「それで、誰かこの中のものに、興行に加わったものはいいるのか」

法然のこの質問に、今まで沈黙を守っていた湛空が返答した。湛空も感西、証空と同じく、この法然一門の中にあつて、新進気鋭の若い弟子の一人であった。

「はは、私め、昨日信空様のご命令により、引導寺へ参つて、彼らが六時礼賛の興行を見てまいりました」

「そうか、それで、……どうであった。」

法然に興味深そうに体を前へ少し屈めた。

「は、それはそれはたいへんな賑わいでございました。多くの人が集まり、皆一心に念仏を唱える様はまことに美しく、心打たれるものがありました。安樂様、住蓮様の音楽の才は、なるほどと唸らせる代物で、六時礼賛の美しい詩文が、さらに美しい節で飾られ、聞く者の心を捉えて酔わせておりました」

「ふーむ」

法然は何か今までの心の不安が取り去られたかのように、安堵の表情を浮かべた。

「さてさて、これにて、またより多くの人々に念仏の功德がもたらされんことを願うのみじゃ」

この法然の発言に、誰もが同様に安堵の表情を浮かべた、その時であつた。

「よろしいでしょうか……」

と、信空が発言を求めた。何か、このことだけは言っておかなければ、という思いが言葉の裏に見て取れたので、法然は彼を促した。「どうした、信空。どんな意見でも忌憚なく言ってみい。この場所では何の遠慮もいらぬ」

こう言われて、信空は言葉を続けた。

「私の耳には、法然様、実は、一部よからぬ風評も聞こえ及んでおります」

と、信空はここまで言うと、フーっとため息をついた。

「よからぬ風評よ、と」

法然はやや顔を曇らせると、信空に問いただした。

「信空、よからぬ風評とはどのような風評じゃ」

「おそれながら申し上げます。安樂、住蓮らの六時礼賛の興行、盛況なのはまことにすばらしきことと、私も考えるところであります。特に上下貴賤、老若男女の区別無く、誰もが平等に念仏三昧をしておりますよし、たいへん結構なことではないかと存じます。しかし、――おそらく事実無根のことと思われませんが、興行の最中に、時に

は、深夜、男女がよからぬ行為をしているというのです……」

法然はやや声を荒げて言った。

「なんということじゃ。それはまことか！」

他の弟子達も驚きと不快の表情を示した。たとえ興行の場とは言え、そのような行為があるとすれば、許されることではない。また、それを見過ごしている、黙認しているなどということであれば、念仏者として許されぬことであるのは明白であった。

「いえ、おそらく事実無根のことと存じます。ただ、引導寺での興行には、まことに種々雑多な人々が参っているようで、中には、河原者始め、興味本位だけのもの、あるいは我々一門とは無関係な、念仏とは名ばかりの似非念仏僧などもいるとのよし、――すれば、これらのものが疑われるような行為をしていないとも限りませぬ」

「ふーむ」

部屋の中を重苦しい沈黙が支配した。そこにいる者にとっては随分長く感じられたろう。そのような風評が天台にも聞こえているとすれば、法然一門の活動にも大いに差し障りとなることは誰の目にも明らかであった。

湛空がこの重苦しい沈黙を破った。

「僭越なことではございますが、信空様、ひとこと申し上げたいことがあります」

「なんじゃ、湛空、申してみい」

湛空から「ひとこと」と言われ、信空は慚然とした表情で答えた。無理もない、本来、法然の方針で、彼の一門内においては、弟子たちに階位の上下の区別は無かった。とは言っても、その時代、年齢から目上、目下という概念が弟子たちの間にあったのは当然のことであつたし、目下で、自分よりの後の弟子に「ひとこと」と言われ、信空が心中穏やかでなかったのは、ある意味当然であつた。

「はは、信空様。信空様の今のお言葉では、河原者たちすべてが興味本位で六時礼賛興行に参っておるかのようにも聞こえます。私目が実際参ったおりも多くの河原者を目にしました。ほとんどすべて

の者がうちひしがれ、衣服も破れ、ぼろをまとい、哀れな様子でありました。しかし、彼らのほとんどは熱心に念仏を唱え、興行を妨害するかなのような振る舞いを起こすものは少なくとも、私は一人も目にはいたしませんでした。信空様は風評とおっしゃられました、そもそもご自身の目でご覧になったことでしょうか」

湛空の鋭い弁舌に信空は圧倒され、

「うむ。確かに自分で見たわけではないが……」

と、答えるのがやっとだった。そんな信空に対して、さらに湛空は畳み掛けるようにこう述べた。

「すべて生きとし生けるものは仏性を持っていると言うのが仏の教えではありませぬか。貴賤の別なく誰もが往生を遂げられるのが阿弥陀仏様の本願ではございませぬか……」

信空は思わぬ身内からの攻撃に驚いたが、湛空の発言はまことにもつともであったので、

「いやいや、湛空。そちの言うとおり。私の発言はうかつであった。河原者達を蔑視するつもりなど毛頭ない。許せよ」

と、素直に自分の発言を訂正した。こういう柔軟さが、彼の長所であった。

だからこそ彼は若い弟子たちから、兄代わりとしても、父親代わりとしても慕われていたのである。

「しかしのう、湛空」

と、それでも、信空は古弟子としての面目も発揮しなければ、と諭すように言葉を続けた。

「まこと念仏とは名ばかりの、怪しい似非念仏僧がおるのも事実じや。彼らが都の市中でどのようなことをしておるものか、まったくわれらも掴めておらぬ。それが現実ではないか。中には法然の弟子だと偽りを言うものもおるらしい。天台との関係がおかしくなり始めたのもそういう輩が現れ始めてからじゃ」

そこへ感西が援護射撃を出した。

「まこと。似非念仏者たちの中には、どんな悪事を働いても、一言

”南無阿弥陀仏”と申せば極楽往生かなうのじゃ、と平気でふれまわっている者もおるとか聞きます。しかもそんな者に限って、自分は法然様の弟子と偽ってとのこと。このような者たちの分別無い行動が比叡山を刺激しておるのは間違いないことと思われます」

感西の言葉が終わると丁度そのとき部屋の外からふすま越しに声がした。

「住蓮参りました」

一同は思わず顔を見合した。話題の本人の登場であつた。

信空は法然の方を伺つた。すると法然は

「皆、当人が来た。我ら議論はひとまず置いて、まずは当人から事情を聞きましょう」

と、一同に告げた。皆は頷いた。それを受けて、信空はふすまの向こうに控えている住蓮を招き入れるべく、ふすま越しにこう呼びかけた。

「よろしい、入れ。皆待つておつたところだ……」

## 第一部第五章

襖をあけて一人の僧が中に入ってきた。

この人こそが住蓮である。がっちりした体格と精悍な顔つき、また鋭い眼光は、もし僧衣を纏っていないければ武者と間違われたかもしれない。その一方で威圧的なその体とは不釣り合いと言ってもいい美声の持ち主で評判であった。唄が好きで、笛を愛し、誰もがその音楽の才能を認めていた。六時礼賛の興行に彼がかかわるようになったのはそんな彼の才能から考えると、至極当然のことでもあった。法然の前に座ると彼は一同に挨拶をした。法然は早速彼に問うた。「住蓮、丁度今、安楽らともども、そちの勤めの件、話していたところじゃ。ご苦労であるの」

こう法然はまずねぎらいの言葉をかけた。

「はは、我ら若輩の取り組みに、さようなお氣遣いまことにありがとうございます」

住蓮のずっしりした、しかし透き通るような声が部屋の中に響いた。

法然はずばりと切り出した。

「住蓮、ところで六時礼賛の興行盛んなよし、まことに結構である。されど今も丁度話しておったのだが、――どうじゃ、何か困りごとというか、興行にあたって、――悩み事などありはしまいか」

「困ったこと、と言われましても……」

住蓮は唐突なこの質問にどう答えていいものか、返事を探しあぐねていた。

すると、信空が単刀直入に切り出した。

「では、私から、率直に話させてもらおう。法然様お許し願えますね……」

法然が頷いたので、信空は続けた。

「実は、そちらの興行に関してじゃが、よからぬ風評がわれらの耳

に入るのじゃ。興行にかこつけて、男女が淫らな振る舞いを行っている、などとな。真偽のほどはともかく、そういった風評は我等の入門の今後にも影響を与えかねん。そちらのあずかり知らぬところでのことも知らぬが、そちらは、そういうこと、そんな風評を耳にしたりはせぬか？」

住蓮は毅然として答えた。

「そのような風評、どこから立ち上りましたものか、私には皆目見当が付きませぬ。寺の中では、何も問題なく、六時礼賛つつがなく執り行われております。いたって平穩そのものであります」

住蓮は憮然とした表情をしつつ、さらに続けた。

「ただ、こここのところあまりに数多くの人が押しかけ、引導寺境内に入りきれない人が多数あります。これら、あふれた人が寺の外でどのような振る舞いをしているのか、そこまでは我らもわかりかねます」

「住蓮」

と、信空がさえぎった。

「そこまではわかりかねます、ではいかんのじゃ。我ら法然門下の一団、どのような目で南都北嶺から見られているか、そこをよく理解せえ。よいか、彼らの中には我らの動きを良きことと思わぬもの多数ある。いや多数では済むまい。ほぼ全員がそうであろう。今は九条兼実様の後ろ盾もあり、声荒高に叫ぶもの少ないが、いずれ大きな糾弾の動きになることも考えられる。事実、都では多くの似非念仏者が、法然様の教えとは無関係の似非念仏を行って、人をまやかしておる。南都北嶺から疑われるような振る舞い、われらは決して行ってはならんのだ」

住蓮は法然の高弟からの叱責に返答もままならず、うつむいているしかなかった。場に重苦しい沈黙が走った。

しばしの後、法然がその沈黙を破って住蓮に語りかけた。場を和ませようとの配慮から、いつもより、より穏やかなやさしい語り口であった。

「住蓮、六時礼賛、そもそも今は無き後白河法皇の追悼供養のため行ったもの。それを、そちたちが受け継ぎ、今後も多くの民が参加出来るよう、新しい形で続けたいとの申し出があった。苦難にあえぐ多くの民が救われるならと許可し、そちらの思うような形で今まで興行をさせてきた。」

「仰せのとおりで……」

まったくそのとおりである。発案者は安楽であつたが、相談を受けるとすぐに快諾した。安楽は歌、中でも、今様、さらに踊りを得意とし、自分は、笛、歌を得意とした。六時礼賛の儀式をより庶民に親しみやすく参加しやすいように形式に手を加えて行つてみたところ、彼らの思惑通り興行は大成功を収め連日多くの老若男女が押しかけている。

法然は続けた。

「そちらの純粹な思い、一人でも多くの人が念仏の功德により極楽往生かなうように、との切なる思い、それを大切にしようと思ひ、私はそちらの興行活動を自由にさせてきた。安楽に至つては、六時礼賛に今様の節をつけて吟じているとのこと。ははは、彼らしい……。無論一部の者は反対したが、私はよかろうと黙認した。まあ、あの安楽じゃから……。それが多くの人々の心に、仏心を起こさせるものであれば、それも仏の御心と許したのじゃ。幸い、そちらの試み、大いに成功し多くの人々が今や念仏三昧、心を一つにして極楽浄土への往生を願つておる。たいへん結構なことじゃ」

住蓮は法然を見て深く頭を下げた。

「法然様、まことにありがたきお言葉」

「されど、住蓮」

法然は、今度は幾分か厳しい口調になった。

「信空が申したように、我ら一門をとりまく気配、決して順風ばかりではない。南都北嶺の一部からは批判的な声が日々高まつておる。幸い後白河法皇、また関白兼実殿の篤い信心もあつて、これら批判は表には出ないであるのが実のところじゃ。ところがそれを良いこ



とに、我らの一門でもないものが念仏僧と称し、誤った阿弥陀仏信仰を唱えておるとも聞く」

法然はここで一息つくと部屋にいる一同を見回した。そして今度はさらに厳しい口調で、住蓮のみならず部屋の一同全員に向かってこう言った。

「だからこそ我ら順風の今の世にあつて、ますます身を律し、念仏三昧の日を送らねばならぬ。住蓮！ 安樂、また信空らとも良く相談し、今後は六時礼賛の興行、引導寺周囲にも目を光らせ不逞の輩などあればこれを除き、安心して多くの人々が集えるようにしてまいれ」

「はは！」

住蓮は法然に大きい声で返事をする、頭を上げた。法然は厳しい表情ながらも、まなざしは暖かく、住蓮は自分の与えられた責任の大きさを痛感していた。

引導寺には飢えた者、病の者、数多くの戦乱で家族を、あるいは愛する者を失った者、打ちひしがれた者、ぼろを纏った者、明日の希望を全く持てない人々が連日多く押しかけていた。彼らにも、いや彼らにこそ仏の救いが届くように、そんな思いで毎日続けているのがこの興行だ。

住蓮のそんな強い思いを察したのであるが、法然は皆にさらに語り続けた。

「よいか、保元、平治の乱、源平の争乱と相続き、国は乱れ、荒廃の極みである。昨今、幾分かは平穏を取り戻したかのようにも見えるが、多くの民衆はいまだ不安の中で明日に希望を見出せぬまま暮らしてある。多くの者が戦乱で家族を失い、仕事を失い、家を失い、悲嘆にくれる毎日じゃ。また飢えに苦しむものも、飢饉は去ったとは言つものの、いまだに後を絶たぬ。都大路にはまだまだ多くの屍がそこかしこに散らばつてある。疫病と飢えのため多くの者が毎日死んである。鴨川の河原も然り、屍が山高く積み上げられているとのことじゃ。まことに生き地獄じゃ。」

「このような末法の世であるからこそ、阿弥陀仏様の本願にあまねく多くの人が預かれるように、我ら、ますます念仏三昧、精進に励むと共に、念仏の功德を多くの民に知らしめていく努力が必要なんじゃない」

法然の説教が終わると、部屋の中の一同すべてが法然に向かって一礼をした。住蓮は自分の思いを代弁してくれた偉大な師匠に改めて尊敬の念を抱いて、いつまでも頭を下げ続けた。

信空が「では、これにて」と一同に解散をうながした。めいめいが席を立て自分の部屋へと向かった。住蓮は最後に席を立とうと思ったが、信空も席を立たず、座ったままでいたので、最後に二人は部屋に取り残された。住蓮は、これは信空様が何か自分に用事があるのだなと、すぐに察した。

そこで座ったままいると、案の定であつた。

「住蓮、もう少し話がある。ちよつとよいか」

信空がやはり語りかけてきた。

「はあ、何でございましょうか」

と、住蓮が答えると、信空は少し声を落としてこう言った、

「実は二人だけで話したいことがある。一つそちに尋ねたいことがあるのじゃ……。そちに関して、もうひとつあるよからぬ噂を耳にしてのう……。無論、このことはまだ法然様の耳にはいれておらんが……」

「はあ……」

住蓮は、多分あのことかと想像がついたが黙っていた。

いつかは正式に聞かれるとは思っていたが……。

信空は黙ったままの住蓮を見て、言葉を続けた。

「単刀直入に聞く。そちが祇園舎によく参るとのこと……。その件なのだが……」

「……」

住蓮は『やはり』とは思ったが、さてその事情をどう説明したらいいものか困惑して黙っているしかなかった。

祇園舎の裏にある犬神人の里に暮らす一女性と自分との関わり……。話せば余りも長すぎる話となるう。

「信空様……」

住蓮の言葉から、やはりそうか、と事の深刻さを察した信空はこう彼に言った。

「わしの部屋に参れ。そこで話そう。あそこなら奥まった所で、他の者に聞かれる心配もあるまい」

「はは」

住蓮は信空に素直に従った。彼自身は他人に聞かれても決して不都合とは思わなかったが、声高に叫ぶような話でもなかった。

そもそも時子とのことは簡単に人に説明できるものではない。安楽ら、ごく親しい友人はすべてを知っている。彼らにはすべてを伝えた。それでも”知っている”に過ぎない。誰があんな過酷な運命に真の理解と同情を示せようか！だから、ごく大切な友人以外には時子との事は詳しくは話していなかったのだ。

彼の思いは祇園舎へ飛んだ。先日は会えないと面会を断られた。いつもは安楽が処方してくれた薬を楽しみに待っているのに、気がかりであった。

時子は、元気でいるだろうか？

ここ吉水の地も寒さはひとしおである。日ごとに増し加わる廊下からの底冷えを足元に感じつつ、

この寒さの中十分な暖を取っているだろうか？

と、住蓮は時子の体の状態を気遣いつつ、信空に従って、彼の部屋に向かった。

## 第一部第六章

こうして住蓮と信空が話し合いを持とうとしていた丁度そのころ……。

彼らがいる吉水の里からは歩いて十五分程の距離のところ、祇園舎の整然とした敷地内の北側にある、周囲から幾分か隔離されたようにも見える一画で、時子は村の雑用に追われていた。

この村は周囲を雑木林に囲まれ、その存在は目に触れぬように隠されている。そこには古びた小屋がいくつか立ち並び、また鍛冶場を始め、種々雑多な作業場がいくつか散在していた。こここそが犬神人の住む集落であつた。

時子はそこに暮らしていた。

つまり時子も犬神人であつた。白ライ（ハンセン病）に侵されていたのである。

時子は先日兄との思いがけぬ遭遇の後、気分がすぐれぬ日が続いていた。そんな彼女を気遣つて、源太は毎日見舞いに來ていた。

源太は、齡五十歳になろうか、祇園舎では二十年以上働いている。性格は豪放快活、責任感が強く、誰からも信頼が厚く、ここの集落内では世話役、まとめ役のような存在で、特に新しく入ってきた新人の教育係でもあつた。彼は時子のことを、娘のような存在と考えていたのか特に可愛がつていた。

その時子が最近どうも元気がないことに彼は心を痛めていた。白らい病みは自らの病に絶望し、自ら命を絶つことが多い。「果たして馬鹿なことを考えてはおるまいか。……今日も朝から彼女の姿を見ないので、心配で時子の小屋を訪ねてきた。」

「おときさん、どうした。まだ体の具合が悪いのか」

時子は先日の件以来、眠れぬ日を過ごしていた。今日も朝までほとんど眠れず、あまりの体の疲労感に、まだ起きられないでいた。しかし、彼女は源太を心配させまいとして。

「源太さん、大丈夫よ。もう起きようかと思っていたところだから……」

と、嘘をついた。

「そうか」

時子は源太のやさしい心遣いがありがたかった。しかし、そんなことを考えるだけでまた涙が目に溢れた。その涙を見られまいと、彼女は源太に背を向けたまま横になっていた。

源太の声が続いた。

「どうだ、少し中に入ってもいいか」

時子は、「少し待つて。」と言うと、あわてて覆面を被った。この集落内では誰もが分かっていることだが、それでもやはり女性である時子は自分の素顔をなるべく人には見せたくなかった。また、涙も隠したかった。

時子自身は、ハンセン病に特有の顔の変形はまだほとんどなく、小さい結節はあったが、源太のようなごくつとした大きい結節はなかった。ただ眉の毛は抜け落ち、頭髪もかなり抜け落ちていた。体全体に白斑は目だった。ただ女性ゆえ力仕事に従事していないせい、大きい怪我也泣く、そのため今まで、指、腕、足を失うこともなく、手足の不自由はなかった。しかし、感覚の麻痺が特に足に強かった。時子はこの集落内では、力仕事以外の雑用を他の女性たちと共に任されていた。

「いいわよ、源太さん」

覆面をつけ終わると、時子が許可したので源太が入ってきた。

「おときさん、どうした。先日から、体の具合が悪いのかね。ここんどこ元気がないようだが」

「大丈夫よ、源太さん。少し、私、疲れただけで、心配かけてごめんなさい」

「おときさん」

というとき源太は、そこで一度大きく息をついた。そして、時子の横に座った。

「おときさん、わしを騙そうとしてもだめだ。あんたの具合はただ疲れているから、なんてこととは違う。何か悩んでおるな、わしには分かる。何かあった。先日京都大路の清掃のお勤め以来じゃ、何かあったか？わしには話してくれんか。話せば少し気が晴れるやもしれん。どうじゃ」

源太の言葉が終わるや否や時子はわつと泣き崩れた。彼のやさしい思いやりになんかの思いが一度に吹き出たのである。源太は時子の肩にそつと手を置いた。

「どうしたんじゃ。何か相当つらいことがあったんじゃな。わしに話してみい。この通り見てくれはひどいもんじゃが頭はまだまだしつかりしておる。何か役に立てるならと思つてのおせっかいじゃ。どうじゃ」

しばらく泣き声が続いた。時子の頭の中は、この数年の出来事が走馬灯のように駆け巡つていた。源太のやさしい思いやりがうれしかった。でも、ひとしきり泣くと、時子は目をぬぐつた。しかし涙は止まらない。無理もない！この数年の思い、ここへ来るまでの悲しい出来事、兄との別れ、父母の死、そして何よりこの身の穢れ。そしてこともあろうかその兄との予期せぬ再会。しかし本来再会の喜びを分かちあはずの、その兄にすら、妹ですと名乗ることの出来ない今の穢れた自分……。

時子は源太に話そうと決心した。今まで自分の詳しい過去は誰にも言わなかった。それは、言つても何の解決になるわけでもないし、かえつて辛さが増すと思つていたからである。それにこの集落では自分の生い立ちを語らない、というのが一種不文律として存在していた。皆、それなりに仲良く明るく暮らしているように一見見えるが、それぞれの思いは深く悲しく、それを表に出せば、かえつてお互いが傷ついてしまうことを皆よく理解していたのである。

「源太さん。聞いてくれる？」

時子は源太の顔を見据えて言つた。

「うん、何でも話してみい」

源太に促され、時子は語りだした。

「何から話していいものか……」

「まあ、ゆつくりと聞くとしよう」

傍らに源太は腰掛けた。暫く沈黙が続いたが、時子は頭の中が幾分か整理できたのだらう。ゆつくりと、すこしずつではあるが語りだした。

「あれは確か……」

こうしてこの悲しい物語はここ祇園舎の犬神人の里においても語られ始めた。ア。

時子の口から……。そう、今まで秘めていた思いをすべて吐き出すために。

吉水の里で住蓮の口から、今から語られるであろう物語と調和しながら……。

## 第一部第七章

信空の部屋に招き入れられると、住蓮は信空とあい向かいに座った。12月の空気は肌を切るように冷たく、部屋は閉め切つてはいたものの、寒々として底冷えに足が痺れた。

信空は普段は温和な表情をくずさない人であつた。ただし、それは性格がそうだからというよりは、誰に対しても良い表情を見せているのだ、といった方が当たっているかもしれない。彼は揉め事を嫌つた。法然の一番弟子として、彼は法然教団の中にあつて、様々な問題の調整役として活躍していたことは誰もが知っていた。そして実際、その調整能力、さらには色々な実務能力は高く評価されていた。住蓮も彼の人となりは熟知していたので、それなりに覚悟を決めていた。

もはや隠し通すことは出来ない

住蓮はしかし問われるまで沈黙を守るしかなかった。信空はというと、しかし、目を瞑つたままでいる。

しばし沈黙の時間が流れた……。住蓮は緊張感の高まりを感じた。そしてその緊張感が頂点に達した丁度その時だった。おもむろに信空がこう切り出した。

「その女人とはいかなる関係であるか？ 真実を今日はしっかりと話してほしい」

「真実……」

住蓮は答えに窮した。

「左様、真実じゃ。噂ばかりが耳に入ってくる。安楽もあまりこのことはしゃべろうとはせん。だからそちの口から直接聞いてみないことには……」

そう言つと、信空は少し間をおいて、続けた。

「幸い、知っているのはごくわずかの者ゆえ、いまだ大きい問題にはなつておらぬ」



と言うと、彼はさらにこう言葉を続けた。

「仔細を話してはくれぬか。あらぬ噂が飛び交う前に。さつきも言ったが、六時礼賛の興行の件を巡って、天台は我々に厳しい目を向けておる。少しでも付け入られる隙があつてはいかん。私としては事の次第を掴んでおきたいのじゃ。一体どういう関わりあいがあつて、犬神人の女性の元へ足繁く通わねばならぬというのじゃ。安樂は、その者の病を少しでも良くするための薬を施しているのだと言うが……。まことにそうか」

きびしく詰問するのでもなく、穏やかな口調で問いかけてくる兄弟子の姿勢に、ようやく住蓮の高まつていた緊張感もほぐれてきた。

「分かりました」

住蓮はそう言うつと、頭の中を整理した。そうは言つたものの、そもそも話したところで本当に理解してもらえるのかという思いや、過去の多くの思い出が錯綜して、何からどう話し始めたものか思案にくれてしまった。

信空はこの教団の中ではまとめ役のような存在であることは誰しもが認めていたし、天台の厳しい行を法然と共に修めた立派な僧として誰からも尊敬されていた。しかし、住蓮ら、特に六時礼賛の興行を共にしている、安樂など若い僧からは伝統を重んじ、形式にこだわる保守的な僧として、その存在は時には、目の上のたんこぶ的存在ともなつた。実際、六時礼賛にしても、彼は当初、その興行には一般民衆の参加を認めるべきではない、と提案した。いらぬ混乱をもたらしかねないというのである。これに安樂が猛反発し、最後は法然自らが仲裁する形で、

「阿弥陀如来の慈悲はあまねくすべての人にいきわたらねばならぬ」

と裁定が下り、誰でもが参加できる今の形となつたのである。

何から話そうか？

時子との思い出が頭の中を駆け巡つた。どこまでも広がる近江の

平野、美しい三上山、葦茂る琵琶湖の湖岸、かなたに見える比叡山に落ちる鮮やかな夕日。楽しい日々、そして、突然の悲しい出来事。

すべてをありのままに話そう

そう決意すると住蓮は姿勢を但し、続いてしつかりした口調で語りだした。

「私が法然様のもとで修行を始めるにいたったことの次第より、まずお話申し上げねばありません」

すべてを話すと決意した今、迷いもなくなり、かえって気持ちは軽くなった。

「話がかなり長くなるとは思いますがよろしいでしょうか。すべてをお話しますので、ゆるりとお聞きいただきますようお願いします」  
「分かった」

頷いた信空の表情が幾分か和らいだように住蓮には見えた。決して自分たちを嫌っているのではない。教団のことを案じればこそ、教団に関する雑多な問題を、法然上人を煩わせることなく解決する役割を彼は担っているのである。そのことを住蓮はよく承知していた。すべて話すことにより、何かの知恵を授けてくださるかもしれない。

「そのために、まずは私の生い立ちから話さねばならぬかと思います……」

彼の話の始まりは遠く奈良の興福寺での幼少時代にさかのぼった。どうしても乗り越えられなかった親子の葛藤、そこからすべてが始まったことは間違いない。彼自身が確信していることだった。

「あれは確か……」

おもむろに彼は語り始めた……。

## 第一部第八章

住蓮の記憶は12年前に遡った。

治承4年、8月には源頼朝が伊豆に挙兵したこの年の春、近江路を歩く一人の青年の姿があつた。名を時実と言う。齡18――後の住蓮であつた。

奈良を出発して3日目。昨日は木津川から宇治川へと抜けると、逸る心で、一気に川に沿つて瀬田の唐橋を目指した。そして昨夜は石山寺の粗末な宿坊で一夜を過ごした。

そして、今日は朝早く寺を後にした。寺の者に尋ねたところ、目的地馬淵の里まであとわずか。川の向こうに琵琶湖が広がって見える。といつても河口付近なのでまだ琵琶湖の一部しか見えていない。しかしそれでも時実にとつては大きい感動であつた。

何せ、生まれも育ちも奈良であつたから、彼は海も湖も見ることがなかつた。

それが、今、目の前には琵琶湖の水が溢れるほどに広がって見えている。それは朝日にきらきら輝いてまことに美しく、時実はもっと高いところから見たいと思い、近くの人に登ってみることにした。頂上にたどり着くと、琵琶湖が遠くに一望できた。

「いやー、本当にでかいな！」

時実は大きい声で叫んだ。何とも言えない開放感であつた。眼前に広がる美しい琵琶湖を見ると、苦しかった興福寺での修行、そして父との確執、いやな思いでもどこかへ吹き飛んでしまった。

「俺は今から俺の人生をやり直すんだ！」

と、もう一度腹の底から大声で叫ぶと、彼は清々しい気分で山を降りた。

後は一路馬淵を目指すのみである。

馬淵では、住蓮の母の親類が自分を待っていてくれるはずだった。

近江の国は肥沃な土地からの農産物の収穫、また琵琶湖から取れる湖の恵みも豊かで、古くから天皇家、貴族、社寺が直轄領として多くの莊園を經營していた。馬渚にあるそんな莊園の一つの管理を任されていた、佐々木孝信という豪族の元に、彼の母方の親類が嫁いでいたのである。還俗して興福寺の僧を辞して後、奈良を去るにあたって、母は次の働き口として、その親類の元を訪ねるように取り計らってくれたのだ。

孝信は源氏の血を引いているからということで、佐々木の姓を名乗っていたが本当のところはわからない。近江の国では、古くからいる豪族たちも勝手に佐々木氏を名乗ったりしていたからである。彼は平治の乱の折は平氏方に与した。平治の乱では、近江の佐々木氏一族は源氏方、平氏方に分かれてしまい、敗れた源氏方の佐々木氏は東国へと落ち延びていたのであった。

時実が訪ねようとしていた孝信はそんな混乱の中で、近江での勢力を伸ばしたのであった。しかし今、平氏方の分は悪い。源平の争乱の最中、混乱の中で人手が足りず、租税に関わる計算に長けた人物を探していたのであった。興福寺で修行を積んだ時実は、幸い計算にもめっぽう強く、孝信も彼に期待していた。無論、時実に不安がなかったわけではない。

「なあに、何とかなるさ」

しかし、美しい近江の風景は、そんな時実の不安な気持ちも吹き飛ばした。とにかく、青年時代を興福寺の厳しい修行の中で過ごしたので、身に着けた学問も相当なもの、という自負があった。

「そう、俺は、過去との決別のためにこの地に來たのだ」

時実奈良で生まれ育った。父、祖父は興福寺の堂衆であった。特に彼の父は興福寺でも名の通った荒法師で、都への訴状へ出向くことも度々、平氏の軍勢と戦ってこれを蹴散らした武勇伝は小さいころからたびたび聞かされた。

しかしそんな父は息子を、自分とは違って、学問で成功させたい

と思い、幼少時から勉学に励ませた。

「わしのような荒法師になつてはいかん。お前は学問で身を立てろ」父のこのいいつけ通り、時実 は 学問に没頭し、出家すると仏法修行に勤しむ毎日であつた。

しかし、当時の興福寺で高僧となるのは、実際は殆ど貴族の子息らであつた。純粹に学問に励む青年にとってこの壁はいかんともしがたく、貴族の子息らがまだ若いのに次々と出世の階段を駆け上げるのを見て、やがて学問への情熱は冷めていった。

また仏法修養そのものへの疑問も大きかつた。奈良の都も当時の深刻な社会状況と無縁ではなかつた。人々の貧困は深刻で、町はずれのいたるところ、死人で溢れていた。そんな一般民衆の苦悩とは無縁に、興福寺の僧たちは京の都での権力争奪ゲームに明け暮れていた。

人は自分だけが救われればいいのだろうか。

仏の教えは、習うに深大、行うに難しく、仏の教えに従おうと修練すればするほど、従えない罪深い自分がいる。

殺すなかれ

偽りを言うなかれ

盗むなかれ

邪淫をなすなかれ

酒を飲むなかれ

今の時代に、一般の民衆たちがこのようなことを守れるものだろうか。とすれば一体誰が救われて、往生できるのか、涅槃へと至れるのか。みな地獄へ落ちるしかないのか。

「いや、それでいいのだ」

と言う修行僧仲間もいた。でも、時実には納得できなかった。貧困に呻き餓死していく人々、毎日の生活のためにやむなく、偽り、殺し、盗み、そして絶望から酒に溺れる人たちを見るにつけ、自分自

身すら救えないのにこの人たちにどうやって極楽往生の道を教え示すことができようか、と自分の無力さに腹を立て、また悲しみにく  
れる毎日であった。

「お前は理想が高すぎるのだ」

と父からは言われた。父に相談しても、息子の立身出世しか頭に  
ない父は聞く耳を持っていなかった。父子の関係は冷めていった。  
ある日時実は決意した。還俗する、と。

反対する父と大喧嘩になった。父からは親子の縁を切ると告げら  
れた。しかし時実の決意は固かった。母は息子を不憫に思い、息子  
の世話をしてくれそうな親族を探した。幸い近江の地で、莊園管理  
を任されている孝信が、学問の素養のある青年なら預かってもいい  
と言ってきた。

「新しい地へ行こう」

時実ももう奈良の都に未練は無かった。すぐに旅支度を整えると、  
近江へと旅立ったのであった。

彼は瀬田の唐橋を渡ると東へと進んだ。大きい山が湖の向こう側  
に見えた。

「あれが比叡山だな」

あそこでも多くの僧たちが修行に明け暮れているのだろう。いや  
な自分の過去が思い出された。それを振り切るよう眼を右側へ移す  
と、道のまっすぐ向こうには比叡山よりはるかに小さいが、まこ  
とに美しい姿をした山が見えた。

たまたま通りがかった土地のものに尋ねた。

「あの山の名は何と言うか」

「三上山と申します」

土地のものは、名前と共に、三上山にまつわる大ムカデの伝説も  
語ってくれた。聞けば、馬淵の里はその三上山のすぐ向こうだとい  
う。

「急ごう」

時実は歩を速めた。

「ムカデの伝説、気に入った」

美しい近江の地、時実はここでならやれると思った。

「いや、やらねばならない。そして父を見返してやるのだ」

自信に満ちた足取りは軽く、高まる胸の鼓動を感じながら時実は  
一路馬渕の里を目指した。

## 第一部第九章

こうして、住蓮が信空に、時子との出会いのいきさつを説明せんと、過去の記憶を辿っていたちようどその頃……。

ここ祇園社のはずれにある犬神人の里でも、時子が、今まで誰にも秘密にしていた自分の過去を、源太にまさに今から語り始めんとしていた。

「源太さん、本当にお気遣いありがとうございます」

時子は涙を拭って、源太に語りかけた。

「話します。私の話、聞いてください。お願いします」

「おときさん……」

この人ならすべてをありのままに話せる。時子はそう自分に言い聞かせると、押し殺していた思いをぶちまけるかのように、一気に源太に向かって話し出した。

「実は、昨日の都大路でのお勤めの折、偶然見かけたのです、

叡山座主の護衛の武者の中に私の兄がいるのを」

「何とそんなことが そんな！」

あまりに唐突な告白に、源太は言葉を失ってしまった。

「近江の地、馬渚の里で別れて以来、もう何年になりましたか……」

時子の話は近江馬渚での幼少時代にさかのぼった。彼女は思

い出をかみしめるように、ゆっくりと話し始めた。両親が管理する莊園、領地での楽しい日々、豊かな自然との触れ合い、そして……

「住蓮様ともそこで出会ったのでございます」

「なんと、そうであったか」

源太はようやくこの二人の不思議な関係に合点がいった。

「あの方と初めて会った日のことは鮮明に今でも覚えております」

時子が、住蓮が馬渚の莊園を来訪するまでのいきさつを、ひとまず語り終えると、源太は大きいため息をついた。



「なるほど、あの坊主にはそんな過去があつたわけか」

「左様でございます。」

と言うと、さらに時子は続けた。

「住蓮様はすぐに私の父母から気に入られ、莊園の管理の仕事も順調にこなしていられました」

時子は源太に語りながら、同時に懐かしい近江での日々を思い起こしていた。

「私はそのころまだ十五の年を迎えたばかりで、あの方が来られた時は、兄がもう一人増えたような感覚でしかありませんでした。でも、日がたつにつれ、あの方への思いが、……」

ここまで語ると、時子は声を詰まらせた。源太はすぐに彼らが恋人になつたのだと察した。

源太は今迄にも多くの新参者からここへ来るに至つた身の上話を聞いてきたので、時子のような境遇が決して珍しいものではないことを承知していた。

しかし何度聞いても、哀れな話に悲しみが尽きることはない。一体このような家族、夫婦、恋人の離散の悲しみがいつまで続くのだろう！

「神も仏もあつたものか！」

源太は恋仲であつた二人を無残にも引き裂いたこの病を心底呪つた。源太の目から涙がこぼれた。

時子は声をつまらせながらも話を続けた。

「私が体の変化に気づいたのはそれから三年ばかりしてからのことでした。眉が薄くなつたのに気づいたのが最初でしょうか。また体のところどころに白い斑点が出てきました。母は気がついていたのかどうかは分かりません。母には知られまいとしましたから。ただ、自分では話に聞いていたこれがひよつとするあの白癩というものか、そう考えると恐ろしく、毎日が眠れない日が続きました。」

「- おそらく兄がいれば、真っ先に兄に相談したでしょう。しかしその兄が……」

「兄上がどうされたんじゃ」

源太が問いかけた。

「兄は元来が、気性が荒く、武道に秀で、莊園管理の仕事も退屈に感じておったようです。いつも『機会があれば源氏の兵に加わって平氏と戦いたい。』と、口癖のように言っておりました」  
「なるほど」

「丁度その時でした。木曾義仲の軍勢が京を目指して近江の地まで参りました。兄は、木曾の義仲が比叡山に陣を張った、と聞きますと、父母の反対の声にも耳を貸さず、家を飛び出して、義仲の軍勢に加わったのです……」

ここで源太が口を挟んだ。

「そうであったか。すると、おとさんの兄上は、兄上はこの戦乱を何とか生き延びて、それで、今はどういうわけか比叡山のお坊さんの護衛をしているというわけか」

「そのようでございます。」

時子の目に再び涙が溢れた。

「兄に、一言、一言、声をかけたかった……」

ここへ来るものは家族について多くを語らない。世話役として頼られている源太には、それでも、ある程度年数がたつといういろいろと心の内を打ち明けるものが現れる。

しかし、語ったところで何になろう。みな、白癡とわかったとたん、家族からは見捨てられ、ぼろきれのごとくなりながら、ある者は放浪生活に入り、辛酸を嘗め尽くしたあげく道端で野垂れ死にするしかないのである。ここへたどり着いたもの、拾われた者は運のよい方だ。

家族からはもう死んだものとされている。連絡を取ろうとしたところで、拒絶される。

「お前はもう死んだことになっているのだから、これ以上家族に迷惑をかけないでおくれ」

と言われ、もう二度と会うことはかなわない。

生きながらも、実はもう死んでいるのだ！

なつかしい故郷へ帰ることなど適うはずもない。祇園社のものは、犬神人として、ここで死ねるだけまだましというものだ。

「つらからう、つらからう」

源太も言葉を詰まらせた。

源太と時子は共に涙を流した。　　どれだけ泣いただろう。源太が涙を拭いたあとも、時子は一向に泣き止む気配が無かった。

「おときさん、つらからう。　　これぐらいにしておこうか今日は、またゆつくり話して聞かせてくれればよい。」

源太がそう言って時子の下を去ろうとしたところ、時子は、ようやく泣くのをやめた。そして涙を拭いながら、

「いえ、源太さん。行かないで。　　最後まで話を聞いていってください。この私の哀れな話を……」

と、源太を呼び止めた。

「そうか、　　大丈夫か……、おときさん。無理しなくともよいのじゃぞ」

「はい、大丈夫ですから」

時子の返事のその気丈さに、源太も少し安心した。

「そうか、　　それでは話をもう少し聞くとするか、　　で、それから、どうなったのじゃ」

源太が促すと、時子はさらに話を続けた。

「住蓮様と私はことあるごとに一緒にいたものですから、あの人はすぐに私の体の異変に気がついたようです」

「であろうな」

「はい、それで私は思い切ってあの方に相談しました。頼れるのはあの方しかおりませんでしたし、父母をとにかく落胆させたくなかつたものですから」

「で……」

と、言いかけて源太は言葉を止めた。時子が再びわっと泣き出し

たのだ。悲しい思いをせき止めるのに、理性はあまりに無力と言えた。

「水でも一杯汲んでくるか」

源太は少し時子を休ませねば、と思った。

外へ出ると、いつもの集落の風景がそこにあつた。男たちは鍛冶仕事、力仕事に、女たちは洗濯に、あるものは歌を歌いながら、各自仕事に勤しんでいた。

いつまで我々はこの病に苦しめられなければならないのか？この穢れはいつになったら清められるのか？この穢れを清めてくれるのは神なのか、仏なのか？

いや、そもそも我々は清められるのか。救われるのか。

源太は天を仰いで叫んだ。

「神でも仏でもおわすものならここへ今すぐ出てきてください。今すぐに……、そして悲嘆にくれるお時さんを今すぐに救ってください。わしはどうでもよい。わしはどうでもいいから」

するとそこへ、そんな源太の胸の内など知ろうはずもない、都の死体処理の仕事から帰ってきた彼の仲間が近寄ってきた。井戸から組んだ水を竹筒に満たし手に持っている。汗のにおいと、この病氣独特の腐敗臭にも近い独特の臭いの混じりあつた臭いが源太の鼻を刺激した。無論、そんな臭いにも皆慣れっこになってしまっている。源太の前に来ると彼はその水を一気に飲み干した。そして彼に声をかけた。

「いやー、源さん。相変わらず都は屍で一杯じゃ。この仕事もかなわんのう。鴨の川原など臭うて、臭うて、いやもつともこつちも半分死に掛けているみたいなもんじゃがのう。あははは！」

源太は半ばあきれながらも、このどん底の中にあつて、それでも明るく生きようとする仲間の言葉に、反面少し救われた気がした。

早くお時さんに水を持って行ってやらんと

彼はその仲間に別れを告げたと水汲み場への歩を進めた。

## 第一部第十章

「近江での新しい生活はまことに楽しく……」

住蓮が信空に語った話は決して誇張されたものではない。彼の近江の国での生活はまことに充実したものであった。

まず、近江の国は、源平争乱とは無縁とまではいかなかったが、それでもある程度は秩序が保たれていて、奈良の都では日常茶飯事であった強盗、人殺し、また、死体がそこかしこに散らばっている光景には滅多にお目にかからなかった。

次に仕事に恵まれた。もともと勉強に長けた彼であったから、荘園管理の仕事はさほど難しいことではなかった。時子の父母からは絶大な信頼を寄せられたし、周囲のものもすぐに彼を慕いだした。そして時子との出会いである。

住蓮は生まれて初めて恋心を抱いた。彼女はまことに魅力的であった。

春には二人で琵琶湖の湖畔に遊び、夏には葦の茂る湿原に小船を浮かべ、秋には紅葉の美しい湖南の山々に登り、そして冬には積もった雪で雪合戦をした。二人のお気に入りには三上山であった。あの大むかでの伝説が残る美しい山である。山の頂上まで登ると琵琶湖が一望できた。向こうには比叡山も見える。そして特に何を語り合うというのでなく、ただ時を過ごすのである。それだけで十分二人は幸せであったのだ。

いつも二人はいつしよであった。時子の父母も二人の関係を暗黙のうちに認めていた。

全てが順風満帆であった。

しかし2年目に状況は変化した。

全国的な飢饉はこの近江の地にも押し寄せた。収穫はいつもより少なく、このため収めるべき税が思うように徴収できない事態となった。

住蓮は農民から陳情を受け、税負担を軽減してもらえないと、生きていくこともかなわない、と切実に訴えられた。

しかし都からの税の取立ての要求は厳しいものであった。

住蓮は農民たちの苦しい生活を目の当たりに見て、それでも彼らから容赦なく税を取り立てねばならぬ自分の仕事に苛立ちを覚え始めた。

また、源平争乱の影響が少しずつこの近江の地にも現れ始めていた。

平治の乱でこの地を追われた佐々木氏一族が、源頼朝の勢力伸長の余勢を駆って、再びかつての領地を取り戻さんと虎視眈々とこの国を狙っていたのである。このため豪族同士の揉め事がいたるところで起こるようになった。あるものは源氏方、あるものは平氏方に与しひどい場合は夜討ちをかけ、一家皆殺しを図る、といった具合であった。

時子の父は平治の乱の折は、佐々木氏ではあったが、平氏方に与した。このことが源氏の血筋に誇りを持つ長男の盛高には気に入らなかった。

親子はよく喧嘩をするようになった。彼は住蓮によく父への不満をこぼした。住蓮は盛高とも仲が良かった。住蓮は荒法師で鳴らした父、祖父の血を引き継いでいたせい、武芸も達者であった。しばしば二人は武術の練習をした。馬で近江の平野を駆け巡り、弓矢の練習も競い合った。

「どうだ、俺と一緒に義仲様の軍勢に加わらぬか」

盛高は冗談とも本気とも取れぬ口調で住蓮に尋ねたことがある。

住蓮がどう返事をしたものか思案していると、

「なーに、戯れに申したこと。聞き流してくれ」

と言うと、盛高は急に表情をキツと引き締めて、

「時実、しかし、もし俺が家を出るようなことがあれば、時子のことをよろしく頼む。あれはお前のことを本当に好いているようだ。それと父母もよろしく面倒を見てくれ。こここのところこの馬淵の里

周囲でも不穏な気配が感じられる。父を狙って、いつ誰が屋敷を襲ってくるとも限らん。いつも喧嘩ばかりしている父だが、それでも大事な父親だ。しかしお前がいれば安心だ。ゆめゆめそのこと怠りないように頼む」

そして住蓮が近江の国に来て3年が過ぎたある日、盛高は突然家を飛び出した。　　こういい残して。

「俺は木曾の義仲様の軍勢に加わり、都から平氏一族を追い散らす。それが源氏の血を受け継ぐ佐々木の家に生まれた俺の役目だ」

こうして盛高は馬渕の里を去った。

父母の落胆は大きかった。そして、さらに悲しみに追い討ちをかける出来事が持ち上がった。

それは……。

## 第一部第十一章

時子が白癩を発病したのである。

最初は頭髮がやや薄くなり、また肌に白い斑点がうつすらと出現する程度であつた。この時点では、両親も本人も、また住蓮も『まさか』と思つていた。しかし、日を追うにつれ、それらの体の変化は着実に悪化し、すぐに、もはやそれは隠しようの無い現実として直視しなければならなくなった。

「彼女が白癩を患つていると分かつたときの落胆は、それはとても言葉でいいあらわせるものではございません」

悲しそうにこう言う住蓮に、信空は、

「まこと、ようやく理解できた。祇園舎の犬神人の女人が、要するに、その、時子という名の女人であるというわけか……、そちと恋仲になつたという、佐々木家の娘御であつたというわけか……」  
と、慰めるように静かな口調で答えた。彼は、ようやく二人の關係が理解でき、安堵もしたが、同時に二人を襲つた悲しい出来事により、その後二人が引き裂かれたことが容易に想像されたので、その悲しみはいかほどであつたか、と深く彼に同情するのでもあつた。  
「それからというものは、絶望と悲嘆に明け暮れる毎日でありました」

馬淵での思い出話が、次第に悲しい様相を帯びてくるにつれ、住蓮の語り口も次第に重くなつてきた。それでも彼は一つ一つ慎重に言葉を選びながら、信空に話を続けた。

「私が、それでも、その絶望感から何とか立ち直れたのは、まこと、応水和上のお蔭です」

応水という名前を聞いて、それまで黙つて住蓮の話を聞いていた信空が驚いた表情を見せた。

「応水、……。よもや、そちの言う応水和上とは、あの応水律師のことではあるまいな。将来を嘱望されながら、天台のあり方を批判



したため比叡山を降りる羽目になってしまった、あのお方か」

信空のこの発言に住蓮も驚いた。

「応水律師、多分間違ひありますまい。比叡山で律師まで上り詰めた偉いお方だということは聞いておりましたから、そうですか、信空様は応水和尚のことをご存知でしたか」

応水、住蓮は彼との最初の出会いを今でも克明に覚えている。

ある日、佐々木の家の雑役婦の一人が病で倒れ数日の後に死んだ。住蓮はその死後の処理に当たることとなった。

当時、貴族、武士階級に属さない一般庶民の葬送を行うのは、もっぱらその地域、地域で活躍していた市の聖いちひょうと呼ばれる僧たちであった。彼らは特定の宗派に属することなく、特定の寺院を持たず、辻説法を行いながら、阿弥陀信仰を庶民の間に広めていた。

彼らは貴族社会と結びついた寺院から見れば、こじき坊主に過ぎない身分の者であったが、庶民からはよく慕われていた。それは、当時貴族の間に流行していた阿弥陀信仰を庶民にも広め、庶民に説法をする傍ら、彼らと生活を共にし、親身になって彼らの悩みの相談に乗ったり、生活の援助に奔走したりしていたからである。

ここ馬渕の里では応水と言う名の市の聖が普段、この役割を演じていた。住蓮も名前だけは聞いて知っていた。

彼は琵琶湖湖畔にある長命寺の近くに草庵を結び、普段は長命寺の坂下者たちの面倒を見ていた。

坂下者とは、当時、寺の門前にあって、大抵は塀で囲われた所に集団で居住していた、いわば乞食集団である。彼らは、人間として最低限の生活、――ぼろぼろの衣服、今にも崩れ落ちそうな小屋、そして粗末な食事など、――をその寺が保証する代わりに、寺の雑用、掃除、修理、またお布施周りに駆り出されたのである。行き倒れで寺の境内で死んでしまったものなど、身元不明の死体の処理、また動物の死体処理もその一つであった。

市の聖たちは、時にそんな彼らを組織、管理し団結させ、彼らの代弁者となり、寺院側に彼らの待遇の改善を要求したりするのであった。

住蓮は長命寺へ向かった。それまで遠くから見ただけで一度も足を運んだことはなかったが、道は知っていたので、すぐにたどり着いた。

こんな鄙びたところにこのような立派な寺院があるのか、と住蓮はあらためて驚いた。一方、対照的に坂下者が暮らす集落は、粗末なぼろ小屋が並び遠目にもすぐにそれと分かった。

住蓮は奈良の都を思い出した。興福寺ではこのような集落は門前になかったが、都のはずれに貧困層の人々が暮らす集落があった。住蓮は彼らの姿を見て心を痛めたものであった。

この貧富の格差は一体どこから生じたものか。生きとし生けるものすべて仏性あり、と人間の平等を是とするのが仏の教えではないか。末法の世ではこれも致し方ないのか。これら貧しい人々は前世の因縁でその報いを受けなければならぬということなのか……。

今が末法の世であるすれば、仏の教えは、このような人たちにそもそも届くものなのか。この人たちを仏は一体いかなる方法で救済しようと考えておられるのか。興福寺での厳しい修行の傍ら、住蓮が常に抱いていた疑問であった。

今、目の前に、このような貧しい人々が多数うごめいているのを見て、住蓮は改めて心が痛んだ。

近江の地でも、近年続く飢饉の影響は逃れがたく、農民たちの生活は苦しいものとなっていた。飢え死にする者が数多い中、それでも何とか生きて行ける者たちは、ここの坂下者たちの集落に来て、彼らの貧しい生活を見れば、自分たちはまだ幸せだと感じるだろう。

住蓮は、そんな心の思いをひとまずは振り払い、とにかくにも、応水を探し出そうと、坂下者の一人に声をかけた。

「すまぬ、この近くに応水と言う名の和上がお住まいの草庵はないか」

「応水、ああ、あの坊主か」

どうも、あまりここでは尊敬されていないようだ、と彼の受け答えから住蓮は感じとった。

「あの坊主は暇なときは大抵、湖で釣りをしとる。ここから湖まで行ってみればどうじゃ」

『湖で釣り？』 住蓮は不審な気持ちを抱いた。

殺生を禁じられている僧が釣り、とは一体どういうことか。応水とは破戒僧か、そんな坊主と会わなくてはならぬのか、やれやれとんでもないことになったわい、 住蓮はそんな思いを抱きながら湖へと歩を進めた。

湖まではすぐだった。湖畔の風が気持ちよかった。蘆茂る湖畔の風景を住蓮は愛していた。時子ともよく散歩をする、お気に入り場所である。しかし今まで釣りをする僧の姿を見たことはなかった。釣りをする場所なら岩場の方が、 住蓮は普段は行くことのない岩場の方へ向かった。案の定そこに彼はいた。僧衣姿の男が釣り糸を垂れている。彼に違いない。住蓮は近づいた。

## 第一部第十二章

「御身が応水殿であるか」

住蓮は尋ねた。ぼろぼろの僧衣を着た男は振り返ると、こう住蓮に切り返した。

「ふーむ、確かに私が応水であるが、そちは何者かな？」

そう言つと、住蓮をじろじろと眺めだした。

住蓮は葬祭の件を手短に話した。話し終わると、こんな破戒僧にいつまでも係わつていては面倒なことになるとの思いから、

「では、あとのことよろしく」

と言つて、その場を立ち去ろうとした。するとそれまで黙っていた応水が

「まあまあ、確か、名を時実と申したか、噂には聞いておつた。あの佐々木の莊園で働いておるとか……、もともとは興福寺での修行僧であつたとか。であれば、わしと話も出来よう。どうじゃ、ちと、わしも退屈しておつたところじゃ。今日はさっぱり魚も釣れん人恋しい日もあるうというもの。ちよつとばかりこの坊主につきあつてはもらえまいか」

そつという応水の言葉は、耳にはやさしく響いたが、そつ言いながらの目つきには眼光鋭いものがあり、時実――住蓮は、なぜかしらその誘いに”否”とは言い切れず、とりあえずここは彼の言つことに従おうことにした。

それになんと言つても彼はこの地では新参者であつたこともあつた。

「では、しばらくだけ」

と言つと、時実は彼の傍らに腰掛けた。

「ははは、それでよい。それでよい……」

応水は今度は笑顔で時実を見つめた。

彼は年のころ五十歳ぐらいであろうか。遠目には、がりがりに瘦

せた貧相な顔つきであつたが、こうして横に座つて見ると、非常に思慮深そうな人柄を漂わせていた。また先ほどうつて変わった笑顔は、彼の温厚な人柄をしのばせた。

穏やかな顔つきで彼は話を続けた。

「どうじゃ、ここの暮らしぶりは」

気軽に声をかけてくる彼に、

「はあ、まずまず機嫌よく仕事はさせていただいております」

と、住蓮は卒のない返事を返しておいた。しかし、やはりあまり係わり合いにならないように、という彼の防衛反応からであつた。

「それは結構なことじゃ」

と、応水は言葉を返しながらも、釣竿を持つ手に急に力をこめた。「かかりよつた！」

と、応水は大声で言うつと、釣り糸を引き上げた。

「おお、釣れたわい！」

見ると小魚が引つかかっていた。応水は手際よく魚を針からはずすと、持つてきていた魚籠に放り込んだ。すると満足そうに笑みを浮かべて、

「さてさて、今日はこれで何とか腹が足りる。ありがたいことじゃ」

と自ら呟くのであつた。

住蓮は呆れてしまった。漁師の捕つたものを食べるとしても、戒に反するのだ。ましてや、自分の手で魚を捕らえて、それを食用にするとは……、腹が足りる、と満足するとは……。

仏の教えを捨てた自分が立腹するのも筋違いかもしれないと思つたが、住蓮は、

それにしても、僧衣をまとつた人間がかくもあからさまに、と思うと何か義憤に近いものを感じた。そこで、こんな破戒僧に関わるのはこれぐらいにしないと、と思い、立ち上がるところ告げた。

「それでは、私目はそろそろ……」

そう言つて暇乞いをしその場を離れようと歩き出した。

すると、そんな住蓮の思いを見透かすかのように、毅然とした表情を見せると、応水は立ち去ろうとする住蓮に向かって、急に厳しい口調で語りだした。

「さてさて、おぬしはこう思っているのじゃ。何という坊主だ。破戒も甚だしい。こういつた、だらしない坊主共がこの国をだめにしているのだ、民を誑かしているのだ、とな」

住蓮は心に考えていたことをずばりと言い当てられて少しうろたえた。彼は、返す言葉が見つからず、歩を止めると已む無く黙っていた。

すると、今度は応水は急に

「はははは！」

と笑い出した。そして住蓮に、

「それでいいのじゃ。それで！そう考えて当たり前。何せ、そちはあの修行厳しい南都興福寺で修行をつんだのであるからな」

と語り終えると、また元の厳しい表情に戻った。何か思案しているようであった。

そして、しばし沈黙の後、さらに彼は語り続けた。

「しかしだ、のう時実。この魚はわしの腹に入つてわしを養う。わしを生かすために死ぬのじゃ。すれば、次にはこうして生かされたこのわしはまた誰かを生かさねばならん、という定めにはならんか？そのためにはいずれ死ぬこともあるう。そう、死んでこそ誰かを生かせる場もいずれ出てこよう！物みな、それぞれ役割を持つてこの世に生を受けている。そして役割はいつか終わるときが来る。熟した果物の実は落ちて後、腐り、命果てた後、また、その種が根を出し、新しく樹木へと成長する。そして多くの実を結ぶ。わかるかな……。一粒の種は死ななければそのままだが、地に落ちて死に、新たに芽を出すことによって、その百倍も、千倍も多くの実を結ぶのじゃ」

急に真摯に語りだした応水を住蓮はただ黙つて見つめていた。応

水は湖に向かって顔を向けると話を続けた。

「わしが意味もなく、ただ殺したい、という欲求だけでこの魚を食したのであれば、それは仏の教えに反するであろう。しかし、これは違う。生きとし生けるものすべて仏性あり。草や花にだって命はある。しからば命ある草や花にも仏がおられる。とすれば人間は何も食べてはいけないということか……。そんな馬鹿なことがあるうはずも無い」

住蓮は言葉の重みにただ圧倒されて聞いていた。

「仏様の教えた戒律はそもそも人を活かすためのもの。仏性を目覚めさせるためのもの。人々を彼岸へと導くためのもの。しかし、昨今の南都北嶺の教えは、形式にばかり囚われてはおらんか。戒律、勤行、ああやらこうやら、と。しかし、飢えに苦しみ、生きること、に絶望しておる、この今の世の多くの民衆を、この戒律が救えるのだろうか。彼らにきびしい修行を積みと言うのか。どうじゃ、おぬしはどう思う」

厳しい表情でこれらのことを語り終えると、一転して、応水は再び表情を和らげ、にこりと住蓮に微笑んだ。

「ははは、すこし喋りすぎたようじゃのう。いや、すまん、すまんでも、何となくおぬしには一度話したかったのじゃ。話さねばならむと思っていたのじゃ。いや時間を取らせた。またこんな坊主でよければ、人恋しいおりに尋ねてきてくれ」

応水はそう言つと、岩場を離れた。

「そうじゃ、肝心の葬送の件だが、心配するには及ばん。わしがすべて手配する。莊園で待つておれ。すぐに連絡いたす」

そう言い残すと、応水は足早に去った。住蓮はしばらくその後姿を追っていたが、やがて遠ざかる彼の姿は、松林の中に消えてしまった。

## 第一部第十三章

住蓮は次の日、再び長命寺へと向かった。なぜか応水にまた会いたくなつたからである。

「戒律は人を生かすためのもの。仏性を目覚めさせるためのもの。人々を彼岸へと導くためのもの」

という、前日の応水の言葉が耳にこびりついて、昨夜はなかなか眠れなかった。そのような教えは興福寺の修行僧時代には聞いたことは無かった。何か、忘れかけていたものが思い起こされたような気分であつた。

確かに、本来人を救うはずの戒律が人を苦しめている。そしてその苦しさから逃れようとますます勤行に励むが、その結果は、ますます煩惱にまみれた自分をそこに発見するだけである。興福寺の日々、まじめに修行に取り組めば取り組むほどこの悪循環から逃られない自分に気づくのが常であつた。

興福寺の修行に耐えられなかった自分は、そのことを忘れるために逃れてこの地へやってきたようなものであつたかもしれない。無論、今はそれなりに楽しい日々である。しかし逃れられない人々はどうなる。彼らは放っておいて良いのか……。

自分だけ良ければそれでいいのか……。

答えがほしいと思つた。

「応水殿はおいでか」

昨日訪れた、坂下者の集落で彼を探した。集落は粗末な柵で囲われている。その柵越しに一人の男を捕まえて彼の所在を聞いた。

「あそこだ」

見慣れないよそ者に、不審さを抱いたのか、その男はじろつと住蓮を見返した。ひどい臭いがした。応水の姿が柵越しに向こうに見えた。

「応水殿！」



応水は住蓮の声に気がついて振り向いた。

「やあ、お前さんか。ははは、よく来た。というか、多分来ると思  
つとったがな」

応水は気さくに彼を集落の中に招きいれた。

「さあ、中へ入って来い」

「中へ、ですか……」

柵で囲われた、というよりは隔離された、この手の場所に足を踏  
み入れるのは初めてだった。

一種独特の臭気がした。足を踏み入れるにつれ、臭気が強まり吐  
き気を催した。それでも中の人々は快活そうに行き交い、楽しげに  
会話を交わしていた。

「よう来た。そうじゃ、中を案内するか。なあに、この臭い、すぐ  
に慣れるわい。心配無用じゃ」

遠目にこれらの人々を見ることはあっても間近で接する機会は無  
かった。住蓮はそんな自分が何となく恥ずかしく感じられた。

近江の地の美しさと豊かさばかりを追い求めていた。莊園の中の  
比較的豊かな生活の影で、これらの人々がうごめいている。

住蓮は、ふと考え込んでしまった。

そもそも、こういった人々の犠牲の下に自分たちの豊かな生  
活が成り立っているのではあるまいか？

と、そんな疑問が湧いた。

応水はそんな住蓮の思いを見抜いたかのように呟いた。

「寺からの施しと言うても、なーに、お情け程度のもんでな。

結局、寺もこの者らをいのように利用しているというわけだ。使い  
捨ての雑役夫としてな。寺の坊主らにとってこんな便利なものはな  
い。無論、わしは、この者たちが、いのように使い捨てにならんよ  
うに、寺に監視の目を光らせておる。しかしのう、それとて限界が  
ある。まったく仏の教えを説いているものどもが、こんなこと  
を平気でしよおる。許せんが、この者たちの食うもののことを考え  
ると、そう簡単にわしも喧嘩は出来んからのう。　　こんなわしに

出来ることといえば、あとは……」

と、そこまで言うとき、応水は急に目を瞑り合掌した。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、左様、彼らが阿弥陀様の救いに預かれるように、念仏の功德を毎日彼らに説いて回ること。

老いばれたこのわしに出来ることはそれぐらいじゃ」

彼は住蓮に向かつてなおも語り続けた。

「五濁溢れるこの末法の世、結局人間の作ったこの濁りに人間が飲まれようとしておる。しかしこの濁りはここに居る者たちが作ったものか。この者たちは犠牲となったものではないか？」

応水は遠く琵琶湖の対岸にそびえる比叡山を見ると、

「のう、あの比叡の山の向こうに京の都がある。行ったことはあるか、おぬし？」

住蓮は「ありません」と答えると、彼は、さらに続けた。

「ひどいもんじゃ、都のありようは。この度の飢饉で、また多くのものが都へと流れた。食うに困ったものが集まるが、結局都へ行ったとて同じこと。飢え死にするしかない。鴨の河原には死体が溢れておる。それはそれはひどい光景じゃ。累々と死体が山積みになれておるのじゃから……」

住蓮は京の都へはまだ行ったことがなかった。そんなにひどいありようなのか、と思うと心が痛んだ。

『しかし、私には何が出来るのでしょうか。興福寺の修行に挫折し、逃げ出した無力な私です。こんな私が……』

と、今まさに口に出して、住蓮がまじめに答えようとするのを、応水は遮って続けざまにこう言った。

「いや、何、破戒僧のばやきじゃ。あまり気にするな。ああ、年をとるとぐちが増えて困るわい。どれどれ中を案内してやろう。おもしろい奴もおる。そうじゃ、忠助を紹介しよう。この村一の人気者じゃ」

そう言うと、応水は先に歩き出した。住蓮は何か自分の気負った気持ちをはぐらかされた気もしたが、この村の生活にも興味があつ

た。というより、今まで存在を知っていても眼を背けていたことに、今はそれをまっすぐに見据えて、立ち向かうべきだ、と感じた。住蓮は何かしら自分の心が奮い立つのを感じながら応水のあとに付いて行った。

## 第一部第十四章

住蓮は、応水との出会いのいきさつをここまで話し終えると、いったん話を中断した。異常な疲労感と口の渇きが彼を襲っていたからである。無理もない、そもそもが語るには余りにも悲しい思い出なのだ。

信空は住蓮のそんな疲れた様子を見ると、彼を気遣って、

「少し、休むがよからう」

と声をかけた。そして

「誰かに水でも持ってきてこさせよう」

と言つて部屋を出た。外で、彼が用事を申し付ける声がした。

すぐに彼は部屋へ戻ってきた。

若い修行僧がしばらくすると、湯飲みを二つ持ってきた。

信空は住蓮に湯飲みの水を勧めると、

「そうであつたか、応水律師が長命寺におられたか。いやいや、何とも、　　そうであつたか」

と言つた。そして目を瞑つて黙想を始めた。彼も過去のことを追想したのだ。昔のこと　　比叡山、黒谷での修行時代に思いが及んでいるようであつた。

住蓮は、湯飲みの水で、ようやくのどの渇きを癒すと、ふーっと大きいため息をついた。疲労感を取れないがここまで話した以上は一気に喋ってしまう　　そう決意した住蓮はさらに話を続けた。

「信空様は応水殿をご存知であると、先ほど仰られましたが……」

そう言つて、さらにこう信空に問いかけた。

「いつ、どこで、どのように応水様とはお知り合いになられたのですか」

そう問われると、信空は目を開けた。彼はしばらく天井を眺めていたが、再び目を瞑ると再び少し黙想して後、

「いや、叡山は西塔黒谷でのこと、もう昔の話したが、　　共に修

行をしていた仲じゃ。叡空さまのもとでな」

と、住蓮に答えた。

「左様でございましたか」

住蓮も、何とも不思議なこの因縁に、心を巡らしていた。

信空はまた暫しの黙想の後、

「当時は、黒谷に山の念仏者達が集まっておった。叡空様はその中心であつた。法然様、応永……、皆、共に修行をした仲間じゃ。最も法然様が中でもずば抜けて優れていたのは言うまでも無いが……。私が法然様と共に比叡山を降りたのは、もう十数年前のことであるうか。――それより少し前であつたと思う。彼がある日、突然山を降りる、と姿を消したのだ」

と、さらに付け加えた。

「左様でしたか」

住蓮は数奇な運命の廻り合わせを感じた。信空も昔を懐かしがって思いを馳せていたのか、窓の外に見える庭を見やっていた。

信空は話を続けた。

「彼は若くして律師となつた、その秀逸さは叡山内でも評判であつた。次は大律師となるのも時間の問題、と将来を囑望されていた。それがある日、所用のため都へ行ったところ、そこで念仏聖に群がる民を見て心をうたれたらしい。それから彼は変わった。程なくして彼は念仏僧の集まる黒谷へとやってきた。そして我々と修行を共にしたというわけじゃ。そして……」

と、そこまで言うつと、信空は急に黙ってしまった。暫し沈黙の間が過ぎた。一つ一つの思い出の点検が終わつたのか、彼は話を再開した。

「彼はことあるごとに都へ足を運び、念仏聖たちと交わっていた様子じゃ。その影響からか、彼の言動はいつしか行き過ぎることが多くなり、叡空様も手を焼いておつた。彼も叡山は自分の住むところではないと感じたのじゃろう。そして市中で念仏の功德を皆に説いて回る道を選んだというわけじゃ。さて、どこにおられるものか、

と案じていたが近江の国におられたとはのう」

住蓮は、

「わかるような気がします」

と、言う、さらに言葉を続けた。

「あの方の目は常に民に向いておりました。それも打ちひしがれて、ぼろぼろになった人々、この世に絶望し、自分には何の救いもないと、悲嘆の毎日を過ごしている人々……」

そこまで言うと、住蓮はまた近江でのなつかしい日々を思い起しました。

「応水様は世間知らずの私の目を開かせてくれました……」

彼は再び語り始めた。

応水に坂下者たちとの交わりのきっかけを与えられた後、彼は積極的に彼らの村へ出かけた。

何か興味深かったという単純な気持ちからそれは始まった。そして彼らもそんな住蓮をなかなか受け入れなかったのは当然であった。しかし反発されればされるほど、住蓮は彼らの中に入り込みたい欲求に駆られた。興福寺での修行に挫折したその埋め合わせにも似た気持ちもあった。

そうして、次第に彼らと生活を共にし、彼らと共に笑い、泣き、悲しむことが出来るようになった。

「応水坊主に続いてまた変てこな者が現れよった」

集落ではそんな評判が立った。

住蓮はいかに自分が偏見に囚われていたか、ようやく気がつくと共にそんな自分を恥ずかしく思った。彼らは貧しくとも、互いに協力し、少しでも足りているものは不足しているものに分け与え、力のあるものは力の足りないものに力を貸し、誰もが貧しいながらも平等に生活できるよう、お互いの生活を支えあっていた。それは見事に調和の取れた共同体であった。

住蓮には眼から鱗の取れる経験であった。

外から眺めていたときは、そんな彼らを可哀想だとは思いつつも、

反面、汚い、くさい、などと心の底では感じていたのだ。それは誰しもがそうであろう。

中に入ってみてこそ本当の姿が見える。

近江の自然と交わる日々にも増して、彼らとの交わりの日々は楽しいものであった。彼は自分が見失っていたものをやっと見つけたような、そんな幸せすら感じていた。

「あの者たちが私の目から梁を取り除いてくれたのです」

信空はそんな住蓮の思いに深く共感した。

「そちも、応水律師からよきこと多くを学んだようじゃの。なるほど、彼の教えがあつて、今のお前があるということか、なるほど、なるほど……」

信空はやつと合点がいったという調子で何度も頷いた。

「六時礼賛にかけるそちの意気込みも応水律師の教えの賜物というわけか、あはは、合点、合点」

信空はめつたに笑つたりすることはなかった。住蓮はその信空が珍しく笑うのを目の当たりに見て、彼に対する親近感を覚えた。

不思議だった……。

法然の教団内で、彼は法然の一番弟子という存在であつたが、若い弟子たちからは、彼らのお目付け役という立場がら、どちらかというと疎まれる存在でもあつた。自分もどちらかというところ疎ましく思うことのほうが多かった。

しかし今は父親のような眼差しを自分に向けている。住蓮は法然の教団に拾われた自分の幸せを噛み締めた。すべての人たちに感謝の気持ちさをさげたかった。なかんずく身も心もぼろぼろであつた自分をここまでたち直してくれた安樂には心の中で有難う、と改めてつぶやいた。

和やかな空気がしばしその場を支配した。しかしそれをかき消すかのように、再び、信空の厳しい言葉が発せられた。

「応水律師との出会い、まことに興味深い話であつた。ところで、肝心の祇園舎の女人とそちとの関係についてはまだ合点がいか

ぬことがある。その時子殿という名の女人は何ゆえ、近江の地を離れてここで暮らすようになったのじゃ。話を続けてはくれまいか」と、信空は住蓮を促した。

この発言が、住蓮の心から、楽しい思い出をたちまち奪い去り、代わって、悲しい思い出で彼の心を満たした。

「それは……」

悲しい思いが募った。思い出したくない、しかし……、住蓮は重苦しい心に鞭を打った。

今は真実をすべて話そう

「分かりました」

と冷静に言った住蓮だったが、そこで沈黙してしまった。次の瞬間、激しく沸き起こる悲しみの感情からか、彼は嗚咽にのどを詰まらせたかと思うと、ついにはただ泣きじゃくるばかりであった。

それを見ていた信空は、この青年が味わったであろう想像を絶する辛酸さと思うと、これ以上話を続けさせるのはあまりにもむごい仕打ちにしかならないと察し、

「分かった……。住蓮、もう言わずともよい……。住蓮、辛かったであろう。そちの辛さを思いやることも出来ず……。私が悪かった、もうよい、その時子殿が白らいを患ってしまったということ、祇園舎の女人こそが即ちその人であったということ、それだけ分かればもうよい。十分だから……」

信空は、この不幸な出来事に見舞われた若い二人の心のうちを思うと、何とも辛い思いに苛まれた。

「辛かったであろう」そう重ねて言った。こうして住蓮を慰める以外、信空もなす術がなかった。

住蓮の咽び泣きの声は、しばらく続いた。

どれほど続いたであろうか 漸くして彼は泣き止むと、手で目を拭い、少し落ち着きを取り戻したのか、しっかりとした口調で信空にこう告げた。



「信空様、お心遣いありがとうございます」

信空は、ただ黙って頷いた。

漸く平静さを取り戻した住蓮は

ことここに至っては、後は全部話すしかない、隠すようなことは何もないのだから

と、あらためて覚悟を決めると、

「信空様、こと、ここにいたりましては、その後のこと、ここにすべてお話してしまおうかと思います。お時間がよろしければ、ですが……」

と信空に告げた。

「大丈夫か……。そちさえよければ、私のほうはいつこうに構わぬが」

信空は心配そうに住蓮の顔を見つめて言った。

「はい、大丈夫でございます」

そう住蓮は答えると、時子の白らい発病以後、馬淵の里に起こった、その後の出来事についてさらに詳しく信空に語り始めた。

## 第一部第十五章

「今から言えば、本当に愚かな話ですが、最初はずいぶんと色白になったものだ、と妙に喜んでいたりしたのです」

同じ頃、ここ祇園舎のはずれ、犬神人の里にある時子の小屋では、少し元気を取り戻した時子が、源太に向かって、話の続きを始めていた。

「しかし、間もなく、この白さは何かおかしいと自分でも……」  
左様、やがてそれは病的に白い肌となった。

即ち、つやつやとしているようで、実はそうではなく、針を突き刺せば腐った汁が飛び出てきそうな感覚だった。さらには薄くなつた眉と頭髮、――遠目にははつきりしないが、近くで見ているものにはそれとわかる。そうこうしているうちに、時子の白癩はもうそろそろ隠し通せない状況にまで症状が悪化してきた。

「住蓮様には私から打ち明けたのです」

時子は悲しい思いに打ち潰されそうになるのを必死でこらえながら、源太に語り続けた。

「実際は、住蓮様も内心では分かっておいででした。しかし、そうして打ち明けてみると、あの方の落胆たるや……」

あのときのことは鮮明に覚えている。住蓮の悲しみに満ちた目、表情……、

「あの方は、『やはり、そうか……』と言うと、天を仰がれました。住蓮様も早くから当然気がついていたのでございます。私の両親よりもおそらくは早く……。しかし事の重大さが恐ろしくて、あの方も、なかなか口には出せなかったのでございます」

恋人同士、二人は、思い切り泣いた。運命の悪戯を呪いながら……。

「あの方は、『出来る限りのことはしよう』と仰ると、私を抱いて慰めてくださいました」

「次の日には、『自分の手で治してみせる』とも仰ってくださいました。叶わぬことと分かつてはいましたが、あまりに重い現実に気力もつぶされて、萎えてしまっていた私にはうれしい言葉でした」

「私の両親はと言うと、私の病のことは口に出すのもおぞましいと思つたでしょう。屋敷の者たちには内緒で、内々に祈禱師を呼んで、祈禱を試みたり、密かに比叡山の高名な僧を呼んで祈つてもらつてみたり、とそれは必死にあらゆる努力を重ねられました」

時子は記憶をたどるのもつらいのか、ここでため息をついた。源太も自分の発病の頃を思い起こしていた。この里にいるものは誰でもが経験した、家族、郷里とのつらい別れの物語が後に控えているのは明らかだった。

源太はただ黙って聞いているよりほか術が無かった。

時子は続けた。

「しかし、どれも無駄な努力であることは、実は、最初から誰もが分かつていたのでございます。左様です、この私も……。この病が治ることなどありえないのだ、それは実は誰もが承知していたのでございます。そして、実際、どんな加持祈禱も効果は無かつたのでございます。思えばおろかな話でございます」

「私の病は着実に進行していきました。屋敷のものには気づかれぬよう、両親は私の服装、化粧にも今までの何倍も神経を使われました。私は人前に出ることがまったく無くなつてしまいました。娘の発病を、両親は誰にも知られまいと、必死でした」

「住蓮様はある高名な薬師様にも相談されて、いくつか薬を試してみよう薦められたようです。しかし、無論ですが、結局どれも効果はありませんでした」

「どれほど高名は方をもつてしても、この病ばかりはどうしようも無かつたのです」

「住蓮様は、『こうなつてはただ御仏の慈悲におすがりするよりほかにない』と、興福寺で学ばれたことを思い起こし、毎日仏に祈られておられました。ほかに頼るすべの無い今、私もただ奇跡を祈る

しかありませんでした。あの方は、食事も殆どせず、痛ましいほどに熱心に祈りを続けてくださいました」

「私は住蓮様のそんな姿を見て、うれしいと思う反面、食事も取らず日々やせ細っていく姿を見ては、自分のためにこれほどまでの迷惑をかけて申し訳ない、と涙ぐみ、申し訳ない気持ちで、心が苛まれたのでございます」

「最後には住蓮様からも両親からも、絶望のため息しか聞こえなくなりました。無論、私もですが」

「そして、私が最後に出した結論は……」

と、ここまで言うのと、時子はいったん話すのを止めた。そして天井を眺めて大きく一息つくのと、最後にはしっかりと口調で、

「もはや自ら命を絶つしかない。それが私の出した結論でした。」

そう、もうこれ以上誰にも迷惑をかけたくないって、ただその思っただけでした。」

と、源太に語った。そしてもう一度大きくため息をついた。その目からは再び涙が流れ出した。

白癩の病に侵された者なら誰もが一度は必ず考えるという”自殺”という手段によって、彼女はこの不幸な出来事に決着をつけようと考えたのだ。

源太は、今まで何度同じような話を聞かされてきただろう、と、時子の悲しみを思うと胸が張り裂けそうになった。すると、時子が、突然大きい声を上げてわんわんと泣き出した。

そして、涙声でさらに源太にこう訴えた。

「だって、そうでしょう、源太さん、だって……、私が生きている限り、両親にも、住蓮様にも迷惑がかかるんですから」

そして、さらにこう言うのであった。

「私さえないくなければ、たとえ一時の悲しみがあつたにせよ、皆はここで今までどおりの平穏な日々を送れるのですから……、そう思っ、そう思っ、湖へ身を投げようと決意したのです」

こう言う、と、時子は目頭を拭いた。もう涙も枯れそうであった。

源太には返す言葉もなかった。

白癩をわずらったものの末路は悲惨なものだ。彼らは乞食になるか、寺に拾われるか、しかし、どのみち最後には、結局、体にうじが湧き、腐って死んでしまうのだ。当然そんな結末をきらってその前に自らの死を選ぶ者がいるのは当然のことだった。実際、この里でも将来を悲観して自殺をするものは後を絶たないのが現実だ。慰めの言葉などもはや何の意味も持たない……。黙っている源太に向かって、時子は叫んだ。

「私は一体何の因果でこのような罪を背負わなければならないのでしょうか！女に生まれただけでも罪深い身なのに、さらにこのような業病を患うとは、もはや私は救いには預かれまい。地獄に落ちるしかない。ああ、穢れたこの体！あるとき死んでしまっていたら良かったのだ！そして地獄に落ちてしまっていればよかったのだ！」

時子のこの絶叫を、源太はただ黙って聞いているより他なかった。そしてこの時子の叫びは、むなしく犬神人の里に鳴り響くのであった。

## 第一部第十六章

「あとは実行に移すだけでした」

時子は淡々と、源太に語り続けた。

源太が聞いたその一部始終は次の通りである。

決意を固めると、時子はまず遺書をしたためた。父母宛に一通、住蓮に一通、父母には今まで大切に育ててくれた感謝の気持ちを、そして住蓮には、いつも自分に優しくしてくれたこと、愛してくれたこと、に対する感謝の気持ち、すべてを書き綴った。

遺書を書き終わると、あとはいつ実行するかだけであった。琵琶湖に身を投じる決心だった。簡単だ。湖畔の岩場には身を投じるに適した高台がいくつもある。ここからは歩いていける。

しかし、住蓮がいつも傍にいたので、一人で琵琶湖まで行くことはなかなか出来なかった。

何とか一人つきりになれないだろうか……。

チャンスは程なくして到来した。住蓮の父が病で床に伏したという消息が伝わったのであった。重い熱病で、容態はかなり良くないらしい。

住蓮は奈良へ向かうことにした。奈良を旅立ちこの近江の地に向かうときは喧嘩別れであったが、それでも父は父だ。見舞いに行かねばなるまい。

奈良へ旅立つ住蓮は時子を一人にすることに一抹の不安を感じた。

一人にして大丈夫だろうか？

しかし、まさかだいそれた行動には及ぶまいと、「私の留守中、十分に体を休ませて置くように。」と、くれぐれも時子に告げると、彼は奈良へ旅立った。

今が絶好の機会

時子は住蓮を見送った日の夜、いよいよ覚悟を決めた。

すでに二、三ヶ月も前から庭の木を眺めているときでも、外出して道の並木を見たりするときでも、その枝振りをみては、そこにぶら下がっている自分を想像し、

死んでしまえば楽だろうか？

死ぬときは苦しむだろうか？

いやひとおもいにぶら下がればその瞬間絶命するから苦しむことはあるまい

とか、自問自答することが癖のようになってしまい、ふとわれに返ってはそんなことを考えている自分の身の上を恨めしく思い、涙ぐむ毎日が続いていた。

あるいは一思いに小刀を胸に突きつけ血まみれになって死んで自分の姿を想像する。その痛みに自分は耐えられるだろうか。結局は死にきれないで苦しむだけではなからうか。

それならば湖に身を投じよう。溺れ死ぬならすぐに気を失ってそう苦痛は感じないだろう。そう思っても、

いや湖に身を投げると魚に食われてしまうのではなからうか、それはいやだ

などと馬鹿なことを思ってみたり、

それなら池に身を投げればよい。さいわい、この馬淵の里にはいくつもある池がある。その一つに身を投じればよいのだ

などと、池に身を投げて溺れ死んだ後、池の底で腐っていく自分の体を想像するのであった。

とにかく死んでしまえば今の苦しみからは逃れられるに違いないあるまい！

しかし、そんなことを考えれば考えるほど、ますます死に切れない自分を発見するのである。

しかし今はもう決行するしかない。

時子は固く決心すると、遺書を自分の部屋の小机の上にしたためた翌日、世の明けぬうちに身支度を整えると、そっと屋敷を抜け出した。誰にも気づかれないうちに外へ抜け出すと、琵琶湖へと足を

速めたが、一瞬足が止まった。今までの思い出が脳裏にわっと、吹き上げてきたのである。時子は屋敷の方を振り返ると、そこで何も知らず寝ている父母のことを思つて、また泣き出してしまった。

どれぐらい泣いたであらう。ひとしきり泣いた後、時子は涙をぬぐうと、向こうに見える、父母のいる母屋の方に向かって、深々と頭を下げた。そして、

「本当に今まで有難うございました」

と言つて、最後の別れを告げた。

時子は体を反転させると、暫く息を整えた。そして意を決すると、琵琶湖の方向へ再び歩を進めた。もう振り返らなかつた。

すべてを捨て去るしかないのだ。この穢れた身を捨て去るしかないのだ！

そう心に言い聞かせながら、まだあたりは暗い中、時子は湖へ向かう小道を急ぎ足で歩いていった。



## 第一部第十七章

湖岸にはすぐにたどり着いた。春の琵琶湖は波も穏やかで、湖面を吹きぬける風も暖かく気持ちよかった。

すでに空が白み始めていた。すぐに夜が明ける。その前に決行しなければ、時子がかねてから、ここで、と決めていた岩場に登った。

目の前に黒々とした湖面が不気味に広がっていた。『ここへ身を投げるのか』 今、現実に湖を目の前にして、時子は一瞬たじろいだ。

沖のほうに目をやると船が幾艘が見えた。朝早くから漁師たちも働いているのだろう。そんな、船で働いている漁師たちの懸命な仕事振りをふつと想像した瞬間、なぜ自分は死ななければならないのだらうと、何故か、すでに答えを出したはずの疑問が湧き出てきて頭の中をぐるぐる回りだした。

漁師も農民もその生活は困窮を極めている。ここ数年の飢饉（ひがね）は悲慘を極めた。時子の一族を含め、当時の地方豪族たちはそれでも何とか食べるだけのことは出来た。しかし、民衆には多くの餓死者が出た。生きようと懸命の人たちは、自分の子供の肉まで喰ったという。そうまでして生にしがみつくなのが人間の性なのだ。それなのに、自分は、自分は……。

命を捨てようとしている。この大事な命を！それほど追い詰められた今の自分、今までそんな民衆の苦しみから目を背けてきたことの報いがこの結末だったのだろうか。無論貧しい人々への施しはいつも怠りなかった。でも結局自分だけは食べていた。その間にも無数の人々が飢えて死んでいったのだ。その報いだろうか。ここまで考えを巡らすと時子はその場に座り込んでしまった。

死ぬと平安があると自分に言い聞かせていたが、結局罪深い自分

は地獄に落ちるのだとあらためて思い知らされた。前世の自分も罪深い身であつたからこうして女として生まれたのだ。とすれば、死んで安らぎを得られるとは、とんだ妄想ではないか。

結局は生きるも地獄、死ぬも地獄なんだわ

時子は涙に暮れた。地獄に落ちる恐怖が体を突き抜けた。自ら命を絶つ決心は揺らぎつつあつた。

途方にくれて泣き崩れた。どうすればいいのか、

誰か私を助けて、誰でもいい、こんな私を絶望の淵から救ってください、女性に生まれ、ただでさえ穢れたこの身にさらに降りかかった忌まわしいこの白癩という業病、私は地獄道に落ち、生涯そこから抜け出せぬ哀れな女、ああ、だれかこの身を救ってください！

いつしか悲しみの声は祈りの声へと変わっていった。

しかし、いつたい誰に祈っているのか、いや祈っていいのか、時子にもわからなかった。神様なのか、仏様なのか、私を救って下さる方はいったいおられるのか、それとも誰にもこの私はもう救えないのか……、

やはりひと思いに湖へ飛び込もう

時子はあらためて決心した。もう迷うまい。よいのだ、自分が地獄の業火に焼かれようとも。

少なくとも、父母と時実様の苦痛は取り除けるではないか

一時の悲しみがあるにしても、わずらわしい厄介者がいなくなるのだ。私のことなどすぐにみんな忘れてしまふ。いいのだ。これでもいいのだ。せめて人様にこれ以上迷惑をかけるのはやめよう。それには命を絶つしかないのだ。

一步、一步、と崖の淵へ近づいた。恐ろしくその時間が長く

感じられた。漸く崖の淵まで来ると、そこで足がすくんでしまった。

この先にはもう地面は無いのだ。しかし……、湖面を見下ろすと、それは自分を優しく手招きしてくれているようにも見えて、彼女は不思議な安堵感に包まれるのを感じた。

もはや選択の余地は無かった

彼女は、そこで深く息を吸うと、目を瞑り両手を合わせた。

「みんな本当に今までありがとう。さようなら」

そうつぶやくと時子は最後の一步を空へ踏み出した。

## 第一部第十八章

と、まさにその時だった。

「待たれい！」

呼び止める大声に時子の足は止まった。一体誰の声か、と思うも間もなく、時子は後ろから体を捕まえられた。

「あっ」

と思った瞬間、時子の体は地面へと押さえつけられた。僧衣姿の男が時子を押さえつけていた。

「離してください！」

時子は男の手を振り解こうと懸命に頑張ってみたが、所詮男の力には叶わなかった。

「馬鹿なことをするでない！」

男は時子を叱り付けた。万事休す。時子はへなへなと体をそこへ横たえるしかなかった。

上る朝日に湖面が反射して、きらきらと輝きだした。鏡のような輝きだった。周囲はかなり明るくなっていた。

男の顔がはつきり見えてきた。時子はすぐにそれが誰かわかった。

「応水様……」

実は時実につれられて、長命寺の坂下の集落に何度か足を運んだことがあった。

「行ってみよう。なに、決して怖いところではない。ははは……」

時実は無理強いはいしなかった。うら若い女性が足を踏み入れるような場所ではない。そんなことは承知していた。ただ、そういう場所になぜか自分は関心があつて、足を運んでいるのだという事実を恋人に隠しておくのがいやだったのだ。

時実は、時子を応水にも紹介した。何とも不思議な雰囲気を漂わせた僧であつたと、その程度の記憶しかない。時子が坂下の集落に足を運んだことが後日、彼女の父母に発覚してしまい、出入りを以

後禁止されたからである。

すでにその少し前から時実が長命寺の坂下者たちの集落をたびたび訪れてはそこで時間をつぶしているという噂は時子の父母の耳に入っていた。

「一度は注意をしておかねばならぬ。あんな者たちと交わるなどもつてのほかじゃ」

時子の父母は、時実を部屋へ呼び出した。

「どうしてあのような者たちが暮らす村へ行くのか？」

時子の父母は時実の将来に大きい期待を抱いていただけに、受けたショックも大きかったのである。

「あのような者たちと交わればそなたの身まで穢れるではないか！」  
住蓮は懸命に自分の考えを理解してもらおうと努力したが、所詮はわかつてもらえなかった。

時実のことを特に時子の母が疎ましく思い始めたのはこのことがきっかけであった

時子の父母とて、地方の豪族として底辺の社会で蠢いている人々のことをまったく知らないわけではない。彼らは普段隔離され、目に触れぬようにされているが、しかし、実際彼らなしでは日常の生活のいろいろなことが成り立たなくなってしまうということは、彼らもよくわかつていた。葬祭、土木工事、人畜の死骸の処理、踊り、唄など人々の余興、娯楽、鍛冶仕事、等等。

しかし地方の豪族の生活習慣も都の貴族文化へのあこがれから次第に貴族化していた。のが実情であった。

すると当然、彼らも、そういう社会の底辺の人々を”穢れた”ものとして扱うようになってきた。

「穢れたものたちに安易に近づいたりしてはならない」

それが当時の貴族階級の人々の間での不文律であった。

「時子を二度とあそこへは連れて行かぬように！」

時子の父は厳しく時実に申し渡した。

「また、そちも今後、用も無くあそこを訪れたりすることのないよ

うに。       このことが守れぬならこの家を出て行ってもらうしかない」

時実は承諾せざるを得なかった。時子を失うことは彼には考えられなかったからである。

「はい。承知しました」

そう答えて後、彼らは応水のもとを訪ねることは無くなった。

そんな応水の顔を、しかし、時子はしっかりと覚えていた。以前から、ぼろぼろの僧衣姿に身を包んだ彼を、ここ馬淵の里でもよく見かけることはあった。しかし、破戒僧に近づくべからず、と親からも言われていたので会話を交わすことなどまったく無かった。

時実に紹介されて、実際にあつて話をしてみると、しかし、想像に反して、実に人のいい、やさしい、思いやりにあふれた人であったので、ひどく驚いて、さらには、外見で人を判断していた自分をひどく恥ずかしく思ったのを覚えている。

その彼が今日の前にいた……。

## 第一部第十九章

時子がようやく落ち着いて、もう湖面に身を投じる危険性がなくなった、と判断すると、応水は時子を座らせて、自分も合い向かいに腰を下ろした。彼自身も一つ深呼吸をして気を落ち着かせると、こう優しく語りかけた。

「そなたは、以前にお見受けしたことがある。確か時実といっしょに……」

時子はようやく平静を取り戻していた。彼女も落ち着いた口調で答えた。

「左様でございます。時子です」

「そうじゃ、そうじゃ、時子殿　確かあの佐々木家の娘御であつたの」

「はい」

周囲が一気に明るくなり始めた。自分の顔が朝日に照らし出されると、時子は思わず顔を袖で隠した。

「隠さずともよい、病のこと、すでに時実から聞いておる」

「時実様から……」

時子は、初めてこのことを知ったので驚いた。父母からは応水との接触を禁じられていたはずだが……。

「そうじゃ、何度も相談を受けた」

「左様でございましたか」

時子は、時実の自分を思う気持ちがうれしかったが、それがまた新たに悲しみを呼び起こし、目から涙が溢れ出た。

応水はそんな彼女を慰めるように、やさしく彼女に語りかけた。  
「死んでどうなる……。皆が悲しむだけじゃ。皆はどうしてそちを救えなかったか、と自らを責めるじゃろう。そちが死んでも皆に悲しみを残すだけじゃ。何も解決にはならぬ」

時子は涙を流しながら黙って聞いているよりほかなかった。

応水はさらに話し続けた。

「この世に人として生を受けて、何かの因果でそちは今、白癩を患った。それがどのような因縁からか、そちの前世に何があったからか、それはわしにわからぬこと。ただ、これだけは明らかじゃ。それはのう、それは、今こんな死に方をしては、いつまでもこの悪い輪廻を断ち切ることは出来ぬということじゃ」

「悪い輪廻……。断ち切れない……。そうなのかも……」

時子はそう呟くと俯いて黙ってしまった。しかし暫くすると、感情の高まりを抑え切れなくなったのか、きつと顔を上げると、激しい口調で応水にこう反論した。

「そんなことはわかっております。死んだら私は必ず地獄に落ちるでしょう。それでよいのです。それが望みなのです。一生そこで地獄の業火に焼かれてしまえばいい。私なんか、もう、どうなったって、どうなったって！……」

これを聞くと、それまでやさしい口調であった応水が、

「馬鹿なことをいうでない！」

と、突然、時子を叱りつけた。

応水の思わぬ一喝に時子はたじろいだ。優しい人のいいだけのお坊さんという印象は失せた。時子は、しかし、ひるむことなく、今は自分の思いのたけを全て、彼にぶちまけようと、彼に反撃を始めた。

「でも、応水様。私は今このような病の身になって一体何の希望があるというのでしょうか。もうこれ以上は考えられないというぐらいい考え、考え、そして考え拔きました。その結論がこれだったのです！」

応水はこの時子の反論を、今度は黙って聞いていた。

「女として生まれただけでも穢れたこの身ですのに、さらに白癩まで患うとは！ああ、こんな穢れた身を一体誰が救って下さるというのですか。神にも仏にもあらゆる祈願をかけてきました、それでも、それでも、誰も私に救いの手を差し伸べてはくれなかったのです。」



そうではありませんか！」

応水は、とりあえず時子の気持ちをなだめようと、時子の背中に手をやった。時子の気持ちは痛いほど分かった。何と慰めていいのか……。応水も慰めの言葉を捜せないでいた。

絶望の極限に身を置かねばならぬ、そんな人の心の苦しみがどうして赤の他人に理解できよう？

どんな言葉もこの人には空虚な響きしかもたないのだ　　応水は背中をさすりながらそれでも、何とか時子に希望を持たせようと、言葉をゆつくりと選びながら語りはじめた。

「遠くに見える漁師たちの船をみてごらんなさい」

「船……」

はるか向こうの湖面に幾艘もの船が浮かんでいるのが見えた。早朝から漁に出ているのであろう。さつき時子が見た時よりもその数はふえていた。

「あの漁師たちも穢れたものとされておる。殺生をするという理由でじゃ」

応水の言うとおりである。当時、山の獵師、海の漁師らは仏法で禁じられている殺生をするから、という理由で”穢れたものたち”とされていた。

「しかし、都の身分の高い人々は、彼らが漁で捕ったその魚を、珍味として食卓に並べて、食しておる。なんとも皮肉ではないか。そしてその罪を許して貰わんと、比叡の山の高僧を招いては、夜通し読経をさせよる。まったく馬鹿げた話じゃ……」

やさしく、ゆつくりと丁寧に語りかける彼の言葉が不思議と素直に耳に入ってきた。しかも説得力を持って……。彼のことをせいぜい人のよい変わり者のお坊さんぐらいにしか思っていなかった時子は、しばし悲しみを忘れてその熱弁に聞き入った。

「彼ら漁師は自らが生きるために、また人の暮らしのために、働いておる。で、そのあげく穢れたものとされる。おかしい話ではないか」

「彼らだけではない。長命寺の坂下にも、生まれながらに足の萎えた者、目の見えぬ者、孤児、いろんな者たちがいるが、『けがらわしい』と言って、高貴な身分の者達は近づこうともせん。彼らに一体何の罪があるというのか！……」

応水はそこまで喋ると一息ついた。暫く黙っていたが、今度は立ち上がると遠く向こうに見える比叡の山を見やりながら、さらに言葉が続けた。怒りを込めながら……。

「そもそも仏の教えに”穢れ”というものがあつたのか。わしもあの比叡の山で修行中、多くの経を読んだが、どこに穢れとか浄めとかいう教えが書かれておるのか、天台の高僧と呼ばれる偉いお坊さんに聞いても満足に誰も答えてはくれなかった」

時子は彼の熱弁に黙って聞き入っていた。

「おかしいではないか。そもそも仏の教えは、生きとし生けるものすべてに仏性ありというものじゃ。そうじゃだから誰でも仏になれる。まさに仏教とは誰もが仏になるための、また誰をも、すべての衆生を仏にするための教えではないか。それなのに山川草木悉皆成仏を言う天台の坊主ですら、穢れ、浄めを口にする。仏の教えを本当に理解しておるのか！全く馬鹿げたことじゃ！」

ここまで一気に話し終えると、応水はまた腰を下ろした。そして時子に近寄り、彼女の両肩を持ってさらに語り続けた。

## 第一部第二十章

「往生極樂など到底叶うはずも無い穢れた者共、と蔑まれている彼らが、みんな、懸命に、真面目に日々の暮らしを生きておる。一方で、墮落した都の貴族どもは、大金をつぎ込んで叡山の坊主から戒を受けよる……。そして、『これで極樂往生可能じゃ』と安心して喜んでおる。そんなことが許されているのか！懸命に、真面目に生きておる者たちこそが極樂往生に預かれるべきではないか！そうではなくて、何が御仏の教えじゃ。懸命に、真面目に、正直に生きておってこそ極樂往生の望みがあるのじゃ、たとえ、この世では絶望の毎日の連続であったとしても……」

応水の熱弁はさらに続いた。

「のう、時子殿、穢れも、浄めも往生極樂とは全く無縁じゃ。女人であっても、白らいを患った身であっても、極樂往生は可能じゃ。地獄へ落ちることなどない。何故なら、万人を誰一人区別することなく、等しく救われようと言うのが御仏の願いなのじゃから。それが阿弥陀様の本願であるのじゃから……」

「時実を氣遣い、両親を氣遣い、そちのようにやさしく、美しい心を持ったもの、そう、仏心に満たされた者が、地獄に落ちることなどありようはずが無い。そうじゃろ、そちの心は仏心で満たされておるのじゃから。それを承知の阿弥陀様は必ずそちを救ってくださる……」

「だから、今、諦めぬことじゃ。弥陀の本願におすがりなされ。そして、あるがままの自分のままで……。そう、悩み、苦しみ、煩悩に蝕まれながらの自分のままで……。左様、あるがままの自分の姿のままで懸命に生きていくことが肝要なのじゃ……」

「あるがままの自分の姿のままで……」

時子は応水の言葉の説得力に不思議な魅力を感じた。

「そうじゃ。あるがままでのう……。安易に自らの命を絶つなどと

いうことは、絶対にしてはいかん！」

激しい口調で時子をそう叱責すると、応水は言葉を休めた。

琵琶湖の湖面が朝日に照らされて一気に輝き始めた。

美しい眺めであった。

時子は、湖面で働く漁師の姿を見やりながら、今聞いた応水の言葉を頭の中で反芻していた。

私は、確かに不幸ではあったが、同時に我尽であったのかも  
しれない

応水に諭されて、時子は、この病を治そうと必死になればなるほど、即ち、自分がもがき苦しめば苦しむほど、周囲の人々までもが苦悩を深めてきたことに改めて気付いた。

この病は自分の運命として、そのまま受け入れるべきなのかもしれない

時子がそんなことを漠然と思っていると、それまで黙っていた応水が口を開いた。

「時子殿、そちの身、わしに預けてみてくれぬか」

「預ける……」

時子は、この突然の応水の提案の真意を測りかねた。

「さよう、実はわしに考えがある。というのも、先日、都にいるわしの友より興味深い消息があった」

「興味深い消息……」

「左様、興味深い消息じゃ」

応水は少し間をおくと、さらに言葉を続けた。

「京の都の清水寺にな、ここ長命寺と同じような坂下の集落がある。そこにはこのこと同じように坂下者と呼ばれるものがいて、このこと同じように寺の雑役をさせられておる……」

唐突な応水の話に時子はただ、耳を欻てるしかなかった。

「実はその一角に、白らいを患った者たちが別に集められており、施しを受けながら、やはり寺の雑役夫として働いておるのじゃ」

「清水寺……」

時子はまだ幼いころ、京の都へ行った折、清水寺を遠くから眺めたことを思い出した。美しい寺だと思った。どのようにしてあんな山の斜面に寺を建てることのできたのだろう……。子供心に、そんなことを随分と不思議に思ったのを覚えている。

ましてやそこにそのような境遇の人々が暮らしていようとは！

時子にはただ驚きであつた。

応水は時子のそんな驚きの表情をよそにさらに話を続けた。

「実は、このたび後白河法皇様の肝いりで、清水寺に集められておる白らいの者を祇園社に移動させ、そこで神官（神人）として働かせようという動きがあるのじゃ」

「後白河法皇……。」

時子は話の大きさ、奇想天外さに言葉を失ってしまった。

なぜ、後白河法皇様のようなやんごとなきお方が、わざわざ白らいのものを集めて、そのようなことをしようとするのか？

時子は事の真意がつかめなかった。

「これは、実は、単なる施しとかお恵みとかいった簡単な話ではない」

応水の説明はこうであつた……。

平家の福原遷都、それに続く都落ち、さらには木曾義仲の軍勢の都での暴挙のせいで都は完全に荒廃しきってしまった。今や、秩序は乱れ、検非違使判官として新しく任じられて源義経ですらその秩序回復には手をやいている。

「京の都の有様はそれはそれはひどいものじゃ……」

応水によれば、飢餓、病、あるいは戦乱で打ち捨てられた無数の死体、風化した骸骨が都の大路に転がっているという。

「京の都は、今や、無数の悪霊、魑魅魍魎が徘徊する祟られた場所じゃと誰もが信じておる。特に、その祟りを恐れておるのは腰抜けぞろいの朝廷の貴族たちじゃ」

応水は続けた。

「そこに目をつけたのが法皇様だったということじゃ。源平の争乱

の煽りを受けて、法皇様もかつてほどの権威を保てないであった。

何とかご自分の権勢を回復する手立ては無いものかと考えられたのじゃろう……」

応水の説明はざっと次のようであった。

策略家としてもずば抜けた才能を持つ後白河法皇は、ひとつの奇策を考え出した。

それは……

白らい者の集団を別に組織して、彼らに一定の権威を持たせ、それを法王の直轄化に支配、都の治安秩序回復に役立たせようとしているのだ、と。

「穢れた者に権威を持たせる？」

時子にはさっぱり合点がいかなかった。

「理解は難しかろう……」

応水の説明は続いた。

彼によれば……。当時、人々は白らいを病んだ者に対して、当然「穢れた」者たち、という認識を持っていたが、その一方で、病に冒されたその姿、形相から、彼らには何かしら神秘的な力が宿っているのではないか、とも考えていた。

「まあ、言わば魔力みたいなものじゃ」

即ち、たとえば、死者との交流、霊との交わり、この世と冥土との往来、など……。特殊な能力を持つ彼らにはそのようなことが可能なのだ、というようなことがまことしやかに人々の間で囁かれていたのである。

「法皇様は、巷に流れるこのような風説を利用してようとしておられるのじゃ。魔力で武装した白らい者を法王様が御自在に操られるというわけじゃ。そして都にあふれる死体の始末、処理、さらには一部、都大路の見回り、警護の仕事にも彼らを利用しようと考えておられるようじゃ……」

平安時代、これら「穢れた」ものとされていた死体処理などの仕事は、鴨川に居住する河原者たちや、律令制度化で固定化されてき

た、ある種の職業集団の部族集落の者たちなどがすでに行っていたが、法皇はこれを自らの管轄下におくことで、自らに対し、人々の”怖れ”と”権威”を持たせようとしたのである。 応水の解説は以上のようなものであった。

「もうすでに一部の者たちは、法皇の命により、祇園社に集められておる。そして彼らを神人として、正式な位を持たせ、また、正式な装束も与えておられるとのことじゃ」

噂によると、真つ赤な装束に白い頬冠り、手足には牛皮の手袋と靴を着用させるという。 この神秘的、かつ異様ないでたち  
に都の人々はさぞかし驚き、恐れおののくであろう。畏敬の念すら  
いだくに違いない。

「あの法皇様らしい、奇想天外なお考えじゃ」

当然、神官となった白らい者への畏敬の念は、そんな彼らを自在に操る法皇そのものにまで及ぶであろうと法皇は読んだのである。

「そして、都の浄化が順調に進めば、いやでも法皇様の権威も高まるに違いないという計算じゃ」

応水はここまでの説明を終えると、こう付け足した。

「法皇様のこのお考え、無論、わし自身は、とんでもない、間違っ  
たことと思っておる……」

応水の口調は厳しく批判的となった。

「白らいを病んだのは、その人が穢れたからでもないし、穢れたものに関わったからでもない。何度も言うが、病は病、原因はあろうが、穢れからくるものではない。穢れなどという考えは人間が勝手に作り上げたものじゃ。仏の教えに穢れなどという言葉があろうはずもない。少なくともわしは知らん」

時子は少し頭が混乱したせいもあって黙って聞くばかりであった。「そもそも、今の都のあり様は、清めが必要とか、そんなことが問題なのではない。政の失敗が問題なのじゃから。 まったく問題のすり替えとしか言いようが無い！」

応水は、そこまで言うつと、時子の肩から手を放し、立ち上がった。

そしてもうすっかり明るくなった琵琶湖の湖面を見やりながら、時子に尋ねた。

「とにかくにも、そこでじゃが……。時子殿、そちは確か笛を得意とされておると聞いたが、それは間違いないか？」

唐突なこの質問に時子は一瞬戸惑った。

「笛……ですか？」



## 第一部第二十一章

無論、笛は得意だった。時子の笛の見事さは馬淵の里では有名であつた。

時実が来てからは、彼と二人よく笛を吹きあつた。時実も笛をよくした。二人の笛の音色に多くのこの地の者たちは心を慰められた。しかし……

この病に侵されてからは笛を持つ機会もほとんどなかった。指の感覚も鈍くなつてきている。いつまで笛も吹けるものか検討もつかないが、

「はい、確かに笛には多少の心得があります」と、時子は応水に答えた。

「それはたいへん結構じゃ。いや実は、その都の友によれば、法皇様がこの度集めようとしている神人の中に、是非笛の名手を是非幾人か、とご所望されておるらしい。ところが、これが……、難しいのじゃ。というのも、今、清水寺にいるものには笛の心得のあるものが一人もおらんらしい。まあ、権威付けには音楽も必要というわけじゃ。もつと言え、笛には魔力が潜むなどと本気で信じている者も多い。ははは。まあ今様をこよなく愛されて、みずからも今様を歌われるという法皇様ならではの考えといふところじやろ。どうじゃ、そちは、ひとつ都でその役目引き受けてみる気はないか」

「神人として……。笛を吹いて……」

時子は話の展開についていくのがやっとで、急の申し出にどう返答したものか考えあぐねていた。

「そうじゃ……。そもそも一人でいるから死のうなどと考えてもしまう。多くの仲間と過ごすことで気も晴れるやもしれん。ここ長命寺でも坂下者たちはたとえ病を患つても陽気で元氣快活じゃ。それは仲間がいるからじゃ。時には喧嘩もしよう。しかしいつも彼

らは助け合っておる。支えあっておる……。そちも同じ境遇の仲間とともに暮らすのが一番じゃと思う。どうじゃ」

「助け合っ、支えあう……」

そんなことは一度だって考えたことが無かった。時子は目の前に僅かにだが光明が見出せたような気になった。

すると明るいい日差しを浴びて、朝の空気がすがすがしく感じられた。もう随分と長く忘れていた、最近では珍しい感覚だった。

そんな時子の心情の変化を応水は見抜いていた。

「死ぬのはいつだって死ぬる。　　のう時子殿、繰り返して申すが、わしは法皇様の考えはとんでもない、間違ったものだと思う。しかし、そちらの境遇の者たちは、しかるべき庇護がないと生きていけないのも事実じゃ。ここは、だまされたと思うて、わしの言うとおりにしてみんか。さいわい、わしの友は、法皇様から、彼らの管理を全面的に任されることになっておる。信頼できる奴じゃ。安心されい。また、聞けば、身分も、一番の下級神官ではあるが、法皇様の直属ということになるらしい。　　まあ、実際は今をときめく検非違使判官様の下で働くことになるのじゃろうが……。いずれにしても、生きていく糧の心配はおそらくあるまい！」

彼女は応水の親身な説得に、都へ行ってそのような形で働くのも、悪くはないかも、と思い始めた。

助け合い、支えあい、こんな私でも何かの、誰かの役に立てるかもしれない。それにかけてみようかしら

しばらく考えていたが、もはや迷うこともなかった。実際ほかに選択肢もなかった。時子は応水に頭を下げて、こう告げた。

「わかりました。応水様にこの身お預けします」

時子の返事に、応水の表情がようやく柔らいだ。

「そうか、そうか、わかってくれたか……。わかってくれたか。ありがとっ、ありがとっ」

時子もうれしく思った。いざとなれば、拾ってくれる神や仏もいるものだ、と思った。そして、応水に命を救われたことを感謝した。

しかし、感謝しながら、時子はそので、ふと時実と両親にあてた遺書のことを思い出してうるたえた。

「どうしましょう……」

応水は時子から遺書の件等、今朝からここに至るまでの事情を聞いた。

「なるほど」

応水は少し考えていたが、

「時子殿、ご両親と時実のことはご心配無用。早速、今からわしがそちと共に出向いてすべて説明いたすでしょう。早いほうがよいの」

と、時子に安心するように告げた。

「ありがとうございます」

時子は深々と頭を下げた。

無論、今、自殺を思い立ったとは言っても、白らいに侵されたこの体は、確実に死に向かつていく……。それは分かっていた。だからこそ、そんな姿を絶対彼には見せたくない。故郷を離れて京都へ行ってしまふのは寂しい限りだが、様々なものへの愛着を断つうえで、ある意味よいことなのかもしれない……。時子はそう自分に言い聞かせて、恋人への思いを振り切ろうとしたが、一方で、

時実様、もう二度とは会えますまい

と、彼への思いが募ると、また涙ぐんでしまった。

応水はそんな彼女の心情を察して暫く黙っていた。

まったくこんなか弱い女子に、何という試練であろうか

しかし、いつまでもじっとしてはいられない。彼はやさしく彼女を促した。

「それでは参るとするか。

御両親が心配されておられるであろ

う。急がねばなるまい」

「はい、わかりました」

と、そう言った時子であったが、少し考えてから後、

「応水様、お願いがあります」

と、言つと、こう続けた。

「応水様、私は屋敷へは戻りません。両親への報告、応水様に全部お任せしてもよろしいでしょうか……」

突然の提案に応水も驚くと、

「それは、なにゆえか？」

と、時子に尋ねた。時子は言葉を慎重に選びながらゆっくりとこ  
う答えた。

「応水様、今から両親と会いまして、また、別れに辛さが募るばかりでございます。時実様もいつ近江へ戻られるか全く不明でございます。あの方が帰られるまで待ったところで結局は別れが待つばかりでございます。そんな辛い日を過ごすことは耐え切れませぬ。

都へ着いたら、何なりと消息も伝えられましよう。私は、もう自ら命を絶つようなことなど決していたしませぬ。元気でいるからと、皆にお伝えください。こうなった以上、一刻も早く都へ行きとうございます。応水様、今日にでも都へ連れて行つてくださりませ。お願いします」

「確かに……」

時子のこの願いももつとも事だと、応水は思った。

結局は別れが待つばかり、であれば、辛さ、悲しみも倍増するといふものだ。

「わかった。そちの言つとおりであろう」

と言つと、応水は続けて、

「この近くに古い阿弥陀堂がある。そこは、わし以外は誰も立ち寄らん。あそこなら人目にもつかんし……。まずはそこへ行くとしよう。そして、そちはそこで待つてもらふこととしよう。よいか、いずれにしても急がねば……。屋敷は今頃大騒ぎであろうからの」

と、時子に告げるや、歩き始めた。

「わかりました。よろしゅうに」

時子もそう言つと、応水の後に続いた。二人は歩みを速めた。かくして、とりあえずその阿弥陀堂を目指して歩き出した二人で

あつたが、暫く進むと、時子が何か思い出したように、空を見上げると歩みを止めた。そして応水に向かって、声をかけた。

「応水様、もう一つお願いがあります」

応水は、突然の時子の問いかけに、振り向いて立ち止まった。そして

「うん、どうされた？」

と聞き返すと、時子は、

「はい……。応水様にもう一つお願いがあります」  
と返答した。

「うん、なんじゃね、それは」

「それは……」

時子の願いとはこうであつた。

時子の語るところによれば

時子の両親、特に母が、このたびの時子の白らいの発症の原因について、時実が時子を、長命寺の坂下集落に連れて行ったりしたからだ、あんな所へ出入りしたために、そこで身が穢れてしまったのだ、と思い込んでいるというのである。

「私から、長命寺の坂下に白らいを病んだ者は一人もおりませぬ、と重ねて申しあげたのですが、母は全く言うことを理解してくれません」

「また、あの集落の人々は見た目とは違い、大変心が清く、いい人ばかりです。穢れた心など持ち合わせている人は一人もいません、といくら話しても、『時実にうまく言いくるめられたものであるな』と、まったく取り合ってくれません……」

「どうか、応水様からも、そのこと、全くの誤解であること、よく母に言い聞かせていただきたいのです」

時子の話を、応水は目を瞑り黙って聞いていた。そして時子が話し終わると、静かにこう語った。

「まかしておきなさい。全くの偏見じゃ。話せば分かってもらえよう……」

そう言った応水だが、実は、内心は自信があつたわけではない。当時の人の穢れ思想の根深さは、自分が何を言つたところで、そんな簡単に覆せるものではないことは、応水自身が一番よく知っていたからである。

まして、相手から見れば、自分は所詮「乞食坊主」に過ぎない身だ……。

しかし、今はともかく時子を安心させなければならなかった。

「私から直接話せばおそらく理解してもらえようて」

彼は、そう、時子に安心させるように優しく話したので、時子も心の不安をようやく払拭できた。

「ありがとうございます。そのことが、すごく気がかりであつたものですから……。時実様が奈良へ行かれる前の日にも、母がそのことでものすごい剣幕で時実様を責め立てていらつしやつたのです。

『娘に穢れをもたらしたお前など、もう二度と帰ってくるな!』と……。私が入つて、何とか二人の口論を止めたのですが……」

この時代の人々の穢れ思想をどうすれば一体改めさせることが出来るのか。

応水はそんな憤懣を心に抱きながらも、

「約束しよう。必ず納得してもらえように説明いたすから……。ともかく、今はまずは、急ぐとしよう」

と、時子を促した。

「はい」

時子も素直に応じた。

今はこの方にすべてをお任せするしかない!

時子の目には、今や応水の後姿が、以前に会つた時よりもいっそう大きく、また頼もしく見えた。

そして、まだ見ぬ、都の祇園舎の集落の有様を頭に描きながら、またそこで仲間と働く自分の姿を想像しながら新たな期待を抱きつつ、彼の後を急ぎ足で追つた。

## 第一部第二十二章

こうして、身投げを思いとどまった時子は、しばし件の阿弥陀堂で休息を取った後、その日のうちに京都へ向かつて旅立った。募る故郷への思いを断ち切るためにも、一刻でも早く、という思いに駆られたのである。

おそらく二度とは帰ることはあるまい。

張り裂けんばかりの辛い気持ちに苛まれたまま、時子は夜遅く京に到着すると、そのまま応水の友人に身を預けられた。

どんな生活が待っているのだろうか？

不安な気持ちで、まったく眠れぬまま、その日の夜を時子は過ごした。

その同じ日の深夜、父の病の知らせを聞き、急ぎ近江の地を後にした時実もようやく奈良の都に着いた。

久しぶりの奈良の都であった。懐かしさに旨がこみ上げてきた。

しかし、自宅で荷物を紐解く間も、時子のことは片時も頭から離れなかった。

自分のいない間に、何かよからぬことでも起こりはしまいか？

奈良到着後も、そんな悪い予感に心を苛まれる毎が続いた。

平家の焼き討ちにあつて荒廃しきつた奈良の都にあつて、時実の心も同じように荒んで行つた。

時子はどうしているだろう

特に、こちらへ旅立つ前夜、時子の両親と彼との間でかなり激しい口論があつた。

「時子がかくも穢れた身になったのは、そもそもそちの責任ではないか！」

彼は厳しく時子の両親、特に母親から責められた。

時子が何とかその場を取り持ってくれたが、そのことで彼女がさらに心を痛めたのは明らかであつた。

馬鹿なことをせねばよいが

いやな予感がした。心配ではあったが、いかんともしがたかった。ただ、応水に、もし彼女に何かあればなにとぞよろしく、と頼んできてもいたので、今はともかく父の看病に専念するしかなかった。

そんな彼の元に馬淵の里の悲劇が伝えられたのは程なくしてであつた。

佐々木家の親類より、急ぎもたらされたその手紙の文面には、

「時子様、湖に身を投げられた数日後、悲嘆のあまり、御母上、屋敷に火を放たれ、お父上も亡くなられた由、ここに、まずは急ぎ、ご報告云々……」

と、あつた。

「そんな馬鹿な！」

時実は母からその消息を聞くや否や、身支度を整えると、重症の父を置いて、またもや近江路を目指した。

「自分の目で確かめなくては！」

かつては夢と希望に胸を膨らませて歩いた近江の国への道、その同じ道を今度は絶望と悲しみを背負つて辿る。

「どうして、一言の相談もなく、自ら命を絶とうなどと！」

また時実は、時子を一人にして奈良へと旅立つた自分の非を責めた。

「何というおろかなことをしてしまったか！」

時実はともかく一刻も早く近江の地へと、疲れる体に鞭を打つて、奈良の都を後にすると、木津川方面へと近江へ向かう街道を急いだ。

時は寿永四年（千百八十五年）の一月

寒さは厳しく、身を切るような冷たい風は、ただでさえ寒々とした時実の傷ついた心に追い討ちをかけるように吹きつけ、時実の心は、悲しみで今にも張り裂けそうであつた。

ようやく近江の地につくと、もはや佐々木家の屋敷は跡形もなかった。かなりの者が焼け死んだと聞いた。生き残った者も散り散りとなつており、詳しい消息を知るものはなかった。



やむなく長命寺の坂下へ向かった。

「応水殿！」

しかし、応水はいなかった。彼も時子が命を絶った日以後消息不明だという。

坂下の村で幾人かから聞いた話を総合すると、ざっとこのようなことであつたらしい。

即ち……。

時子の自殺という知らせに、彼女の母親はショックのあまり錯乱状態となり、完全に気が触れてしまった。そして程なくして屋敷に自ら火を放ったのだという。しかし中には、

「いや、俺はそうは聞いていないぞ」

と、別の噂を口にする者もいた。

その噂によれば、屋敷に火を放ったのは、時子の父と敵対していた佐々木氏の一族だと言う。彼らが東国源氏の入洛に合わせて、時子の父の所領を狙つて屋敷を攻め落としたのだという。そう語る者も、時子が自殺したことは間違いないと断言して憚らなかった。

今となつては真相はどうにも分からない

時実にとつては、しかし、時子が自殺したこと以外はいつでもいいことだった。

絶望に打ちひしがれて、彼は馬渚の里を去ることを決心した。

さらに、そんな彼に追い討ちをかける様に、悪い噂をもう一つ彼は耳にした。その言葉は、幾度も繰り返され反響して、彼の頭の中で渦を巻いていた。

「時実殿、ゆめゆめ気をつけなされい。実は、先日、貴殿より一足先に、時子殿の兄様である盛高殿がここに立ち寄られた……」

「そして、どこで、誰に聞いたものかしらだが、時子殿の身投げはそちとの喧嘩が原因であり、時子殿の母上はそちを恨むあまりに、最後には気が触れてしまったのであるとな……」

「それを聞いた盛高殿は、貴殿を、必ず捕まえて殺してやる、と口走っていたらしい。もっとも、彼は東国源氏の落ち武者狩りに追わ

れていたゆえ、今頃は捕えられ、首を刎ねられておるかもしれんが……。ともかくも気をつけなされ」

時実はその話を聞いてももはや驚く気力すら失っていた。

盛高に殺されるのも、今やすべてを失った俺の定めなのかもしれん

何かそのようにも思えて心が軽くなるのを感じた。

生きていても何になろう！

行く当ては無かった。

いや、もっと言えば、もはや生きるあてすら無かった……。向こうに比叡山が見える。

「あの向こうは京の都か……」

無論奈良へ変えるつもりは無かった。

近江路を西へと、まるで幽霊のように、力なく歩いていく時実の姿が目撃されて以後、その日を最後に、住蓮の消息を知るものは近江の地にはいなくなった。

## 第一部第二十三章

さて……。

時実 後の住蓮が、かくの如くの理由で近江の地を離れたその数日前のことである、近江佐々木家の廃墟を訪れていたもう一人の青年がいた。

それこそ、左様、時子の兄、盛高である。

武者姿でこそあるが武具はぼろぼろで、彼が落ち武者であることは、一目で分かった。そう佐々木家の嫡男、盛高が生家に帰ってきた。一人の従者を連れて……。いや、正確に言えば、逃げてきたのである。

「故郷の両親の元へ行けば何とか……」

しかし……。

その彼を迎えたのはかつて栄華を誇った彼の生家、そう佐々木家屋敷の廃墟となった姿であった。こげくさい臭いがまだ漂っていたことから、つい最近焼け落ちた跡であるのは容易に想像できた。「何と言うことか！」

その廃墟を目の当りにして、彼は茫然と立ち尽くすしかなかった。「母上！」

彼の悲しげな絶叫が馬淵の里に響き渡った。

絶望の中でそう叫ぶ彼の目の前に、この屋敷に起こったであろう惨事の物語絵巻がありありと浮かんできた。

その絵巻の中に、皓々と燃え盛る炎、泣き叫ぶ人の声、逃げ惑う人々が見えた。と、その中に身を炎に包まれた女性がいる。

「母上！」

想像の中で、盛高は必死にその女性に近づこうとするが、炎の勢いが強く近寄れない。

「母上！」

盛高の叫びも空しく、女性は炎に包まれたまま息絶えた。

やっこの思いで女性に近づくとそこにあるのは全身焼けつくされて燃え残った骸骨だった。髑髏が突然こちらを向くと悲しそうに涙を流した。

「母上！」

四たび、母上と叫ぶと、そこで盛高ははっと我に帰った。全身汗びっしょりだった。

目の前には、ただ、焼け爛れた廃墟が広がるばかりである。

「母上、父上、時子、皆はいずこ！」

幾たび絶叫したのであろうか？最後には涙も枯れ、声も噎れた。

とにかく何が起こったのか確かめないと

かろうじて冷静を取り戻すと、彼は自分が不在の間の事情を知るものを必死で探した。そして、何とか屋敷で働いていた蔵人の一人を探し当てた。

「ああ、盛高様！よくぞご無事で！」

その蔵人は、彼の帰郷を全く予期していなかったらしい。木曾義仲軍への落ち武者狩りで盛高も命を落としたらしいと聞いていたからである。

「何とかここまで逃れては来たが……。一体屋敷に何が起こったのだ？」

「それがでございます……」

と語りだした彼の証言によれば……。

「時子様は時実様が屋敷を出て奈良へ向かった後、琵琶湖に身を投げて自ら命を絶たれたのでございます。――理由は私どもには分かりませぬ。それを知ったお母上様は悲しみのあまり床に伏され、食事も召し上がれない様でございました……」

「お母様は毎日のように『時実憎し、時実憎し、……時子は時実が殺したも同然、ああ、時実憎し！』とうわごとのようにおっしゃっておられました。時には気が狂われたかのように、そのことを一日中叫ぶ日もありました……」

「そして 実際最後には気が狂われてしまったのでございます！」

何と自ら屋敷に火を放たれたのです！ああ、思い出しても恐ろしい！燃え盛る炎に焼かれながら、お母上は最後まで『時実憎し、時実憎し！』と叫んでおられました。もうなんとも恐ろしい光景でございました……」

また蔵人は次のようにも盛高に述べた。

「時実様が奈良へ旅立つ日の前日のことでございます。屋敷の中で時子様と時実様お二人が激しく言い争っておられるのが聞かれました。今から思えば男女の別れ話でございましょうか……」

「また、時子様のご両親が、激しく時実様を叱責される声も聞かれました。その夜時子様は夜通し、ずっと泣いてばかりでございました。次の日は部屋にこもったまま出ておいでにならず、そしてその次の日の朝、琵琶湖へ身を投げられたのでございます」

「おそらく、時実様と別れ話になり、口論の末、絶望し、悲嘆にくれた時子様は、身投げを決意されたのでありましょう。ああ、なんともおいたわしい！」

話を聞き終わると盛高は怒りで全身が震えるのを感じた。彼を待ち受けていたのは、妹、時子の自殺、それを悲しんだ両親の憤死、という悲しい消息、そして焼け爛れて廃墟となった家だった。

あまりにも悲しい結末であった。

盛高は絶望感に苛まれながら、馬渕の里を後にした。風は冷たく、落ち武者として逃亡生活を続けていたため体力を失っていた彼の体は、急速に冷えていった。

「母上、父上、時子……。本当にすまないことをした。私が家を離れさえしなければ、こんなことに……。こんなことにはならなかったのだ。ああ、若気の至りとはいえ、本当になんというおろかなことをしたのだろう」

盛高の目にうつすらと涙が浮かんた。

しかし、いくらこうして懺悔して涙しても、失われたものは帰ってはこないのだ！

そう心で絶叫する彼に、次には憎しみの感情が現れ、そしてそれ

は次第に渦を巻いて彼の心を占拠していった。

そう時実への憎しみである！

「そうだ！あの時実を見つけて、八つ裂きにするのだ。あいつが我が家を……。我が佐々木家を無茶苦茶にし破滅に追い込んだのだから！」

思わず、彼はこう口に出して絶叫すると、次の瞬間にはわっと泣き出した。

「盛高様、お気をしっかりと持ちなされませ」

すると、それまで傍らで黙っていた従者の男が、取り乱した主人を何とか慰めようと声をかけた。

盛高は高ぶった感情を、ようやく抑えると、

「六郎、まことにすまん。家へ帰れば何とかかなると……。何とかなと思って帰ってきたが、このありさまじゃ……。お前にも迷惑をかけてしまった。これ以上は迷惑をかけたくない。そちは、自分の行きたいところに行くがよろう。そち一人なら追っ手の手からも何とか逃れられよう……」

と、従者の男に告げた。

六郎と呼ばれた従者は、そう言われて、

「何を仰いますか。この六郎、どこまでも盛高様について行きます。生死を共にすると誓ったではありませんか」

「六郎……」

忠義信に満ちたこの従者のことを盛高はうれしく思った。

「ありがとう……」

あとは言葉にならなかった。必死の思いでここまで逃れてきた。身も心も極限まで追い詰められていた。

木曾義仲の軍にあって武功著しかったさしもの盛高も、今は口から弱音しか出てこなかった。

「されば、どこへ向かうか……。ここにもじき追つての手が伸びよう」

いつまでも悲しみにくればかりもいられない。追つての手は近

い。つかまれば命はない。

六郎も、しかしまったく良い考えが浮かばなかった。東国源氏の追及は厳しい。果たして逃れられるのか……。

「六郎、思い切って叡山へ向ってみよう」

「叡山でございますか」

六郎は呆氣にとられた。つい先日まで彼らは叡山にいたのだ。

「左様じゃ」

「しかし、叡山が我らを匿ってくれるでしょうか。我らは今や源頼朝様から追われている身ではありませんか。当然、叡山にも追及の手は伸びましょう」

「うむ、確かにそうだが……。だからこそ、叡山に向ってみよう。

木曾殿の時もそうであったが、彼らはたとえ源頼朝であれ、そもそも東国武者には好意を持つておらん」

「はあ、なるほど……。確かに左様ではございますが」

六郎は少しずつ、主人の考えが見えてきた。

「前回木曾殿の命にて叡山に陣を構えていた折、知り合った僧兵が幾人かある。彼らに相談すれば何とか我らが身、匿ってくれようかもしれない」

六郎もこの考えに同意した。

「そこまでの考えであれば、この六郎、何も申さずただお従います」

「よし！」

こうして二人は比叡山を目指した。

そもそも二人は比叡山でめぐり合った。

共に家を飛び出した二人は、当時、破竹の勢いで平氏軍を打ち破り、都入りを目前に控え、比叡山で駐屯していた木曾義仲の軍勢に加わったのである。

近江源氏一族である盛高はその家筋を買われ武者として引き立てられたが、伊勢の国からやってき獵師あがりの六郎は、吹き矢の武芸こそ達人の領域ではあったが、結局特に源氏の血筋を引くもので

もなかったので、盛高の従者とさせられた。

「六郎、比叡山でおぬしと会ってからもうどれほどになるうか」

「さて、二年ほどになるかと存じますが」

「そうか、もうそんなになるか」

そう呟く盛高の記憶は二年前に遡った。木曾義仲の軍に加わり、平氏追討の戦の中、連日のごとく武勇を立てていたあの頃へ……。



## 第一部第二十四章

「平氏を倒せ！」

この言葉を合言葉に全国の源氏の武将が旗を揚げた。特に木曾義仲の軍勢の猛進撃は目覚しかった。

「義仲様のもとへ！」

近江の源氏は木曾義仲が比叡山に陣を構えたことを聞くと、彼の元へ馳せ参じた。盛高もその一人であった。

両親、妹からの反対を押し切って家を飛び出した盛高は、比叡山で木曾義仲の軍勢に加わり、都へと上洛した。

「俺の手で平氏をねじ伏せる！」

その確信のもと、武芸に秀でた盛高は、そこで連日のごとく武勇を立て、大活躍の毎日を送った。その功績が義仲に認められてか、都から平氏が一掃されると、ある日、彼は義仲に呼び出された。

「盛高、そちの働き、まことに立派であった」

義仲はそう労いの言葉をかけると、少し黙っていたがやがて次のように続けた。

「実はそちに軍勢を預けようと思う！それを引きつれ今より比叡山に戻り、天台の僧たちの動きを監視し、逐一わしに報告してほしい」  
「比叡山に……」

平家を追って、討伐の軍勢を西へ向かわせんものとはかり思っていた盛高は、意外なこの義仲の言葉をただ黙って聞いていた。

義仲の語るところによれば……。

もともと朝廷と関係の深い比叡山は、山育ちの自分のことを、  
「木曾の山猿」と陰で呼び、朝廷と同様、彼の存在を快く思わず疎んでいた。都入りを目前にした自分が、比叡山での駐屯を望んだのに、なかなか快諾しなかったことを見ても、それは明らかである。

「おそらく、比叡山の狸坊主共は、裏ではわしを排除しようと、頼朝の側につくのは間違いない」

というのである。

「そこで監視役を送ろうと決めたのじゃ」

「監視役でございますか……」

平氏討伐の一番乗りでなくとも、こうして義仲の信を受けて軍勢を任されるのは誉れには間違いなかった。西国に逃れた平氏討伐の先頭に立ちたい気持ちを抑えて、彼はここは義仲の命に従うことにした。

「はは！盛高、この命をかけて義仲様のご恩にお応えいたしとう存じます！」

こうして、木曾義仲の意向を受けた盛高は、一軍をつれて、京の都より比叡山に送り出された。

こうして戦闘から遠ざかった盛高であつたが、彼は、その叡山での駐屯の間、個人的に幾人かの僧兵と懇意になつた。というのも、叡山の僧たちは義仲の横暴な振る舞いには辟易することが多かったが、盛高には一目置いていたからである。

「やはり近江源氏の血筋を引くお方、あの山猿とはえらい違いじゃ」  
彼が近江源氏の血を引く佐々木一族の者、という事実が大きかつたのも勿論であるが、ただそれ以上に、彼が人気を集めたのは、実際は彼の人柄によるところも大きかつたと言えよう。

実際、彼は義仲のように強圧的、威圧的に振舞うことをしなかつた。支配と言うよりは、秩序と威厳による管理を重んじた。こうして彼は、比叡山の僧侶達のプライドを満足させつつも、彼らをしっかりと彼の管理下に置くことに成功した。

さらに彼は僧兵たちに武術の指南もした。部下のものに篤く、正義感が強い、そんな人柄が好感をもつて受け入れられたのである。叡山での評判は日毎に上がつていった。

多くの僧兵たちが盛高のことを褒めた。

こうして、彼は比叡山でそれなりの人脈と友好関係を築き上げていった。

さて、その一方で、都入りしたものの、統制の取れない義仲軍の

士気は急速に落ち込み、都での一部軍勢の狼藉乱暴ぶりも目に余るものであった。

朝廷からも後白河法皇からも疎んじられ、拳句の果てに、源頼朝と敵対するに居たり、彼は孤立無援となった。

そんな八方塞の環境の中、いらだつ義仲は、自分になかなか忠誠を示そうとしないどころか、源頼朝に接近しようとする比叡山に対して、その見せしめのため、幾人かの高僧を捕らえ処刑するという暴挙に出ようとしたのである。

「あの坊主達を見せしめに殺してしまえ！」

義仲は、叡山に屯所を構えていた盛高に対し、処刑する僧の名前を伝え、一刻も早く処刑せよ、と伝令を通じ命令した。

「僧侶の首を刎ねよか……」

盛高は義仲からのその命を伝えられると、部下を集めた。

重々しい雰囲気の中、彼はこう決意を述べた。

「わしには出来ん。義仲様ともはやこれまでじゃ」

彼はそう義仲との決別を宣言した。

「義仲様の恩があつて今のそれがあるのは事実、しかし木曾殿の行状、あまりに目に余るものがある。それがしが目指していたのは平家の追討、都での狼藉や叡山の僧を処刑するようなことではござらん！」

こうして彼は義仲からの命令を無視した。

幾たびの催促にもかかわらず、なかなか言うことを聞かない盛高に対して、業を煮やした義仲は、比叡山に攻め上った。攻める義仲軍に対し盛高は反旗を翻した。

「こうなつたら戦うまで！」

彼は叡山の僧兵らと共に少数の軍勢でよく交戦したが、結局は多勢に無勢、敗北を喫し、敗走したのである。

敗走した後、彼はしばらく大津の地で潜伏していた。源義経率いる東国源氏の軍勢が京の都へと進軍するという噂からそこへ合流しようと思論んだのだ。しかし木曾義仲の軍勢にいたことからどうに

も東国軍の信頼を得られず、拳句の果てに捕らえられようとしたので、逃亡したのである。

「同じ源氏であるのに！」

しかし今やこれが現実であつた。こうして彼は、一人追つ手を逃れて生まれ故郷の馬渕の里へと向かつたのであつた。

「ふるさとへ帰れば何とかなるだろう」

そう考えた盛高は、一路馬渕を目指したのであつた。

そして……。

そこに待っていたのは悲惨な佐々木家の末路であつたというわけである。

長居は出来ない。追つての手は迫っている

こんな結末でふるさとを去ることになるうとは……。

馬渕の里を後に、東国源氏の追つ手の手を逃れながら、比叡山へと向かう道すがら、盛高はずっと自分を責め続けていた。

そもそも佐々木氏の名誉回復のために、と家を飛び出したのである。木曾義仲殿の軍勢に加わり武勲をたてれば故郷に錦を飾れる。

そうすれば平家の顔色を伺つて今の立場を得た父親に代わつて、自分が頭領となり、今はばらばらとなっている近江佐々木氏の中心となつて、源氏の新しい国造りの一翼を担うこともできる！　それは盛高の純粋な思いであつた。

しかし、すべては若気の至りであつた。結果的には東国源氏から追われる身となつてしまった。しばらくはきびしい追及の手が及ぶに違いない。

ともかく今は比叡山へ向かうしかない

比叡山が次第に近くに見えるにつれ、盛高はなつかしい日々思いを巡らせた。

美しい近江の山、川、――そして琵琶湖。道すがら目にする光景は以前のままであつた。

美しい自然の中にあつて、自分のみすばらしい姿が情けなかつた。あれほど憎んでいた平家の武士たちもこのような思いで西国へ逃れ

たに違いない。

落ち武者とはこんなに惨めなものか

彼らへの同情心が自分の心の中に沸きあがってくることを、盛高は何とも皮肉に感じた。

「六郎、すまぬな。お前にまでこんな迷惑をかけて……」

「何を仰せられます！ 盛高様に最後までお仕え出来て、六郎ほどの幸せ者はおりますまいて！」

彼の人柄に惚れて、最後を共にしようとしてここまでついてきたのだ

六郎は主人を励ました。

「盛高様、お気を強く持たれませ。叡山には必ずお味方がおられます……」

六郎の励ましの言葉もしかし彼の頭には空虚に響くばかりであった。

「ともかくも自分が未熟すぎた……。今となつては後悔しても遅いが」

日の暮れまでには坂本の地に到着した。あとは山頂まで上るだけだ。

あの僧兵たちはまだいるだろうか

盛高は体の震えを感じながら、山頂へと至る道を、六郎と共に上っていた。

## 第一部第二十五章

比叡山頂の延暦寺に到着すると、早速、盛高と六郎は、秘密裏に、馴染みの僧兵の幾人かと連絡を取った。

「佐々木盛高が帰ってきたらしい！」

僧兵らは彼らを進んで匿ってくれた。彼らは、盛高が叡山を守るために義仲の軍と戦った功績を大きく評価していたのである。こうして、盛高と六郎は彼らの厚遇のおかげで、日増しに精神的にも肉体的にも元気を回復することが出来た。

そして、丁度その頃、比叡山内には、職業軍人たる武士を、延暦寺防衛のために雇い入れようという動きが持ち上がっていた。

「佐々木殿、叡山で我等の警護のために共に働いてはみぬか？」

ある日、馴染みの僧兵からそう提案を受けた盛高は突然のことに戸惑いを覚えた。しかし、状況を冷静に分析すると彼らの提案もなるほどと頷けるものがあつた。

なぜなら……。

確かに、ここ延暦寺内にも屈強の僧兵は確かに多く居る。しかし、義仲の延暦寺進攻という暴挙のおり、職業軍人である武士の前に、結局彼ら僧兵はほとんど無力であつた。

さらには平氏が京の都から追放されたとはいえ、まだまだ戦乱の世は続いている。

木曾義仲に散々な目に合わされた比叡山にしてみれば、源頼朝率いる東国源氏も、所詮は東国の田舎武者の集団にしか過ぎなかった。

源頼朝も、時と場合によっては、いつ叡山に攻め込んでくるやもしれない

「もつと僧兵を増やそう！」

「いや数だけ増やしても意味がない！」

そんな議論が連日堂内で繰り広げられていた。

「思い切つて武家の者を召抱えてはどうか？」

「でも、誰を？まさか平家の落ち武者を集めるわけにもいくまい」  
そこへ丁度盛高がの登場したわけであった。 僧兵らは警護の  
頭領として彼を推挙した。

反対するものはいなかった。 かつて、義仲から比叡山を守る  
ために、命を賭して戦った盛高である。 誰もがそれは認めていたし  
信頼するものも多かった。

「彼こそ確かにこの任にふさわしい」

結果、多数の賛同で、彼は座主の護衛、および僧兵の訓練の任務  
に就くこととなったのである。

東国源氏による、義仲軍の落ち武者狩りは容赦なかったが、比叡  
山は盛高の過去の素性を封印してくれた。

盛高は自分の誠実さを評価してくれた叡山に感謝した。 彼は与え  
られた任務を全うせんと、比叡山の自己防衛力を高めることに日夜  
専念した。

こうして、身を比叡山に落ち着けた彼であったが……。

彼の時実への復讐心は日毎に高まるばかりであった。

両親、時子の仇……

あの憎き時実めを何としても見つけなければ……

毎日、心でそう叫びながら、彼は時間が許すときは、叡山を降り、  
京の都、近江の国で、時実の消息を尋ねまわった。

しかし、時実の行方は全く分からなかった。

そんなある日の夜……。

なかなか時実を見つけることの出来ない苛立ちから、盛高は熟睡  
できぬ夜が続いていた。

そして、その日も、悪夢にうなされて目を覚ましてしまった。

目の冴えてしまった彼は、興奮してほてった体を冷やそうと、部  
屋の外に出て庭へ降りようとした。

と、その時庭から声がした。

「盛高様、どうされました。 もうお休みかと思っておりましたが…  
…。 うなされる声がいたしましたもので……」

六郎であつた。彼は、盛高のうなされる声を聞いて、心配で様子を見に来ていたのであつた。彼は、盛高が住蓮を見つけられぬ苛立ちのために、日毎に殺氣立っていくのを見逃してはいなかった。

この六郎の忠義な態度に盛高はいたく感動した。

「いや、なに……。少し眠れんでのう」

と、盛高は少し俯き加減にそう言つたが、続けて、少し語気を強めると、

「のう六郎！」

と言つて、彼を見据えた。

「はつ、何事でございましょうか」

六郎は平静さを保つて返事をしたが、主人の心のうちは見抜いていた。

今宵も煮えたぎる復讐心のためにお休みなれないのだ

盛高の心中を察していた彼ではあるが、そんな主人の気持ちをどうすれば落ち着かせることが出来るのかには苦慮せざるをえなかった。

仇と思う相手がどこにいるのか皆目見当がつかないのだから

……

盛高は、そんな六郎の気遣いを感じとつたのか、少し気を落ち着かせると、さらにこう続けた。

「そろそろ、時実めを本気で探さねばなるまい」

「は、まことに」

そう真摯に答える六郎の顔を見て、盛高はようやく冷静さを取り戻した。そして空に目を移すと、

「そちに無理をいうこともあるやもしれん。すまぬな……」

と、ぼつりと言つて目を瞑つた。

六郎は深々と頭を下げると、

「何を仰せられます。私はあなた様に命を預けた身。盛高様の言いつけであればいかなることでも実行する所存であります。ご安心なされまし……。しかし、盛高様、今はお体が大事でございます。早



くお休みになれますように……」

と、盛高の体を気遣いつつ、従順に答えた。

盛高は六郎のこの忠誠心をうれしく思い、

「そうじゃのう……。そちの気遣い、うれしく思う。本当にすまん。確かに……。早く休むとしよう」

と、最後にそう言うのと、部屋へ戻った。

部屋へ戻ると、盛高は再び床についた。冷静さを取り戻したつもりであったが、こうして横になると、再び、心を落ち着かせようとする彼の意思と反して、時実への復讐心はまた徐々に昂ぶってくるのであった。

時実め、どこにいるのか！ いやなんとしても探し当ててやる。探し当ててみせるとも！ そして、この手で、この手で、必ずあいつに止めを刺してやる！

彼は心の中で叫び続けた。

しかし、一体どうやって探し出すのだ。どうやって？

なかなか寝付けない寝床の中で、盛高は、この焦燥と苦悶に満ちた夜を、今日もまた過ごさねばならないのであった。

時実を呪いながら……。

## 第一部第二十六章

「であれば、未だに、その盛高という男は、そちの身を仇として追っているかも知れぬということか」

この信空の言葉に、過去の回想に耽っていた住蓮は、現実に取り戻された。

「左様でございます。もつとも……。東国源氏による落ち武者狩りに会い、すでに命亡き者となったかもしれないが」

そう返事をする住蓮に対し、信空は続けて語った。

「しかも、貴殿は結局、佐々木家の娘御がてつきり身投げをしすでに亡くなられたものと、勘違いをしていたわけだ」

「左様でございます。後日、誤解が解けるまでは私はそう信じて疑いませんでしたから」

住蓮の言葉に、信空は大きく頷いたが、

「それにしても、真に数奇な運命ではあるな……」

と言うと、黙ってしまった。ここまでも壮絶な体験をしてきたこの若い僧に、どう言葉をかけるべきか分からず、言葉が詰まってしまったのである。

### 数奇な運命

住蓮は信空の言葉を心で反芻していた。

本当に数奇な運命だ。あの時、安楽とめぐり合っていないければ、今の自分は……

住蓮は再び過去を回想し始めた。

安楽との出会いが、この数奇な運命に弄ばれた自分を救ってくれたのだ……

今は、この数奇な運命の結末まで、すべてを語ってしまわなければ。

沈黙が破られた。

「近江の地を去った後……」

住蓮は再び過去の記憶を辿り始めた。

「ふむ」

耳を傾ける信空に、住蓮の話は再開された。

彼の回想が再び始まった……。

時は、寿永4年（千百八十五年）の春

そんな春のある日の夕暮れ、京の都を流れる鴨川の河原に、ぼろを纏い、目は虚ろで、もはや、廃人と言っても過言ではない様相を呈した一人の若者の姿があつた。

住蓮である。

近江の国、馬渚の里にて、先述した佐々木家滅亡の惨劇が起こった時より幾月か後であつた。狼藉を欲しいままにした木曾義仲の軍勢は東国源氏の手によりすでに都から追放されて、ここ京の都は一見やや平安を取り戻したかに見えた。

その京の都の鴨川の河原に住蓮は暮らしていた。

無論、かつての彼ではない。奈良の都で悩みながらも勉学に励んだあの熱心さ、一途さ、また近江の国で青春を謳歌したあの潑刺とした青年の姿をもはや今の彼に見出すことはできなかった。

彼はぼろをまとい、酒のにおいを一日中口から発し、人からの施しでかろうじて生きている、何の希望もない、乞食の一人となっていた。

川の向こう側、東側の河原には無数の人間の死体の山が見えた。飢え死にした者、病死の者、戦で死んだ者などの数はあまりに多く数え切れない、平安京の斎場として使用されていた鳥部野はすでにその死体処理能力の限界を超えていた。その結果、死体葬送の処理が追いつかず、処理しきれない死体が鳥部野からあふれ出し、東山の麓からさらには鴨川の河原にいたるまで山積みになされていたのである。

無論、これほど死体の数が増えたのには理由がある。

千百八十二年から続いた養和の飢饉である。これは日本全国に甚

大な被害をもたらした。源平の争乱に加え、この飢饉の影響で、親をなくした孤児、働き手を失って残された家族、その他もろもろの被災者が都へ流入してきた。

彼らは都の東の京極の外に集落を作った。いや作ったというより、作らざるを得なかったと言っべきか、都の中に定住することは出来なかったからである。

そして、多くのものが飢え、病で倒れて死んでいったのである。

死体の処理が間に合わないのは当然のことであった。

そして飢えた者の中には、先に飢え死にした自らの子供の死体を、平然と食うものもいた。まさに混沌としたおどろおどろしい世界であった。

そして住蓮はその真っ只中にいた……。

河原の西側はまだ少しましだった。人々の生活の場があった。掘っ立て小屋が散在していた。

「河原者とはよく言ったものよ……」

住蓮は自嘲気味に呟いた。養和の飢饉以前から、ここには、河原者 当時、彼らはそう呼ばれていた たちが集落を形成していた。 たち

少し解説が必要かもしれない……。

それは、おそらく、当初、平安の律令制度からはみ出た者たちが集落を形成したものと思われる。そして、その数は次第に増え、このたびの源平争乱、また養和の飢饉の結果、その数が桁外れに大きくなったのである。

彼らは実にさまざまな人々の集まりであった。物乞いがもつとも多かったが、中には、強盗、殺人などの犯罪者、そして一度は捕らえられたが許されて放免されたもの、――彼らの中には河原での処刑を担うものもいた。

また土木工事の人夫、鍛冶仕事の職人、あるいは見世物を生業とするもの、はたまた踊り、歌、を興行として金を稼ぐもの。また念仏を唱える怪しげな乞食坊主がいるかと思えば、一方で市の聖と呼

ばれる熱心な念仏布教者もいた。市の聖の周りには多くの群集が集まった。まこと賑やかな雑踏を呈していたと言えよう。

彼らはお互いがお互いを助け合い、支えあつて生きていた。貧しいながらもここで暮らしていれば何とか生活は出来たし、それなりに楽しみもあつたというわけである。

無論住蓮はそんな時代を知るはずもない。

「俺にとつては三途の河原そのものだが……」

飢饉以後は、死体の処理が追いつかぬほど死人が増えて、ほとんどの死体は腐るに任されていた。住蓮がここに身を潜めた頃も、説法をする市の聖の、そのすぐ傍らには多くのもはや口利かぬ死体が散乱しているというありさまであつた。

皆が飢えていた……。そして多くのものが、人間の善なる心を失つていた。自然発生的に形成されていた互助精神も、もはやほとんど失われていた。

左様、今や、河原者は、ただ無数の骸骨と暮らす人々の集団というだけの存在に化していたのであつた……。

そんな河原で、他の者同様、骸骨と寝食を共にする住蓮にとっては絶望しかない毎日だつた。

すべてを失つてしまつたのだ……

あれからどれだけの時間が経過したのか……。

## 第一部第二十七章

実際、近江の地を去った後、どういう経過でここへ流れ着いたのか、今の時実にも実はよく分からなかった。 思い出せないのだ。ここへ来て、酒に溺れる毎日を過ごすようになって頭の働きが衰えてしまっていた。

自分がどうしてこの河原で暮らすようになったのか？  
全く思考が定まらないのだ。

いやもうそんなことすらどうでもいいのだ  
なぜなら、もう大切な人はいない。自分は過去の悲しい出来事に呪われながら、そして自分の運命を呪いながら死んでいくしかないのだ。 いや実のところはもう死んでいるのだ。

無論、この絶望の支配する河原にあっても、陽気に元氣良く毎日を過ごしているものもある。

しかし、もはや自分には絶望しかない。誰も救ってくれるものなどいないのだ！時実は今日も酒をしたかたに飲みながら、酔って遠のく意識に、何ともいえぬ快感を感じていた。

毎日毎日死に近づいていることが実感できた。

それでいいのだ

なぜなら、

死んだら時子に会えるではないか

毎日そればかり考えていた。

しかし時子は今、どこの世界をさ迷っているのだろうか？極楽にいてほしい。彼女は何の罪も無いのに、病に冒されこの世の地獄を味わったのだ。せめて来世は極楽で暮らしてほしい。

でも、この俺は極楽に行けるのか？

いやこんな体たらくでは極楽への往生など出来ようはずが無い。地獄に落ちる運命だ。それは覚悟しよう。

では、死んでも結局時子とは会えないということか！

毎日が、この考えの堂々巡りであり、たどり着く結論は 絶望であつた。

いつしか、住蓮の目からは涙があふれ出ていた。涙目で周りのはつきりと見えなくなると耳に感覚が集中した。すると次にはその耳に近くからの念仏の唱和が飛び込んできた。

河原者の中には熱心な阿弥陀信者も多くいたのである。

念仏を唱えれば極楽往生可能なのか。

辻説法をする念仏聖たちの話を聞いていると、いとも簡単に往生が叶うようである。

「ただ一言南無阿弥陀仏と唱えればよいのだ」

彼らはそう説く。

しかし……。

そんなものはでたらめだ！

なぜなら……。

自分は、馬淵の里での毎日、仏に時子の全快を祈願したが、結局仏は自分たちを救ってはくれなかったではないか！

そう心で絶叫すると、また心の中でもう一人の自分がこう反論するのだ。

『それは自分の信仰が薄かったからだ！』

いや、もうもはやそんなことはどうでもいいのだ……。

時実は今にも崩れそうな粗末な小屋から外へ出た。かなり酔っていた。

小屋を出ると、子供を抱いた母親の姿がいきなり目に入った。横を通り過ぎるときに、しかし、それは、子供を抱いているのではなく、死んだ子供の肉を、その母が食らっているのだということが分かった。

「……」

それは住蓮にとっては珍しくも無い、いつもの光景であつた。通り過ぎると、その女は子供の死骸を放り投げると、時実に食べ物の施しを求めた。

「……」

彼はそれを無視して歩き続けた。

こんな地獄の世界ともそろそろおさらばせねばしかし、どうやって……。それに、どこへ行っただって、結局そこに待っているのは、生き地獄の世界だ。

時実の目が対岸の向こうに見える東山に注がれた。

そうだ、鳥部野へ行ってみよう。そしてそこで野垂れ死にするでしょう！

死にたかった。ともかく、この果てしない、思考の堂々巡りのもたらす苦痛から逃れたかった。地獄の苦痛も、この今の苦痛に比べればましであろうか……

いや、よしんば、地獄の苦痛が今の苦痛よりも辛いものであっても、そんな地獄こそ俺にふさわしいではないか？

なぜなら時子を俺は救えなかった。そんな俺の行き先は阿鼻叫喚の地獄こそふさわしいのだ、苦痛を得てしかるべきものなのだ。時実は川の向こうを見やった。あの死体の山の中に無数にころがる髑髏、そして群がる鳥……。

俺の最後の死に場所としては絶好の場所ではないか

そんな思いが彼を駆り立てた。

時実はふらつきながらも、鴨川を西から東へと渡った。水量は多くなき簡単に渡れた。いくつもの死体が浮かんでいる川を、それらを、手で掻き分け、あるいは足で蹴散らしながら……。

俺もすぐこいつらの仲間入りだ

時実はそう思うとなぜか体が軽くなった。可笑しかった。不思議な気持ちだった。

川を渡り終わったところで急に目の前が真っ白になった。崩れ落ちていく自分を感じた。

さあ、もう少して、地獄だ。三途の川を渡り終わったのだから……

最後の力を振り絞って進んでいった。



どれだけ歩いたろうか？

気がつくとも周辺に死体の山があった。まさしく”山”であった。鳥部野である。死臭があまりにひどく時実は思わず嘔吐した。

その足元を見ると、白骨化した死体が一体あった。住蓮の吐物にまみれた髑髏が住蓮を見て、にやっと笑った。少なくとも彼にはそう見えた。

「やあ、いらつしやい」

髑髏が時実に囁いた。と、そう住蓮が感じた瞬間、彼は地面に崩れ落ち、体を打ちつけた。

時子、本当にすまなかった！

最後の力を振り絞って、心の中でそう時子に叫び続けた。すると時実の目の前に地獄の世界が広がった。皓皓と燃える炎、阿鼻叫喚の様、絵で見る地獄絵そのままの様相であった。

やはりこここそ、俺に相応しいところだ

彼はにやりと笑った、笑いながら死にたかった。本望だ。

時子、本当にすまなかった。俺はこの地獄で、そちを助けられなかった報いを受けることとしよう

薄れ行く意識の中で、時実は時子が微笑むのを見た。

その彼女は優しく、こう彼に語りかけた。

「いいんですよ。そんなに気になさらくとも。」

慰めの言葉が嬉しかった。

「ありがとう」

時実もにこりと微笑を返した。薄れていく意識が心地よかった。

雲の上に浮いているような気分だった。

やっとこれで死ねる

もはや何も考えられなかった。ひたすら永遠の死を願いながら彼は深い眠りに落ちた。

## 第一部第二十八章

ここは一体どこだ。俺は今どこにいるんだ……。

深い眠りから覚めると、周りは一面真っ白な世界であった。時実  
はうろたえた。

これは夢なのか現実なのか？

なんとも心地よい気分であった。ふんわりとした雲の上を歩いて  
いるようであった。

地獄であればもつと苦しかろうはずだが……。

そんなことを考えていると、今までに出会った人々が交互に目の  
前に現れては消えていく。中には手招きする人もいれば、逆にこち  
らへは来るな、と言わんばかりに手を振って時実を追い返そうとす  
る者もいた。

『これは一体何なんだ？』

すると次には、美しい女性が微笑みながら手招きするのが見えた。  
そこで急いでそちらへ行こうかと思ひもするが、そう思うや否や、  
後ろから体を誰かが引つ張ってそれを止めようとしたりするのであ  
る。

そうこうするうちに雲の切れ目が大きくなった。視界が急に開け  
た。無数の天女の群れが目の前に現れた。

そうか俺は死んだんだ。今俺は三途の川へ向かっているとい  
うわけだ。そうに違いあるまい！

と、そんなことを考えていると、一人の天女が近づいてきてこう  
彼に囁いた。

「早くいらっしやいませ。何を躊躇っておられるのですか？」

その声に促されて、時実には差し出された天女の手を取ろうとした、  
まさにそのときであった。

「お——い」

「お——い」

と、大きく太い男の声が何度も後ろから響いたかと思うと、後ろからむんずと体を捕まれて、たちまち天女の群れから引き離された。「何をする！行かせてくれ！」

そう叫びながら彼は必死に差し出される天女の手にしがみつこうとした。そして何とか天女の手をつかんだと思うと、天女は彼の方を振り向いてこの世のものとは思えない笑顔を振りまくのであった。「そうです。こちらへいらっしやいませ。早くこちらへ……」

とやさしく天女は彼に語りかける。しかし次の瞬間であった。

その天女の顔は恐ろしい形相の髑髏と化した。

「あっ！」

と思うも間もなく、全身すべて骸骨と化した天女はすさまじい力で彼を引っ張った。

「早くこちらへいらっしやいませ！」

あまりの恐怖に、時実は

「助けてくれ！」

と大声で叫び続けた。すると、それに呼応するかのように、彼の背後からは先ほど聞こえた

「おーい」

「おーい」

という男の声がいよいよ大きくなって響いて聞こえてきた。

時実は必死の力を振り絞って骸骨から逃れようとした。そしてついに骸骨の手を振り払うことに成功した。

その瞬間であった。

「おーい。しっかりしろ！」

という耳元で発せられる言葉で彼は目を覚ました。そう、現実の世界に引き戻されたのである。

目を開けると、見知らぬ二人の顔がそこにあった。

「……」

まだ目は霞んで、はっきりとは彼らの顔は識別できなかった。意識も完全に元に戻ったとは言いがたかった。まだ呆然としている。

そんな時実の顔を見やりながら、その二人は、彼がようやく意識を取り戻したのを確認すると、

「おお、良かった。生きておる、生きておる」

「いやはや、われら偶然ここに来たこととは言え、何とも命を救うことができたか、まあ、ともかくよかった」

と、お互いの肩を叩き合って喜んでいる。

この二人は何者か？

まだはつきりとはしない頭で、時実は懸命に今の自分の状況を理解しようとしたが、激しい頭痛に襲われてそれもままならなかった。すると、二人のうちの一人が、

「これも一人でも多くの衆生を救おうとの阿弥陀仏様の本願の賜物でございますな、安楽様」

と、二人の背後で、少し離れて佇んでいた、三人目の男に呼びかけた。

安楽と呼ばれたその男はおもむろに口を開くと、

「いや、まこと阿弥陀仏様のお慈悲のお陰ではある……」

と言うと合掌して目を瞑り黙想を始めた。――しばしの黙想の後、さらに彼は言葉を続けて、

「ともかくもこの男連れ帰ろう。意識を取り戻したとはいえ、体の衰弱が著しいようだ。まだまだ予断を許さぬ」

時実は口を開こうとするが、その力すら消耗していているようで、言葉を発することはできなかった。やむなく体を動かそうとしたがそれも叶わなかった。体を動かそうとすると激痛が体に走ったからである。どうも全身をどこかに強く打ちつけたらしい。

やはり俺は死ぬのだろうか？

次第に意識ははつきりしてきたが、ともかく体が動かせなかった。先ほどの夢の中の心地よさが嘘のようである。頭痛も段々とひどくなった。

目の前には最初霞がかかったようで、彼を取り囲む三人の男の顔の区別もはつきりしなかったが、次第にその霞も消えて、男らの顔

がはつきり見えてきた。

安楽と呼ばれた男が三人の中の頭のようにであった。というのかもしれない。二人はぼろをまもっていたが、安楽と呼ばれた男だけは僧衣姿であったからである。

「さあ、はやくこのものを連れ帰ろう。相当冷え込んできた。まだ完全に安心というわけではない」

促されて後の二人は時実を抱きかかえた。

「急ごう」

「はは」

安楽と呼ばれた男が先導を切った。時実の目にその後姿が写った。僧衣姿の後姿はひどく華奢に見えた。背は高く見えたが、肩幅は狭く女性的な線の細さを感じた。――しかしそれでいて、歩く姿は勢い強く、その姿も堂々としていて、体の線の細さからは想像できぬ、なんとも言えぬ力強さを周囲に漂わせていた。

この僧はいったい何者か

そんなことを考えるとまた激しい頭痛に襲われた。頭も強く打ち付けたのであろうか。それに、そもそもやはり俺は死ぬのではないか？体がまったく言うことを聞かない。痛みも激しくなるばかりだ。その痛みに耐えかねて目の前もまた霞み始めた。

そのかすんだ彼の目には、向こうに鴨川が見えた。

せつかく渡った三途の川を引き返すのか

先ほどの髑髏と化した天女を思い出した。地獄の入り口まであとわずかだったのを、この三人に連れ戻されたのだ。

俺は娑婆の世界へ戻るために再びそこを渡るというわけか

生き返ったのか、俺は……。師に切れなかったのか……。

しかし生き返ったところで、魂の平安はない。また苦痛に満ちた毎日が繰り返されるだけだ！

死んだほうが幸せということもある。今の都の有様は、時実に限らず、多くの河原者たちにとって、生きるも地獄であった。”平安”の都とは彼らにとってなんとも皮肉な名前であった。

鴨川の対岸のさらに向こうにはその平安の都が広がっているのがおぼろげながら見えた。

またあそこへ帰るのか

そこへ戻るのもまた地獄であることは明白……。

いずれにしても時実は、今は自分ではどうにもならないこの体をとにかくもこの男たちに任せるしかなかった。怪我の状態はひどそうだ。結局のところ助からないかもしれない……。

そして、死んでも、待っているのはまた地獄、決して俺には成仏、極楽往生など叶わぬのだ

そうさ、俺は地獄で生きていくしかないのだ

そう考えると、時実の目にはまたとめどなく涙が流れ出すのであった。

男たちにかつがれて運ばれる途中、何度も激痛が彼の体を走った。しかし彼には言葉を発することすら叶わなかった。あまりの激痛に意識がまた遠のいていった。

「安心なされ。もうそこが我らが庵じゃ」

安楽と呼ばれた男の声がした。

華奢な体つきからは想像できない、力強い声であったが、時実はその声を聞くと、なんとも表現できぬ安心感に自分の体が包まれていくのを感じた。すると、彼には、不思議とその声が何かしら、仏の声のようにも感じられた。と、そう感じた瞬間、その安心感からであろうか、再び遠のく意識の中で、彼はまた夢心地で、想像の世界の中、雲の上を歩き始めるのであった。

## 第一部第二十九章

「本当にあの時の私はまさに死の淵をさ迷っていたということでございます……」

住蓮は、人間としてどん底の営みを送らざるを得なかった当時の記憶を、一つ一つ確かめながら信空に語り続けた。それは恥ずかしくもあり、また妙に懐かしくもあった。底辺に暮らす人々と生活を共有していた……。皆でいろんなものを分け合ったりもした。左様、貧しいながらも気持ちは豊かな人々が多かったのだ。しかし、飢えや絶望はそんな彼らの良心までも最後には奪ってしまった……。

ため息を一つつくと、彼はさらに語り続けた。

「安楽たちに私はこの命救われたのです……」

「安楽と河原者の仲間達であるな？」

信空が問い返した。

「左様でございます」

住蓮は目を瞑った。そしてまた当時の記憶をたどり始めた……。

暫くして彼は鋭い痛みに目を覚ました。最初の瞬間には、自分が何処にいるのか、自分に何が起こったか分からなかった。記憶がまだ完全には回復していなかったのである。

頭ががんがんとして、相変わらず目は霞のようなものに覆われていた。

それでも暫くすると、徐々に意識がはっきりしてきて、目の霞みもかなり取れてきた。すると自分の顔を屈みこんで見ている三人の男が目に入った。一人は僧衣姿、あとの二人はぼろを纏っている。

この者たち、先ほどの……。

時実は直近の記憶を取り戻した。

そうだ、自分をここまで運んできたのだな……。

周囲を見ると、どうやら粗末な小屋の中に寝かされているようだ

った。

その三人とは別に一人の女性が傍らで自分の左腕を撫でている。女性はぬれた布でどうやら傷口を洗っているようであった。というのも撫でられるたびにひどい激痛が走ったからである。

時実はその激痛に耐えられず、撫でるのをやめてくれ、と言おうとするのだが、それが声に出ない。

止めてくれ！

いくらそう叫ぼうとしても、しかし口が思うように動かない。

まるで拷問だ……。

やはり俺はこの生き地獄へ帰ってきたのだ

、と自分に納得させると、その痛みも自分に与えられる罰として受け入れるしかなかった。

「いつそのこと殺してくれ！」

痛みに耐えかねて、必死にそう叫んでいるつもりなのだが、その声も、実際は声とはならず、四人の耳には届かぬようだ。おそらく苦しみのうめきぐらいにしか聞こえぬのだろう。

僧衣姿の男が右に立つ男に尋ねた。

「次郎、この者、見つけた時の有様、いかようであったのか」

次郎と呼ばれた男は答えた。

「はい、それが、わしらが、いつものお勤めで、鳥部野の見回りに出かけたのですが……」

というと、もう一人の男が口を挟んだ。

「安楽様、ほんに、末法の世とは今の世のこと、間違いありません。鳥辺野には仏の服を剥ぎ取ったり、髪を抜き取ったりする輩が、まこと、増えておりまして、我ら取締りをいたしましても焼け石に水、仏の髪を抜き取り、鬘にすると！　しかし、そんなものを捕らえてみたら、その者は、普段よくわしらが知っておる河原者の仲間であつたりするのです」

「まことじゃ、三郎」

と、次郎と呼ばれた男が続けた。



「わしら、放免の者に、この鳥部野に群がる悪党、取りしまれとの命、ああ、もつたいたい、恐れ多くも検非違使様より仰せつかったはものの、そもそも多勢に無勢、出来ようはずもない」

「さよう次郎、一度判官様自らここへ赴いて取締りをなさるとよいのじゃ。あの匂い、――群がる鳥、野犬、そして盗人ども……」

「ほんに、わしら、検非違使様に使われる身と言えは聞こえは良いが、結局のところは屍のお守り役、まったく損な役回りを押し付けられたわい。貴人様方が出来ない仕事を押し付けられているだけのことじゃ！」

安楽と呼ばれた男が二人を諫めた。

「まあ、まあ、そういうでない。おぬしらも、そもそも盗人ではなかったのか。放免された恩、もう忘れたか」

そう言われて、次郎と三郎はからからと笑った。

「安楽様、昔のことは言いつこなしでさ」

盗人と呼ばれても、次郎、三郎は意に介する様子はなかった。

時実是不思議に思った。

この者達は何者か？

時実はまだ自分の身の上に何が起こったのか、整理が出来なかった。とりあえず男達の名前は三人の会話から分かった。僧衣姿の男は安楽、初めて見る顔であった。他の者は次郎、三郎、――放免らしい。なるほど確かに、この二人は、見るからに筋骨たくましい屈強な体格をしている。安楽と呼ばれる男の華奢な体格とはまことに対照的と言えた。すると同じ河原で生活していたかもしれない。そう考えると、河原のどこかで見たような顔でもあった。

そんなことを思案している時実を横目に、それまで笑っていた次郎が、突然真面目な表情に戻ると時実を発見した時の様子の経緯を安楽に話し出した。

「安楽様、この者、発見しました折、あまりに様子がおかしいので、鳥部野に出没する例の盗賊ではないかと思って立ち去るよう命じたのです」

三郎がこれに続いた。

「左様です、日の暮れ時、あんなところをうろろするものは盗賊しかおりませぬ。わしらそろそろ見回りを終えて帰ろうと思った時に、死骸の周りをうろつくこの者を見つけたのです」

「ところが、立ち去れ、という声をかけるが早いか、男の姿が忽然と見えなくなりました」

「左様でさ、それで急いでそばへ近づくと、この者、足元の崖に気づかず、まっさかさまに下に落ちてしまっていた、というしだいです」

「なるほど」

ことの顛末を聞くと、安樂は合点がいった、とばかりに大きく顔を上下に振ったが

「しかし、そもそもこのもの、やはり盗賊であつたということか？」と疑問をぶつけた。すると傍らで傷の手当てをしていた女性が、

「このかたは、盗賊ではありませんせぬ！」

と、突然、強い口調で三人の会話に割って入った。女性の口調がかなりの真剣さを帯びたものであつたために、場は一瞬緊張した。

「ゆきはこの者と知り合いか？」

安樂は女性に尋ねた。

「いえ、知り合いというわけではありませんせぬ。ただ……」

そついうと、ゆき、と呼ばれた女性は時実の腕の傷の手当てをする手をしばし休めた。そして時実の顔を覗き込むと、

「間違いありません。二三ヶ月ほど前にこの河原にやってきて住み着いたかたです。私と小屋が近かつたものですから、覚えております」

と三人に答えた。

「左様か……」

安樂がそう応えようと、ゆきと呼ばれた女性はさらに話を続けた。

「はい、この方、ここに小屋を構えると、すぐに酒びたりとなりました。手のつけられぬ有様でした。乞食をしながら何とか生業をた

てていたようです」

そういうと、ゆきはもう一度彼の顔を優しく覗き込んだ。深い同情に満ちた表情であった。

「ただ、それだけなら覚えてはいなかったかもしれませんが。そんな人はここにはごく普通にたくさんいますから」

安楽が尋ねた。

「たしかに、して、それでは、なぜこの者を特別に覚えておるのか？」

ゆきは安楽にそう言われると、

「これでございます」

と言つて、時実の腰を指差した。そこには横笛が吊り下げられていた。

「これでございます、この方はこんな落ちぶれた姿をしてはおりましたが、かつては笛の名手であつたのでしよう。いつも夜になると、河原に座つて笛を吹いておりましたが、その調べは美しく、しかし悲しく、聴くものを魅了しておりました。そして……」

と言うと、ゆきと呼ばれた女性はそこで一瞬声を詰まらせたが、  
「そして、夜通し一人で泣きとおすのです」

と言つた。

「そうであつたか……」

皆は押し黙つてしまった。ゆき自身も涙目となつていた。同じ生活を経験したものだけが感じ得る心からの同情であつた。

「きつと、とてもとても悲しいことがあつたのでしよう」

ゆきの言葉に、安楽ら三人はただ沈黙を守るしかなかった。

一方、時実は、というと彼も回復しつつある意識の中で、このゆきなる女性の言葉を聴いていた。するとなぜか時子のことを思いだして深い悲しみに襲われ、また彼も絶望で涙があふれてきた。そして言葉にならない心の叫びを放つのであつた。

どうして自分をそのまま捨てていつてくれなかったのか！

時実は自分を救い出した放免の二人を恨めしく思つた。

今からでも遅くはない。この体さえ言うことを聞けば、鳥部野へ再び赴いて髑髏の群れの中にまた身を投じようものを！

しかし現実には、体が全く言うことを聞かない今、彼らに自分の身を委ねるしかなかった。

「とにかくにも、安楽様」

「うむ」

「あたりはかなり冷え込んでおりませう。取りあえずは、さしあたつての傷の手当ても済んだことですし……」

「ふむ」

安楽は少し考えた。どこへ運んだものか思案したのである。

「この者、骨がいくつ折れておる可能性が高い。手当ては時間がかかるであらう。次郎のこの小屋では十分な手当ては無理じゃ」

「では少し先の安楽様の説法所へ連れてまいりましょうか」

「いや」

安楽はしばし考えに耽っていたが、

「いや、傷の手当ても十分には出来ておらぬ。あの説法所では薬が十分でない。やはり吉水へ運ぶのが妥当であらう」

「法然様のところへですか」

「左様」

「いやはや、法然様のもとへ、またもやこのような乞食同然のものを担ぎ込まなければならぬとは」

次郎が言つと、三郎が続いた。

「左様、法然様も、安楽様も人が良すぎるといふものでさ」

安楽はそれを聞くと、二人に快活な声でこう答えた。

「何、我らの思いは一人でも多くの衆生に弥陀の本願を伝えること。この者もこうして我らに助けられたこと、やはりこの者を救えという弥陀の思いであらう。我らはこのような者を拒むことは決して出来ぬ。心配せずとも、吉水では、乞食同然の者運ばれることに、誰が命じるでもなく、また命じられるわけでもなく、誰かがその者の世話をしておるではないか。――吉水へ運べば何とかなろうという

もの。法然様もそれをお咎めになろうはずもない」

ゆきと呼ばれた女性も同意した。

「このかたの傷、今は血は止まっておりませんが、かなり深い様子、是非とも吉水にある薬が必要かと」

「ともかく、それでは急ぐとしましょう」

次郎と三郎は、そう言うが早いのか、元氣よく時実が乗せられている戸板を担ぎ上げた。

目指すは吉水、祇園舎の北東に隣接するところ……。あの叡山で、智慧第一と呼ばれた法然上人の庵があるところ。そう、今や、身分の上下貴賤かわりなく、多くの都人の信心、尊敬を集めている”念仏聖”の住まわれる場所である。

## 第一部第三十章

吉水　それは、今の京都、円山公園の東北端あたりの地をさす。平安時代、現在の円山公園およびその周辺は、真葛ヶ原の地名で呼ばれ、現在の円山公園を中心とし、北は知恩院三門前より南は双林寺に及ぶ、東山山麓一帯に広がる閑寂幽静の原野であつた。そこには真葛や薄、茅などが一面に生い茂っていたが、また萩の名所としても知られ、都人の歌にも読まれていた。

しかし、そこから少し南へ向かえば、時実が自らの死に場所として赴いた、平安京の庶民たちの一大葬送場であつた鳥部野が、清水寺周辺の東山山麓に広がっていたわけである。　いずれにせよ、今の京都の東山の風情とは程遠い、心寂しい殺伐とした地であつたのである。

比叡山を降りた法然が最終的に居を構えたのがこの地であつた。無論、彼の教団はこの頃、特定の宗派として独立したものではなかつた。したがって、吉水に彼が構えた庵は、彼と志を同じくする念仏者達が寝食を共にする場に過ぎず、『浄土宗の聖地で本山』というような性格のものでは毛頭なかつた。

しかし、彼の念仏信仰が都人の多くの心を捉えるようになると、この吉水の地には多くの人々が集まるようになった。

法然らとは別に、かねてより市中で説法していた諸々の念仏聖たちも、法然を慕つて、ここに集まるようになってきたのは自然の流れであつたろう。その数は日毎に膨れ上がり、二百人とも三百人とも、あるいはそれ以上とも言われた。

一人の念仏聖が仮に二、三百人の信者を持っていたとすれば、総数十万人に届く念仏者の数である。　南都北嶺の既存仏教教団がこの新興勢力に恐れを抱いたのも当然のことといえた。

ましてやそこに、当時比叡山で智慧第一と持て囃された学識高い僧が下山して庵を持ち、そこを訪れるもの皆に、気軽に平易な言葉

で、南無阿弥陀仏、と唱えれば誰でも極楽往生できると説きはじめたのである。噂はあつという間に都中に広まった。

そしてその教えが、源平騒乱で身も心も疲弊しきつた都の人々の心を捉えたのは当然の成り行きと言えた。この世の地獄を味わっていた人々誰もが、せめて死後の極楽往生を願うことは至極当たり前のことであつた。

「法然上人の説法を何としても聞きたいものだ」

その思いは、上は朝廷貴族から下は盗人、乞食に至るまで同じであつた。様々な人々が、中には怪しげな物売り、似非僧まで混じっていたが、多くの人々が、ひたすらこの高僧の話を聞こうと、阿弥陀仏の本願に頼ろうと、連日押し寄せていたのである。

中にはそのまま周辺に住み着いてしまうものもいた。彼らは法然およびその弟子、さらには法然を慕って周辺に居を構えた念仏聖たちの雑用をこなした。今で言うボランティアのようなものである。

その一角に病人や貧者のための救護施設とでもいうべき性格の庵が出来たのも必然の成り行きであつた。本来、これらの役目は朝廷がすべきものであつたが、源平争乱と、あい続く飢饉のただなか、市中、あるいは寺院にある官立の救護所はまったく機能していなかったのである。代わって、庶民達が自らの手で救済事業に乗り出したのである。

そのひとつのよりどころとなつたのが、当時相当な勢いで広まっていた阿弥陀信仰であり、それを庶民に教えて説いて回つた、念仏聖たちであつたということである。

ここ吉水の里の周辺にも、そういう念仏聖たちを中心にして、そんな救護所がいつともなく作られ、病で倒れた人、餓死寸前の人などが運びこまれた。そして前述の”ボランティア”の人々が救護に当たつたのである。

これら多くの吉水の里の救護所をまとめ、その運営の中心になっていたのが、今まさに、重い傷を負つた時実をそこへ運び込もうとしている、法然の弟子、安楽その人であつた。

「安楽様に見てもらえば助かるに違いない」

そんな噂が広まるのにも訳があった。彼には薬の知識が豊富にあったのである。そんな事情から、彼自身が意識したわけではないが、気がつけば、自然と、そんな救護所の一番のまとめ役になっていたのである。

さて……。

時実を戸板に乗せた安楽たちの一行は、祇園舎の東、長楽寺の前までたどり着いていた。ここまで来れば、吉水の救護所はもうそこである。

「もうあと少しだ。頑張れ」

次郎と三郎を励ますその安楽の目に、今まさにその長楽寺から出て来ようとする数名の武者と僧兵の集団が映った。長楽寺は比叡山延暦寺に属する天台宗の寺であった。だから件の僧兵は無論比叡山の者たちであることは言うまでもない。

これはまずい

内心、そう思った安楽だが、時すでに遅かった。

「待たれよ、その者」

安楽は、呼び止められでもしたらまずいことになるぞ、という自分の不安が的中したので、心穏やかでなかった。

天台宗派の者が、法然の影響力の元、広がる一方の阿弥陀信仰を快く思っていないのは明らかであったし、吉水の庵の周辺に雑多人々が群がる現状にも苦言を呈していたのを彼は良く知っていた。また、実際、時にはあるが、この長楽寺に出入りする叡山の僧兵達と念仏僧達の間で小競り合いが起きていることも知っていた。

ここは穏便にすませよう

安楽は妙な言いかけりをつけられたりしないようにと、随行する次郎、三郎らにも軽く目配せして、注意を促した。彼は穏やかな口調で答えた。

「はい、いかなる御用でしょうか？」

僧兵の一人が案の定、安楽のこの返答に絡んできた。



「ほう、これが今世間を騒がしておる念仏聖とは見かけばかりの破戒僧であるか」

「げに、見よ、この風体、乞食を従えての辻説法からの帰りであるか。ははは。その乞食が、行き倒れを運んでおるとは！ははは、こっけいな光景よ」

乞食呼ばわりされた、次郎、三郎が「こやつ！」と、今にも飛び掛らんとしようとするのを安楽は必死に手で抑えた。腕っ節の強い次郎、三郎らが本気を出せば、彼らと血を流す争いになりかねない。

ここは何とかこの場を収めなければ

内心、そう思うと、安楽はすぐに

「申し訳ございませぬ。我ら見てのとおり、病人を運んでいる途中、急いで救護所に運びたいと思う所存。失礼させていただいてもよろしいか。決して怪しいものではござらぬゆえ……」

と言つて、その場をやり過ごそうとした。

しかし、この安楽の返事に一人の僧兵が怒りを露にした。

「口の利き方に気をつけい！我ら叡山の僧衆であるぞ。貴様がごときわけの分からぬ破戒僧が身の程を知れ！」

この僧兵の一喝を契機に、両者の間に緊張が高まった。安楽はともかく、次郎三郎は放免である。元々は犯罪者だ。気も荒いし、喧嘩も強い、武術の心得もある。騒動が持ち上げれば、大変な事態となる。

ここは、ともかく、謝るしかない

と、安楽がやむを得ずその場に土下座して謝ろうとしたそのときである。

「何の争いであるか？」

という声と同時に、僧兵の背後から一人の武者が馬に乗って姿を現した。

「盛高様」

僧兵達は彼に一礼をすると後ずさりをして背後に控えた。彼らの

動作から判断して、この武者が彼らのリーダー核であることは間違いなかった。実際、威風堂々、鋭い目つきと周辺に漂う威圧感はこの武者の百戦錬磨ぶりを物語っていた。

この者、只者ではない

安楽はその彼の、あまりの目つきの鋭さに一瞬たじろいだ。

安楽自身もかつて後白河法皇のもとで北面の武士として奉公していた経験があつたが、そんな公家出身の名前ばかりの武士とは違うことは明らかであつた。

盛高と呼ばれた武者は、安楽らの前に進み出ると、外見の威圧感からは想像できないような、物静かな口調で語った。

「見ると病人を運んでいるようだ。それを呼び止めるとは……。これはすまぬことをした」

この突然の謝罪の言葉に、安楽らも当惑して黙っていた。そんな彼らに、盛高と呼ばれた武者は言葉を続けた。

「我ら、本日、隆寛律師殿、急用にて叡山より下山し長楽寺に入るにあたり道中警護せよとの命を座主より賜り、つい先ほどお供をしてここに到着したばかり。しかるに、到着するや、使いのものより叡山に急ぎ戻れ、とお達しがあつた。それで、これら僧衆の者ども、多少疲れで気が立っており。ご無礼があつたとすれば謝ろう。勘弁されい」

と、そこまで言うと、彼は安楽らに向かって頭を下げた。

「隆寛律師……」

最近、長楽寺に、叡山より定期的に勤めのため赴いている天台の律師がいることは聞いていた。

どうもそのお人の話らしい

安楽は、ここはこの場を何とか円く収めようと、

「お名前存じ上げております。隆寛律師のような立派な方がわれらの近くにおられるかと思うと、私ども身の引き締まる思いであります」

と、相手の機嫌を損ねぬようにと、丁重な物言いでその武者に答

えた。

すると盛高は

「ははは、私には仏の教えの難しいことは分からぬ。しかし、いずれにせよその者、早く運んでやれ。かなりの重傷のようじゃ。ともかく我が部下の者がそちらの邪魔をして申し訳なかった。早う、その者、運んでやるがよい」

と言うと、列の中に戻っていった。

「はい、ありがたきお言葉」

安楽は次郎、三郎を促すと、足早に盛高ら一行のもとを離れた。彼らの姿が見えなくなつたところまで来ると、安楽は立ち止まつて、次郎、三郎に注意した。

「ああ、よかった。あの武者がおらねば一騒動が持ち上がりところだつた。全く……次郎、三郎、その気短な性格何とかならぬか」

次郎はしょぼんとして答えた。

「わしら、安楽様にめぐり合えて、何とか信心を持つようにはなりましたが、まだまだ安楽様のように悟りの境地には至れませぬ」

この思わぬ次郎の反撃に、安楽は笑いながらこう返した。

「わしとて凡夫、所詮は阿弥陀様の本願におすがりせねば極楽往生叶わぬ身、何の悟りの境地があるうものか……」

そう言うつと、安楽は表情をきつと引き締めてさらにこう続けた。

「それにしても、あの武者、あの目つき、いや、あれに切りつけられたらもうこれまで、と一瞬観念したわ」

次郎が続いた。

「いや、あの武者が出てきたときは、わしもほんに肝を冷やしました。あの僧兵共だけなら三郎と二人、たちまち一ひねりでございましたが……。まあ比叡山も相当物騒なんでございましょうな。僧衆だけでは警護の手が足らんということですか」

安楽はその問いかけには答えず、一人盛高の鋭い目つきを思い出していた。

この時代だ。多くの人の目は怒り、悲しみ、憎しみの輝きを増す

ばかりだ。落ち着いた口調とは裏腹に、盛高の目つきも例外ではなかった。顔を会わせた瞬間の目つきは、底知れぬ憎悪、そして怒りに満ちていた。

あんな目は久しぶりに見た……。

妙に落ち着いた口調は、爆発寸前の、彼の精神の緊張を解すためのものなのか……。そう考えると、背筋が寒くなった。

「今の時代の象徴よな」

安楽はそう自分に言い聞かせると、皆を促して時実を救護所へと急ぎ運ばせた。

一方、長楽寺の前では、盛高は安楽らが立ち去るのを見届けると、そばの僧衆の一人にこう問いかけた。

「聞けば、南無阿弥陀仏と唱えれば、誰もが極楽往生可能という教えは、あの者たちのものか」

僧衆の一人が答えた。

「いかにも、さようでございます」

「そうか……」

盛高は答えると何故か馬から降りた。そして、

「仮にそれが本当だとしても……」

と言うと、突然太刀を抜き、振り向きざま、全身の力を込めて傍らの竹に切りつけた。

「あっ！」

と僧兵らが声を出す間もなく、竹は一刀両断、切り倒されて「ずさっ」という鈍い音と共に地面に落ちた。

周囲の僧兵達は、彼のあまりの気迫に押されて、身動きも出来ないうでいた。

暫し、辺りを静寂が支配した。次に

「かちっ」

という音が響いた。太刀は盛高の刀の鞘に戻された。

静寂の中、盛高は大きく息を弾ませ、また全身をぶるぶると震わせていたが、二三度深呼吸をして呼吸を整えると、突然、真葛が

原の茂みに向かって大声で叫び始めた。

「仮にそれが本当だとしても、あの男だけは例外だ！　あの時実だけは地獄へ落ちる。いや俺があいつを見つけて、地獄へ突き落としてやる。俺のこの手で地獄へ突き落としてやる。父、母、妹の敵、憎きあの男、必ず、必ず！」

盛高の目につつすらと涙が浮かんだ。

この復讐はいつはたせるのか

彼の心の苦悩は竹に切りつけたところで、当然晴れようはずも無かった。

時実、貴様はいつたい、どこに……、どこにおるのだ！隠れておらず出て来い！そして決着を付けよう。俺が貴様をこの太刀であの竹のように一刀両断のもと、切り捨ててやる！

僧兵達は盛高の気迫に押されてただ押し黙っていた。

無論、まさか、つい今しがた目の前を、実はその時実が運ばれて行ったのだということを、知る由も無い盛高であった……。

運命の皮肉……。

彼は、時実の行方をいまだ掴めないでいる自分が腹立たしく、また不甲斐なく、こみ上げて来る怒りの感情に、心は熱く燃え滾った。そこへ、突然、一陣の風が吹き抜けた。と、真葛が原の雑草がざわざわと風にうごめいた。火照った盛高の体にその風は心地よかった。苦悩に満ちた心をも冷やしてくれるようだった。

次第に強まる風の音は、しかし、一方で、あたかも盛高の心の苦悩を代弁するかのように、悲しげに、真葛が原の草原に響き渡るのでもあった。

## 第一部第三十一章

時実は戸板の上で断続的に意識を取り戻してはいたが、自分がどこへ運ばれようとしているのか皆目見当がつかなかった。

それでも、ようやく吉水の救護所に着いたときには相当意識もはつきりしてきたのだが、それにつれて腕の痛みもますます強くなってきた。これほど痛むのであればいつそのこと切り落としてくれ、と言いたいほどの痛みであった。

「ようやく着きましたわ。安心なさってください」

傍らの女性に声をかけられ、時実は痛みに耐えながらも初めて口を開いた。

「ここはどこだ」

見たような景色でもあったが、時実には見当がつかなかったのである。多分、自分を治療しようとしているのだろう。どうしてそのまま死なせてくれなかった、と恨み言も言いたい心境だったが、それよりも今はこの痛みを何とかしてほしい、その思いで頭はいっぱいだった。

「痛い……」

住蓮が呻くようにそう言うと、女性は

「もうしばらく辛抱なさいませ。今安楽様が薬を取りに行っておられます。」

と時実の手をさすりながら優しく返答した。

ようやく目の焦点も定まってきて、時実は傍らの女性の顔の輪郭、細部が分かるようになるかとひどく驚いた。夢の中で見た天女の顔に似ていたからである。着ているもののあまりの粗末さとは対照的に女性の美しさが目に焼きついた。

その女性は、時実の手をそつと離すと、介抱に必要なものの準備のためか、慌しく動きはじめた。時実はその後姿を見てみると、時子の姿が思い出され、また涙が溢れた。準備が一段落ついたのか、

女性は時実のそばへ戻った。

「よかった、気を失っておられましたから……。一時は、一体どうなることかと案じておりました。気分はいかがですか」

気分、と言われて時実は一瞬戸惑った。――自分は死のうとしていたのだ。そして死に損なって、今は無様な格好を晒している。加えてこの腕の激痛……。

時実は唸るような声で返答した。

「気分などいいはずがあるか――この痛み、耐えられぬ。ひと思いに殺してくれ！」

女性はこの言葉を聴くとひどく悲しそうな表情になった。今までにも多くの者の救護をした経験から、時実の痛みがどれほどに強いかよく分かったからである。

「もう少し辛抱なされませ。もう安楽様が薬を持って戻られます。ここにはよい薬がありますゆえ」

時実はそれを聞きながらも、苦悶に満ちた表情で、

「ああ、どうして俺を救ったりしたのだ。放って置いてくれれば良かったものを。俺は死にたかったのだ」

と呻くような声で女性に語りかけた。

するとそれまで傍らに立って、沈黙を守っていた男が時実を叱り付けるような口調で厳しくこう言った。

「先ほどから聞いておれば、死なせてくれ、死なせてくれ、と、女々しい情けないことよ。なぜ命を大事にせぬか！このゆきさんがどれだけあなたのために一生懸命介抱してくれたか、――気を失って倒れているそなたに寄り添い、体が冷えぬようにと、そちの体を温めてくれたのだ。なんと有り難き事。その恩がわからぬか！」

一喝された時実は、ただ黙っているしかなかった。

そこまでしてくれたのか

時実はゆきと呼ばれる女性に改めて視線を送った。

時実の視線に気付いたゆきは、

「次郎さん、今はそのことはよろしいでしょう」

と言うと、顔を赤らめながら下を向いた。次郎のあからさまな物言いに恥ずかしくなったのである。

気まずい雰囲気が場を支配した……。と、その時であった。小屋の外から、

「仏は常にいませども、現ならぬぞあわれなる」

と、男の歌声が聞こえてきた。今様の節にあわせて、なんとも輕妙に歌い上げるその歌声は美しく、切なく、聞くものを魅了せずにはいられない、不思議な魅力を持っていた。

「安楽様だ」

次郎は立つて、小屋の入り口を開けた。

時実も入り口に目をやった。そこに一人の僧侶が姿を現した。僧衣は粗末なものであったが乱れもなく汚れもなかった。背丈は時実と同じくらいであろうか、年の差も自分とそれほどなさそうであった。きりつとした顔立ち生まれの高貴さをどこか物語っていた。美男子と言ってよかつたろう。それでいて、とうとうと今様を吟じながら薬を運んで来るその姿はたいへん親近感があり、また、どこかとぼけた調子で、親しみやすさを演出していた。

小屋に入ると、彼は今様を吟じるのを止めた。そして言った。

「次郎……。おぬし、三郎が何処へ行つたか知らぬか」

安楽の問いに、

「はい、むしろ放免のお勤めの報告がありますので、あいつに行かせた次第です」

と次郎は答えた。

## 放免

時実は放免と聞いて、なんとも不可解な感じを抱くと同時にまた不安な気持ちにもなった。

そもそも放免とは元犯罪者である。それが恩赦等で運良く”放免”されたものたちである。ただし、放免後も彼らは検非違使の管轄下に置かれることが普通であり、都の警護、犯罪者の取り締まり、牢の番人などに当たられた。極悪の犯罪者の場合には、放免後、



六条河原の処刑場で犯罪人の首切り役を命じられることもあった。自分をここへ運んだ者の二人はそんな放免だというのである。確かに元犯罪者にふさわしい筋骨隆々とした体つきであった。

そんな彼らに似ても似つかわしくない、不釣り合いなこの美しい女性……。さらに、今ここへ登場した、今様を吟じる僧衣を纏った男……。

――いつたいこの者たちは何者なのか

時実は混乱した。

安楽はそんな彼の混乱ぶりを察してか、

「今はあまり考えすぎぬこと、ともかく体を良くする事が先決。それ、痛みを和らげるによき薬を差し上げよう。ゆきさん、後は頼む」「はい」

てきばきと指示を出す安楽の態度に、時実もいくぶん安堵の気持ちが大きくなった。ともかく今は彼らに任せるよりほかはない。

ゆきが早速、安楽の持ってきた薬を時実に飲ませると、続いて安楽は時実の傷の様子を次郎に尋ねた。

「次郎、今までに経験した数多くの戦で、折れた腕もたくさん見ておろう。どうだこの者の傷は、良くなりそうか」

次郎はしばらく考えていたが、

「この程度なら命に別状はないでしょう。腕も時間がかかっても元へ戻りませう。無論、このわしの名人芸があつてのことですがね」

と、答えた。

「名人芸か、ほんに次郎の腕は確かじゃ」

そう言つと安楽は、はははと笑った。和んだ場の雰囲気のおかげ、時実は若干痛みが和らいできた気がした。

「足りないものはあるか？」

「大丈夫でさ、――腕に巻く布、添える木、すべて準備は万端、では今から次郎様、腕の見せ所つてとこで、――さあさあ、見てらっしゃい！よつてらっしゃい！」

「まあ、次郎さんたら」

ゆきと呼ばれた女性もつられて笑い出した。

少し和やかな雰囲気になったところで、安楽は再び今様を吟じ始めた。するとゆきと次郎がそれにあわせて掛け声を出した。安楽はついには軽妙に踊りだした。

堂々とした物言いに似合わぬ、こうした動作の軽妙さに、時実はますます

この僧の正体は？ 一体何者か？

と、疑問を深めた。

しかし、徐々に思考がまとまらなくなってきた。飲んだ薬のせい……。痛みも和らいだが、少し頭もぼうつとしてきた。相当強い薬のようだ。意識が再び遠のいてきた。

「安楽様、薬が効きすぎではございませぬか」

ゆきの問いに、安楽は

「いや案ずるに及ばぬ。痛みが強かろうと思って、少し調合を変えただけ。眠っていたほうが本人も楽であろう」

時実は再び遠のく意識の中で考えていた。

- - 彼らはどうしてこんなにも楽天的でいられるのだろう

男は放免、女もその粗末な身なりから察するに、自分と同じ河原者に違いない。

自分は時子を失い、河原者としてすぐす間に人生に絶望し、酒に溺れ、自殺を図ったというのに……。

彼らも同じ河原者であるのに、なぜ彼らは人生に絶望しないのだ？ なぜこんなにも楽天的なのだ？ 時実は困惑した。

河原者として生活する中で、時実はその多くの者が、程度の差はあれ、自分と似た境遇を経験して来ていることを知った。愛するものを失い、人生に絶望し、死に怯えるもの、あるいは自ら死を選ぶもの、共に酒を飲みながら慰めあったりもした。

しかし、そんな生活を楽しいなどとは思ったことなどない！

それなのに彼らは、今様を吟じながら少なくとも今を楽しんでいる！

再び遠のく意識の中で、時実は時子の姿を見た。自分を手招いているように見えた。すると一人の天女がそれを遮った。

「こちらへいらっしやいませ」

その顔を良く見ると、今介抱してくれたゆきの顔であつた。にこりと彼女は彼に微笑みかけると、彼の手を取って空を駆け巡った。

## 第一部第三十二章

安楽の持ち込む薬と、ゆきの手厚い看病も手伝って、時実の怪我は順調に回復していった。しかし、そんな見た目の肉体的回復はともかく、病んだ心の回復はとうていかなわなかった。彼は、固く心を閉ざしたままだった。

肉体の回復に伴って彼の深い悲しみも癒やされることなど、直ぐにありようは再也不用なかった。

しかし……。

ゆきの献身的な看病はそんな頑なな時実の心を少しずつほぐしていった。

「ゆきさん」

ある時、時実は思い切って尋ねてみた。

ゆきが時折見せる、何とももの悲しげな表情を時実は見逃していなかった。ゆきの素朴、かつ無邪気でいて、しかも誠実な態度の裏に、実は自分と同様、悲しい過去が秘められているということを感じて取っていたのである。

「こんなことを聞いてはいけないのかもしれないが……。ゆきさんにも、何か辛い思い出があるのか」

突然の質問に驚いた表情を見せたゆきだが、彼女も、このことはいずれ質問されるだろうとは予測していた。

「いつかは、聞かれると思っていました」

語り始めたゆきの話は悲惨なものであった。

彼女の語るところによれば……。

彼女はもともと白拍子であった。後白河法皇のもとで舞ったこともあるという。一時は華やかな時が続いた。

評判が広がり、平家の屋敷に呼ばれるようになった。彼女はたいへん重宝がられ、彼女は歌も舞いも得意としていたこともあって、どこの屋敷からも引つ張りだこであった。

ある時、平家の一武者に見初められ、側室に迎えられた。

「あの頃は幸せでございました」

順風満帆の日々……。

しかしそれは長くは続かなかった。

「その方が源氏との戦で命を落とされてしまわれたのです」

恋する人を失った悲しい毎日……。正室からは家を出るように命じられた。

さらに追い打ちをかけるように、

「平家方の勢力が衰えるにつれ、私の身にも……」  
想像は容易についた。

当時は、平氏に組したものは容赦なく、責任を追及された。元の白拍子に身を転じることも叶わず、平氏の没落後は遊女に身を落とすしかなかった。

鴨の河原で身を売る毎日……。

「それを救って下さったのが安楽様でございます」

「あいつが……」

時実の目には、一方で、暇さえあれば今様を吟じて、時には踊り説法もなかなかのものであったかもしれない。さらには、体格からは想像できぬ芯の強さもある。

それでも……。

時実の目には、一方で、暇さえあれば今様を吟じて、時には踊りだしさえする彼が、何かしらお調子者のようにも見えたからである。ゆきは話を続けた。

「時実様と同じでございました。私はすべてに絶望してあとは飢え死にを待つのみ、と覚悟を決めておったのです」

「そうか……」

想像していた通りの悲しい物語の展開に時実も心を痛めながら聞いた。

「そんな私の小屋を、安楽様は毎日粥を持って見舞いにきてくれたのです。無論私だけではありませぬ。当時、法然様のもとに集まら

れていた多くの念仏聖の皆様が、説法所を鴨の河原に構え、説法をすると同時に、私のような境遇のものに食べ物を通していただけです。しかし、私は絶望の余り、そんな聖様方の施しを拒否していたのです」

「俺もそうだった……」

時実は河原のここかしこで響き渡る念仏の唱和を思い出した。しかし、彼にはそれは耳障りな雑音以外の何者でもなかったのだが……。

「すると、噂を聞いた安楽様がわざわざ私のもとまで粥を運んでくださったのです」

「あいつが」

「左様でございます。訪ねてこられた安楽様は、私を知っていると云うのです。びっくりしました。しかしすぐに何故かが分かりました。というのも、私は一度、後白河法皇様の元へ招待されたことがございます。そのおり、私を迎えに來られた北面武者の一人だったのだそうです。私のことはよく覚えていると……。見事な舞を披露してくれたから、と」

「あいつは武者であったのか」

時実は、安楽に感じる芯の強さは、なるほど彼のそういう経歴から来るものか、とようやく合点がいった。ゆきは話を続けた。

「元気になったら、私の唱に合わせて見事な舞を舞ってくれと、安楽様は毎日励ましてくださったのです。最初はかたくなに拒否していた私でしたが……」

と、そこまで言うと、ゆきの表情に明るさが戻った。そしてこう力強く言うのであった。

「安楽様、またお供の次郎、三郎さんらの献身的な姿を見て、また生きてみよう、やり直してみよう、と言う気持ちになったのです！」

ゆきはこれらのことをすべて話し終わると、黙ってしまった。目には涙が浮かんでいた。

時実もただ、

「そうか……」

と言っしかなかった。

このようにして、自分の心のうちを隠さず、正直に打ち明けてくれた彼女に対し、時実も少しずつ、自分の生い立ち、そして、近江での出来事などを打ち明け始めた。

思い出すことすら苦痛であつたこれらの出来事……。

人に話したところで何になるう

と、この京の鴨の河原に来て後も、誰にも語ることは無かつた。しかし、ゆきは一生懸命に耳をそばだててくれた。時には一緒に涙も流した。時実はゆきへの信頼感を日毎に増していった。

そんなゆきは、朝夕の念仏を決して欠かさなかつた。彼女は、当初ほとんど時実のそばで付きっ切りで世話をしていたので、彼女が朝に夕に念仏を唱える姿を、時実はそばですつと眺めることとなつた。

そして、彼女の念仏を聞いていると、なぜか心が安らぐ自分に、時実は最初抵抗を覚えた。

そしてこう自分に言い聞かせるのであつた。

「こんなもの、いくら熱心に唱えたところで、何の益があるうか！ 益などあるうはずもない」

それは、仏の力にいくら縋つたところで、時子の病を結局は癒せなかつたではないか、という無力感からだつた。

酒に溺れ出してからは尚更であつた。

しかし、ゆきが一心不断に唱える念仏は、今までに聞いたことの無い美しい旋律で、まるで唄を吟じるようでもあり、時実の頑なな心をなぜか解きほぐすのであつた。

少しずつ体力が回復して、歩けるようになると、時実は救護所の周辺を散歩してみた。おそらくは自分と同じような野垂れ死に寸前の者が多く運ばれていた。そして、それらの人を救うべく、その周りをぼろぼろの服を着た人々が忙しく立ち回っていた。

貧しいながらも、皆が協力し合つて、お互いに足りないものを補

い合い、助け合って、そして生きている不思議な共同体といえた。

住蓮は長命寺の坂下者の集落を思い起こした。

ただ、長命寺と違った点は、一日中念仏が絶えないことだった。

そこかしこ、いたるところで、終日、念仏唱和が行われていた。最初のうちは耳障りで不快なものとしてしか耳に入ってこなかったそんな念仏であつたが、最近になると、唱える者たちの独特な節回しの違いや、音程の違いが聞き分けられてきて、もともと、笛をよくした時実には興味深く、ある種の唄として聞こえてくることもあつた。

それは時にすばらしく美しい旋律として聞こえることもあつた。

聞いているだけで涙することもあつた。

しかし、そんな時には、

「いかん、いかん、俺はもうこんなものとは縁を切つたのだ」

と、彼は心の中で叫ぶのだが、その抵抗も虚しく、美しい旋律に聞きほれている自分を発見するのであつた。



### 第一部第三十三章

そんなある日のことである。救護所にいる安楽のもとを次郎が訪ねた。安楽に折り入って話があると言う。

「どうした、次郎、あらたまつて。何でも話してみい」

安楽に促され次郎は語りだした。

「安楽様、我らが鳥部野より助け出したあの者についてですが、いやな話を耳にしました」

「ほー、それは何か？」

次郎は少し躊躇した。隣の小屋では当人である時実が休んでいる。聞こえてはまずいと言わんばかりに、ぐつと声を落とすと、安楽の耳元に近寄り、

「さて、あの者ですが、人を殺したために身を隠しているのだとの噂が、河原者たちの間で囁かれておるのです」

「何と！」

安楽は絶句したが、しかし「人を殺めた」と聞いても、いつもの飄々とした表情は変わることは無かった。

「それで、そちはどうしようと考えておる？」

安楽に逆にそう尋ねられた次郎は、困った表情で、

「いや、安楽様、それで、どうしたらいいものか安楽様に尋ねに来たのでございますよ」

と、返答するしかなかった。すると、

「ははは！」

と、突然、安楽は笑い出した。次郎は惘然とした表情で、

「安楽様、笑い事ではありませぬ！」

と安楽に抗議したが、安楽の笑いは止まらなかった。

ひとしきり笑い終わると、安楽は真面目な顔つきで次郎に語った。  
「いや、許せ。しかし、次郎、考えてもみよ」

飄々とした言い回しから、今度は一転して真剣な口調に、次郎も

「はい……」

と神妙に言うつと、黙って安樂の話に耳を傾けた。

「河原者たちのなかに、そもそも何か暗い過去を持たぬものが一体全体一人でもあるか？」

痛いところを突かれた次郎は

「そう言われてしまいますと……」

と、言うつと黙ってしまった。

そんな次郎を尻目に、安樂は続けた。

「よいか、次郎、たとえ、過去に人を殺めた、大罪を犯した者であったとしても、救いの手を差し伸べてくださるのが阿弥陀様なのだ。そうではなかったか、いつもわしがそちらに教えているであらう……」

……

「確かに……」

次郎は反論できず黙ってるしかなかった。

「經典にこうあるとな……。『仏、弥勒に告げたもう、この世界において六十七億の不退の菩薩ありて、かの国に往生せん。十一の菩薩、すでにかつて、無数の諸仏を供養せること、弥勒に次ぐ者なり。もろもろの小行の菩薩、および少功德を修習する者、称計すべからず。みな、まさに往生すべし』とな……」

「はあ、聞いたことがありますような……」

次郎が当惑しているのを、安樂は言葉を休めた。

「いかん、いかん、分かりやすい言葉で語らねばならないと！」

と、自らに言い聞かせると、さらに話を続けた。

「その意味についても何度も教えたはずじゃ。忘れてしまったか？ その意味するところは、阿弥陀様の無量のありがたい功德におすがりすれば、たとえ悪人と呼ばれる者でも、わずかの善根を植えさえすれば極楽国に往生させていただけるというものじゃ」

と、ここまで言うつと、安樂は次郎を見ながらにこつと微笑んだ。

「この者の過去の詮索は重要でない。大切なのは彼がどう生きていくか、どう我らが支えられるかじゃ」

そう言われた次郎が、

「確かにわれらそのように安楽様から教えられておりますが……」  
と、しぶしぶながらも、安楽に返答するのと殆ど同時であった。  
ががっ

という音と共に、二人のいる小屋の入り口の戸板が突然開かれた。  
二人が驚いて後ろを見ると、そこに件の時実が立ちすくんでいる。  
……。

まずい！話を聞かれましたか？

気まずい空気が場を支配した。沈黙の時間がしばらく続いた。  
と、その沈黙を破って、やおら時実は大い声で笑い出した。

「あはははは……」

安楽も次郎も、なすべがなくなつただ黙つて事の成り行きを見守る  
しかなかった。

ひとしきり笑い終わると、時実が興奮気味に話し出した。

「今の話、聞かせていただいた！」

安楽は平静を装つて

「そうか……」

と返すと、続けて

「心配はいらぬ。われらが仕事は救護をすることのみ。おぬしの過  
去のことをいちいち詮索はせぬ」

と、時実を安心させるようにゆつくりと言ひ聞かせた。

しかし時実の興奮は収まらず、声をさらに荒げると安楽に食つて  
掛かった。

「氣に入らぬ、おぬしの言い分！」

安楽は何のことか分からず、黙っているしかなかった。そんな  
安楽の反応には無頓着に、時実はますます大きい声で叫びだした。  
「氣に入らぬわ！阿弥陀様がすべての人を救ってくれるとかなんと  
か……。それなら何ゆえわしは救われなかったのじゃ。毎日願掛け  
を怠らず、祈りを欠かさず、仏に祈ったわしを仏は見放したではな  
いか！すべてのものを失つたではないか！このわしの今の有様、こ

れが仏の仕打ちじゃ、仏の前にすべてを投げ打った結末じゃ！」

と、そこまで一気に言い尽くすと、時実は「わっ」という声をあげて、大粒の涙を流して泣き始めた。

この時実の有様に、さしもの安楽らも、どうしたものか対処の仕方がわからずおろおろするばかりであった。

と、そこへゆきが現れた。

「まあ、びっくりしました。床に居られないので」

ゆきは泣いている時実を見つけると、

「さあ、まだ無理が出来る体ではありません。床へ行って休みましよう」

と時実を促した。促されると、時実は素直にそれに従いゆきと共に隣の小屋へ赴いた。

二人が去ると、部屋に残された安楽と次郎は互いの顔を見つめると、ほっと安堵のため息をどちらからということなく漏らした。

「いやはや驚きました。安楽様……」

次郎はこう呟くと、

「それにしても、毎日仏に願掛けをしていた、とはどういうことでしょうか？」

と安楽に問いかけた。しかし、安楽も

「さあ、わしにも何のことやら、さっぱり合点がいかぬ……」

と、思案顔で答えるしかなかった。

すると、突然声がした。

「それには私がお答えしましょう」

背後からの声に、安楽、次郎の二人は、振り返ると、そこにはゆきが佇んでいた。今、時実を隣の小屋へ連れて行ったあと、すぐにこちらへ戻ってきたのである。

「ゆきさん」

と言うと、安楽はさらに続けて

「ゆきさんは、あの者から、何か事の仔細を聞いておるのか？」

と、ゆきに尋ねた。

「はい」

そう答えたゆきの目にも涙が溢れてきた。

「それはそれはとても悲しい出来事でございます……」

ゆきはそう言って説明を始めた。

「あの方の苦悩はまこと、阿弥陀様のお力を持つてしても取り除くことはかなわぬのではないか、ふと、そう考えてしまうほど、それはそれは辛い過去でございます……」

安楽も時実の過去のことはこれまで詳しくは聞いていなかったのだ、

「左様か。それはぜひ聞かせてほしいものじゃ」

と、ゆきを促した。安楽はゆきに座るように勧めた。ゆきは安楽、次郎と合い向かいに座ると、重い口を開き始めた。

「最初は、固く心を閉ざして何も話しては下さりませんでした……」  
ゆきは時実をここへ運び入れ、看病を始めた頃のことを思い出しながら語り始めた。

「しかし、少しずつ私への信頼感が出てきたのか、次第にいろんなことを話してくれるようになりました」

こうして、ゆきは彼から聞いたことをすべて安楽、次郎に語った。

- 奈良での幼少時代、興福寺での修行、還俗後、近江の国、馬淵の里での充実した一時、そして、一転、暗く重苦しい日々の始まり、恋人である時子の発病、自殺、絶望、そして……。

時子の兄、盛高の復讐の始まり。逃亡、潜伏、さらなる絶望、そして……。

「最後に、あの方は、自ら命を絶とうと、鳥部野へ赴いたのでございます」

これら全てを語り終えると、ゆきは堰きとめていた感情の爆発に、再び涙を流すと、ただただ泣くばかりであった。

あまりの悲劇的な話に、安楽、次郎もただただ深い悲しみに包まれるばかりであった。

安楽は、しかし、暫しの沈黙の後、すくつと立ち上がると、泣き

続けるゆきの肩にそつと手を置き、慰めるように、優しい口調でこつ告げた。

「ゆきさん、大丈夫、大丈夫じゃ。阿弥陀様の救いの手が届かぬところはない。阿弥陀様の力は無限無量……。わしはあの者にも必ず阿弥陀様の救いの手が差し伸べられると信じておる。だから、今も少し、あの者の世話を頼む」

「はい……」

安樂の力強い声に勇気付けられて、ゆきも漸く泣くのをやめた。

安樂は、ゆきが落ち着きを取り戻したのを見て、安心すると、

「大丈夫じゃ、必ず阿弥陀様が救ってください」

と再度、彼女を励した。そして、

「あの者、必ず救われるように、我等一身に阿弥陀様をお願いすることじゃ……。念仏三昧、念仏三昧……。次郎、ゆきさんのこと、あとは頼む」

と言うと、安樂は立ち上がり、次郎に背を向けた。

突然の安樂のこの言葉に、

「急にどこへ行かれるの？」

と、怪訝そうに次郎は尋ねた。それに対し、安樂は、

「うむ、わしは法然様の下を訪れ、あの者のこと、一度相談してみようかと思う。何かよい知恵を授けてくださるかもしれん」

と、答えると、戸口へ進んだ。

「わかりました……。が、法然様のもとへは、どうして、こうもややこしい人間ばかりが集まるのでしょうか。あの怪しげな陰陽師の阿波之介といい、はたまた大泥棒の河内の耳四郎といい……。また、それを嫌がるどころか、にこにこ笑みを絶やさず、一人一人相手にされる法然様もまこと、人が良すぎる、というか……」

と、愚痴をこぼす次郎に、安樂は、再び次郎に顔を向けると、  
「それが、法然様のお人柄じゃ。次郎のおりもそうであつたらう！」  
と、微笑みながら彼を諭した。

「まったくその通りでございますが……」

次郎はばつが悪そうに、頭を搔きながら返答した。

「では、ゆきさん、あの者、かなり興奮しておったことでもあるし……。暫く目を離さぬようにな！」

安樂はそう言つと、次郎とゆきを後にして、小屋を出た。

小屋を出ると、多くの呻き声が周辺から聞こえてきた。いつ

ものことである。

安樂の目の前を、また一人、病人の者が今まさに運び込まれんとしていた。これもまた、いつものことである。

それを助けるものは、しかし皆明るく振舞っている。これもまたいつものことである……。

しかし！

安樂は心の昂ぶりを覚えると、そこに立ちすくんでしまった。

一体いつまで、この『いつものこと』が続くのか、いつになつたら終わるのか！

この民の苦痛に満ちた叫び、これは一体いつになつたら無くなるのか！

われらの念仏唱和、まだまだ足りぬということか！

彼は、いつもの見慣れた光景に、今日は別の感慨を覚えた。心の昂ぶりはしばらく続いた。気持ちを落ち着かせようと、安樂は目を瞑つたが、その昂ぶりはなかなか止まなかった。

今は……。とりあえずは、あの者の心の苦悩を何とかせねば安樂は、そう自分に言い聞かすと、ようやく気持ちを落ち着かせた。そして、さらに一度大きく息をすると、法然上人のいる庵へと向かうべく、その歩を早めた。

## 第一部第三十四章

「確かに、法然様の悪人好きにもほどがあるが……」

信空の言葉に、住蓮の回想は中断された。

信空は苦笑いをしていた。法然の悪人びいきは都でも有名だった。無論、法然が悪人を意味無く贖罪していたわけではない。

何人たりとも分け隔てなく接するのは法然の信念であつた。であればこそ、稀代の大泥棒と言われた、河内の耳四郎にしても、様々な方便で人々を誑かして、お金を騙し取った陰陽師の阿波之助にしても、彼らが自分の罪を悔いて救いを求めてきた時に、法然は暖かく彼らを迎え入れたのである。

「法然様にとつて、救いを弥陀に求めるのに貴賤の区別は全く無いということなのだが……」

確かに法然を尊敬して止まない信空であつたが、しかし、法然が、世で悪党と評判される者たちと、時には、それこそ膝を交えて、気軽に談笑する時間を作るのを、時には苦々しく思わないわけではなかった。

なぜなら……。

信空にしてみると、南都北嶺の既存仏教勢力をはじめ、周囲の厳しい目が光る中で、法然に自重してもらいたい面もあつたのである。

「許せ、決してそちが悪人だ、という意味で言つたのではない」

悪人、という言葉が発したのを、うかつだった、と感じた信空はすぐに言葉を訂正した。

「いえ、お気になさらないでください」

住蓮は答えた。

「私は確かに悪人でしたから……。でも法然様は、そのようなものを本当に気にかけてくださりました。気にかけてくださつたからこそ、私を何とか立ち直らせようと……」

信空がそこで住蓮の言葉を遮つて、代わりに言葉を続けた。



「何とか立ち直らせようと……、法然様は荒療法を安樂に命じたわけであるな。わしも詳細を後には知ったが、まあ、良くぞ考え付いたものじゃ。本当の往生の姿とは何か？そちは自分の目でそれを確かめたわけじゃ。そして、いまのそちがある。生まれ変わったそちがの。その荒療法が功を奏したわけじゃ……」

そう言つと、信空は優しい眼差しを住蓮に向けた。

信空の、この言葉に住蓮は思わず頭を掻きながら、こう返事した。  
「左様でございます。あそこで、私は生まれ変わりました……。恐らく、あの日のことは一生忘れないでしょう……」

そう言つと、彼は回想を再開した。

「私が安樂らに一命を助けられ、吉水の救護所へ運ばれた、それからほぼ二月後のことであつたと思います。六月でしたか、蒸し暑い日でした……」

それは千百八十三年六月、曇り空の蒸し暑い日……。

昨日までの雨は止んでいたが、京より奈良へ向かう奈良路は、当時の主たる街道であつたとはいえ、やはりその道はぬかるみが多く、木津川へと急ぐ三人連れの足を時に妨げた。

その三人とは……。

安樂と時実、そしてゆきである。

先を進むのは安樂。足取りは軽い。一方時実は病後の回復が順調であつたとはいえ、長期間床に伏していた影響で脚力は完全には回復はしていなかった。またゆきもやはり女子ゆえ、そもそも健脚とは言えぬ。安樂はそんな時実とゆきを気遣いながら、時折休みを取りながら先頭を歩いていた。

「一度、この辺りで休むとするか」

安樂の提案に

「そういたしましたよう」

と、ゆきも同調した。

六月であつた。都の街中は蒸し暑かったが、都の外へ出て南へと

下るにつれ、風が心地よく蒸し暑さも多少和らいだ。

その年の三月には壇ノ浦で平家は滅亡した。しかし都の人々の生活はなんら変わることはなかった。貧しい人々には相変わらず、飢え、病に苦しむ日々が続いた。

特に河原者たちの窮乏振りは悲惨極まりないものであった。安樂はそんな河原で辻説法を行いながら、彼らを温かく見守り、励ましの言葉を送り続けて来た。

彼の父は縦五位下少外記、中原師秀という。朝廷の書記官であった。そういう父の下で生活を共にする中、彼は漢文は勿論、文章の読み書きに長けた能力を持つようになっていた。

法然のもとへ弟子入りしたのも、元々はその能力を買われて、法然の種々の口述したものの書記役などを担わされるためであった。

その安樂にはもう一つの才能があった。

音楽である。幼少時より音楽の才能はずば抜けていて、それが法皇の目になつての院所でのお勤めとなつたのもあった。

後白河に召された彼は、院所で北面の武士として院の警護を勤めていた。当時の種々の大衆歌謡は勿論、中でも何よりも今様を愛した法皇であつたから、召抱えられて以後、安樂の持っていた音楽の素養が一気に開花したというわけである。

さらには、この後白河の院所で働くうち、彼の持つもう一つの間性が培われた。

それは……。

言わば大衆性と言うべきだろうか。あるいは庶民性……。

後白河法皇は、白拍子、遊女のような身分のもので、芸に秀でている者は、貴賤の隔てなく、院所に招きいれ交流を持った。

そんな法皇のそばで長く警護の仕事をしているうちに、いわゆる卑しい身分の人々とも水平な関係で接することに、何の戸惑いも持たなくなつたのである。

それどころか、安樂は、そんな社会の底辺の人々に、ある種の愛着すら感じるようになっていた。

法然上人のもとへ弟子入りした後も、彼の頭から彼らのことが一時も離れたことは無かった。

当時、都の東京極のはずれから鴨の河原にかけて、大寺院を離れ、あるいは山を降りた多くの僧が念仏信仰を唱え、生きること絶望した人々へ辻説法を行っていた。

彼は進んで、そんな念仏僧らに交じって、そこで辻説法をする役目を引き受けたのであった。法然上人の教えを、その日を生きること絶望した人々にも伝えたい……。伝えて、そして、救いはまだあるのだということ、弥陀の本願は、そんなあなたたちこそが救われねばならないのだ、という事を、教えてあげたい。彼はそんな思いで、いつも鴨の河原へと赴いていったのである。

「安楽様の歌いながらの説法は本当に型破りでございましたわね」鼻歌を歌いながら、今にも踊りだしそうな安楽の姿を見て、ゆきは当時を思い出すように呟いた。

「ゆきさんとあそこで再会しようとはな……」

安楽も当時を回想した。

ゆき、次郎、三郎らとはそんな鴨の河原生活の中で知り合った仲であった。次郎、三郎は犯罪人であったが、その後放免となった。ゆきはもと白拍子である。彼らは安楽の辻説法を聞くうち、阿弥陀信仰を受け入れ、今や熱心な阿弥陀信者である。

ゆきが時実の足を心配そうに眺めるのを見て、安楽が代わって、

「時実殿、足は大丈夫か」

と、時実に問いかけた。

その時実は、無然とした表情を崩すことなく軽くうなずくだけであつた。

「そうか、まあ、大丈夫ならよいが……」

安楽は、そう言つと、用意してきた竹筒から水を飲んだ。

と、その時だった。

時実は安楽に厳しい視線を向けると、

「何度も申し上げたこと、重ねて申し上げておくが……」

と前置きをした上で、

「私が、このたびのそちの誘いに応じたのは、そちの説教に耳を傾けたからではない。私のために献身的に看病してくれたゆき殿の面子を立てたまでのこと。このこと忘れて欲しくない。わしはもう仏の教えに何の関心も持つておらぬ！」

と強い口調で安楽に言い放った。

安楽は突然の時実の言葉に若干惑いを見せたが、

「時実殿、それは重々分かつておる」

と、あえて、涼しげに返答すると、さらに

「このわしの願い聞いてくれたのだから、都へ帰った後は、そちの自由になさるがよい」

と、付け加えた。

「自由か……」

そう言うとき時は天を見上げた。彼は、涼しげな安楽の態度に苛立ちを感じ始めていた。そこで、声を荒げてこう言い放った。

「自由……。しかし、せつかく死のうと思っても、そちらに止められた。この私に自由などあるのか！」

こう言つて、彼は暫く押し黙っていたが、続いて、

「されば、今度都へ帰ったら、私は盛高の手にかかつて死ぬことにしよう。あいつはこの私を仇として都中を探しているとのこと、風の便りに聞いた。そうだいっそのこと彼の手にかかつて死んでしまえばそれも本望というものだ！」

と、今度は、低い絶望に満ちた声で、吐き捨てるように言うのであった。

ゆきはこれを聞くと悲しげに

「時実様、そのような悲しいことおっしゃるものではありません。二度とそのような悲しげな話、このゆきには、もうせぬ、と約束してくださいませんか」

と諫めたが、当の時実は深くため息をつくとき黙りこくってしまった。安楽はゆきに

「今はそつとしておいてやろう……」

と囁くと、

「さあ、出発するでしょう。木津川まで今少しじゃ」

と体を起こした。時実が続き、ゆきがそのあとを追った。

彼らの目指すのは木津川河川敷……。

そこでは本日夕、平重衡公の処刑が執り行われる……。

そう、あの平重衡である。源氏の囚われの身となって東国へ一旦送られたが、仏敵として、木津川河川敷にて、源氏の手から興福寺僧兵のもとへ本日引き渡されたうえ、その場で即刻処刑が行われるという段取りであった。

「急がねば！」

彼らは、まさに、その平重衡公処刑の有様を見届けに行こうとしていたのである。

左様、法然の考えた時実への荒療法とは、まさにこのことであつたのだ。

## 第一部第三十五章

「時実殿、このたびの平重衡公の処刑の儀であるが、この安楽、法然様より、その立会いを命じられた。ついては、我らに同行してはくれんか……」

いきなり、そういわれた時、時実は安楽の真意を測りかねて、戸惑った。

自分に、そんな処刑の現場を見せて、一体どうしようというつもりか？

「処刑は木津川で執り行われるとの由、一日、付き合つてさえくれればよい。それさえしてくれば、あとはご自身の思うままになされよ……。そちがどこへ行こうが、何をしようが誰も止めはせんから」

時実は、最初この提案を断った。

平重衡――時実も名前と評判だけは聞いていた。

平清盛の五男である。文武両道に秀で、一の谷合戦までは戦において負け知らず。武者としての評価もあることながら、その人望ぶりは、都人からも、奢る平家の中にあつて彼に対してだけは悪口を言う者は少なかった。

心ある都人の間では、彼の指図によるとされている南都の焼き討ちですら、実は、南都の荒くれ法師たちが自らの負け戦を知つて、自暴自棄になつて自ら火を放つたのが事の真相だ、という噂が専らであつた。

そんな彼は、一の谷の合戦で源氏側に囚われの身となつた。都へ護送されると、彼は自らの死を覚悟し、鎌倉へ送られる前に、法然上人に、受戒、教導を求めたのであつた。

そして彼は、結局法然の勧めを受け入れて熱心な念仏信者になつた……。

鎌倉へ送られて後も、その堂々と落ち着きはらつた態度物腰に、

源頼朝ですら敬服してしまったと、都にまで噂が流れてきた。彼にならって多くの鎌倉武士が念仏に帰依したとも聞こえてきた。

「まこと、かくも立派はお方を……」

安楽も処刑の消息を聞くと、興福寺の僧に対する憤りが収まらなかった。

時実は、しかし覚めた目で見ていた。そもそも法然からの「受戒」があつたということからして彼は不審でならなかった。

大仏殿を焼いた仏敵に授戒とはどういうことか。悔い改めてすむ問題ではなからう。授戒とはそんな安易なものか。念仏信仰とは、どんな大罪人であっても、一言「阿弥陀仏」と唱えれば受戒を授けて貰える、そんな単純な信仰であるということか。

時実が知る限り、興福寺で、かつて罪人への授戒が行われたなどと言つ話は聞いたこともない。

しかし、そんな大罪人の断末魔を見るのも、今の俺にはふさわしいことなのかもしれん！

時実は決心した。

「ひとつ、お伺いするでしょう」

彼は、安楽らが大仏殿を焼き討ちにした仏敵の処刑現場を見せようという真意を図りかねたまま、安楽に返答した。

「おお、そうか……」

と、表情を和らげた安楽に、彼はさらにこう問うた。

「そちらの師である法然上人は、相手がたとえ極悪の罪人であつたとしても、戒を授けるなどということを通じておるのか？」

実は、彼の頭には、所詮、法然といえど、結局金が目当てではないか、という疑問があつたのである。

興福寺ではそういうことがまかり通つていた。貴族たちへの授戒は報酬が多い、というのがもっぱらの噂であつたのである。

「金さえもらえれば、どんな罪人でも戒を授けるといつのか？」

腐敗した興福寺の一部高僧たちの振る舞いを見てきた彼にとって、法然の、重衡への授戒も同じように感じられたのだ。

「まあ、時実様、それはあんまりな言い方でございます」

時実のこの皮肉に満ちた物言いにゆきが反論した。

「重衡様は、自らの大罪を深く悔やまれ、鎌倉へ護送される前に、法然様にお願ひされたのでございます。かかる悪人の助かりぬべき方法候わば示し給え、と」

「左様……」

と、安楽がこれに続いた。

「罪深ければと卑下し給うべからず。十悪五逆の者も廻心すれば往生を遂ぐ……、こう法然上人が言われたのは尤もではないか。阿弥陀様は万人を平等に救われることを誓われたのだ」

「うむ」

こう二人に言われると、時実も黙らざるを得なかった。

実際は、安楽には一言、言い返したやりたい気持ちもあった。しかし、ゆきらの全心全霊を込めた、献身的な看病が、まさに万人を救おうという阿弥陀信仰に基づいていることを自らの身を持って知ってしまった以上、ゆきを目の前にして、これ以上の反論は適うはずもなかった。

安楽はそんな彼の心を見透かしてか、こう続けた。

「法然聖人はいつもこう仰っておられる。我、黒谷より降り、ここ吉水の地にて念仏三昧の日を送るは、これただ、凡夫の往生を占めさんがためなり、とな」

そしてこう締めくくった。

「また、こうも仰っておられる。善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや、とな。阿弥陀様の前では誰でもが平等なのだ。法然聖人が重衡様に戒をお授けになったのはかくのごとく理由からだ」

時実は無言のままだった。そんな彼が何に思いを馳せているのかゆきにはすぐにわかった。そこで彼女は、優しく、時実の心を解きほぐそうと、ゆっくりとこう語りかけた。

「時実様、心中お察しします。本当に、……本当に、時子様のこと



は残念です。しかし、時子様を思う時実様のお気持ち、まことに阿弥陀様にも届いておりましょう。そのお気持ちこそが、時子様が往生なさったことの何よりの証でございます。今は、時子様、何の差別もなかるう極楽の蓮の上で、病に苦しむこともなく楽しい日々を送られていることは間違いありません」

時実の目に涙があふれた。時子は本当に極楽往生叶ったのであるのか？そんな夢のような話が……。

信じられるものか！

そう思いつつ、しかし、ゆきが語るとなぜか本当のように信じられて、心が慰められるのも事実であった。

「ゆきさん。ありがとう。今は、とりあえず、その心遣い、感謝する……」

時実はそれだけ言うと、あとは沈黙を守った。

もうこれ以上語ることは無い

安楽の楽天的な態度は鼻につくこともあるが、ゆきの心遣いは本当に心に染みた。まあ、あとの人生はやり直せるものかどうか、いややり直せるはずはない。また、鴨の河原に逆戻りだ。そして、今度こそは、あの鳥部野の山で烏のえさとなってみせよう！

「ともかくもその申し出受けるとしよう。木津川であるな？ 奈良へ向かう道、あの道を再び歩くとは！ また、これも皮肉なこと……

……。何かの因縁か……」

南都北嶺の目は厳しい。重衡殿の最後、念仏にてお送り申せの命は安楽にひそかに伝えられていた。そんな折、悩めるかつての青年修行僧の話を安楽から聞かされた法然は、この処刑の一部始終を彼に見届けさせてはいかが？ と、安楽に提案したのであった。

そして、結局時実は彼らの勧めに従うことになったというわけである。

## 第一部第三十六章

「まったく師のお考えになられることは時に途方も無く、我らの知恵が及ばぬこと再々ではある……」

信空は当時のことを思い出しながら、あらためてこの若者を念仏の道に導いた法然の力を評価して止まないのもあった。

「安樂が師の所に相談に行つたわけであるな……」

「はい、左様に聞いております……」

住蓮は答えた。

「私が、安樂と次郎との間の会話を盗み聞きして、それから暫くしてからと聞いております。安樂は私の心が時子のことをめぐって、どうしようもなく深く傷ついてしまっていることを悟ると、そんな私を一体どうしたものか、と師の所に相談に行つたのでした……」

この者の心の平安をいかに取り戻すべきか

安樂は時実の心の平安を取り戻す努力が、もはや自分の手に余るものであることを悟ると、この件について、法然の下へ相談へ行つたのである。

「法然様、実は相談事があります」

安樂は、法然の下を訪れると、早速事の次第を打ち明けた。

相談を受けた法然は、いつもの口癖である、

「ふむ……」

という言葉を発すると、瞑想を始めた。これも、いつもの法

然の癖であった。

しばらくすると、目を開けたが、目は遠くを見つめていた。

そして徐に口を開くと、

「いい考えがないわけでもないが……。もう少し考えさせてほしい」

と言つて、安樂を下がらせた。

救護所に戻つた安樂は、

「きっと、何かいい知恵を授けてくださるであらう」

と、法然からの呼び出しを待った。

そして数日後……。

呼び出しを受けて、安樂は法然の房を訪ねた。

「安樂房、ほかでもない。そちが先日、相談にきた例の者の件であるが……」

続く、法然の突飛な提案に安樂も驚いた。

荒療法とはこのことか

その提案とは、

「その者に、平重衡公最期のお見送りをさせてみよ、そちらと共に」

というものであった……。

奔放な性格の後白河法皇のもとで、彼の際どい命令にも従ってきた安樂であつたので、並大抵のことでは驚いたりすることはなかったが、この提案にはさすがに動揺を隠せなかった。

安樂は珍しく法然に反論した。

「自ら命を絶とうと考えているものに、そのような、人の最期を見届けさせるとは……。逆効果ではありませんか？」

「いや、安樂房」

と、言うつと、法然は諭すように、物静かな口調でこう続けた。

「御仏の救済とは何か……。その時実とか申す者、愛する人のため、その答えを真剣に求め続けたということであらう。真つ直ぐに、なであればこそ、答えをなかなか見出せぬ自分に苛立ち、自らを問い詰め、追い詰め、今のような状況になった……」

法然は続けた。

「五濁溢れる今の世に、これほどまでに正直に生きようとする者があるとは！素晴らしいことでないか。それほどに物事に真摯に取り組めるのであれば、あの平重衡公様が最期、見届ければ、必ずや、本来の自分を取り戻すであらう」

安樂は法然の思慮の深さにただ驚いて黙って聞いていた。

「平重衡公は死を覚悟されて後、弥陀に救いを求め私の元を訪ねられた。私は彼に戒を授け、弥陀の教えを説いた……。あの方は、弥陀の本願をまことによく理解され、そして熱心な念仏信者となられた。死を前にしても些かも動じることなく、今は静かに自らの運命を迎えられようとしている」

「はい、左様に聞いております」

安樂も頷いた。処刑を告げられて後もいささかも動揺することなく、毎日念仏声明に励んでいるとのことであった。法然は続けた。

「それは何故か。弥陀の本願に預かる限り、必ず往生 possible の理を悟られたからじゃ……。のう、安樂。往生とは何か？それは浄土へ往き、そして生きること、そして、輪廻を断ち切り、仏となることじや」

「まことにその通りで……」

法然はさらに続けた。

「弥陀の本願を信じ、ただひたすら念仏三昧する者にとつては、たとえこの世で死を迎えることがあっても、それは此岸を離れて、彼岸へいたるだけのこと。死んでもまた生きること……。死を乗り越えるということじゃ。死を恐れず、それを見事に乗り越えようとされている平重衡公の、その最期を見届けるもの、必ずやそれを得心するに違いない。かの時実という者……。生きる希望を失っているという、その者も必ず得心するであろう」

安樂は法然の言葉をただ黙って噛み締めて聞いていた。

「今のままで死んでも、輪廻からは逃げ出せぬ、苦しみは果てしなく続く。そのこと、必ず得心いたすであろう。さらには、その者、興福寺の修行僧であったとのこと……。すれば、その苦しみから逃れる別の方法も、必ずや見出すであろう。無論、弥陀の救いの手に頼ることが最も望ましいことではあるうが……」

安樂はそう法然に諭されると、

「確かに」

と感服するばかりであった。

さすが叡山第一の智者と言われただけのお方ではある

法然の考えを持ち帰った安樂は、早速ゆきに相談した。

「とんでもございません！」

ゆきは当然反対した。

この頃の時実は、もうすっかり体の傷こそよくなっていたが、依然、心の傷は全く癒えてはいなかったし、先日の安樂との口論以後は、特に、精神的に不安定な状態が続いていたからである。

つまり……。

ゆきらの念仏唱和を柔和な表情で聞いていることがあるかと思うと、

突然『俺はやはり、死ぬしかない！』と叫びだしたり、  
慰めるゆきと、親しそうに話をしていたかと思うと、  
誰とも交わらず一人寂しく笛を吹き続けている……。

というような日々が続いていたのである。

「そんな方に、人の処刑の光景を見せれば、自分も死のうとますます思うだけではありませんか！」

心配するゆきに、安樂は自分の考えを交えながら法然の言葉を伝えた。

「今や弥陀の本願を信じ、善心に満ちた重衡様は、必ずや大往生を遂げられるであろう。それをあの者に見せることで、必ずや心に留まるものがあるう！」

安樂の力強い説得にゆきも少しずつ理解を示していった。

「あの者の心に何か良い変化が起こるかも知れぬ。あの者は生きるにあまりに誠実、自分を責めすぎておる。そのような苦悩、苦痛、悲しみ、悲嘆から阿弥陀様は救ってくださる」

言われてみればその通りである。反論の余地はない。何より、このままでも今にも首を吊って死ぬかもしれない。黙って聞いているゆきに安樂はさらに説得を続けた。

「そのことあの者に何とか悟って欲しいのだ。彼とて仏法をかつては学んだ者だ、必ず再び生きることを考えてくれると信じておる」

安樂の説得にゆきも最期は納得した。

このままでは、河原へ帰しても、また自ら命を絶つか、そう  
でなくても、また酒に溺れるか、のどちらかであろう

ゆきも、実際、時実のことを心配するあまり、食事ものどを通ら  
ない日々が続いていた。

「わかりました」

安樂は安堵の吐息をついた。

「そうか、ゆきさんの協力がなくなるとな、あの者なかなか”うん”と  
は応じるまい。それを案じておったからのう……。良かった。分か  
つてくれて……。では後のことはわしに任せて……」

と、そこまで言つと、ゆきが言葉を遮った。

「ひとつ、条件がございます」

「条件？」

不審がる安樂に、ゆきはきつぱりと言つた。

「私もお供します」

「ゆきさんも……」

安樂は、時実のことをここまで心配しているのか、とゆきの心情  
を察すると、否、とはとても言えなかった。

「よろしい、では三人で参るとしよう」

「はい、平重衡様、浄土へ往生していただけるよう、我らも念仏唱  
和しつつ、お見送りいたしましょう」

「では、早速時実に伝えに行くとするか」

「はいお供します」

二人は不安を心に抱きつつ、時実が手当てを受けている小屋へ早  
速向かわんと、救護所を後にした。

そう、簡単には応じまい

安樂はそう思いつつ、立ち止まると南の方を見やった。

南都の横暴振り、許すまじ！

彼は平重衡公の置かれている理不尽な状況にも思いを馳せつつ、  
振り返るとゆきの後を追つて時実のいる小屋へと急いだ。

## 第一部第三十七章

そして今日か……。

歩きながら安樂は、そのようなことをあれこれ思い出していた。  
すると横から

「重衡様が法然上人様のもとで戒をお受けになったのが昨日のこと  
のようでございます。」

と、ゆきが語りかけてきた。

安樂はその言葉に現実に戻されると、

「本当に、あのような立派な方を仏敵として処刑するなどは、興  
福寺の荒法師たちも困ったものだ。仏の慈悲の心のかけらも持っ  
ては居らん。まこと嘆かわしいことよ……」

と答えた。すると、ゆきは続けて、

「鎌倉へ囚われの身として連れられた折も、他の平家の武者が鎌倉  
殿に命乞いをした中、独り平重衡殿だけは命乞いをなさらず、一刻  
も早くわが首切られよ、と鎌倉殿に申し上げたとのこと。鎌倉殿も  
その態度に感服し、斬るには惜しい武士、と手厚くもてなして居ら  
れた、とお聞きしておりましたのに……」

と、悲しげな表情で答えた。

「いや、興福寺からの圧力に鎌倉殿も抗し切れなかったのよ。平家  
を滅ぼした鎌倉殿をもつてしても、南都の荒法師にはかなわぬとい  
うことじゃ」

安樂も沈痛な面持ちでそう締めくくった。

時実はそんな彼らの会話を黙って聞いていたが、内心

この者たち、わしに罪人の首切りを見せて、一体どうするつ  
もりか。まったく不可解、謎じゃ

と、相変わらず、安樂、ゆきらの真意を図りかねていた。

まあ、いい。いずれにしろ、俺も盛高に首を刎ねられる運命  
だ。その運命に身を任せよう。わしにとって、今日の処刑は自分の

最後をどう締めくくるか、いい勉強になろうというもの。しかと見届けて帰ろう

時実のそんな心を見透かしてか、ゆきが悲しそうな顔をして彼を見つめた。時実はそれにすぐ気がついたが、彼女の目が一瞬涙ぐんで見えたのを見て、すぐに顔を背けた。そして思った。

涙、涙、――ああ一体どれだけ多くの涙を流しあつたことだろう。俺と時子。俺の涙は枯れ果てた。もう、流す涙の一滴もありはしない

と、突然、安楽が声をあげた。

「あそこに見える！」

安楽が指差す彼方、そう遠くないところにはつきりと処刑場と見て取れる場所があつた。すでに多くの人が集まっている。

「急ごう！」

安楽は二人を促した。

「法然上人様より、平重衡様が往生、しかと見届けて来い、との命を受けた。この安楽、重衡様のその時を、南無阿弥陀仏、一心に唱えながら見届けねばならない」

彼らはすぐに処刑場へと辿り着いた。興福寺の僧兵が、柵の周りを何重にも厳重に番をしている。多くの人を掻き分け、3人は柵で囲われた最前列へ進んだ。

刑場は柵でしつかりと囲われていた。多くの僧兵が中でも忙しく立ち回っている。

それは、この時代頻繁に行われた、ある意味見慣れた処刑の光景ではあつた。が、一方でやはり異様な光景と言えた。

なぜなら……

これから処刑が行われる。

そして……

それを執行するのが、少なくとも、見た目には僧形をした者たちである。

殺すなかれ、とはそもそも誰の教えなのか？



かりそめにも、僧形をした者が、多くの人の前で、平然と人を殺すなどということが許されるのか？

群集の一部の者は単に興味本位で来ていた者たちであったが、そんな彼らですら、こうして僧兵達に対する反感を募らせていた。

ましてや多くの群集は念仏信者であり、今や念仏者となつた平重衡公の往生を、念仏唱和しつつ見送ろうとやってきたのである。彼らは興福寺僧兵に対する反感の情をあからさまにしていた。

それを知つてであろう。一心に念仏を唱えているこれらの念仏者たちに対して、僧兵たちは、

「ええい、騒がしいぞ！」

とか

「その耳障りな念仏、止めんと貴様らも、この仏敵と同じ運命であるぞ！」

とか、脅しの文句を並べて、彼らの念仏唱和を止めさせようとしていた。

安樂は、その光景を見て、

「何とも、皆の心からの念仏を、止めさせようとは、あの者達こそ、仏敵ではないか」

と、呟いた。ゆきも同意するように大きく頷いた。

それを聞いていた時実は、この時、しかし、違う次元の感想を抱いていた。

即ち……。

鴨の川原で、多くの犯罪人が処刑されていくのを、日常茶飯的に見ていた彼ではあった。しかしそんな彼の目にも、僧形をした者が、処刑場の中で忙しく立ち回っている、今日の前のこの光景には、何とも言えない違和感を感じたのである。

俺が、もし奈良にとどまって、父の仕事を継いでいたら、ひよつとして、今日、この柵の中にいたかもしれない

そう思うと背筋がぞつとした。彼の父親、また祖父は僧兵であった。それも、興福寺では知る人ぞ知る、相当の荒くれで、平家の武

者もその名前を恐れたという。彼自身も、そんな血筋を受け継いでいた。体格もがっしりとしていたし、実際喧嘩も強かった。奈良にとどまっていれば、当然、彼が、父の仕事を継いで僧兵になっていた可能性もあったわけである。

そんなことを考えると、何故か一瞬身震いがしたのである。妙な感覚であった。

俺も一歩間違えば、人殺しになっていたのだろうか

実は、小さいころ、彼は、父親の勇猛果敢ぶりやその武勇伝を耳にすると、子供心に、何とはなしに嬉しくて、友達に自慢したりしたものであった。

いやそれどころか……。

父のように強い僧兵、荒法師になりたい、と無邪気な心で思ったりしたこともあったのだ。

だとすれば……。

父が、自分に、学問を修めさせようとしたのは、息子を自慢したい虚栄心からではなくて、ひよっとすると、息子を、このような血なまぐさい修羅場から遠ざけるためのものであったかもしれない。時実は病床の父を置いて、奈良を離れた時のことを思い出した。

意識がはつきりしない父であったが、自分に何か言いたそうで、とても寂しい顔をしていたのが忘れられない……。

あれは、何を語ろうとしていたのであろう。

もう、生きてはいまい

なぜか、あれほど敵対し、憎みもしていた父に対して、別の感情が頭をもたげてきた。

もし、まだ生きているのであれば、俺は父に謝罪をすべきなのかもしれない

父は俺を、こんな修羅場から遠ざけんと、俺を救ってくれたのかもしれない

時実は、今となってはもう、その謝罪も叶うまい、と思うと悲しい気持ちに満たされ、思わず涙ぐんでしまった。

そんな三人三様の思いを無視するかのように、刑場の中の僧兵たちは、着々と処刑の準備を進めていた。

刑場の中心に穴が掘られているところであつた。勿論、切られた首を落とすところである。その傍らに筵が敷かれている。ここに今日の主人公が座らされるのだ。

と、三人の傍らで、やはり、その様子を眺めていた見物人が、突然時実に話しかけてきた。

「お前さん！わしも、賀茂の河原で多くの罪人の処刑を見てきたが、皆、最期は同じじゃ。助けてくれ、と大声でわめいてみたり、泣き叫んだり、がたがたふるえて動けなかつたり。何かわけのわからぬことを口走つたり、気が狂うたふりをしてみたりな……」

時実ははつと我に返つた。

そうだ、いらぬ感傷は無用

早く終わつてくれぬか、そうすれば、俺は自由の身になれると、また、そんな思いに駆られた彼は、口を開くと傍らの安樂に、「何をみせるつもりでここまで引つ張つてきたか知らぬが、もうこんな光景は見飽きておる。どんな偉い人物かは知らんが、結局最後は命乞いで終わるのだ。そんな罪人の浅ましい姿など見とうもないわ！」

と、言い放つた。

しかし、時実のこの言葉も聴いているのか、聴こえていないのか、安樂もゆきも一心不乱に念仏を唱えているばかりであつた。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

気がつくと周囲はすでに念仏の大合唱が始まっていた。

すると、一人の僧兵が柵の向こうから三人の方へ向かつて歩いてきた。と、突然彼は、

「ええい、その忌まわしい念仏、止めんか！」

と、叫んだかと思うと、持っている薙刀の柄を、柵の間の隙間から差し込み、それでもってゆき突き飛ばした。

「あっ！」

と言う声とともに、ゆきはその場に倒された。

「何をする！」

思わず、時実は叫んで、その僧兵を睨み付けた。

睨み付けられた僧兵は、逆に住蓮をこの世のものとは思えぬばかりの恐ろしい形相で睨み返した。

「やかましいわ！ 仏敵のために念仏唱える者、中にしよつ引いて、共に首刎ねるぞ！」

彼はこう叫んで引き返した。

「ゆきさん、大丈夫か？」

と、時実がゆきに声をかけたその時であつた。

周囲が大きくざわめいた。

「重衡様じゃ！」

群集のどよめきの中、刑場に一人の男が縄をかけられたままの姿で連れてこられた。

白い浄衣を身に纏い、手には数珠を持って、刑場の中心へと進んでいく。僧兵に導かれているが、足取りはしつかりとして、死を前にした人間の弱弱しさなど微塵も感じない。

そう、この方こそ、従三位平重衡公その人であつた。

## 第一部第三十八章

口元では、一心に何かを呟いているのが見える。

「見よ、一心不乱に南無阿弥陀仏と唱えておられる。我らもますます力強く唱和しようぞ！」

安樂が大きい声で周囲の群集に言い放った。起き上がったゆきも、安樂に同調して呼びかけを始めた。

しかし、彼らの、その提案を待つまでも無く、殆どの群集がすでに、口々に「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と熱心に唱和を始めていた。

「護送使源頼兼殿の御計らいで、重衡様、今朝、奥方の輔子様との最後の別れを果たしてこられたそうじゃ」

時実の傍らの男が連れの者たちに語りかけていた。

「あの白の浄衣、輔子様が準備しておられたものらしい。さも辛い別れであつたに違いあるまい」

そんな話が聞こえたからではあるまいが、ゆきの目から涙が伝わり落ちるのが時実には見えた。そのゆきは、安樂と共に手を合わせ、熱心に念仏を唱えている。

そんな献身的なゆきの姿を見ているうち、さらには周囲の念仏の大合唱を聞いているうちに、時実の心の中である変化が起こっていた。

ゆきを突き飛ばした僧兵への反感からでもあつたが、これほどまでに死を惜しまれる人物の首を刎ねようとしているこの現状が、何かしら許せない、と思い始めたのである。

平重衡その人は、表情を変えることも無く、一心不乱に念仏を唱えている。時実の目に、その顔は涼しげにさえ見えた。そしてその態度には何か余裕すら感じられた。

さらに驚くことには……。

体全体から満ち溢れる生命力すら感じるのである。

俺が今まで、鴨の河原で見てきた罪人とは全く違う

これが平重衡なる人物の徳のなせるわざでもあるのか？

時実の心に、彼への同情の気持ちが生えてきた

一方群集の念仏唱和はますます熱狂し、時実はその南無阿弥陀仏の大合唱に圧倒されてしまっていた。

実際のところ、彼は、ここまで多くの念仏信者たちが集まるとは思っていなかった。そして、その彼らは平重衡をして何としても往生たらしめよう、と無心に念仏を唱えているのである。自分を助けるためではない、他人を助けるために……。

そして、平重衡も、迫り来る死を前に、阿弥陀仏と一対一になり、心を集中させて念仏を唱えている。

まことに見事な決定往生の念仏

時実は感服するよりほかに無かった。興福寺の修行時代学んだ念仏の意義はあまりに観念的であつた。

念仏とは人を生かすものなのだ……。自分のみならず、他人をも

彼は、さらに、

平重衡をして、これほどに見事な念仏信者とならしめた法然上人とは、一体どんな人物であろう

と、法然の徳の大きさにも思いを馳せるのであつた。

彼は、阿弥陀信仰など貧しい民衆に対する一種のごまかしだ、と理解していた自分の偏見が、いかに間違っていたか、を今や悟つた。彼は、恥ずかしい気持ちでいたたまれなくなった。

時実は、何か大きい未知の力に動かされている自分を感じた。

気がつく周囲の人々にあわせて、懸命に口を動かしている自分がいた。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

## 第一部第三十九章

この念仏の大合唱に、興福寺の僧兵達の

「ええい、やめんか！」

という脅しの声も完全にかき消された。

あまりの声の大きさに、僧兵達も、念仏を止めさせようとするのは無理だと判断したようだ。

処刑を急げ！

重衡を囲む僧兵たちの動きが活発になってきた。一人の僧兵がやおら書状を取り出して読み始めた。

「平重衡、先の南都焼き討ちにおける……」

大声で怒鳴っている。どうやら罪状の申し渡しらしいが、ますます大きくなる、観衆の「南無阿弥陀仏」の唱和にかき消されて、何を言っているのかはつきりとは聞こえない。

すると罪状を申し立てていた僧兵が、書状を読むのを一時中断した。彼は、苛立ちを抑えられないのか、抑えていた怒りをついに爆発させて群集に叫んだ。

「えーい。騒がしい。静まれ、静まれ！騒がしいものは引き立てて同じ目に合わせるぞ！」

すさまじい怒号であった。

しかし、その怒号をもつてすら、群集の念仏唱和を止めさせることは出来なかった。

罪状を読み上げていた僧兵も最後には諦めたようだ。彼は、苛立ちながらも、観衆を無視して、罪状を読み続けた。

時実は念仏を唱え始めると、目を瞑っていたが、うねる様な「南無阿弥陀仏」の大唱和に圧倒されながらも、死に行く者から何か逆に力を与えられている自分に気がついて狼狽し始めた。生まれ  
て初めての経験であった。

この感覚はどうしたことか……

この力は……

時実が心に動揺を感じたその時であった。

「いよいよである。覚悟はよろしいか！」

僧兵の最後の宣告の声に、時実は思わず目を開けた。

そこに平重衡の姿があつた。最後の宣告をされた彼は、念仏をしながらも、目を開けると、群集に向かつて深々と一礼をした。

その時であつた。一瞬、平重衡の視線が、時実を捉えた。

――いや、実際の所はどうだったかは分からない。

時実は、しかし、今でもそう信じている。彼の視線が自分を捕らえたのだと。そしてその瞬間、体に大きい衝撃が走るのを彼は感じた。この世のものとは思えない、何か物凄い力が体に入ってくるのを感じた。

何ら抵抗出来なかつた……。一方的に命の息吹を吹き込まれたような感覚だつた。

何だ、この感覚は？

時実にとってはその時間がとても長く感じられた。

と、次の瞬間

「あとのことはよろしく頼む」

と、はつきりした声が彼の耳に聞こえた。

その声到时実は我に返つた。

見ると、三方に向かつて、丁寧に一礼を終えた重衡が、最期、刑執行役の僧兵に向かつて軽く頷いていた。そして目を閉じると、重衡は再び、一心に念仏を唱え出した。

「いよいよじゃ！」

誰かが叫んだ。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

観衆の大合唱と重衡の念仏とが渾然一体となつて、その場を支配した。

その時間は時実にはひどく長く感じられた。

「これがいつまでも続けばよいが……」



そう思ったその瞬間、刑執行の僧兵の刀が振り下ろされた。

「あつ！」

観衆のどよめきの声と共に、重衡の首は切って落とされた。

刑場の柵の外から、誰かが石を投げ始めた。刑場は騒然とし始めた。

また刑執行が終わっても、相変わらず「南無阿弥陀仏」の大合唱が止むことはなかった。

苛立った僧兵が、

「えーい、止めんか、やめんか！」

と静止したが、まるで効果は無かった。

投げ入れられる石は、その数を増した。僧兵たちは身の危険を感じたようだ。群集を制御するのをあきらめて、なすがままにさせた。

「お前らこそ、地獄に落ちろ！」

「恥ずかしいと思え！」

という群集の怒声を浴びながらも、投げ入れられる石を巧みに避けて、彼らは重衡の首を持って引き上げの準備を始めた。

そんな間中も、

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

という群集の念仏唱和はいつまでも止むことは無かった。

ついに僧兵たちは引き上げた。

刑場を取り巻いていたあれほど多くの群集も次第に三々五々、刑場から引き上げてしまった。

気がつくと、刑場には安樂、ゆき、時実の三人だけが残っていた。

## 第一部第四十章

最初に沈黙を破ったのはゆきであつた。

「何という悲しいことでございましょう。本当に」

ゆきが涙ながらにそう言つと、安樂も

「まことに……」

と言いかけたが、そのまま押し黙ってしまった。

重衡の死の衝撃はあまりに多きかつた……。

それでも氣を持ち直すと、彼は続けた。

「しかし、多くの民が往生願つて、念仏唱和をなし、その中、最期を迎えられた。きつと重衡殿、阿弥陀様のお力で、今は浄土の蓮の花の上でゆつくりと休息されておられることであらう」

と言つて、ゆきを慰めた。

一方時実は今の自分の感情をどう表現したらよいのか分からず、また自身が皆と共に念仏唱和をしていたことも、ひよつとして氣付かれてしまったかと、氣恥ずかしい思いも手伝つて黙っていた。

ゆきが、そんな時実に助け舟を出した。

「時実様、一緒に念仏唱和してくださいありがとうございます。重衡様もこれだけ多くの方に見守られたことは、無念な中であつて、往生の大きい助けとなつたことでありましょう」

「いや、それがしは……」

そこまで言つたはものの、しかし彼はやはりそれ以上言い訳になりそうな言葉も見つからず、やはり沈黙を守るしかなかった。

照れくさいということもあったが、あまりに大きい感動に、今までの自分が惨めに思えて恥ずかしかつたせいもあった。

「ゆきさん、時実殿のこと、もう大丈夫じゃ。わしには分かる」

安樂も彼が最期には念仏を共に唱和していたことを、知っていた。「重衡殿自らの一命を落とされたこと、まこと悲しいことであるが、考え方によつては、そのことが、一方で多くの命を救つたのだ。今

日、集まった者たちの中の多くが、生きる力を与えられた、わしはそう思う。そしてこの者、時実殿もそのうちの一人！まこと、これが阿弥陀様の力でもあり、願いでもある、ありがたい、ありがたい」

安樂の発言にゆきはおおきく頷いた。

「しかも、平重衡、まことに立派な決定往生であられた。まことに、後の世まで語り継げられるであろう」

安樂はそう言つと、目を瞑った。彼は今日一日のことを思い出して回想しているようであった。

そして、内心

まこと、法然上人様の御知恵、お見事というばかりと、自らの師の偉大さを改めて認識するばかりであった。

しかし、いつまでも感傷に浸つてはいられない……。

安樂は元気良く声を上げた。

「さあ、帰るとしよう。京の都に我らを待つ多くの民がいる……。それに法然上人様にも急ぎ意京のご報告もしなければ……」

と、安樂は皆を促した。次に時実の方を見て、

「さて、時実殿、どうされる。約束どおり、ご自由になされよ。わしらはもう何の束縛もせぬ……」

と、問いかけた。

突然言葉を投げつけられて、時実は黙っているしかなかった。

「まさか、このまま奈良へ帰られることもなかるうとは思うが……」

安樂のこの試すような質問に、ゆきがかみついた。

「まあ、安樂様、そんな意地悪な質問ってありませんわ！」

ゆきも安樂をからかい気味に叱ると、優しく時実の腕を取った。

「だって、もう時実様、私たちと一緒に都へ帰られることお決めになられてますものね！」

安樂は一本とられた、という調子で、

「いや、まこと、時実殿、貴殿さえよければ、我らのところへ戻られよ。大歓迎じゃ」

と答えると、にこりと笑った。

ゆきも時実を見ると、にこりと微笑んだ。時実もつられて、つい反射的に微笑んだ。

「いや、時実さんが笑った。笑ったわ!」

確かに、久しく忘れていた微笑であった。ゆきに言われて、彼は思わず顔を赤らめてしまった。

「ゆきさん、いじめてはいかん。可愛そうじゃ。それよりも……」  
と言うと、安楽は空を見上げた。

日の暮れが迫っていた。

「急ごう、暗くなる前に」

安楽は二人を促した。

「さあ、行きましょう、時実様」

時実もゆきに手を取られて、二人に続いた。

二人に続くしかない

まだ漠然とはしていたが、時実は自分の道はこれしかないと思った。何か大きい運命に逆らえない自分を感じたのである。

歩みも何かしら軽く感じられた。ここへ来るときとはまるで違う。来るときは絶望だけが心を支配していた。

今は生きる力に満ち溢れている。なぜか、うまく説明できない。安楽が言ったことが事実なのかもしれない。

生きる力を、本当に俺は重衡から貰ったのであろうか

住蓮の心の中に、死を目前にした重衡の目が思い出された。そして次にはなぜか阿弥陀仏の姿が浮かんた。

阿弥陀仏はほんとうにいるのだろうか。いるとすれば何処にいるのであろうか

そんなことを考えながら、空を見上げると、夕焼けが美しく、まことにすがすがしい気分に包まれた。

「あとのことはよろしく頼む……」

歩み始めた彼の耳に、あの、刑場で聞こえた言葉が何度も繰り返し響き渡った。

確かに聞こえた。確かに耳に……。

帰りの道すがら、そう自分に言い聞かせながら、彼はゆき、安樂と共に都へと向かった。

この日、時実は今までの人生に一区切りをつける。

都へ帰って後、彼は正式に法然のもとに弟子入りした。

そして、その後、名を住蓮と変える……。新しい人生の出発を迎えたのである。

## 第一部第四十一章

「重衡殿の頭は地に落ちたが、それが種となり、そちと言う実となつたわけだ。まさしく、人を生かす念仏とはこのことか……」

「左様で……」

二人は、共に当時のことを回想して目を瞑った。

「しかし……」

と、沈黙を破ったのは信空であった。

「まだ解せぬことがある」

信空は住蓮に尋ねた。

「あの祇園舎の女人とはどういう経緯で再会出来たのであるか。もう死んだものと思っていたのであろう」

住蓮は答えた。

「まことに……。私も彼女はもう死んだものと信じて疑いを持っておりませんでした」

「であろう、とすれば、いったいどのようなにして……」

という、信空の問いを遮って、住蓮はこう答えた。

「話は大原談義の時に遡ります」

「大原談義……」

「左様です、私はそこで応水律師と再会し、ことの真相をすべて知らされたのです」

「応水律師が、大原談義に来られていたのか！」

「はい」

そう答える住蓮の記憶は、大原談義の頃、即ち、平重衡処刑の年の二年後、文治二年（千百八十六年）の秋に遡った。

法然教団　　とここでは便宜上そう述べさせていたが、無論、当時法然が意図的に教団を組織していたわけではない。吉水の里に多くの念仏聖たちが法然を慕って集結していたのである

即ち、法然を頂点とする、念仏聖たちの群れは、この頃になると都の中では、もはや誰であつても無視できない存在となつていた。千七百七十五年、比叡山黒谷を降りて十一年、着実にその専修念仏の思想は多くの人を虜にして、信者を増やしていた。

後に天台座主となる顕真はこの頃、大原勝林院にいたが、ある時法然を招き、彼より浄土經典について講話を聞くと、彼の専修念仏思想に共鳴した。こうして、彼は、大原に、仏教各宗の碩学を招き、さらにこの点について議論を深めることを提唱したのである。

これが後に言われる大原談義の由縁である。

千百八十六年のことであつた。

大原勝林院におけるこの談義の場で、法然は、顕真の要請でその場に集まつた聖道門諸宗の碩学たちを相手に、念仏に勝る極楽往生への道は無し、と様々な仏典を引用し理路整然と彼らを見事論破したのであつた。

同行した住蓮は堂々と自らの説を述べる法然の姿にまことに感動した。見た目にはひ弱にさえ見える師が、説法の折にはまことに堂々として見えたのが驚きであつたのを覚えている。

そしてさらには十二年後、千百九十八年、建久九年に選択本願念仏集を著すことで法然の考えは確固とした専修念仏の思想として定着するわけであるが……。

住蓮がこの大原談義に同行したのは、無論彼が、この時には法然の弟子であつたからにほかならない。

平重衡公処刑の後、彼は都へ帰ると、安楽の勧めに従つて再出家し、法然の下へすぐに弟子入りした。こうして彼は、仏教への情熱を再び燃やすこととなつた。

この時、名も時実から住蓮へと変えた。

「一度は死んだ私の魂を、阿弥陀様は平重衡様の死に様を私に見せることで生き返らせてくださったのだから」

ことあるごとに住蓮は周囲の者へそう語つた。

「これからは、私が、再び得た命の尽きるまで、絶望と不安、飢え、病、死への恐怖に苦しむ多くの人々に弥陀の本願、弥陀の救いの心を伝えていかなければならない」

そう彼は決意し、法然のもとで修行に励んだのである。

それまで住蓮は、阿弥陀信仰というものは、教養の無い庶民に分かりやすく教えんがために、仏教の正道から多少外れた、幾分か歪曲されたものと理解していた。

だが法然の教えを間近に聞くようになってからは住蓮は驚きの毎日を迎えることとなった。なぜならその阿弥陀仏信仰を、ここ吉水の里で、法然は多くの仏典を引用しながら、すばらしく体系的に解説し、凡夫が往生に至る道はただ阿弥陀仏の本願に頼るしかない、ということを知り、弟子たちに理路整然と説いて見せていたからである。

住蓮のように興福寺の伝統的かつ国家守護的仏教を学んだ僧にとつては、それは驚きそのものであった。法然によれば、詰まるところ、念仏以外の行はさして重要なものでないというのであるから……。

このような師のもとで、住蓮は毎日学問に励み、いつしか法然の門下生たちもその存在を決して無視できないほどになっていた。もともとが興福寺で修行を積んだ素養があったので修養の速度もずばぬけて早かったのである。

こうして頭角を現した彼は、安楽ともども鴨川の六条河原を基点に、大衆を教化するための辻説法を行う役目を任された。そこでの生活が長かったし、河原者の知り合いも多かったから適任とされたのである。

そして弟子入りから一年……。

新進気鋭の住蓮は、大原談義のその場へ、安楽と共に同行を許されたというわけである。

大原三千院に着いた住蓮は、何よりもそこに集まった人の数に驚いた。その数、数百にも上ろうかという念仏聖の群れであった。

無論、彼らは談義に参加するのではない。ただ、法然を支持



するがゆえに、談義のほどを見守ろうと集まったのである。

いわば応援団、圧力団体のようなものである。

住蓮、安樂も、師が他宗の碩学を相手に、談義を重ねている間中、他の念仏聖たちと共に念仏を唱えていたのであった。

## 第一部第四十二章

信空も当時を思い出して懐かしそうに語った。

「まことに、あの折の師は堂々として、語る言葉に周囲の者もただ頷かざるを得なかった……」

住蓮も頷いた。そして続けた。

「そこに応水様も来られていたのです」

「そうであつたか……」

住蓮の話は続いた。

「近江の地を離れた後、念仏聖として諸国を行脚されていたのですが、大原にて、法然上人、諸宗の碩学たちを相手に談義をされると聞いて、はるばる東国の地より駆けつけられていたのです」

そう、当日その地に集った念仏聖たちは、すべてが法然門下の者であつたわけではない。

噂を耳にした全国の念仏聖たちが終結したのである。

日中日夜、不断に念仏を唱えるその声は、まる三日大原の地に響き渡つたと言う。

応水もそんな念仏聖たちの中にあつた。

話は琵琶湖での時子と応水の出会いに遡る……。

あの時、湖で時子の身投げを思いとどませた後、彼は時子を京の都まで連れてくると、暫くは彼女の様子を伺うため都に滞在していた。

「時子のことを気につけ、毎日祇園舎まで足を運んでいたのださうです……」

そして、ようやく時子が祇園舎での生活に何とか馴染んできたことを確認すると、かねてからの彼の希望を満たすべく、諸国行脚の旅に出たのであつた。

彼の希望……。無論、目的は阿弥陀信仰の布教である。

こうして彼は旅に出た。

そんな行脚の最中に大原談義の噂を耳にしたのである。

「まずは都へ帰らねば……」

自分が何が出来ると言うことはない。しかし、せめて念仏唱和して偉大な念仏者の応援をしたい

彼は、丁度関東を中心とした東国行脚が終わり、次は西国行脚の計画を立てていたおりでもあり、この大原談義を見守ろうと、京の都へ帰ることにしたのであった。

そして、ここ大原へやってきた彼は、偶然にも、不断に念仏を唱えている住蓮を目にしたわけである。

「本当に驚きました……」

「であるうな」

それは応水も同じだった。彼も驚きのあまり、まずは自分の目を疑った。

「よもや時実ではあるまいか、貴殿は！」

「応水殿」

声をかけられた住蓮も突然のことに声が出なかった。久々に応水と再開した住蓮は駆け寄ると、

「応水殿、懐かしゅうござる！」

と、まずは挨拶を交わすと、

「どこにおいででしたか。父の看病に奈良へ赴く前にお会いしたのが最後でしたでしょうか。知らせを受け、近江の地に戻ってみたら、何もかもが失われていて……、さらには応水様まで行方が分からぬと……」

「何もかも失われていて、とな！」

応水は住蓮のこの言葉に不吉な思いを抱き思わず絶句した。

「知らせを受け、とは？、失われてしまって、とは？一体どういうことじゃ」

「応水様は何もご存じなかったのですか！」

住蓮は、馬淵の里での惨劇の事情を何も知らないらしい応水に、事の顛末を簡潔に述べた。

「奈良の地で父の看病をしていた私のもとに、馬淵の里より急な知らせが届いたのです。時子殿が湖に身を投げ、自ら命を絶った……」

「急ぎ駆けつけしてみると、馬淵の里には屋敷の焼け跡しかありませんでした。それを見た私は全てに絶望して、近江の地を離れ、鴨の河原で乞食生活をしていたのです。酒に溺れながら……」

「そんな、馬鹿な！」

応水は絶句した。

何かとんでもない行き違いがあつたに違いない！

応水は住蓮に自分の知る限りのことを話した。

「何を馬鹿なことを！時子殿は生きておるはずじゃ。わしがここへ、この京の都まで連れてきたのじゃから！身投げを思いとどまらせたいあとなに！」

「えっ！」

今度は住蓮が絶句した。

時子が生きている！それは本当なのか？

「本当でございますか！」

応水は大きく頷いた。

「本当も何も、とんでもない思い違いじゃ！病の進行がそれほど進んでおらるのであれば、じゃがの……。無論、今どのように過ごされておるか、そこまではわしも確認しておらんが……。しかし、元気でいれば、祇園舎で犬神人としてお勤めをされておられるはずじゃ」

「本当ですか！」

驚く住蓮に応水はこのあらましを、今度はゆつくりと告げ始めた。

即ち、偶然、朝の釣りに出かけた折、入水自殺を図ろうとしていた時子に遭遇し、それを思いとどまらせたこと、さらには、都で犬

神人として働くよう勧め、それを彼女が受け入れたこと、また……。  
「時子殿は、会えばいつそう別れが辛くなるからと、両親のもとを訪れて別れの挨拶をするのは遠慮したいと申され……」

応水はさらに言葉を続けた。

「私が、一人で屋敷を訪ね、ご両親に事情をすべて説明したのじゃ。そしてご両親の承諾を貰ったのじゃ」

応水はそこまで言うのと、眼を瞑った。そして当時の記憶をさらに辿った。

「ご両親の落胆は無論大きかったが、運命には逆らえようはずもない。時子殿の病は、病として受け入れねばならない……」

「父上は、そのこと、ある程度分かっておられた。彼は、佐々木家当主として、家の体面を保たねばならない役目がある。その意味で、病に侵された娘のことを、表ざたにせず事が処理できるのであれば、むしろ、よい解決策であつた、と思われたようじゃ。ただ、母上は

……」

応水はそこで話を中断した。

「時子の母上が、私を責められたのですね」

住蓮がぼつりと、そう言った。

住蓮は、時子の発病について、彼女の母が住蓮を激しく責めていたことを忘れてはいなかったのである。奈良へ旅立つ日の前にも一度激しく言い争いをして、時子が泣きながら止めに入ったこともよく覚えていた。

応水がそれに答えた。

「左様じゃ……。もつとも、母上は私をも責められた。時子が病に侵されたのは二人のせいであるとな……。この乞食坊主があちこちへ連れまわしたことが……」

と、そこまで言うのと、応水も言葉が続かず、沈黙するしかなかった。

たとえ、思い込みであるにせよ、娘を苦しみから何とか解放したいと思う、そんな母の心情を察すると、そんな彼女を責めること

など無論出来ようはずもない……。

住蓮がその沈黙を破った。

「おそらくは、娘と永遠の離別をする悲しみに打ち負かされて、時子殿の母上に物の怪が取り付いたのでありましょう。それで屋敷に自ら火を放った……」

と、彼は自分を納得させるかのようにぼつりと語った。

応水も頷いた。

「左様であろうな……。あの母上の、私に対する冷たい視線は、今でも忘れられん」

そう言つと、応水は深いため息をついた。

「何とも悲しい話ではある……」

そこまで言つと、応水は口をつぐんでしまった。二人の沈黙はさらに続いた。

どれぐらい、その沈黙が続いただろう……。

突然住蓮は大きい声で応水に問いかけた。

「しかし、生きているのですね！どうすれば会えるのですか！」

突然の大声に、応水は吃驚した。彼の戸惑いの表情を無視して、住蓮は構わず問い続けた。

「ここのお勤めも今日で終わります、われらは吉水へ夕刻には立ち戻ります。私は彼女に今晚にでも会いに行きます！時子殿は、祇園舎にいますね！必ずそこにいますのですね！」

応水がこれに応じた。

「左様、おられるはずじゃ。しかし……」

と言つと、応水は腕を組んで、何やら思案げな表情となった。そして、住蓮の興奮を鎮めるかのように、ゆっくりと、しっかりした口調でさらに言葉を続けた。

「時実、いや今はもう住蓮と呼ぶべきか」

「はい！」

と答える住蓮は、というと、時子に会いたい一心で、逸る心を抑えることが出来ないでいる。

応水はそんな住蓮を宥めた。

「まあ、落ち着け。貴殿の気持ちはわかる。しかし、考えてもみよ」「考えるとは、何をですか！」

住蓮は、しかし、簡単に感情の高ぶりを抑えることなど出来る様子ではなかった。

はやく会わなければ！

彼の心は逸るばかりである。

そこで応水は、彼を何とか冷静にさせようと、一層ゆっくりと、宥めるように、言葉を続けた。

「よいか、相手の気持ちは考えなくてもよいのか……」

「相手の気持ち……」

住蓮はそう言われて、はっと我に返った。

応水は、ようやく平静さを取り戻しつつある住蓮を見て、やや安心すると、さらに彼にこう告げた。

「今、時子殿に会っても、それは彼女にとって、むしろ苦痛ではあるまいか？」

応水から、このように諭されてみると、住蓮も返す言葉が無かった。

確かにその通りであった。

彼女は病に苦しんでいる。

この白らいという病は進行性であり、よくなることなどありえないというのが当時の常識であった。

住蓮も当然そのことは知っていた。

また、たとえ、死期がまだ近くないとしても、それまでに体は崩れ、顔は醜く変形し、手足の指が落ちていく……。生きながら地獄を見るのである。

あれから何年過ぎただろう……。

時子の病状も進んでいることは間違いなかった。

あの、忌まわしい、ごつごつが体中に吹き出ているかもしれない。髪も抜け落ちているかもしれない。そんな姿をかつての恋人に

見られたいと思うであらうか！

住蓮は大きいため息をついた。

「応水様の言われるとおりです……」

応水は、住蓮が現実を直視し、冷静に状況を判断出来たことに安堵した。

「ここは、わしに任せなさい。早速わしは、彼女のこと、元気でいるかどうか調べてみる。なあに容易いことじゃ。友がまだ清水の寺におる。彼に聞けばすぐ分かるじやろう。それまで、時実、動きを起こすな。わしからの連絡を待て。おそらくは、会えるときがあるとしても。まだまだ先のことになるじやろう」

そう言つて。応水は、住蓮の肩を叩いた。

「わかりました……」

「わしが、ひとまず、先に都へ帰るとしよう。早速、友と会つてみることにする。その後、今晚貴殿のもとを訪ねるとしよう。必ず、良いしらせを持って行くから……。とりあえず待つておれ。わかったな」

「はい！」

こうして二人は、吉水で再会する段取りを組んで、一先ず別れることとなった。

その別れ際に、応水は住蓮にもう一つ約束事をさせた。

「よいか、飯に会えることがいつかあったとしても、ご両親のことは絶対喋つてはならぬぞ」

「それは、十分承知しております」

「あまりに悲しい話、今の時子殿の境遇に追い討ちをかけるだけじゃ。このことはわしと貴殿との間の秘密にしておこう」

「もつともです」

と、賛同した住蓮であつたが、今度は、彼の頭の中に一つの不安が持ち上がった。

「もう一つ問題があります」

住蓮はこの問題も応水に相談しておかなければ、と考えた。



「何か、それは」

「はい」

早速、住蓮はありのままに語りだした。

即ち……。

時子の兄が、自分が勘違いをしたのと同じく、やはり妹を亡くしたと思い込んでいること、しかも、時子の自殺、ご両親の憤死、そのすべてが住蓮の責任であるとし、自分を敵として追っているらしい、ということである。

「もつとも、すでに彼は落ち武者狩りに会い、もう殺されてしまっているかもしれませんが……」

出家した後も、このことは住蓮の心に刺さったとげとして、彼を悩まし続けていた。

「左様であつたか……」

応水も、このあらたな難題には頭を抱えた。      しばらく目を瞑

つて考えていたが、

「それについては、おいおい考えるところ。また……、それも時子殿には伏せておいたほうがよからう」

とだけ住蓮に答えた。

「承知しました」

答えがあろうはずはない。それは彼も分かっていた。しかし、応水に話を聞いてもらったことで、幾分か心の重荷が取れた感じであった。

「それでは、私は先に出発するでしょう」

こうして二人は分かれた。

住蓮は、時子が元気で過ごしている知らせを、応水から聞けることを心楽しみにしつつ、一方で事態が複雑に展開してしまったことへの不安も感じながら、都へ向かう応水の背中を見送った。

## 第一部第四十三章

時子のことを応水に任せると、住蓮は安樂と共に大原の地にとどまり、法然らの談話を見守りつづけた。無論、実際は念仏三昧に励んでいたのであるが……。

こうして、ここ大原の里でまる三日を徹して行われた大原談義もいよいよ終わりを迎えた。

「聞いたか？住蓮……。師が皆を論破された！念仏に勝る往生への道無しといことを誰もが認めざるをえなかったということだ！我らの歩んでいる道が正しいことが認められたのだ！」

興奮する安樂の言葉を、住蓮は感慨深く黙って聞いていた。

噂では、法然上人が浄土經典を始めとし、様々な經典を引用しながら、念仏の功德に勝るもの無し、と諸宗の碩学を見事に論破したという。

住蓮はそんな話を耳にしながら、師の活躍を嬉しいと思いつつも、師が、声を大にして、相手を論破するような人物ではないことを良く知っていただけに、内心では、

師のことだ。実際は静かな物言いで、諄々と自分の意見を述べただけのことであろう

何せ、比叡山一の智恵者といわれたお方である。その方を論破できるだけの人がいなかっただけのことだ

と、思いつつも、周囲の念仏聖らが法然を賞賛する声を聞くと、自分が褒められているようでもあり、師の活躍を自慢に思った。

「これで時子に会えるのか！」

使命が終わったのだ。あとは帰るのみである。住蓮は、自らの荷物の整理に取り掛かった。そんな住蓮の心の中では、複雑に様々な思いが交錯していた。

早く会いたい

そう思う一方で反対の思いに苛まれる

いや、会えば、時子が苦しむだけだ！

住蓮の胸のうちは悶々として、張り裂けんばかりであった。

いや、それでも会わなければ！

いや……

考えがぐるぐると堂々巡りを繰り返すばかりで頭がどうにかなりそうだった。でも最後は、答えはここに行き着くのであった。

しかし、それでも会いたい！

と。

こうして、そんな思いに囚われながら、住蓮は、先に都へと発った応水が時子に会えたであろうか？また、時子がどんな状況にいるだろうか？とそればかりが思いやられて、気が気でなかった。

「安楽……」

彼は思い切つて安楽にすべてを打ち明けた。

「そうであつたか……」

安楽はこの深刻さに思案していたが、

「後のとは任せておけ！師には私から事情を説明しておく。貴殿は一刻も早く都へと発たれよ！」

と言うと、住蓮を先に都へ返した。

こうして住蓮は、大原の地を離れ、重い足取りに鞭を打って、急ぎ吉水へ向かった。

吉水に着いた頃にはもうすっかり辺りは暗くなっていた。庵に荷物を降ろすと、彼は荷を解く間もなく、救護所へ赴いた。そこで応水と落ち合うことにしていたのである。

救護所に着くと、そこで応水を待った。

待ちながら、住蓮は、ふと、先日都大路で目にした、犬神人の行列のことを思い出した。覆面姿の犬神人の行列は、都ではもうすでに有名であつた。白覆面、白装束、赤の手袋、という異様なでたちに誰もが、怖れを抱いた。都人なら誰もが一度は目にしていただろう。

住蓮自身、彼らが都大路の清掃に出かける行列を、遠目に何度か

見かけた。そして彼自身、

あの覆面の下にどのような素顔が隠されているのかと、ふと思ったりしたこともあった。

噂によれば……、それは、とてもおどろおどろしい、この世のものでは無い、不気味なものだという。伝説に聞く唐の国の、獅子のような顔つきになってしまふとも言つ……

それが、まさか、その中の一人が時子であつたとは！

彼女が、そんな状態であれば、自分とは会いたくないと思つても当然であらう

やはり、会いたいと思う自分の気持ちは、彼女を苦しめるだけなのか……

会いたくない、と言われても止むを得まい！

彼は、時子の容姿の変貌ぶりを想像すると、ため息をついた。そして、悲しい気持ちにやりきれなくなり、また涙が溢れてきた。

さて応水ははなかなか姿を現さなかった。かなり夜も更けてきた。遅い！

思わず、住蓮は苛立つて、外へ飛び出した。外へ出ると、月が明るく、救護所の向こうに広がる真葛が原は幽玄たる景色を呈していた。

皮肉なものであつた。

この真葛が原の幽玄美はたびたび和歌にも詠まれていた。その地が、実は犬神人の里と隣接しているのである……。

無論、この真葛が原の鬱蒼とした雑木に隔てられて、その里の様子を伺うことなど出来ない。彼らの里は完全に隔離されていた

のである。真葛が原から、だけではない。祇園舎からその里に至る小道もあつたわけだが、人々は絶対にそこへは立ち入らなかつた。

そう、犬神人の里は、

あそこへは近寄つてはいけない！

と、誰もが口を揃えて言う、いわば『禁断の地』であつたからである。

無論、当時、この白らいという病は感染症としては認識されていなかったわけで、このように隔離されていた理由は、別にあった。それは、無論、当時の人々の常識では、そこが”穢れた”場所に他ならなかったからである。当時、穢れの思想を、人々がどこまで理解し、また持っていたのかということについては定かではない。僧侶についても同様である。

しかし、仏教における輪廻の思想と、因果応報の思想が、従来からあった民間信仰、あるいは神道思想としての”穢れ”といとも簡単に結びついたのは容易に想像できる。

即ち、実際は多くの仏教徒がこの病を”穢れた””忌まわしい””因果応報の現れ”としての”業病”と捉えていただろうと思われる。そして、民衆の多くが、白らいを病むことは仏罰の中でも最も重いものである、と信じて疑わなかったのである。

それは、新しい風を仏教界に送り込んだ法然一門内においても同様であった。

法然門下の僧の中にも、白らいと聞くだけで震え上がるものがあった。ここ吉水の里と隣接した祇園舎に、犬神人の集落があるということだけで、何か恐ろしい気分を持つ者も多かった。

「馬鹿なことを言う者には言わせておけ！」

そんな中、安樂は、さしたる恐怖の念を持つことも無かった。それは彼が、普段、鴨の河原で多くの、病者、貧者らと交わっていたからであろう。

彼は、一度住蓮に、こんなことを言ったことがある。

「なあ、住蓮。あの犬神人の里にも、一度説法に行ってみたいものだな」

「犬神人……」

住蓮は、犬神人と聞いて、時子のことをまず考えた。

安樂は、住蓮のそんな思いを当然察知していた。そして、彼の顔を覗き込むとさらにこう続けた。

「貴殿の恋人だった時子殿……。貴殿は毎日、彼女のために祈った

という……。無論、病を治すことは、難しいであろう。彼らの悲嘆、絶望に満ちた心の内は、到底我らが計り知ることの出来るものではない。しかし、我ら熱心に弥陀におすがりすれば、病の進行を遅らすことはひょっとして可能ではなからうか。あるいはよしんばそれが叶わぬというのであっても……」

と、言うとき、安樂は空を見上げ、

「往生は叶わなければなるまい！ そうであろう。弥陀の本願に、老若男女、身分の上下貴賤無し！ 念仏の功德に預かりさえすれば、たとえ悪人であっても往生は可能。しからば、白らいを病む者、因果の重なりにて今はそのような境遇にあるとしても、弥陀の本願を頼りにさえすれば、往生叶わぬことなどありえまい。違うか……」

と言つて、言葉を結んだ。

「彼らにも弥陀の本願を述べ伝えようというのか……」

住蓮は、この友の熱心さに脱帽した。

まことに安樂は、その布教の熱心さにおいては法然一門の弟子の中でも一、二を争つたであろう。ただ熱心さゆえにややもすると脱線することがあり、法然からお目玉を食らうことも度々であった。

そんな安樂の問いかけに、住蓮は大きく頷かざるを得なかった。

確かにそうだ

自分は病を治すことばかり考えていた。それは仏に祈っているように見えて、実は、自分の力で何とかしようと思つていたのだ。そして自分の力が及ばないと知ると、その責任を仏に擦り付けていたのだ。

人間の力で出来ることなど、所詮は限られているのだ

念仏を唱え、あとは弥陀の力に頼るしかない。もし弥陀の力がそれでも及ばぬというのであれば、それは自らの祈りが不十分なのだ。「重要なのは絶対他力であること……」

そんな安樂とのやり取りを思い出しながら、真葛が原の向こうにあるであろう犬神人の里に思いを馳せていると、住蓮の心に、ある一つの決意が芽生え始めて来た。

今、俺がすべきことは……

住蓮は空を見上げた。三日月の明かりが目眩しかった。続いて、彼は目を瞑って黙想した。その決意は次第に確固としたものとなり、住蓮の心をついに動かした。

彼は決断した。

行かねばならない！

目をかつと見開くと、彼は一步前へ進み出た。目の前には鬱蒼とした真葛が原が広がっている……。

この向こうへ、俺は行かねば！

住蓮は何のためらいも無く、救護所を後にして、真葛が原へと進んでいった。そこは道らしい道も無い。わずかに獣道らしきところを見つけると、そこから彼は茂みを手で払いのけながら、中に足を踏み入れた。すると、それまで輝いていた月が急に雲に隠されて、あたりは漆黒の闇となった。足元が覚束なかった。しかし、彼は、構わず奥へと進んだ。

目の前にはただ闇が広がっている……。

何度も躓いた。手も足も傷だらけになった。それでも構わず、彼はさらに奥へ進んだ。祇園舎へと向かう、だいたいの方向はわかる。気持ちの高ぶりは、不気味な暗黒の世界の恐怖に十分打ち勝った。

こうして茂みの中を突き進んでいくと、雑草の生い茂る向こうに、かがり火の明かりらしきものが見えた。

住蓮の心は躍った。

ついに来た！

この雑草の向こうに犬神人の集落が広がっていることに間違いはあるまい。

この向こうに時子がいる！

はやる心を抑えきることは出来なかった。彼は生い茂る雑草の中に、さらに足を踏み入れようとした。

と、その時であった……。

住蓮は自分の耳を疑った。

「あの調べは、……」

かなたから笛の音色が聞こえてきたのだ。それも何とも懐かしい響きの、笛の音……。それはたちまち住蓮に昔の思い出を蘇らせた。

左様、それは昔、近江の地で時子が得意としていた曲であった。

住蓮は最初は空耳かと思つて、思わず首を振つてしまった。

しかし笛の音色はますますはつきりと住蓮の耳に響いた。空耳ではない！

確かにはつきりとした笛の音色！

「あの調べは……」

それは、時子が得意とした曲、近江の国、馬渕の里で時子と住蓮、二人で夕暮れ琵琶湖の辺へ出かけては楽しいときを過ごした、そんな時に時子が愛用の笛でよく吹いてくれた曲であった。

無論、それは当時なら誰もが知っていた歌であり、ここ、都の賀茂の河原でも、時折誰かがこの曲を吹いているのを聴いたこともあった。もつともそのたびに彼は、時子のことを思い出しては悲しみにくれるばかりであったのだが。

今、しかし、ここで耳に届いてきた、この笛の音の主は……。住蓮の心を揺り動かすこの曲を奏でる、この笛の主は……。

「時子！ これは紛れも無く時子の笛の音！」

住蓮はそう確信すると、彼は立ち止まったまま、暫し、その笛の音に耳を傾けた。

すると、近江の国の思い出、懐かしさ、また悲しみが次から次へと走馬灯のように心に溢れ出し、彼の心を覆いつくした。いつしか知らず、目からは涙が溢れ出した。必死に声を抑えながらも、嗚咽に喉を詰まらせた。

琵琶湖の湖畔で、馬渕の里の川辺で、あるいは三上山の頂上で、何度も聞かされた、また時には二人して奏でた、あの曲……。そうだ！

この向こうに時子がいるのだ！



住蓮は、かがり火のある所まで辿り着きさえすれば、彼女に再開できると思うと、その喜びに胸を詰まらせながら、目の前に広がる茂みを、さらに奥へと、笛の音のする方向へ進もうとしたが……。

そこで、突然、彼はたとえ立ち止まった。

待て！

彼は逸る心を自制しながら、自分に言い聞かせた。彼の頭の中では、大原の里での応水の助言が何度も何度も反響していた。

住蓮、時子殿の気持ちにもなってみよ！

応水の助言、また軽率な行動は慎むという彼との約束を思い出して、住蓮は立ちすくんだまま、動けなくなった。ほとんど金縛りになったといってもよかった。

微動だに出来ず、立ち尽くしたまま、彼はようやく自分を取り戻すと、自らにこう言い聞かせた。

軽率な振る舞いはするまい！

今、会っても自己満足でしかない！時子にしてみれば、ますます辛さが増すだけだ！

彼は、笛の音のする方向へ一歩進むと、そこへしゃがみ込んだ。そして、しゃがみこむと、思い切り大声で泣いた。心の悲しみを吐き出そうと、声を振り絞って、彼は泣き続けた。

どれ位泣いただろう。漸く泣き止むと、彼は涙を拭って空を見上げた。

笛の音も止んでいた。まったくの静寂が辺りを支配していた。

すると、それまで雲に隠れていた月が再び姿を現した。悲しい彼の心を慰めるかのようにであった。

月に照らされた真葛が原の幽玄美を目にしながら、住蓮は引き返そう……。

と決意した。そして立ち上がって、踵を返したその時であった。

あれは？

住蓮の耳に今度は、風に乗って、女性のすすり泣くような声が聞こえてきた。はっきりとは分らない。しかし、しばらく耳を澄ま

していると、それは間違いなく、かがり火のある方向から風に乘つて聞こえて来る……。

時子が泣いているに違いない！

なぜか住蓮はそう確信した。理性ではない。本能がそう確信させたのである。

そして、しばらくその泣き声に耳を澄ましていたが、徐に腰に挿してある愛用の笛を取り出すと、

この笛の調べ、時子に届け！

と、念じながら、今度は自分が笛を吹き始めた。同じ調べである。昔を思い出しながら、住蓮は思いの全てを乗せるかのように、ただ一心に、笛を吹いた。

すると、どうしたところであろう！

かがり火のある方向からは、すすり泣きの声は止み、代わりに、再び先ほどの笛の音が聞こえて来た。

住蓮はその音を耳で確認すると、相手の笛の音に調子を合わせた。馬淵の里で二人調子を合わせて笛を吹いた、そんな昔のままだった。

いつしか目から涙が溢れてきた。彼はかまわず、ただ一心に笛を吹き続けた。その思いに応ずるかのように、先方からの笛の音色も、ますます力強く、住蓮の耳に届いてきた。

こうして、しばらく見事な合奏が続いた。真葛が原に美しい

笛の合奏の音がこだました。聞くものを魅了せずにはいられない、それは見事な演奏であつた。

空に浮かんだ月も、まるで、この二人の合奏を、もっとはつきりと自らの目で見たいかのように、その輝きを増した。そんな月明かりに照らされた住蓮の顔は涙でくしゃくしゃになっていた。恐らくは先方もそうであろう……。

住蓮は笛を吹きながら、

時子！

と、心の中で叫び続けていた。

本当にすまなかった。俺がそばにいてやれず、本当に、本当にすまなかった！

そんな思いを笛の音に託し、彼は全身全霊を込めて、笛を吹き続けた。すると、女性の笛の音がまた止んだ。

住蓮は、相手が 時子が再び泣いているのだ、と直感で感じた。すると、そんな彼女を励ますかのように、彼は一層力強く、笛を吹き続けた。

すると、まるでその励ましに応えるかのように、相手方の笛の演奏が再開された。

再び、見事な合奏が続いた。

真葛が原に響き渡る見事な笛の合奏！

耳あるものであれば聞け！この笛を通じて交わされた、二人の会話……。心ある者には彼らの会話がその耳に聞こえたであろう。

それはこうである……。

「時子！生きていてくれてよかった！」

「時実様ですか……。お久しゅうございます」

「時子、すまなかった。長く、お前を一人にってしまった。俺を許してくれ」

「何を仰いますか。私はこの里で、優しい仲間を支えられて生きています」

「そうか、それなら安心した」

「はい……」

「でも、時子」

「はい」

「これからは、俺も一緒だ。もう離れない。いつもそばにいる。だから、だから、辛い毎日だろうが、元気を出してくれ！」

「ありがとうございます。でも本当に心配なさらずに」

「お前と会えないのは辛いが、いつも私はそばにいる。この真葛が原の向こうに、目と鼻の先にな。寂しいときは、いつでも言ってくれ。その時は、このように俺は笛を吹きに来よう。そして昔を思い

出して、二人で笛を吹こう」

「わかりました。時実様、いや今は住蓮様なのですね。応水様から聞きました。出家して立派にお勤めを果たされていると……。ここ祇園舎にも吉水の上人様のお噂は伝わっております。ますます精進されて、いいお坊さんになってください」

「ありがとうございます、時子」

「住蓮様！」

かくして住蓮、時子の兩人は、ここ京の都でようやく再会を果たしたのである。

寿永四年（千百八十五年）一月に馬淵の里にて、二人が別れてから、今日、文治二年（千百八十六年）十一月に至るまで、ほぼ二年の月日が経過していた……。

無論、それは、笛を通して交わされた、心と心の再会、また魂の会話でしかなかったが、二人にはそれで十分であった。

いや、ほかにもこの二人を祝福する者達がいた……。

それは、真葛が原の雑草の中に潜む虫や、雑木に巢を作る鳥達……

……。彼らも、二人の笛の音に合わせて、楽しげに合唱を始めたのである。

悲しい運命に翻弄されたこの二人を慰めつつ、見事なこの自然と笛のオーケストラの演奏は、いつまでもいつまでも真葛が原に鳴り響いたのであった。

## 第一部第四十四章

ここ祇園舎の犬神人の里でも、時子の話はそろそろ結末を迎えようとしていた。

「そして、その後、暫くしてからです。あの方の熱心さに、そして真摯な態度に、私も最後には会うことを決めたのです」

時子はこうして、すべてを源太に語り終えると、大きくため息をついた。

「まことに数奇な物語よな……」

源太は、すべて納得できた満足で、大きく頷くと、

「おときさん、よう聞かせてくれた」

と、時子を労った。

「もうよいじゃろ、今日は早く休みなされ。明日もお勤めがある……。それにしても……」

と、そこまで言うと、源太は語気をここで強めた。

「その坊主の勇氣にはまこと、頭が下がる。いかに吉水の上人の弟子とはいえ、周囲からは嫌がらせも受けておるう。何せ、我々は、仏さんの教えでは、最も重い仏罰に当たった身、『穢れ』のかたまりみたいなものじゃからのう……。ははは」

源太はひとしきり、からからと笑うと、再び真顔に戻った。そして続けて、

「しかし、今まで、わしらのために、これほど骨を折ってくれた坊さんをわしは知らん。もう一人、あの安楽とかいう坊さんもだが……。まあ、しかし、もう少し効く薬を持ってきて欲しいものじゃが……。そうすれば、あの手糞な説法をもう少し聞いてやってもいいのだが……。ははは、まあ贅沢を言っではいかな。ともかく、今日はもう休みなされ」

と言うと、時子ににこりと微笑んだ。

時子は今までは頼りになる世話役としても、ある一定の距離を感じ

じていた源太の、やさしい言葉に思わず涙ぐんだ。それは久しく忘れていた父の温もりのようでもあった。彼女はそう感じると涙が止まらなかった。

「ありがとうございます」

と言うと、時子は彼に頭を下げた。

源太は、

「なんで頭を下げなさる。いや、あんたのお陰で、あの坊さんらが薬を持ってきてくれるようになったともいえる。ははは、わしら голову下げねばならぬ方じゃ」

と言つて、逆に時子に感謝の念を伝えた。

「おときさん。後白河法皇様が亡くなられて、わしらも大きい後ろ盾が無くなった。だからこそ、ますます、みんな力を併せて、頑張つて生き抜いて行かねば」

「はい」

時子は源太から励ましの言葉をもらいながらも、今日図らずも目にしてしまった兄の姿を思い浮かべると、心の中では、

兄上と会いたい！

という気持ちと、

しかし、今の私は兄のお荷物でしかない……。そんな今の私に、兄との再会など叶えられるはずもない！

という気持ちが交錯してやりきれない思いだった。それでも、その日、胸の思いを全て源太にぶちまけたことで、幾分かは安らぎを得て、彼女はようやく床に就いた。

しかし、なかなか寝付けなかった。運命に翻弄された過去を思い起こすことで、心が昂ってしまったことも無論あった。

しかし、咳が、実はここ一、二ヶ月続いていたのである。それは軽い咳なので、風邪がなかなか治らないぐらいにしか思っていなかったが、今夜は、床についてから、しつこくその咳が続いた。

何だろう

咳に悩まされながら、また、兄に自分の消息を伝えられないもとど

かしさに悶々としながらも、それでも、いつしか時子は眠りに落ちていた。

## 第一部第四十五章

吉水の里でも、信空と住蓮の会話は終焉を迎えようとしていた。  
「そうであつたか。応水殿が、大原に來られていたのであつたか……」

静寂の中、信空の部屋に彼の声が響いた。それに対して住蓮が答えた。

「左様でございます」

「それにしても、みずくさい。法然様に何の挨拶もせずとは」

信空が、半ば呆れ顔に言つた。住蓮がそれに応えた。

「応水様は、元來そのような方でございますから……」

「確かに……」

信空は、常に民を向いて行動する、かつての叡山での同門僧に心の中で応援を送つた。

「それにしても、住蓮」

「はい」

「よう、わかつた。祇園舎の女人の件……」

「はい」

ようやく、時子との今までの経緯を理解してもらえた、という安堵感で、住蓮は大きくここでため息をついた。

しかし、その和やかな雰囲気にならうかのように、信空が再び厳しい表情を見せた。そして、

「しかし最後に一つ、私から頼みがある」

と、住蓮の顔を覗き込んだ。

「はい？」

住蓮は、厳しい表情の信空から、頼みと言われて緊張した。少し間をおくと、信空は厳しい口調で語り始めた。

「今、われらが一門をとりまく状況を考えて欲しい」

「はい」



「後白河法皇崩御されて後、今、われらが後ろ盾となつただけなのは関白、九条兼実公のみじゃ」

「まことに」

住蓮は信空の言いたいことをよく理解していた。後白河法皇の後ろ盾無くして、ここまでの専修念仏の広がりはいえなかったという捉え方を、信空は周囲のものによく漏らしていたからである。

「われらが専修念仏の布教、もともと南都北嶺は快く思っておらんしたがって、後白河法皇亡き後、これから、ますます様々な嫌がらせをしてこよう。だから、くれぐれも行いを戒めて欲しい。結果的に法然様の迷惑になるようなことのないように、くれぐれも自戒してほしい、よいな！」

「はい」

住蓮は、そう答えながらも、信空が後ろ盾を後白河法皇や九条兼実のみに置いていることにやや違和感を持った。

われらが真の後ろ盾は、往生を求める無数のわれらが民の声！いや、それよりも何よりも、弥陀の本願そのものではないか！しかし、敢えて今、目の前に座る法然一門の高弟と言い争う気もなかった。

この方は、われら一門の行く末を心から案じておられるのだから

そんな思いに捉われていると、信空が咳払いをした。そして言った。

「では、夜も更けた……。ここまでとしよう」

「はい」

こうして、住蓮はようやく信空の部屋を後にした。

住蓮は自分の部屋に戻ると、床に就いた。胸に痞えていたものが取れた感じもあって、『今日は眠れるだろうか？』と幾分か期待もした。しかしいざ床に就くと、特に、今日時子から面会を断わられたことも気になって、心が昂ってなかなか眠れなかった。

結局いつものように眠れない夜を過ごした……。

その次の日、住蓮はいつものように目覚めると、昨日のことを思い出しつつも、朝の勤めの準備にかかった。

気持ちを切り替えねば

そう思いつつも、しかし、今朝は目覚めが悪く、また体も依然としてだるさが残り、疲労感が取り切れていなかった。

昨日、信空と遅くまで話をしていたことが、疲労のもつぱらの原因であったのは無論だが、時子と面会を拒否されたことが、心に大きい棘となって刺さっていたからである。それは自分でもよく分かっていた。

体の具合は大丈夫だろうか

そんなことを思っていると、部屋の外で安楽の声がした。

「住蓮、朝の勤めだ。本堂へ行こう」

「わかった。少し待ってくれ」

そう答えると、住蓮は疲れた体に鞭を打って、何とか身支度を整えると、部屋の外へ出た。安楽は笑顔で彼を迎えた。

「さあ、今日も頑張るとするか。すべては御仏のために、……」

と、軽妙な口調で話しかけてくる安楽に、

「安楽、そちはいつも、楽しそうにしている。その楽天的な性格が本当に羨ましい」

と、住蓮はとりあえず受け答えると、続けて

「ところで昨日の件だが、……」

と、安楽に昨日の信空との会話のやり取りについて報告を始めた。本堂へと連れ立って歩いてく途中、神妙な顔つきで、黙って一部始終を聞いていた安楽であったが、本堂まで来ると、

「また、その件は朝の勤めの後に……」

と、住蓮に告げると、先に本堂へ入った。住蓮も続いた。皆が集まってきた。昨日とほぼ同じ面々である。

念仏が修行の中心であるとはいえ、朝の勤めはそれなりに厳しいものだ。ましてや住蓮には、連日の六時礼賛興行の疲れの蓄積も重なっていたので、今日の勤めはいつもより一層体に堪えて感じられ

た。

さて、その朝の勤めが漸く終わって……。

早速安楽が話しかけてきた。

「昨日の話、詳しく聞かせてくれ」

「分かった」

住蓮は安楽と共に庭へ出た。人目につかないところへ来ると、住蓮は昨日の会合でいろいろと質問されたことを安楽に語って聞かせた。

「そうか……」

安楽は黙って聞いていたが、住蓮が語り終えたと、

「相当、風当たりが強くなってきたな」

と、厳しい表情で、独り言ともつかず言葉を発した。しかし生来、楽天的な性格の彼は、すぐに表情を和らげると、

「なに、我らは、仏の教えに導かれるままに、我らに与えられた勤めを果たすだけじゃ。のう、住蓮」

と、住蓮に、にこりと語りかけた。

安楽をよく知る住蓮であつたが、身内からも厳しい目で見られているという現実でさえ、さらりと流してしまうことの出来る、この楽天的性格にはただただ脱帽するばかりであつた。

「いやはや、安楽」

「どうした」

「貴殿のその楽天的性格、まことに感嘆に値するな」

「楽天的、そうか、自分では考えたことも無い。貴殿こそくよくよ考えすぎなのじゃ」

「そうだろうか」

安楽にそう言われると少し気分が軽くなったような気がしてきた。しかし、時子のことは……。

時子のことに思いが馳せると、住蓮は再び心が沈んだ。そんな住蓮の憂鬱な表情を安楽は見逃さなかった。

「何か、ほかに悩み事があるか」

「うむ」

住蓮は昨日、時子に面会を断られたことを安楽に語って聞かせた。面会が断られたのは再会後は初めてのことであったので、住蓮も戸惑ったのであった。

「そうか」

安楽は聞き終わると、しばらく目を瞑っていたが、

「二三日はそつとしておいてあげるのがよからう。病の具合が悪いのやもしれんが……。ただの風邪かもしれん。それに誰でも気分が塞ぐこともあるう。あせらず様子を見るのがよからうと思うが」

と、住蓮を諭した。

「そうだな」

気分が塞ぐ、住蓮も、友人にそう言われて一先ずは納得したが、すぐに別の不安が頭を過ぎった。

「しかし、病の具合が悪いのであれば、……安楽、その時は、よい薬があるのか」

こう問われて安楽は少し戸惑った表情を見せた。

沈黙が続いた。

よい薬、……そんなものがあるうはずも無い。そのことはお互いによく承知しているはずだ。それは住蓮も承知の上で尋ねているのである。

安楽がその沈黙を破って言った。

「努力はする。知り合いの薬師にまた当たってみるし、……住蓮、貴殿と時子殿のためだ、わしは出来る限りの努力をする。だから、諦めるな。気をしっかり持て。わかったな。貴殿が弱気になれば時子殿まで弱気になってしまう。病と闘うのに最も大切なことは、気を強く持つことだ。無論、御仏のお力にも縋らねばならないのは言うまでも無いが、……」

「わかった」

信頼する友人に励まされて、住蓮は幾分か心のもやもやが晴れるのを感じた。

「では、今日も参るとするか。大和入道が引導寺で首を長くして待っておりう」

安樂は住蓮を促した。先に歩き始めると、やおら体を少し揺らしながら、同時に即興で歌を謡い始めた。

「いざいかんー、引導寺へ我ら、ただ御仏のー、願いに縋る、南無阿弥ー陀仏」

謡い終わると、振り向いて住蓮ににこりと微笑んだ。そして、

「今日も、多くの民が待つておる。頑張ろう」

と、言葉を続けた。

「まことに」

住蓮は体に力が沸いてくるのを感じた。

我らを待つてくれている多くの民がいる、まことにその通りだ。弥陀の本願の有難さを、いよいよもつと多くの人に伝えねばならぬ。個人的な感傷に浸ってはおられぬ！

そう、自分に言い聞かせると、住蓮は安樂の後に続いた。

そうして、救護所のところまで来ると、先をゆく安樂が、

「救護所に忘れ物があるゆえ立ち寄る。貴殿は先に行つてくれ」

と言つて、そこで住蓮と別れた。

「わかった」

と言うと、住蓮は引導寺へと向かい、その歩みを速めた。祇園舎の横を通り過ぎ、いつもの道を歩く。

ところが、ようやく引導寺が向こうに見え始めた頃である……。

後ろから、突如、安樂の大声がした。

「住蓮、たいへんだ！」

安樂の大声に振り向くと、彼のただならぬ様子に、住蓮も、急いで、安樂のもとへ駆け寄つた。

「どうした？」

安樂の蒼ざめた顔から、大変なことが何か起こったことは間違いないと、容易に想像できた。

「大変じゃ、時子殿が、時子殿が……。祇園舎から急ぎの文が来た

！」

時子、という名前を聞いて、今度は住蓮の顔が蒼ざめた。思わず彼は叫んだ。

「時子がどうしたというのだ！」

安樂が声を振り絞って、手に持った手紙の内容を伝えた。

「時子殿が、血を吐いて倒れたというのだ！」

「何と！」

住蓮は、あまりのショックに倒れそうになった。

安樂はそんな住蓮を支えながら、

「住蓮、とにかくにも急いで行ってみよう！」

と言うと、駆け出した。安樂に促されるまでも無く、住蓮も走り出した。

二人は元来た道を引き返した。

急げ、祇園舎へ！

二人は全力で駆けた。

建久三年、千百九十二年、時子と再会を果たしてから六年が経過していた。その年の師走の今日、この日、住蓮に大きい運命の転換点を訪れようとしていた。（第一部終わり）

## 第二部第一章

建久十一年（正治二年）（千二百年）、慈円が天台座主の地位を追われてはや四年の月日が過ぎた。

はるか東の方角に比叡山が見える。慈円は座主辞任後、ここ西山に拠点を移して、日々再興のための計略をめぐらす毎日であった。

それにしても情けないことよ！

天台座主就任前の時代を過ごした青蓮院が懐かしかった。由緒ある門蹟寺院である。都にも近く、多くの貴人達が挨拶に来たものだった。当時は、座主就任を確実視され、上げ潮の時でもあり、すべては順風満帆であった。

しかし、あの頃と比べて、今の……。

何と、この落ちぶれようであるか！

都から離れた、この西山の寂しい庵には、訪ねて来る人として殆ど無い。今年の冬も寒さは厳しそうであった。

そんなある日、慈円のもとへ都より一人の人物が訪れた。

僧衣姿のその人物は、応対に出た慈円の弟子に来訪の用件を伝えた。

「尊長でござる。慈円様にお目通り願いたく、参上いたした次第……」

弟子は、早速この来客の知らせを、慈円の下へ届けに来た。

「何、尊長が、か……」

尊長、と聞いて慈円はひどく複雑な思いになった。

それには事情があった……。

尊長と名乗る人物、彼は、今や朝廷の再興権力者たる後鳥羽上皇に仕える祈祷僧の一人として、権勢を都に振るっていた。

とはいうものの、実はかつては慈円の弟子であった僧である。

いや、正確に言つと、今でも、彼は身分上は慈円の弟子と言えた。上皇に仕えるとは言つても、地位は少僧都に過ぎない。天台に僧籍

がある以上、慈円から見れば、はるか下の階位に属する僧でしかなかった。

ところが、ある歌合せの会の時であつた。後鳥羽上皇が身近に祈祷僧を置くに当たつて、慈円にも、誰か適当なものを推挙して欲しいと言つて来たのである。

慈円の頭にはすぐに尊長の名が浮かんだ。まだ若い、叡山の中でも、特に加持祈祷に優れた才能を持ち、慈円が仏法による国家護持に力を入れていたこともあつて、慈円が座主の時代、常日ごろから目をかけていたのである。

彼の父は一条能保、母は源頼朝の妹である。血筋も問題なかった。そこで慈円は、上皇の機嫌をとるためにと考えて、比叡山、延暦寺より彼を呼び寄せ、上皇に推挙したのであつた。自分の弟子が上皇の身近にいれば、何かと都合のよいこともあるう、という慈円一流の策略とも言えた。

ところが、である。

「上皇様のお気に入りとなつた途端、わしの元へは顔を出さんようになつておつたくせに……」

左様、上皇に仕えることとなつた尊長は、上皇の信頼を得ると、次第に、上皇にのみ忠誠を尽くすようになり、慈円から一定の距離を置くようになってしまったのであつた。

さすがの慈円にもこの展開は予測できなかった。しかし、後悔先に立たずである。

「客間にて待たせておくように」

もはや、相手方の意のままに動くこととなつた者の機嫌までとる必要はあるまい、という慈円の気持ちではあつた。

そうして、彼を待たせている間、慈円は座主辞任の頃の慌しい月日を思い起こしていた。

慈円の座主辞任は止むを得ない事情によつた。

無論、慈円に落ち度があつたのではない。

建久七年（千百九十六年）の政変が原因である。即ち、この年の



十一月に源通親一派が、敵対する九条兼実一派を宮廷より追放、慈円の兄である九条兼実は関白職を罷免させられたのである。

朝廷内での力関係は、すぐに比叡山内での力関係に反映される。

慈円が天台座主を辞したのも、こういう事情によった。

そんな苦い思い出を噛み締めつつ、

「ふー」

と、溜息をつく、慈円はようやく立ち上がり、客間へと歩み始めた。

「尊長のやつ、どんな顔をぶらさげて、私と面会するつもりか、さて、楽しみではある」

廊下から見える外の冬景色、それは見渡す限り、森、森、森……。

――都から隔絶されたこの西山、今でこそ美しい、と思えるようになったが、比叡山から降りてここへ来たときには、なんともおどろおどろしく思えた。

天狗の住処にしか見えなかったのだ。その寂しさに耐えて、自分はそれでも、何とか上皇と繋がりを持ちつつ、ここで再起を図っている。

座主になる前は、人の二倍三倍の学問に励んだ。それでも、座主になったときには、「兄の兼実の力のおかげよ」

と陰口をたたかれた。

しかし、彼は意に関しなかった。

「持てる力は利用すればよいのだ」

これが彼の持論であった。尊長もまだまだ利用出来るはず……。

「弱気になつてはいかん」

自分に向かって、

「喝！」

と言い聞かせると、客間近くまで来たときには、威風堂々いつもの自信に満ちた表情を取り戻していた。そして尊長と面会すべく、客間に入った。

## 第二部第二章

この頃の時代背景は真に複雑であつた。

建久九年（千百九十八年）兼実一派の追放により、勢力を増した源通親一派は、強力な摂関政治体制を目指した。そして、鎌倉幕府も少なくとも表面上は、頼朝と兼実との間の蜜月時代とは比べようも無いが、この公家政権との融和政策をとり続けた。

ところが、正治元年一月（千百九十九年）源頼朝が死去し、鎌倉幕府の体制が揺らぎ始めるや、通親らの築いた摂関体制に待ったをかけるように今度は後鳥羽天皇が密かに動き出した。彼はこの混乱の間隙について、天皇親政体制の実現のための足がかりを築き始めたのである。

即ち、彼は突如、土御門天皇を強引に即位させるや、自らは上皇となり、院政を敷いたのである。こうして強力な院政政治を自ら司ることで、摂関を始め、天皇周辺の公家を政治から遠ざけようとしたのであつた。

「後白河の後は、間違いなく後鳥羽の世……」

慈円はそんな後鳥羽院の政治への執着を、いち早く見抜いていた。だからこそ、愛弟子の尊長を上皇の求めに応じ、祈祷僧として推挙もしたのだ。そこには、まだ若き上皇を、出来る限り、暴走させず、自分の管制下に置いておきたい、という思いが根底にあつたのである。

「すべては、この国家の護持のため……」

慈円は、決して自らの保身のみを考えて行動していたわけでは無い。少なくとも彼は自身そう確信していた。彼の考えの根底にはいつもこの「国家護持」の考えがあつたからである。その観点から見れば、後鳥羽院の昨今の動きは、危険な匂いを漂わせていた。

まかり間違つと、また、この日の本の国を、混乱に落としかねない……。

尊長の待つ部屋へ向かいながら、慈円の頭の中を、ふとそんな不安が過ぎった。

「後鳥羽院の昨今の動き、気になるところでは……」

すぐに客間に到着した。この襖の向こうに、その彼がいる。慈円は身ずまいを正すと、胸をはり、一気に襖を開けた。

「尊長、久しぶりであるな」

慈円は部屋に入るや、開口一番わざと大きい声で呼びかけた。

無論、彼があくまでも上皇からの使者という名目であれば、本来このような振る舞いは許されない。

しかし、上皇からの使者として、正式な文書を携えて来たわけではないらしい。しかも、互いに天台の僧籍を離れていない以上、尊長は自分の弟子に過ぎない。

弟子が自分を訪ねてきたに過ぎないのであれば……。何も卑屈な態度を取らねばならぬ理由は無い。そこで、彼に先制攻撃を加えたのであった。

「慈円様もご機嫌麗しゅうようで……」

一喝されるかのような大きい声で先制攻撃を加えられた尊長は、このように返事するしかなかった。

尊長 端正な顔つきではあったが、ぎよろぎよると絶えず周囲を見回す目は、彼の神経質な性格を窺わせた。しかし彼の頭のよさは叡山でも一二を争うものであった。特に天体の動きから吉兆を判断する能力はずば抜けていて、そんな彼を当時、慈円は高く評価して引き立てていたのである。

慈円は彼に対して、この先制攻撃が成功したのを見ると、

「で、何用か」

と、さらにこの弟子にたたみかけるように問いかけた。

「はい……」

と少し言葉を濁すと、誰もいないのを確認するかのように尊長は周囲を見回した。そして、その確認が終わると、言葉を続けた。

「実は上皇様に置かれましては、慈円様に一つ頼みがあると……」

慈円は、上皇からの頼み、と聞いて少し緊張した。

今度は、私に何をしろというお考えか？

と、思いつつも、努めて平静を装うと、彼は返答した。

「ふむ。して、上皇様からの頼みとあれば、この慈円、出来る限りのことをせねばならんが。それはどのようなことか」

尊長は少しにじり寄ると、慈円との距離を縮めた。そして声を潜めて、

「先日、慈円様の使者として御所に遣わされた、佐々木盛高という武士でございますが、上皇様がその者をひどくお気に召されまして……」

と、そこまで言うと、話を中断して、慈円の反応を確かめるかのように、彼の顔を覗き込んだ。

佐々木盛高、確かに、あの者、先日御所に遣わしたが……。

盛高は、慈円が叡山を降りた後も、彼と行動を共にし、この西山の里で慈円の護衛役を相変わらず務めていたのであった。

「ふむ。して……」

慈円は、思わぬ方向に話が展開したことに戸惑いを感じながらも、相変わらず平静を装うと、尊長を促した。

尊長は、もう一度周囲を見回すと、さらに声を潜めて、

「上皇様は……。上皇様は、慈円様にさえ異存が無ければ、その者の院の北面の武士として召抱えたいと仰せなのです」

と言うと、元の場所に戻り、襟を正した。

ここまで一気に言うと、尊長は

これは上皇様からのいいつけであり、私はその使者であるぞ！

と、まるで慈円を威嚇するかのように、そのぎょろつとした目で慈円をもって睨みつけた。

慈円は、この尊長の態度に不快感を隠せなかった。しかし、それ以上に、上皇の願いごとの内容を聞いてひどく驚いてしまった。

最近、北面の武士を盛んに集めておられる、という噂は真であつたか。

しかし、まさか、自分の護衛に目をつけて、わざわざそれを横取りせんばかりに、召抱えようとは……。慈円の疑問は率直なものと言えた。

北面の武士は、本来、ある意味形式的な武士集団でしかなく、貴族の子弟が召抱えられることが多かった。護衛をするとは名ばかりで、戦になれば役に立たない者の集団とも言えた。実際、後白河法皇が、その院所を木曾義仲に襲われ、幽閉されてしまった際も、法王直属の北面の武士達は全く無力であり、義仲の軍にいと容易に蹂躪されてしまったのである。

後鳥羽院は、本物の職業軍人を集めておられるという噂はまことであつたか？

慈円の心は騒いだ。

一体何をお考えか？

しかし詮索をいくらしたところで、命令とあらば止む終えない。

「異存などあるうはずがない」

慈円はそう言うのと、席を立った。そうしながらも、最後にはわざと尊長を見下ろしながら、こう言った。

「上皇様に伝えられよ。承知しました、と」

そう伝えると、慈円は尊長に後姿を見せたまま、襖を開けると、そのまま部屋を出た。

尊長との面会はどうして呆気なく終わった。

何とか、慈円の優位なまま……。

しかし……。

尊長へはかろうじて優位感を保てたが、しかし……。

上皇様、一体何をお考えか！

噂はかねてから耳に入っていた。最近の、この北面の武士の補強は、表面上は身辺警護のためであるとも称されていた。

しかし、公家の息子ばかりではない。むしろ明らかな職業軍人を多く集めている、との噂であつた。

何に備えようとなされているのか？

そんなことを自問自答しているうちに、慈円の心の不安感は次第に大きくなっていった。

「上皇様、最近、祈祷僧を多く集め、密かに鎌倉幕府の調伏を、朝に夕にさせておられるという、専らの噂じゃ……」

そんな物騒な噂までうちうち広がっている……。

慈円は天を仰いで呟いた。

「まさか、上皇様、まさか……」

しかし、そこまで言うつと、あわてて口を噤んだ。そして思わず、辺りを見回した。慈円の心はいっそう騒いだ。

上皇様、保元の乱、平治の乱の顛末を、まさかもうお忘れか？  
慈円はぶるぶるっと体を振るわせた。

いや、しかし、いかに血氣盛ん、天衣無縫の性格の上皇様といえど、まさかそんな無謀なことを考えてはおられまい！

そう、自分に言い聞かせて、ようやく心の平静さを取り戻した慈円ではあった。彼は、安堵のため息をつくつと、急いで自分の部屋へ戻った。

その日の夜、慈円は、後鳥羽院の真意を測りかねて、なかなか寝付けなかった。

漸く眠りに落ちたものの、今度は悪夢ににうなされた……。

夢の中で人々が争っている。殺し合いである。一群の人々は法然を頭として、口々に「南無阿弥陀仏」と唱えている。戦っている相手は南都北嶺の衆徒、堂衆、そして一部武装化した僧兵達である。そこへ駆けつけたのは東国の武士達であった。しかし彼らはそれを制止するどころか、そこへ加わって、一緒に殺しあい始めた。そして、それを笑いながら見守る後鳥羽院がいる……。

そして、なんと、実は、彼らの背後には天狗がいて、そんな彼らの殺し合いを操っているのである！

何としたことが！

なんとかしなければ！と、慈円は天狗を相手に戦った。相手は手ごわかった。慈円の得意とする呪法も功を奏しない。

ああ！

天狗に食われそうになった、そのところで、慈円ははっと目がさめた。

「夢か……」

全身にびっしょり汗をかいていた。

「天狗の仕業か。――ならば、それでよし。天狗何するものぞ！天台一門の力で、見事天狗を都から追い払って見せようとも！」

慈円はそう自らに言い聞かせながら、汗を拭くと、その決意を胸に、再び床に就いた。

## 第二部第三章

次の日、慈円は晴れない心のままではあったが、早速、盛高を呼ぶように弟子に命じた。

上皇様の願い、と言ってもほぼ命令である。早速盛高に申し付けねばならなかった。

無論、無条件に差し出すつもりは無かった。盛高は自分への忠誠心が高い。彼には、御所の内部の様子を、出来れば自分に適宜報告するよう、釘をさすつもりであった。

尊長を送り込んだつもりが、相手方に組み入れられてしまったことの反省からである。

慈円は、実は尊長の件以前にも同様の失敗をしていた。律師隆寛の一件である。

天台座主に就任したころ、法然の専修念仏の広がりにより危機感を覚えた彼は、法然の教えに理解を示す隆寛にたまたま目をつけた。そして慈円は、彼をわざと、長樂寺に外向かせることにした。勤めのため、として定期的にである。

長樂寺は天台の寺であったが、法然が居を構える吉水の庵とは隣りあわせの距離であった。つまり、法然の身近に弟子を派遣すること、法然一門の情報を収集しようとしたのであった。

ところがこれも失敗に終わった。

こともあろうに、数カ月後隆寛は法然の弟子となってしまう。一応天台に籍を置いたままではあったが、専修念仏の信奉者となってしまうのである。

部屋から、東の方角を見やると、遠くに都が一望できる。さらにその向こうには比叡山も……。

比叡山を見ているうちに、心に晴れ間がさして来るのを感じた。天台は彼の力の源であった。

何としても、あそこへ戻らねば！



慈円はそう決意を新たにすると、体にエネルギーが沸き起こるのを感じた。

天台こそが、この国の未来を救えるのだ。そして……

慈円は、いつも自分にこう言い聞かせるのである。

天台を立て直せるのは自分しかないのだから！

こうして盛高の来訪を待ちながら、彼が未来への展望を心の中で膨らませていると、

「盛高様、おいでです」

という弟子の声に慈円ははっと我に返った。

「中へ……」

慈円は盛高を招き入れると、早速用件を伝えた。

「盛高、実は……」

慈円は淡々と、昨日の話を伝えた。

百戦錬磨、さすがの盛高も、後鳥羽院に仕えるようにと、慈円から言われた瞬間は、その話がにわかには信じられないようであった。

「北面の武士でございますか」

思わず慈円に問い返した。

「左様じゃ」

慈円は盛高を諭すように続けた。

「しかし、北面の武士に、私のような家柄の者が……」

と、ここまで言っていると、盛高は慈円から言葉を遮られた。

「盛高！そこじゃ。大切なのは……」

慈円には珍しい厳しい口調であった。

「はっ？」

盛高は何のことか合点が行かず不審な面持ちでいた。

慈円が、厳しい口調のまま続けた。

「おぬしは由緒正しき近江、佐々木源氏の血を継いでいるのである  
う！」

「はい、まことに……」

「では、そのこと、なぜもっと誇りに思わぬか！」

「誇りに……」

「そうじゃ！」

と、そこまで言うと、慈円は一息ついた。そして、今度は優しい口調でさらに語り続けた。

「盛高」

「はい」

「おぬしが、両親の仇を探して居ることは前から承知してある」  
ずばり単刀直入に、こう言われて、盛高は、どう返答してよいものか分からず、やむなく黙っていた。

慈円がさらに畳み掛けた。

「でも、まだ見つからぬ、――いや噂で聞いたところでは、もう死んでしまったとか……」

盛高の目にうつすらと涙が浮かび始めた。当然、無念の涙である。  
「まことに仰せのとおりで……」

と、ようやく返答すると、盛高は言葉を詰まらせた。胸に悔しさと悲しさが込み上げたのだ。

時実を捜し求めて数年……。時間があれば都中を駆け回った。

漠然とした噂が多い中、近江から来た流れ者が、鴨川の河原で酒びたりになっている、そいつは元は坊主だったらしい、という噂を聞いたときは、鴨の河原まで飛んでいった。

鴨の河原に、しかし、時実の姿は探せど探せど見つけれなかった。

そこで多くの河原者から聞いた話では、その男はある日、突然姿を消したということだった。死んでしまったのかどうか、誰もその後を知らないという。

聞き込みを重ねるにつれ、この話はかなり確かであるらしいことが分かった。男が近江の国、馬淵の里の出身であることを誰かに告げていたからである。また笛の吹き手としてもなかなかのものだったという。

「まず時実に違いあるまい！」

盛高は、その男がもう死んでしまったかもしれない、ということ  
を聞いても、

「もしそうなら、当然の報い！」

と思いはしたものの、

「やつの生死がはつきり分からぬ限り、わしの心は晴れることは無  
い」

と、その後も機会があれば都へ足を運んでいたのであった。

慈円が天台座主を辞して、この西山に居を構えた後も、同様であ  
った。

見つからぬ、仇の姿に苛立つ毎日が続く……。

そんな盛高の心中を察したのか、慈円はさらに優しく言葉を持  
続した。

「しかし、考えてもみよ。仇を探すのも大事ではあるが、おぬしに  
はもう一つ大事なことがあるはずじゃ」

大事なこと？……。

返答に困って、盛高は黙ったままだったが、すると、慈円がきつ  
ぱりとした口調で畳み掛けた。

「わからぬか、それは近江佐々木家の再興ではないか！」

近江源氏、佐々木家の再興！

慈円に言われて、盛高は目から鱗が落ちたような気がした。確か  
に、佐々木家を継ぐ自分は、不名誉な両親の死という不幸を乗り越  
え、さらには佐々木家の名誉を挽回しなければならぬ使命を背負  
っているのだ。

動揺している盛高に、さらに慈円が畳み掛けた。

「いつまでも見つからぬ、いやあるいは既に死んでいるかも知れぬ  
仇を求めることに己が半生を費やすつもりか！」

もはや、盛高に返す言葉は無かった。

慈円はそんな盛高の反応を見て、最後にこう締めくくった。

「近江佐々木家の再興のためには、この後鳥羽院様よりの話、まこ  
とそちに好都合な話ではないか」

まことに的をついた話ではあった。

慈円にここまで勧められるまでもなく、そもそも後鳥羽院よりの命とあれば、断れる状況でもなかった。

院所でのお勤めとなると、仇探しもはや、叶うまい……。

もう潮時なのかも……。

そう考えると、なぜか心も少し晴れてきた。

「では、ありがたく……」

と、応諾した。

「よろしい、よろしい……」

と、慈円は大きく頷くと、次に、やや前かがみになると、声を少し潜め、最後に盛高にこう告げるのを忘れなかった。

「上皇様に召抱えられた後も、ときどきは、私のもと訪ねて、何かと、都の話でもしてほしい！」

盛高の忠誠心に訴える戦略であつた。

御所の中の真の様子、これで、ある程度窺えよう

慈円の策略家の本領発揮と言えた。盛高は簡単に了解した。

「無論です。慈円様への御恩、決して忘れられるものではございません。まことにありがとうございます。この恩忘れませぬ！」

盛高の元気な返事に、慈円は機嫌をよくした。彼は姿勢を元に戻すと、最後にこう締めくくった。

「では、盛高、頼んだぞ」

「はは！」

ふと、東のほうを見やると、彼の視線の先には東山連峰があつた。左様、この西山の対極のその東山に、今、法然一門が一大拠点を作っている。そして今やその勢いは天台にとつてもはや無視できる存在ではなくなっていた。

しかも最近気になる噂を聞いていた。

法然がすでに「選択本願念仏集」なるものを弟子に口述させて、一部の者達に配布していると言う。

そして、その本の中では、彼は念仏以外の行はすべて仏の教えに

おいて重要なものではないと、言い切っているというのである。

慈円は何とかその本を手にしようと努力したが、未だに手に入らない。

いらいらは日毎募っていた。

そんな慈円の心に一つの考えが浮かんだ。

明日は叡山の真性のもとを、久々に訪れてみるとしよう。

法然一門の最近の動き、急ぎ知っておかねば、との思いが急速に膨らんだのである。

「盛高、最後の勤めを明日、頼もうか」

「はは……」

「叡山まで同行してもらおう。久しぶりじゃ。昨今の都の治安も良くないと聞いておるしの」

「承知しました！」

と言つて、部屋を出る盛高の後姿を見送りながらも、慈円は、後鳥羽院、法然一門、と、勢力を拡大する彼らの管制役が努まるのは、自分しかいない、という大いなる自負心で、自らの心を慰めるのであった。

## 第二部第四章

慈円から、後鳥羽上皇の下で働くよう申し渡された日から、一週間後……。

盛高は朝早く西山を発った。目指すは後鳥羽院の御所である。

「お勤めをしっかりと果たすように」

と、慈円より餞の言葉をもらうと、さすがの盛高も少し涙ぐんでしまった。

どこまでも続く竹藪……。最初来た時は、とんでもない所だと思ったものだ。猪を相手に弓矢の練習に明け暮れた。それも、いつか「仇をこの手で！」と思い続けてのことだった。

しかし、それも、昨日の慈円の叱責で幾分か思いなおせるようにはなった。

近江佐々木家の再興……。

その言葉を噛み締めながら、彼は東へ進んだ。

桂川を渡った。西の京極までもうわずかである。戦乱、大火、地震で荒れ果てた都はようやく少しずつ活力を取り戻しつつあったが、この西側に関しては完全に立ち遅れていた。

桂川にも死体が散乱していた。愛宕の山の方角にも、また、南へ向けると久世のあたりからも火葬の煙がもくもくと立ち昇っている。

何も変わってはいない……。

そんな鑑賞に浸りながら、馬に揺られること小一時間、院の御所に着いた盛高は、あらたにあてがわれた部屋へ通されると、早速必要なものを一通り支給されるや、命じられるまま北面の武士の装束に着替えた。

そして、さらに

「そのまま待つように」

と命じられると、部屋でそのまま待機させられた。

何とも不思議な気持ちであった。

過去の思い出が、心の中を、走馬灯のように駆け巡った。

本来なら、木曾義仲都落ちの際に、落ち武者として命を失っていても不思議ではなかった。

慈円がそれを救ってくれたとも言える。

そして、今……。

後鳥羽院から北面の武士として召抱えられようとしている。

人も羨む栄達振りと言えた。

慈円からの別れの言葉が再び脳裏に木霊した。

「佐々木家の再興こそが、御身に課せられた重大な使命ではないか」

確かにそうだ！

思わず武者震いした。

何としても佐々木家の再興を成し遂げねば！

心で再三、こう自らに言い聞かせながら、気を引き締めて、待つこと暫く……。

「防鴨河使長官、三浦秀能殿お目通りであるぞ！」

との声で、はっと我に返った。

一瞬、防鴨河使長官、と聞かされても、盛高はそれがさっぱり何のことか分からなかった。

後日聞いたところでは、天皇直属の元、検非違使の下で鴨川の治水、河原者の統制などを仕事として本来働くものであるが、後鳥羽院は、これを上皇の院内に置いて、上皇直属下に命令を授けるようになったのだという。

「長官殿、ただいま参られました！」

襖の開く音がした。盛高は反射的に、

「はは！」

と言うと、深く頭を下げた。

どんな、精悍な顔つきの武士であろうか

盛高は逸る鼓動を抑えられなかった。しかし命ぜられるまでは頭を起こすことは出来ない……。

しばらく沈黙が続いた。相手も初対面で緊張しているのだろうか

？そんなことを考えていると、突然相手の声で沈黙が破られた。

「よろしい、頭を上げよ！」

思ったより若い長官の声に、盛高は内心驚きつつも、失礼の無いようにと、顔をそろりと上げた。

その瞬間、盛高は自分の目を疑った。

というのも……。

目の前にいたのは、まだ二十歳そこそこの紅顔の美青年であったからである。

何と、まだ、少年ではないか！

そう、思つて、周囲を見回すと、部下の者達であろうか。彼の周りに揃つたいずれの武士達も、同じ位の歳の青年ばかりであつた。

皆、貴族上がりの者たちか？

盛高は呆れてしまった。

これでは戦にならぬ！

どの武者も、戦になればまず役に立ちそうに無いことは、誰の目にも明らかであつた。

ここに至つて、彼は自分が召抱えられた理由がようやく分かつた。

後鳥羽院は本物の職業軍人を探しておられるのだ

それで、合点がいった。先日、慈円の用事で、自分がここへ来た折、後鳥羽院がたまたま自分を目にして、

「あの者、是非とも近くに置いておきたい」

と、側近の尊長に命じたのだという。

自分なら役にたつと思われたのか？

しかし、一体、誰と？まさか本当に戦でもされるおつもりか？

そこまで考えると、しかし、盛高はそれ以上の詮索は止めた。それが、職業軍人として生き残る道なのだ、ということを、彼は身をもつて体験してきていたからである。

武士は与えられた命令をただひたすら遂行するのみなのだ！

そんな盛高の心の動揺を察知したのか、秀能はやや言葉を和らげてこう切り出した。



「噂には聞いておる。そちの活躍ぶりは……。ともかくも今日より、私の部下として働いてもらう」

盛高は

「はは！」

と、大きい声で返事をする、それでも最大限の敬意を表すべく、深く頭を下げると、そのまま頭を上げなかった。

この盛高の態度に、秀能はいたく感動して、さらにねぎらいの言葉が続けた。

「頼もしいかぎりだ……。そうだ、早速だが本日、鴨の河原の現状視察に参る。無論、放免どもも連れてな。上皇様は、昨今の都の治安の悪化にひどく心を痛められておる。特に東京極の向こう、鴨の河原者達が屯するところ、一部は悪人どもの巢窟となっておる。どうだ？早速同行してもらうこととしようか」

そう、命じると、秀能は立ち上がった。

行動力はあるらしい

盛高はこの若い武者の熱血振りを早くも感じ取っていた。

これも、上皇様に気に入られんがためか

盛高はそこまで思いを馳せると、またもや、そこで思考を止めた。

余計な詮索はすまい！

心を引き締めると、盛高は

「承知しました」

と、返事をし、立ち上がった。

「それでは参ろう」

秀能の号令一下、周囲の武士達も立ち上がった。

若い武士集団の最後尾に付いて歩きながら、盛高は自分の行く末に漠然とした不安を抱きつつも、

「上皇様のために、己が出来ること、身命を賭して全てしなければなるまい！」

と、決意を新たにするのであった。

## 第二部第五章

こうして、盛高を後鳥羽上皇に差し出した慈円であったが、一方で着々と自身の復権のために策略をめぐらしていた。

そして、そんな策略の第一手として彼が選んだのは比叡山訪問であった……。

盛高が院の御所で、慣れない宮仕えの仕事にあわただしい毎日をお過ごし始めることとなって間もないある日……。

ここ比叡山に慈円の姿があった。

慈円と席を共にしているのは新しく天台座主となった真性である。「真性、久しぶりであるな」

声をかけられた真性は、自身こそ慈円よりも立派な身なりであったが、この師には頭が上がらないということを正に態度で示さんかのように、

「はは」

と言うと、深く慈円に向かって頭を下げた。

慈円は弟子の真摯な態度にご機嫌であった。

この者、忠義を理解するものではある。やはり自分の見立てに間違いは無かった！

真性 建久十一年（千二百年）、彼は慈円が座主を退いた後、座主となった。もともとは慈円の弟子である。

しかしいくらかつての弟子とは言え、今や身分は逆転している。

真性はその気になれば慈円と対等に座を共にすることも可能であった。

しかし、彼はそうしなかった……。

いや、出来なかった、と言ったほうが正確だろう。

そこが慈円の、さすがに賢いと言えるところであった。座主を退いた際の辞し方が見事であったというべきか。すなわち……。

彼は、自らの持つ情報網から、兄、兼実が宮廷より近い将来追放されるであろうことを十分予知していた。

無論、その折には自分の天台での地位も危ういものとなることも……。

そこで、兄兼実の失脚が避けられないと知るや、自らの息のかかった弟子の真性に座主の位を進んで譲り、人里離れた西山の隠居に自ら進んで逃れたのである。

本来なら東山の格式高き青蓮院に戻り、そこへ籠るところだが、そこを、敢えて避けて、鄙びた西山へ行つたのだった。

つまり、自分は辞めさせられたのではない、あくまでも自ら、引退、禅譲しただけに過ぎないという形を取ったのである。

無論、引退後も真性とは手紙のやり取りをして、情報を交換していた。こうして、彼は着々と、自らの復権の道を探っていたのである。

「上皇様とも相変わらず、歌会で会われておいでですか」

真性の問いに、慈円はにやりとほくそえんだ。

後鳥羽上皇との親交　自らの復権を容易にするための、別の方策、いや切り札と言えたかもしれない。

慈円には、弟子の真性には真似の出来ない才能があつた。　歌である。

この才能があるお陰で、後鳥羽上皇とも盛んに会う機会を作れたのである。

即ち、盛んに和歌を詠む会を開いては、歌仲間の上皇と会話を交わす機会を設けていたのであつた。

無論、それにより上皇の信任を得、さらにはそれを足がかりに座主への復権を目論んだのである。

「まあ、上皇様、相変わらずお元氣ではあるが……」

と、そこで言葉を濁した。今日の来訪の目的は法然一門の動きに關しての消息である。彼は本題に入った。

「真性、その後、選択本願念仏集なる本の写本は手に入つたのか」

単刀直入に彼は尋ねた。

真性は困った表情を見せると、

「それが、なかなか……」

と、首を横に振った。そして続けた。

「噂では、法然、その本、一部の門弟にのみ開示、転写を許している、とのこと……」

「うむ、私もそのようには聞いておる」

慈円は噂が本当であることを確認すると、思わずため息をついた。  
「それほど、その内容、危険なものということか」

真性は、それには直接答えようとしなかった。代わりにこう慈円に伝えた。

「また、これも、噂でできたことですが……。法然自身がある弟子に、『私が生きている間に、この本は流布させたくない。くれぐれも、秘密にしておくように』と語ったというのです」

「なるほど……」

一体、どんな内容なのであろう。

慈円は時代の皮肉さ加減を改めて思い起こしていた。

なぜなら……。

本来、後白河法皇亡き後、法然の強力な後ろ盾であった九条兼実が宮廷より追放されて後、法然一門の勢いも衰えてしかるべきであった。丁度、自分が座主を退かざるをえなかったように。

ところが、法然一門の勢いは衰えるどころか、ますます、盛んになつてきていた。

慈円はその理由を十分に自覚していた。彼らの勢いが衰えない原因は、それは、彼らが民衆の心を掴んでいたからに他ならない！と。

「都の治安が改善しないどころか、悪化している現状では、まだまだ、彼らの阿弥陀信仰は多くの民衆に受け入れられていくことは必定かとも思われますが……」

真性のこの言葉に慈円は大きく頷かざるを得なかった。

確かに阿弥陀信仰の広がり要因の一つは、改善しない都の治安であつた。

いや、正確に言えば、源平争乱の頃より、ある意味では悪化していたとも言えた。

というのも、飢饉、地震、火災、戦などのために、都へ大量に流入した避難民達は、争乱が収まったとはいえ、帰る家も無く、また職も無いといった状況のため、多くの者が物取りなどと化し、都の治安を悪化させていたのである。

鎌倉幕府が成立したため、律令体制が崩壊を始めたことも関係していた。幕府と、朝廷の二重支配に、日本の国は混乱を極めた。地方でも、豪族同士の争い、略奪などが横行していた。

このような状況で、民達は安心して暮らせるはずは無かつた。二重支配があれば、当然二重の搾取が起きる。民衆の疲弊たるや、それは半端なものではなかつた。

絶望の毎日……。

そんな民衆が、阿弥陀信仰を熱狂的に受け入れたのは、ある意味時代の必然であつたと言えよう。

「法然上人、二年前には、元日より毎日七万遍の念仏声明、これにて三昧発得されたと、もはや、民の語る話は、まるで法然が阿弥陀仏の再来であるかのような口振りであると、伝え聞きます」

真性の話は、慈円も噂として聞いてはいた。

慈円は、天台が、その長い歴史で得られなかつたものを、法然ら一門が勝ち得ていたことを事実として認めざるを得なかつた。

それは民の後ろ盾である。熱狂的とも言える信仰心である。

そして、それに合わせるかのように、法然が著したという著作……。

「その三昧発得の後に、弟子達に口述筆記させたもののようです」  
そして、その著作の中ではあからさまに天台に対する批判が著されているという……。

そんな多くの噂が伝わってくる、ここ叡山では法然の考える専修

念仏に対し、”邪道”である、として非難する声が堂衆の間で日毎に大きくなってきていた。

「法然は仏敵である。成敗すべし！」

過激な堂衆、僧兵達は連夜、会合を開いて法然たちを糾弾していると言つ。

「慈円様、これ以上、叡山の中でも特に堂衆、また僧兵たちの動きを抑えるのは難しいか、と考えますが……」

真性は実際のところ、衆徒たちの怒りの爆発がいつ起こっても不思議ではないと考えていた。

そんな真性の発言を、慈円は諫めた。

「真性、それをおさえるのがそちの役目ではないか！」

慈円は弱腰の弟子を嗜めた。

慈円自身は、法然一門を、まだまだ敵視するのではなく、何とか天台が影響力を持ちつつ、彼らを支配下に置けないか、と考えていた。

なぜなら、慈円は、法然一門の巨大な力の源が、民衆の力であることをよく理解していた。仮にそれが、天狗に操られているとしても！

であれば……

法然ら一門と敵対することは、結局は、この国の体制を弱いものとしてしまうやもしれない。また、そうなれば天台の影響力も萎えてしまうであろう。それこそが天狗の狙いではないか？

慈円は漠然とそんな不安を抱いていた。

法然たちを、何とか天台の影響下に留めておくことは出来ないものか……。

これこそが、慈円が目指している解決策であった。

敵対するのではない。法然一門を何とか、天台の、山の念仏僧の配下に組み入れられないか……。

そこで、真性にはことあるごとに、特に衆徒たちの暴走を止めるように言い聞かせてきたのであった。

「しかし、慈円様、私が、いくら心くだいても、また、彼らは次々と天台を挑発してくるのでございます。先の安樂房らの鎌倉行脚もそうではございませぬか」

確かに、彼らは専修念仏の説法を全国に広めてきていた。何とか融和を目指す慈円に対して、それは、まるで彼を挑発するかのようであつた。

安樂らの鎌倉行脚では、多くの東国武士達が、阿弥陀信者となつたと、慈円も伝え聞いていた。

仏国としての国家安泰を目指す慈円としては、多くの武者が仏に帰依することは本来大歓迎であつた。

しかし……。

「専修念仏の信者である彼らは、ことによれば天台の敵となり、かつての清盛のように天台に弓引く者ともならぬやもしれません」

真性が言い終わると、慈円は大きく頷いた。

確かにこの弟子の言うとおりであつた。

「法然一門の布教の真意を確かめねばなるまい……」

慈円はポツリとそう漏らした。すると、真性がさかさ尋ねた。

「しかし、どうやって？」

そう真性から問われて、慈円は少し考えていた。暫く目を瞑つていた彼であつたが、漸く目を開けると、真性にこう告げた。

「一度、会つしかあるまい！」

慈円の強い決意を感じた真性は、この発言に驚きこそしたものの、あえて、彼を諫めなかった。

法然と会つて直談判をすることは必要ではあるかもしれないが、結果によつては、天台での僧侶生命を奪うものになるかもしれない……。

「慈円様、そのこと、何を意味するかよくお考えでありますか？」

真性が、そう言うのも無理はなかった。

しかし……

「それしか方法はあるまい！」

都合の良いことに、慈円は、今は隠居の身分である。そんな彼が個人的に、法然に会うのなら、天台の衆徒も文句は言つまい。

「真性、今暫く、衆徒たちの暴走、抑えておいてくれ」

「かしこまりました」

弟子にこう確約させると、慈円は帰途に着いた。

いよいよ、法然と一騎打ちするしかあるまい  
しかし……。

前には、法然の目指す専修念仏が立ちはだかつて……。これが、天台の権威を揺るがせかねない代物であることは言うまでも無い。

それが天台の行く手を遮っているだけでも重大事であるのに……。気がつけば、後ろには後鳥羽上皇の目指す天皇親政が退路を断っている……。

天皇親政は、当然、南都北嶺の国家権力への介入を防ぐことでもある。つまり、天台の衰退をも招くかもしれない。

そして、後鳥羽院が敵対しつつある鎌倉武士を、法然らは味方につけようとしている……。

さて、さて、大変なことにはなった。

慈円は、立ち往生して身動きの取れない自分を想像した。

自らの身と同じく、この問題の処理を誤れば、この日の本の国そのものも立ち行かなくなることは間違いなかった。

そう確信すると、慈円はますます、自らに課せられた責任の重さを感じながら西山の庵へと帰路を急いだ。



## 第二部第六章

正治二年（千百二十年）もいよいよ暮れようとしていた。  
師走の京の都……

中でも、ここ引導寺周辺の昨今の賑わいはなかなかのもので、都人たちの噂の的でもあった。

多くの人がひしめき合っている。無論、彼らの目的が、引導寺で行われる六時礼賛興行であったのは言うまでも無い。

「押すな！押すな！」

そんな叫び声すら時に聞こえてくる。ぼろを身に纏った民衆ばかりではない。群集の中には、牛車も垣間見える。高貴な人もこの興行に参加せんと、先を争って道を急いでいるのであった。

元々、ここ引導寺のある雲居寺（うんごじ：現高台寺付近）周辺は、安居院と並び、都での念仏聖たちの拠点と言える場所であった。熱心な念仏者であった、少納言信西入道（藤原通憲）が、彼の弟子たちを住まわせたのが始まりと言われている。

そんな事情から、かねてから、その周辺へは、連日多くの都人が老若男女を問わず、念仏聖たちの説教を聴こうと、押しかけていたのである。

しかし安樂らが六時礼賛を始めてからというものの、人の流れは、完全に引導寺一点に集中していた。安樂、住蓮、そして大和入道の名前は都人であれば一度は耳にしたであろう。彼らはすっかり有名人となっていた。

大和入道も、安樂同様、かつて後白河の北面の武士であったのが、出家して法然の弟子となったのであった。彼も、後白河のもとで今様を学び、安樂ともども、その美声と、さらには美貌で、都の女子にはたいそうな人気であった。

「おまえは行ったことがあるのか」

「いや、まだだが」

「それなら一度は行くがよい。たいへんなご利益があるということだ」

「ただ坊主が唄うだけだと聞いたが」

「その唱がなかなかのものじゃ。堅苦しい説教などなしに、唱を聴いてそれで極樂へ行けると言っんじゃから、まあ騙されたと思うて一度訪ねてみい」

このようにして評判は評判を呼び、さらには興行主催のこの三名がそろって美男子でもあり、さらには美声の持ち主であつたことから、女性の姿もまこと多く、寺内に入りきれぬ人の行列が鴨の河原まで及ぶという事態であつた。

ところが……。

そんなにぎやかな興行の続くここ引導寺で、興行主たる安樂は、実は最近苦悩の日々を送つていた。

というのも、彼は、六時礼賛興行を当初より主催してきた一人であるが、そろそろ、この興行から手を引くかどうか悩んでいたのである。

「のう、住蓮」

「何だ、安樂」

「うむ……」

いつだつたか、その件について、相談を受けた住蓮は友人の唐突な発言に耳を疑った。

「安樂、どうして、この六時礼賛を止めようかなどと……、今になつてそんなことを。そもそも貴殿が発案したことではなかったか」

安樂は、友からの反撃を当然予期していた。

「うむ、それはそうだが、私には、今一つ、新たにやりたいことがあるのだ」

「やりたいこと……」

「そうだ」

住蓮には見当がついていた。

「諸国行脚か？」

言い当てられた安樂は頭を掻いた。

「貴殿には隠し事は通じんのう」

安樂の願いは、安樂なりに理屈の通った願いではあった。すなわち、六時礼賛は、今や住蓮が中心となっている。

きっかけは、時子が大神人としての勤めの最中に肺病で倒れたことであつた。

左様、時子が死んで後、住蓮の六時礼賛にかける取り組みは、まこと常軌を逸した、と言つても過言ではない、そんな熱の入れようとなつた。

「極樂往生の願い、時子だけのことではない。一人でも多くの民が往生叶うように我らが頑張らねばならぬ！」

そんな強い意思に支えられ、彼は六時礼賛興行だけに限らず、浄土經典の読破を始め、何よりも何人にも負けないであろう、念仏三昧の日々を送つた。勉強にかける情熱は凄まじかつた。そして……。

まさに不眠不休の毎日……。

気がつくと、今や、弟子達の中でも一二を争う熱心さで法然からも目をかけられていた。

だから、たとえ安樂がこの興行から身を引いたとしても、この興行そのものは十分に今後も成り立つたであろう。

まして、住蓮を支える法然の門下生は、今や安樂だけではない。新進気鋭の若手がここ引導寺には多く集まっている。そろそろ、後輩に道を譲ることがあつても、むしろ、それは法然の教団にとって益となるう。

しかし……。

「貴殿が抜けたのでは寂しいかぎり、是非思い直してくれ」  
住蓮は安樂に率直に頼んだ。

「うむ……」

実は、安樂は、すでに昨年、正治元年（千百九十九年）、東国を行脚していた。

無論、法然に命じられての、鎌倉での布教活動がその中心である。

手応えはなかなかであった。

もともと、東国からは、建久四年（千百九十三年）に熊谷直実が法然の下へ弟子入りしたことを契機に、多くの武士、御家人などが法然に帰依していた。

今回は、さらに、多くの東国の民衆に阿弥陀信仰を述べ伝えよう、という考えであった。

白羽の矢が立ったのは説法上手の安樂であった。

「安樂、これを持って鎌倉へ向かえ」

師より、選択本願念仏集の写本を持たされ、命を受けた安樂は、これは自分が信頼されている証である、と内心思うと、嬉しさがこみ上げてきた。

実は、この東国行脚よりさらにさかのぼること一年、今より二年前に法然は、選択本願念仏集を、弟子に口述筆記、完成させていた。しかし、法然はこの本を筆記させたものの、一部の弟子達にしか、まだそれを公開していなかった。

しかも、最初にこの本の筆記を命じられたのはそもそも安樂であった。しかし、それが途中で、交代させられたのである。筆記を命じられたことで、つい有頂天になった彼を法然が戒めたのであった。そんないきさつがあったので、東国での布教を命じられた安樂の喜びもひとしおであった。

「これこそ、師からの信頼回復の絶好の機会！」

そして、結果は大成功を収めた……。

このあと、安樂は諸国行脚を夢見るようになったのであった。説法、大衆布教に関しては大いに自信を深めたのである。

「でも、勘違いしないでくれ」

安樂からこう言われた、住蓮は、友が何を言おうとしているのかすぐに察しが着いた。

「わかつていても。そちのその願い、決して、説法で脚光を浴びることなどではない、ということであろう」

「うむ……」

すべてお見通しの友人の言葉に安樂は照れた。

虚栄心を満足させたいのではない。そんなかつての高慢さはすでに捨て去っていた。

安樂は大きい危惧を抱いていたのである。 いや、正確に言う

と、それは安樂だけではない。法然自身は勿論、法然一門の行く末を案じる者なら誰でもが抱いていた危惧であつたと言える。

「師の本当の願い、教え、これを一言の誤りも無く、伝えていくのは我らの義務ではないか」

安樂の熱の入った言葉に住蓮も大きく頷いた。

「安樂、そちも気になるのであるな、一念義の動き……」

「その通りだ」

彼らが、法然門下に突き刺さった棘として、問題とし、また話題にしていた一念義とは……。

## 第二部第七章

当時、法然一派の存在が日毎大きくなるに連れて、阿弥陀信仰と一口にいつても、様々な説を唱えるものが現れだした。

それも、すべて、法然の教えと称してである。

たとえば、町の拝み屋のような者までが、法然の弟子と称して、怪しげな念仏信仰を広めていたのが実情であつた。

法然の教団そのものも、まだまだ新興勢力であり、そんな状況をすべて管理することが出来ないでいたのである。

そんな中、かねてより法然の弟子であつた行空が、建久九年（千百九十八年）に法然の下へ新たに弟子入りした幸西と一緒に広めたかった考えが一念義であつた。

「住蓮、貴殿はどう考える。行空、幸西らの、昨今の一念義の教え……」

安楽に改めて問われるまでも無く、住蓮も安楽と思いは同じであつた。

「まこと、けしからんと思うが」

「左様、しかし、行空はともかく、あの幸西は、さすが、叡山で修行を積んだだけあつて、学識も豊富、浄土の經典も数多読破しており、論争になるととても太刀打ちできん」

「わかつておる。だからこそ、師は、誤った阿弥陀信仰を正さねば、との切実な思いから、選択本願念仏集を筆記させたのではないか」

「其の通りだ。だからこそ……」

と言うと、安楽はここで語気を強めた。

「だからこそ、その師の思い。我らが伝えねばならぬではないか。師は御年六十七歳じゃ。われらが諸国行脚し、間違つた念仏信仰、正さねばなるまい！」

安楽にこう言われて、住蓮も返す言葉が無かつた。

二人は暫く黙つたままでいた。何か忍び寄る黒い手の存在を、二

人は漠然と感じていたのであろうか。

「それにしても、まこと、一度、南無阿弥陀仏と申せば、それ以上の念仏口称意味なし、とは大胆にも申したもののじゃな」

住蓮は、こう言うと、彼が幸西と初めて会った日のことを思い出した。

それは丁度、住蓮が犬神人の里へ説法に行くところだった。

時子が亡くなった後、里の首領役の源太から頼まれて、定期的に訪問していたのだった。

ところが、これに対しては、当時としては革新的な考え方の集団として見られていた、法然門下の一部からも反対意見が出た。

「白らいこそは仏罰の極みである。そんな者たちに説法を施すなどとは！」

と、露骨に言いだすものが現れたのである。

実はそれまでも、住蓮、安樂が、時子や、他の犬神人のためにと言って、こつそりと、定期的に薬を持って行ったりしているのを快く思わない弟子も、少なからずいたのである。

住蓮はそんな周囲の囁きを耳にすると、悲しい気持ちで心が塞いだ。

何故だ！阿弥陀様の救いは遍く全ての衆生にもたらされるのではないのか！

いらいらは募った。

結局、この問題に対しては、最後に、法然自らが、このように述べて、裁定を下した。

幾代にも渡る因果の結果、白らいを病んだのである。であれば、その境遇や、まこと辛かろう。しかし、この世に弥陀の救いの光が及ばぬところはない。ただよくよく一心に念仏申させ給え。

こうしてこの問題は、法然教団の中では、一件落着となったわけであるが……。

しかし……。

南都北嶺の伝統僧たちの耳にこの消息が伝わると、彼らが激怒し

たのは言うまでもない。当然、この住蓮の動きは、火種としてくすぶり続け、後日、彼らからの批判の的となってしまうたのである。

幸西は、そんな一連の事情を知ってか知らずか、住蓮から

「同行されるか？」

と聞かれると、露骨に不快感を表した。

「同行先は……。犬神人の里と申されたか？」

新進気鋭の考えを口にしながらも、結局は、頭の中は伝統的仏教感や、穢れなる神祇思想、民間信仰を抜け出せていない……。住蓮は、そのことが分かってしまっただけからは、もうそれ以来、彼とは口を聞いていない。

「いくら口で立派なことを言っても……」

住蓮の呟きに、安樂もただ大きく頷くばかりであった。

そうやった頷く安樂も、実は行空、幸西らと親密にしていた時期があつた。

というのも……。

行空の、その話術の巧みさは弟子たちの中でも群を抜いていた。

行空の行くところ、必ず黒山の人だかりが出来た。そして、彼の話を聞いた帰りには、もうその群集の殆どが、熱心な阿弥陀信者になつていくというのである。

そのため、行空は、いつも自分の説法の巧みさを周囲に自慢していた。

そして、安樂も説法好きであつたので、一時期、彼は行空に近づき、この行空の影響を多大に受けたのである。

法然は日々の念仏をおろそかにし、それよりは説法の仕方の研鑽に時間を費やす、安樂、行空を見て、ある時、二人に注意を促した。「説法よりも何よりも大事なものは、念仏三昧の日々の生活ではあるまいか」

安樂は、師のこの言葉に、すぐに反省し、心を新たにした。

そして、法然からその高慢さをたしなめられて後は、行空や幸西らとは距離を保っていた。



しかし、行空、幸西らは、法然の度重なる注意には耳を貸すそぶりをしながら、反面、その巧みな弁舌で、法然の考えからはかけ離れた教えとも言える、一念義なる考えを着実に民衆に広めていた。

「法然上人の念仏は、多念相続、念仏しつつ俗業に励め、であろう」住蓮は、黙ったままの友に、問いかけた。

「その通り、一念義は、民には受け入れやすいが、多念相続を否定するもの……。民を惑わすものじゃ」

安樂は、そう答えて、少し間をおくと、続けて、

「一念義が危険なのは、実は民を惑わすことだけではない」

と、住蓮の顔を見据えて呟いた。

安樂のこの呻きにも似た発言に、住蓮も大きく頷いた。

左様、一念義が民衆に広まるのを喜ぶものが民衆以外にもいた。

何なるう、南都北嶺の伝統僧たちである。彼らは、それを口実に法然一派を糾弾することが出来たから当然であった。

「一念義こそ法然上人の教えと称して、彼らは連日、山で我らを糾弾する集会を開いておるらしい」

そう言つて、安樂は遠く比叡山の方を見やった。

明日にでも、叡山の衆徒たちが襲つてくるかもしれない。毎日が緊張の連続であった。

機会さえあれば、法然一派の弾圧をと、目論んでいた彼らにとつては、戒を破ることすら問題ないのだ、という彼らの一念義の主張は、絶好の標的と言えたからである。

「だからこそ、今、立ち上がらないと……。一念義をこれ以上広まらないようにしなければ……」

安樂の決意を聞きながらも、住蓮は、友がそばを離れる寂しさを感じて、心が塞いだ。

「まあ、貴殿がどうしても、というなら、それは致し方のないことだが……」

と言うと、住蓮はしばらく俯いて黙ったままでいたが、何かを思

い出したように、はっと、頭を上げると、安楽に向かってこう問いかけた。

「ところで、その選択本願念仏集なる法然様の著作なるもの、一体、どういう内容なのだ」

法然は、この著作を実際は、まだ一部の門弟にしか見せていなかったのである。住蓮も噂でしか聞いていない。限られた門弟にしか見せていない理由は良く分からない。噂によれば、軽々しく人にその内容を伝えてはいけないと、見せたものには固く戒めているという。

その内容がかなり刺激的で、南都北嶺の目に触れさせないようにしているのだ、とか言うものもいた。

「住蓮、それは言えんのだ。すまぬ」

安楽にそう言われると、住蓮もそれ以上は敢えて尋ねなかった。

安楽は、不服そうな友の顔を見ると、済まぬ、と思っただのか、こう述べた。

「これだけは、言える。あの本、南都北嶺の手に入らば、大変な騒動になるうことは間違いない……」

「そうか……」

「左様、その本の最後で、師はこう述べておられる。これは言うても良からう」

「ほう、是非、聞かせてくれ」

住蓮から促され、安楽は目を瞑ると、記憶を辿りながら、その文章の朗読を始めた。

「こいねがわくは、一度高覧を経て後に、壁の底に埋めて窓の前に残すこと無かれ。恐らくは破法の人をして、悪道に墮とせしめざらむがためなり……」

聞いた、住蓮は驚いた。

「そこまでの覚悟で、師が書かれた本であるか」

住蓮は、何か嵐の前触れのようなものを感じた。

千百二十年も終わろうとしている。

迫り来る時代の荒波を感じながらも、二人はお互いの顔を見合わせる。どちらからと言うこともなく、微笑を交わした。そして力強く、握手を交わした。

## 第二部第八章

無二の親友が自分の下を去っていくかもしれない……。

また、俺は一つ大切なものを失うのか！

住蓮は、安楽からの告白を聞いた夜、一人で床に入ると、あらためて事の重大さに気付かされて、暫く茫然自失としまった。

時子を失って、もうすでに七年が過ぎた。その時の喪失感から、ようやく立ち直れたかと思いい始めていたこの頃であつたのに……。

七年前のあの日……。

あの日のことは今でも鮮明に覚えている。血を吐いた、という安楽からのしらせに、一目散に駆けつけたあの日……。

祇園舎へ到着して、時子の小屋へ入ると、まず、血に染まった地面が目に入った。そして次に目に入ったのが奥に寝かされた時子の姿であつた。

「時子！」

彼の呼びかけに、彼女は住蓮を見つめるとにこりと頷いた。

しかし、その次の瞬間、ゴホツという咳と共に、再び血を吐いた。真つ赤な血であつた。

「大丈夫か！」

夜を徹しての看病が始まつた。

源太に言わせれば、肺病、それも労咳（結核）に間違いないという。真つ赤な血は、労咳の何よりの証拠であると源太は言う。長年の経験で分かるらしい。

彼の言によれば、胸からの出血は真つ赤であるが、腹からの出血はどす黒いのだと……。

白らいに侵されると、いろんな病への抵抗力も失われる。その結果、白らいの病状進行が緩やかな者でも、結局、肺病で命を落とすものが多いのだと言う。

幸い、喀血はその時だけだった。大量に出血するとそれだけでも命取りだと源太は言うが……。

しかし、命を取り留めたと言うものの、それからの時子には苦しい闘病生活が待っていただけだった。

自分がいつ死ぬのか、それだけを考えながら毎日を過ごすのである。生き地獄である。

源太に言わせると、それでもよく持ったほうだという。

約一年の闘病生活の後、時子は永遠に帰らぬ人となった。

「時実様、馬淵の里で、あなたと過ごした毎日が本当に懐かしく、また楽しく、その思い出が何よりの冥土への土産でございます」

息も絶え絶えに、そう言い残すと彼女は、この世を去った。

それ以後、住蓮の心にはぽっかりと大きい穴が開いたままである。何をもつて、これを埋めればよいのか！

あまりにも大きい喪失感であった。

住蓮は、この喪失感を補うために学問に没頭した。浄土経典をひたすら読む毎日が続いた。

そして、六時礼賛に全身全霊を込めて打ち込んだのだ。

時子は、果たして往生叶ったのであろうか。

当時の仏教では、女人は穢れたものとして、往生叶わぬものとされていた。法然自身も、この問題について、公に見解を表したことはなかった。

安樂に言わせれば、

「いかに、師といえど、この女人往生の問題、仏典にはつきりと触れられておらん限り、見解など出せようはずがない」

とのこと……。

ただし、法然はある場で、この問題について一度触れたことがあるという。

ある人が、法然にこう問うた、という。

女の、もの妬むことは、罪にて候か  
それに対して、法然はこう答えたという。

世々に女となる果報にて、ことに心憂きことなり

答えは何処にあるのか？

住蓮も自分なりに、仏典を読み漁ってみた。

無量寿経の中に、このようなくだりがある。

法蔵比丘の第三十五願……。

たとい、我仏を得たらんに、その女人にあつて、わが名字を聞き、歡喜信樂して菩提心を發し、女身を厭い、寿終（寿命）の後、未だ女像たらば正覺を取らじ。

これはどうということか……。

住蓮はまだ、答えを見出してはいない。

ましてや、時子は、白らいを患った身……。

穢れの中の、最たる穢れ、しかも女人である。

安樂は、そんな住蓮に、こう言つて励ましたことがある。

「しかし、法蔵比丘の第二十願にはこうある、『十方の衆生が阿彌陀仏の名号を聞き、想いを淨土に懸け、この仏と血縁した者は、必ず極樂往生を遂げる』とな。すなわち、念仏往生に、男女の差別無し。死に臨んで來迎する諸仏諸菩薩も男女の差別無く及んでいるのは間違いないし、とわしは見る」

住蓮は、そんな友の言葉を思い出しながら、常に自分のそばにあって、自分を励まし続けてきてくれた友に、

ありがとう

と、床の中で、心で感謝を捧げると、いつしか眠りに落ちていった。

## 第二部第九章

そんな住蓮の姿を傍らで見続けながら、ため息をつく毎日を送る女性がいた。

ここは、吉水の救護所……。

その女性の名は、ゆき、である。

ゆきの心は複雑に揺れていた。

「ゆきさん、あの坊主も、いい加減、あんたのこと、少しは気にかけてやらんといかな」

「まあ、なんてこと、また、次郎さんたら、私をからかわないでください」

次郎に茶化されてゆきはぷつと頬を膨らませた。

しかし、そう茶化されて、反面嬉しくもあった。

「からかってなどおらん」

「だって、住蓮様はお坊様ですよ……」

そう、ゆきに言われた次郎は、並んで座っていた三郎を横目で見ると、からからと笑った。

「ゆきさん、この吉水におるお坊さんが皆一人身であると、まさか思っておるまい」

「それは、そうだけど……」

確かに、そうであった。当時、僧でありながらも妻帯者であることは、そんな珍しいことではなかった。

特に法然の周辺に集まっていた、いわゆる『市の聖』達の中には妻帯者が多くいた。肉食、飲酒を行うものも当然いて、ひどい者になると『女犯』を平然と行ったりしていた。そして、一部に、こういったこと、戒を犯す行為を、平然と、さらには堂々とする者までいて、そのことが南都北嶺の衆徒たちの怒りの原因の一つともなっていた。

特に、一念義を良し、と主張する集団にそういう者たちが多くい

た。

無論、法然は、こういつた考え、行いを強く戒めてはいたが、全ての市井の念仏者たちを制御することは、實際上出来なかった。

吉水に集った念仏者たちは、法然を中心としたゆるやかな結合体にしか過ぎず、法然の命令一下、すべてが彼に従う、というような強い組織力を持ったものではなかった。

そんな妻帯をしている僧を見るたび、ゆきは、

「住蓮様は、どうお考えなのだろうか」

と、心で思ったりしていたのは事実であった。

無論、頭では理解していた。僧との婚姻が実際は難しいということ。特に、法然上人は、戒をとて重んじていた。したがって、法然の直属の門下生には妻帯を是とする者は誰もいなかった。

しかし、それであっても……。

彼女は住蓮への思いを募らせるばかりであった。

時子さんが死んで、もう七年になるというのに。でもあの人は……

募る思いとは裏腹に、時子が死んで後、一層六時礼賛興行に没頭する住蓮の姿を見るたび、ゆきは、結局自分の恋はやはり叶わぬのだ、と諦めの心を抱いたりするのであった。

「まあ、それだけ、時子殿への思いが、尋常ではなかった、ということであろう」

三郎がぷつりと呟いた。そして、次郎に向かって、

「次郎、ゆきさんをいじめるな。俺だって、ゆきさんは可哀想だとは思うが、しかし、これは相手があつてのことじゃろ。住蓮様がその気にならぬ限り、無理な話ではないか」

と、嗜めた。

ゆきは、三郎が次郎を嗜めてくれたことを感謝していいのかどうか、複雑な気持ちではあった。

住蓮様がもう少し、自分の方を向いてくだされさえすれば……。最近の住蓮は、法然上人が三昧発得されてからというもの、その



師を追いかけるかのように、念仏三昧の毎日を過ごしていた。

あいつには何かが取り付いたに違いない

と周囲の弟子たちから揶揄されながらも、熱心に修行に励む彼は、いつしか、六時礼賛の興行の中心として、安楽、大和入道と共に、なくてはならない存在となっていた。

そんな住蓮の姿を横で見ながら、ゆきは、彼への思いを密かに募らせるしかなかった。

「ゆきさん。一度思い切って、告白してはどうじゃ」

次郎は、三郎からの嗜めも無視して、相変わらずゆきを揶揄し続けた。すると、ゆきはいよいよ顔を赤らめて、

「何を言ってるの。私、そんなんじゃありませんって、さつきから言ってるでしょ！」

と、怒って否定はするのだが、内心、そんな励ましをやはり嬉しくも思ったりするのであった。

しかし、今の住蓮は、そんな恋心とは無縁の世界に完全に没頭していたことは、ゆきの目のみならず、誰の目にもそれは明らかだった。

「もう、私、帰ります」

ゆきは、毎日、引導寺の住蓮、安楽らに、差し入れを持参していた。

「そうじゃな、鴨の河原も最近は物騒になった。明るいうちに帰られよ」

三郎が、ゆきに注意した。

「ほんに、三郎の言う通りじゃ。日が暮れてからの河原歩きは絶対にせんようにな。わしら、放免の者でも、昨今は怖い思いをするところがあるぐらいじゃ」

ゆきも、そのことは感じていた。

「わかっています」

そう言い残して、ゆきは吉水の救護所を後にした。

それでも、住蓮様、いつか私に目を向けてくれるときが来る

だろうか

ゆきは、淡い期待を心に抱きながら、鴨の河原の、自分の小屋へ戻った。

日はすぐ暮れる。

急がねば……。

はるか西山にかかる夕陽がまぶしかった。

西方浄土もあのように美しく輝いた光に照らされているに違いない

そんなことを考えながらゆきは家路を急ぐのであった。

## 第二部第十章

六時礼賛は夜を徹して行われるので、住蓮、安樂らにとって、実際差し入れはありがたいものであった。

だからゆきも張り切って、これを日課のようにこなしていたのである。

小屋に戻って、いつものように差し入れの準備を終えると、しかし、日は暮れてあたりはすっかり暗くなってしまうていた。

次郎、三郎さんの立ち話が長引いてしまったから……

彼女は、どうしようか、少し思案していたが、意を決すると、引導寺へと、差し入れを小脇に抱えて歩いて向かい始めた。

慣れた道だから、大丈夫だわ……。

住蓮が懸命に頑張っている。それを支えてあげねば！という思いが、時子を駆り立てた。加えて、もともとがこの住人である。それにいつもの慣れた道であつたし、大丈夫だと判断して、一人で出かけたのである。

あたりの治安が、ここ最近悪化しているのは承知していた。しかし……。

住蓮様があんなにも頑張っておられるのだから

そう思うとしても立つてもいらなくなったのだ。

しかし、これはまことにうかつな判断であつた。

確かに治安は悪化していた……。

この鴨の河原も、確かに死体の数こそ減りはしたが……。

しかし、かつて死体が散乱していた以前の頃より、むしろ危険が多かったのが実情であつた。

日が暮れた後、一人で出歩くなど本来言語道断というべきであつた。

ゆきが、小屋を出て、少し歩いたばかりの時であつた。

気がつくと、ゆきは、河原の藪から姿を現した二三人の男に、す

でに周囲を囲まれていた。皆、腰に刀を差している。ぼろぼろの服装ではあったが、野武士の風体である。落ち武者くずれであろうか。  
「へへへ……」

不気味な男達の薄笑いに、ゆきは体が震え上がった。

しまった！

と、後悔してももう遅かった。

囲まれてしまって、身動きが取れなかった。男達は、ゆきにじりじりと近寄った。ゆきは思わず叫び声をあげた。

「近寄らないで！」

無論、そんな叫びを聞いて、駆けつける者もいようはずがない。かつては違った……。しかし、そんな、かつての河原での生活秩序はもはや崩れ去っていた。皆、自分のことで手が一杯だ。周囲に困窮した人がいても見知らぬ振りをするのがむしろ普通の振る舞いであつたのだ。

ついに、三人のうちの一人の男がゆきの手を掴んだ。

「きゃっ！」

ゆきは叫び声をあげた。

もはや、これまで……。

と、ゆきが観念したその時である。

「待て！」

という鋭い男の声がした。

ゆきが、声のする方を見ると、武者姿の男が刀を抜いて仁王立ちしている。立派な身なりである。彼は、その両側に放免の装束の男を二人従えていた。

刀を手にした武者は、さらに大きい声で、

「その女子から手を離せ！」

と、叫んだ。

武者の大声に一瞬、ゆきを囲んでいた男達は怯んだ。ゆきは、その隙に、掴まれていた手を振り解くと、助けてくれた武者のほうへ駆け寄った。

ゆきに逃げられた男達は、一斉に刀を抜いた。

「なにを、こしゃくな！」

「やつつけてしまえ！」

と、口々に叫ぶや、野武士たちは、一斉に刀を振りかざして、武者に飛び掛った。

壮絶な斬りあいが始まった。

ゆきは

「きゃっ！」

と叫ぶと身を屈めた。そして目を瞑ったまま、その場に座り込んだ。

ばさっ

という刀の振り下ろされる音と、  
げっ！

という野武士達の悲鳴が交互に聞こえた。

三回？ 最後の悲鳴の後、静寂が訪れた。物音一つしない……。一瞬にして勝負はついたようであった。

かちっ……。

と、刀を鞘に戻す音がその静寂の中に鳴り響いた。

危険は去ったようだ。

ゆきは怖くて目が開けられないでいたが、静寂が続いている状況からはそう判断して間違いなさそうだった。

ゆきを助けた武者の強さは相当なものであったようだ。彼は、衣服の乱れを直すと、目を瞑ったままのゆきの背中を、やさしく叩いた。

「娘さん、もう大丈夫だ」

ゆきはまだ体の震えが止まらないでいた。ようやく、目を開けてその武者に支えられて立ち上がると、自分を囲んでいた野武士たちは皆、斬られて血を流し、地面に横たわっていた。

無論、三人とも虫の息であった。

恐怖と、安堵感が交錯して、ゆきは混乱しながらも、

「ありがとうございました！」

と、震える声で、感謝しながら、武者の顔を見た。とても凜々しい顔立ちであった。しかし、笑顔を作りながらも、その武者の目の奥に宿っている悲しみを、ゆきは見逃さなかった。社会の最底辺で暮らしてきたゆきの眼力である。

何とも悲しそうな目をされている……

ゆきのそんな思いをよそに、武者はゆきをしっかりと支えながら、  
「大丈夫か？」

と言うと、ゆきの顔を覗き込んだ。

ゆきは、改めて、武者の顔を間近で見ると、

さて、どこかで見たことのあるような？

という思いにとらわれた。しかし、それはいつ、どこでであったか、思い出せなかった。何よりも、恐怖感がまだ体を支配していて、落ち着いて物事を感じられる状況ではなかった。

「一人で、暗がりの中を歩くなどは、何と無謀な！」

と、その武者はゆきに嚴重に注意した。

「それがしが通りかかったからいいものの、でなければ危なかった」  
そして、続けて、

「こんな夜更けに、一人でどこへ行くこうとしていたのか？」

とゆきに問いただした。

ゆきはまだ体が震えていたが、それでも漸く落ち着きを取り戻すと、事情を説明した。

「私は……」

ゆきは、自分が引導寺へ向かうつもりであったこと、また、その目的について、手短かに説明した。

彼女の説明を受けると、男は大きく頷いた。そして、  
「噂には聞いたことがある。たいへんなご利益があるとか……。あはは！もつともそれがしは、仏の教えには関心はないが……」  
と、前置きをした上で、

「では、そこまでお供いたすでしょう。まだ、どんな輩が潜んでい

るとも限らぬ。そちを護衛せねばなるまい」

と、ゆきに同行を申し出た。

ゆきは突然の申し出に動転した。一見して分かる身分の高い武者姿である。それが、こんな河原者の女子の護衛をするなんて……。

「とんでもございません。私のような身分の者を、あなた様のような……。私はそんな身分の者ではございません」

ゆきはかたくなに拒否したが、男は改めてゆきを促した。

「何を言われる。か弱き女子を守るのに、身分の貴賤などあるうか！」

こう逆にたしなめられて、ゆきも、男の好意に身を委ねることにした。

「それでは、お言葉に甘えて……」

そう言つと、緊張していた武者の顔が少し緩むのがゆきには分かった。武者は笑顔になると尋ねた。

「では、道はどちらかな？」

ゆきは武者の横について、道を教えながら、ときどき顔を見上げては、命の恩人の、この武者の顔を覗き込んでいた。

素敵な方……。

ゆきは内心そんなことを感じている自分に気がつくと、顔を赤らめた。

しばらく二人して歩いた。付き添いの放免はすでに、彼は途中で帰らせてしまっていた。

引導寺にはすぐに到着した。

武者はゆきに告げた。

「ここである……。それでは拙者は帰るとしよう。娘さん、これから夜、一人で出歩くなどということのないようにな！」

そう言つて、立ち去ろうとした彼に、ゆきが声をかけた。

「ありがとうございました。このご恩は決して忘れません。つきましては、せめて、お名前をお聞かせ願えませんか」

ゆきは男に感謝しながら、こう問うた。すると男は笑顔で答えた。

「拙者か。拙者の名前は佐々木盛高と申す」

「佐々木様……」

無論、この名前は、時子の兄の名前として、かつて住蓮から聞いていたはずだが、ゆきは、もうそんなことなど忘れてしまっていた。

男は立ち尽くすゆきに向かって、さらに続けた。

「昨日より、防鴨河使長官三浦秀能様のもと、都の警備に当たっておる。本日は鴨の河原に視察に来たところ、たまたま、……」

とそこまで言うと、盛高はゆきに近寄って、にこりと微笑むと、彼女の肩を優しく叩いた。

「まあ難しいことはよかろう！娘さん。それよりも今後はくれぐれも気をつけられよ！まこと、都の治安は思ったよりも悪いようじゃ。落ち武者、野武士どもが乱暴の限りを尽くしておる。夜は絶対に一人で出歩かぬようにな！」

そう言うと、盛高は踵を返した。

「ではさらばじゃ！」

立ち去る盛高の後姿を見送りながら、ゆきはなぜか自分の頬がさらに火照ってくるのを感じた。

何と素敵なお方だろう

そんなことを考えながら、男を見送りつつ、彼女は寺の門の前で茫然と、立ったままでいた。

そこへ、

「ゆきさん！」

と、彼女を呼ぶ声がした。安楽であった。しかし、呼びかけるその安楽の声にも気がつかず、ゆきは、そのまま立ち尽くしていた。

「ゆきさん、一人で来たのか？何と、無謀な！」

重ねて問いかける安楽の声にも、ゆきはそれに答えることなく、いつしか頬の火照りが体の火照り全体に広がっていくのを感じていた。

佐々木盛高様……。本当に素敵なお方



と、そこへ今度は住蓮の声が続いた。

「ゆきさん！」

はっと、ゆきは我に返ると、目の前には住蓮がいた。

「ゆきさん、どうした！」

住蓮の心配そうな眼差しを見ると、ゆきは、思わず恥ずかしくな  
って、その視線から逃れようと顔を背けた。

どうしたの私ったら！気持ち切り替えなくっちゃ！

そう、自分に言い聞かせると、つとめて明るい笑顔を作ると、い  
つもの元気な声で住蓮に答えた。

「はい、これ、いつもの差し入れよ！」

ゆきは、持っている差し入れを住蓮と安楽に手渡すと、彼らと共に、寺の奥へと進んで行った。

## 第二部第十一章

ゆきと別れて、盛高は鴨の河原に一旦戻った。そして河原で事後の処理をしていた部下の放免共々、御所への帰途に着いた。

無論、三条の橋で待たせていた従者の六郎も一緒である。

「待たせた」

と言うと、彼は橋の真ん中で馬に飛び乗った。

六郎が尋ねた。

「いかがでございましたか。鴨の河原は……。放免から事情はある程度聞きましたか……」

「うむ、早速三人退治してきたところだ。自らの太刀でな！全くこの放免共も全く役に立たぬ。足がすくんで動けんと……」

「左様でございますか、ははは……。百戦錬磨の盛高様に齒向かうとは、命知らずの悪党もおったのですな」

六郎とこんな会話を交わしながらも、盛高は自分の数奇な運命を振り返っていた。

人を切ったのは久々である。

仇を討つ代わりの、悪党退治となった。

これも佐々木家再興のため

そう自分に言い聞かせながら、途中で放免らと別れると、ようやく後鳥羽院の御所に着いた。

「盛高、遅かったな」

視察とは名ばかりの場合が多いものだが、なかなか御所に戻らぬのを逆に不審に思っていたのか、三浦長官から視察報告を求められた。彼は早速長官と面会した。

三人の悪党を自らの刀で切って捨てた話をする、秀能はいたく喜んだ。

「噂には聞いていたが、腕は確かなようじゃの。頼もしい限りではある」

秀能の言葉に

「ありがたきお言葉、身に余る光栄です」

と、謝意を述べて、視察の報告をようやく済ますと、  
「では、失礼」

と、彼のもとを辞し、盛高は自分の部屋へ戻った。

彼はその日、早々と床に就いた。

久しく眠れない夜に苦しんでいた盛高であつた……。

悪夢に幾度うなされたであろうか！ 無論、原因は時実の件で

あることは言うまでも無い。

しかし、その夜は、珍しく深い眠りに落ちた。

しかも眠りの中で、久方に心地よい夢を見た。 そう、それは、

今日、鴨の河原で助けたゆきの夢だつた。

夢の中で、傍らにゆきがいた。笑顔を振りまきながら……。

場所は？

それは近江馬渚の里であつた。そこを、彼はゆきと二人で散歩していた。楽しげに語らいながら……。

そして、目の前には再興された佐々木家の立派な屋敷があつた……。

…。

時子、生きていて欲しかった。

夢の中で、時に涙ぐみながらも、彼はゆきと二人、次には、馬渚の里を馬で駆け巡つた……。

## 第二部第十二章

盛高がこうして、自分の夢に向かって新たな歩みを始めていた頃……。

その盛高を、新たな夢へと自分の手許から送り出した側の人物……。

そう、慈円は、ここ比叡山で、真性と会談中であつた。彼は法然との面会がなかなか実現しないことに苛立ちを募らせて、弟子の下を訪ねたのであつた。

法然の側に打診したところ、向こう側に依存はないという。

問題は叡山、天台の側にあつた。天台側に見れば、法然側が白旗を掲げて全面降伏を申し出てくるのが本筋であつた。

したがって、その確約がないままに法然と会談を持つことが受け入れられるはずが無かつた。彼らは会談開催拒否を目論んで、慈円に陰に陽に圧力をかけてきた。

たとえ座主を退いた身であつても、慈円は叡山に大きい影響力を持つていたし、その彼が法然と会談を持つことなど、言語道断というわけである。

ならば秘密裏に会うしかない。

しかし、もしそれが知れれば……。

慈円は、何度も叡山へ足を運んで、真性と会合を重ねたが、真性の答えはいつも決まっていた。

「慈円様、今はまだ時期草々かと……」

真性の言葉に慈円は苛立ちを隠せなかつた。

「法然一門の側に、もとの責任があるのは言うまでも無いが……」

慈円はため息をつく、そこで言葉を濁した。

この日ノ本の国が危機に陥っているというのに！

慈円は、天台の側のかたくなな態度にも業を煮やしていた。

なぜ、もっと、大局から物事を眺められないか？

そんな思いを真性にぶつけた。

「のう、真性。行基のこと、そちも存じておろう」

「行基……」

真性は急に出てきた人物の名前に一瞬戸惑った。

「行基じゃ。奈良の都の時代に……」

真性は誰のことかようやく理解できたが、

「はあ、それが、このことと……何の関係があるのでございますか？」

と、狐に抓まれたような顔で問い返した。

「おおありじゃ！」

慈円は真性に視線を向けると、一気に話し出した。

「行基は僧侶令を無視して民衆に布教活動をしていた。処罰されてしかるべきであつた。ちようど、今の法然のようにじゃ。しかるに、聖武天皇は、大仏建立にあたり、建立費捻出のためには、彼の組織した民衆の浄財に頼らざるを得ないと知るや、彼を、大僧正となされたではないか。勅令を出されてな」

真性は慈円の言いたいことがようやく飲み込めた。

「慈円様は、法然一門にも同じように接しよ、と……」

慈円は、弟子の顔を改めて見ると大きく頷いた。

「左様、彼らの力、利用すればよいのじゃ。彼らを天台の組織の下に取り込む努力をなぜしようとしなのか……。対立するばかりが脳ではない。利用しようとなぜ考えんのじゃ」

真性がここで言葉を挟んだ。

「しかし、慈円様、山門（延暦寺のこと）、寺門（三井寺のこと）の確執さえ、未だに解決できてはおりませぬ。法然一門を懐柔し、天台の組織に組み入れていくことなど本当に出来るのでしょうか」

慈円が反論した。

「組み入れなくてよいのだ！彼らはもともと天台を去った者たちだ。彼らを天台に戻す必要は無い。また、戻ってもくるまい」

真性は困惑した表情で、

「戻す必要が無い、とはどういうことでしょうか」と、慈円に問うた。

慈円は真性の顔を見ると、にやりと笑った。答えた。

「真性、空也上人のこと知っておろう」

「はい」

「彼は三井寺とどういう関係にあったかな？」

真性は慈円の意図するところが少し読めてきた。

空也上人、――時を遡ること二百年、平安の中期に活躍した念仏聖である。

「彼は三井寺を拠点として、精力的に京の都を歩き回って、念仏を庶民に広めたのではなかったか？」

「ようやく慈円の言わんとするところが飲み込めて、真性はこう答えた。」

「叡山と法然一門のこの対立、かつての三井寺と檀那流一派のような関係に持っていけないか、と慈円様は考えておられるのですね……」

……

「左様じゃ」

そう答える慈円の目が輝いた。

檀那流とは……。空也上人の直弟子千観が、三井寺内の僧たちに念仏を唱導し、組織した念仏結社である。彼らは積極的に町や村を回り、各地に念仏道場を作ったのであった。

「そうじゃ、三井寺は檀那流一派をうまく利用した。自らの勢力拡張のためにな。また、資金集めにも……。檀那流一派の中に過激なものもいたが、三井寺はむしろ、それを逆に利用したのではないかな？」

「確かにそうではございますが……」

「法然一門が、結果的にはその三井寺檀那流一派、さらにはそこから信西入道が組織した通憲流を、信西の息子遊蓮房の死後、そっくりと吸収してしまったのは間違いない。であれば、その一派の力、

今度は天台が利用しようではないか。つまり、彼らの組織、集金力、民衆への影響力を、天台が利用すればよいのだ。すべていただいてしまえばいいのじゃ。違うか？」

真性は慈円の策士ぶりに脱帽はしたものの、

「しかし、今の叡山に、それだけの度量があるとは思えませぬ」

とため息をつきながら、愚痴をこぼすばかりであった。

慈円は、この弟子の不甲斐ない態度が情けなかった。

「その天台を立て直すのが座主たるそちの役目であらう！」

と、慈円は弟子を叱った。

しかし……。

確かに、真性の言うとおり、どうも今の南都北嶺にはそのしたたかな寛容さが欠けているのは間違いなかった。

これも長く続いた、戦乱の世のなせる業か？

頑なな堂衆たちの態度を伝え聞く限り、真性がいくら努力しても、確かに限界があるのは目に見えていた。慈円もそれもよく理解していた。

弟子を責めてもどうしようもないのかもしれない……。

だからこそ、自分がやらねば！

慈円は自分に言い聞かせた。

であるからこそ、何とか自分の手で、この日ノ本の国の混乱に終止符を打たなければ！

と、慈円は、真性との会談を終わり、叡山を後にする頃には、心を使命感で満たして、自分の未来での活躍に、胸膨らませるのであったが……。

しかし、その時はなかなか来ない。

慈円の苛立ちは募った。

失望感が日ごと増してくる……。

そんなある日のことである……。

思いがけぬ朗報が西山の慈円の山荘にもたらされた。

建仁元年（千二百一年）二月のことである。

彼に対し、天台座主への再任の勅令が下ったのである。

「まことか？」

と、言いながらも、慈円の心は喜びで満たされていた。

一度、座主を退いた者が、再任されることは、異例であったが、慈円の巧みな処世術のなせる業であったといえよう。

なかでも、後鳥羽院との親密な交友関係が大きくものを言った。

即ち、時の権力者である後鳥羽院が、彼を座主の地位に推挙したのであった。後鳥羽院は、その推挙に先立って、つい先日、慈円を院自身の護持僧として召抱えたところであった。

これで、比叡山の過激な衆徒たちを自らの手で黙らせることが出来ようというもの！

慈円の夢は膨らんだ。

自分を中心とした、天台の再建……。

そして、それに法然一門を取り込んでいく……。

初めて、天台座主となった頃を思い出した。あの時は不安も大きかった。しかし、今度は手の内を知り尽くしている……。

早速、法然房と、内々に連絡をとることしよう。

彼は、自信に満ちた態度で、弟子を呼びつけた。

「書状をしたための、準備せよ！」

彼は、弟子が準備に取り掛かっている間、期待に胸を膨らませながら、遠く、東の方を見やっていた。そして、思わずこう呟いた。  
「待つておれ！」

無論、視線の先にあるのは比叡山である。

慈円は、書状をしたための準備が出来たのを見るや、早速筆を持った。そして自信に満ちた筆さばきで、力強く、法然宛の書面の作成にとりかかった。



## 第二部第十三章

ゆきの様子が最近、どうもいつもと違うことに、安楽をはじめ、周囲のものは、大方、気が付いていた。

呼びかけても、返事をしなかったり、突然、天を見上げてため息をついたり、大事な約束を忘れたり……。数え上げれば枚挙が無かった。

住蓮だけは、そんなゆきの変化には無頓着であった。少なくとも、表面上はそう見えた。

安楽が最近のゆきの態度の変化について住蓮に話題を投げかけても、

「さあ、そうなのか……」

と、表情を変えることもなかった。

しかし……。

実際のところは、住蓮も心配はしていたのである。それでも、ゆきの自分への好意を知っていたので、ゆきの話題はなるべく避けたい、という思いから、このような態度を取らざるをえなかったのだ。そんな、ある日の引導寺の境内……。

安楽、住蓮、次郎、そして三郎の四人が六時礼賛の合間に僅かの休みを取っていた。

安楽は、次郎、三郎らとは、普段は彼らが放免の勤めで忙しい時間を過ごしていたせいもあって、なかなかゆっくり話をする機会がないのが常である。

そこで、今日はいいい機会である、と思い、普段ゆきと接触の多い彼らに一度、彼女のことを聞いてみよう、ゆきの話題を持ち出した。

「次郎、三郎はゆきさんのこと、近頃、何か変だとは思っていないか？」

ゆき、という名前を聞いて、住蓮はすぐに俯いた。安楽を見ると、

彼は所在なさそうに地面をずっと眺めている……。

安樂は、住蓮には悪いと思いつつも、ゆきのことを心から心配していたので、構わずこの話題を続けた。

「私が、何か心配事があるのか、と心配して尋ねても、大丈夫です、と言っばかりで、まことのこ、まったく何も答えてくれぬ。すべてが上の空のようで……」

と、ここまで安樂が言ったところで、住蓮は急に立ち上がった。

住蓮は、この場にいるべきではないと判断したのであろう。そこで、努めて平静を装いながら、笑顔を作ると、安樂、次郎、そして三郎に向かって、

「すまぬ、安樂、私は次の準備があるので……。次郎、三郎も放免のお勤めご苦労。そちたちの働きがあつてこそ、この引導寺界隈も安全に歩けるのであるからな。それでも、常々、法然上人が仰つておられること、忘れぬようにな。『念仏しつつ、俗業に励め』と……。わかつておるな？」

と、そう言い残して自分の部屋へと、足早に立ち去った。

安樂は、そんな住蓮の心の内を察して、内心「やはり、彼の前では、この話題は避けるべきであつたか？」と思ひはしたが、

気をつけることとしよう。住蓮の前では今後この件について触れるまい。

と、心の整理をつけると、疑問の矛先を次郎と、三郎に向けた。

「次郎、三郎、そちたちは近頃のゆきさんの様子、心配には思わぬのか？」

問い掛けられた次郎と三郎は、思わず、困惑した面持ちで互いに顔を見合わせた。安樂は、彼らの表情から、彼らが、ゆきのことについて何か知っているに違いないと確信したので、

「何か知っているなら、教えてほしい。我々は御仏の教えの前に結ばれた同じ仲間ではないか。ゆきさんのことが心配でならないのだ」と、彼らを促した。

安樂の、ゆきを氣遣う真剣な眼差しに圧倒されて、次郎が先にそ

の重い口を開いた。

「安楽様、実は先日のことですが……」  
と前置きをすると、彼は話を続けた。

「三郎といっしょに、鴨の河原にあるゆきさんの庵を訪ねると、ゆきさんがいなかったものですから、周囲を探しに出たのです……」  
「すると、ゆきさんが、三条の橋のたもとで、ずっと遠くを見ているのです」

「左様です」

そこから、三郎が言葉を継いだ。

「ゆきさんの、その視線の先には、ある一人の武者がおりまして、ゆきさんはその武者様を遠めで見ては、顔を赤らめながら、ため息をついているのです」

安楽は驚いた。

「武者……」

次郎が続いた。

「左様です。しかも、その武者とは、実は、わしらの新しい頭にあたる人で……」

「頭？」

安楽はさっぱり事情が掴めず、困惑した表情であつた。

次郎がさらに説明を続けた。

「左様です。そのお方の名は、佐々木盛高と言いまして、新しく、鴨の河原の治安にあたることになった、防鴨河使、三浦秀能様の部下でございます。わしら放免の者は、今まではすべて検非違使様の配下で働いておりましたが、このたび後鳥羽上皇様の御命令で、一部の者が、防鴨河使様のもとで働くことになったのでございます」  
「なるほど」

都の治安は悪化の一方を辿っている……。中でも鴨の河原の治安が悪化しているのは、安楽自身、辻説法をそこで行っていることから、実際それをよく肌で感じていた。

しかし、その武者とゆきさんの関係は全くわからない……。

「で、ゆきさんから、そのことについて何か聞いたりしたのか」  
三郎が答えた。

「いや、それで、少しからかってしまったところが、それから、わたしには口を聞いてくれんです」

次郎が続いた。

「まこと、わたしも、囃してしまっただけですから、実は、それ以後、わたしにも口を聞いてくれませぬ。でも、あのゆきさんの態度から見て、彼女がその武者様に惚れているのは間違いありませんまい！」

三郎も大きく頷いた。

「しかも、ぞつこん、というところですかね！」

安楽はようやく納得した。

「なるほど、そういうことだったか……」

ゆきが、ある武者に恋心を抱いているらしい……。

「それなら、それで、よいことではないか」

安楽は、次郎らに笑顔で同意を求めたが、

「それが、安楽様、そんな簡単なことではございませぬ」

と、次郎は反論した。

「何ゆえか？」

安楽のこの問いに、三郎がそれに答えた。

「安楽様、身分があまりに違います！」

「身分？」

「三浦様の配下の武者と言えば、身分は、立派な北面の武士でございます！ そんなお方と、われら河原者の女子が恋仲になるなどということが、一体どういうことか、お分かりでしょう！」

まったく、言われて見れば、なるほど次郎、三郎の言うとおりであつた。

「所詮は叶わぬ恋である、といういことか……」

安楽は、ゆきの悲しみがいかにかりなものか、と想像すると、自分も気分が落ち込んでしまった。

「まったく、わしら、かつては悪事の限りをつくしたものが、河原

者として、輕蔑されても、これはもう自らが蒔いた種ですからどうしようもないですが……」

と、次郎が言うと、三郎がこれに続いた。

「ほんに、ゆきさんのような、純情可憐な女子が、悲しい運命のいたずらで、やむなく河原者として、ここで生きていかざるを得ないだけなのに……」

と、言うのと、三郎は、目に涙を浮かべて、

「あわれ穢土ほど口惜しき所はあらじ。ほんに、極樂淨土にはかかる差別のあるまじきものを！」

と、大声で言うと、泣き出してしまった。

安樂は、これほどに純情な彼らの心を、目の当たりにして、

「次郎、三郎、ようわかった。ゆきさんのこと、私が何とかしようぞ、出来る限りのことを！」

と、三郎を慰めた。

しかし……。そうは言ったものの、安樂の頭に、何かいい考えが本当にあったわけではないの言うまでもない。

三人の何れにとっても、辛い話であるのは間違いなかった。

それでも、三郎がようやく泣き止むと、次郎は、いつものおどけた調子で、沈んだその場の雰囲気明るくしようと、こう三郎に質問して、彼を揶揄した。

「しかし、三郎、今のおまえの言葉、まことに立派ではあったが……。あれって、あの坂東の荒武者熊谷直実の言葉そのままの受け売りであろう？ 確か、関白九条兼実様を相手に、玄関で大声で喚き散らしたという……」

次郎の発言に三郎は大いに照れながら、

「まことに、……やはりばれたか！ ははは、申し訳ない」

と、頭を掻きながらも、涙顔のままで、にこりと微笑んだ。

「であるうな、おまえの口から、かような立派な言葉が飛び出してくるとは、まったく仰天して、腰が抜けるかと思っただわい」

次郎のさらなる追い討ちに、一同は大いに笑った。

この者たちの底抜けな明るさがせめてもの救い

安樂は、内心そう感じて安堵感を覚える反面

彼ら河原者たちが、この穢土においてでも差別されないようになることこそ本当の姿ではないか

と、憤りも感じるのであった。

そのためには、しかし、……何をなすべきなのか？何が出来  
るのか？

安樂は彼らと共に笑いながらも、胸のうちで、自分に課せられた  
使命の重さを自覚し、ますます、これからの念仏布教に情熱を燃や  
すのであった。

## 第二部第十四章

ゆきは先日佐々木盛高との出会い以来、すっかり彼のとりこになつてしまつていた。

「あの方に会いたい……」

と、思うと、居ても立つてもいられなくなり、気が付くと、鴨の河原を、彼を探して徘徊している、という有様であつた。

勿論、盛高が運良く鴨の河原に巡回に来ていることもあつた。

そんな時には、しかし、遠目で彼の河原での巡回警備ぶりを眺めては、ただ溜息をつくばかりであつた。

――身分が違いすぎる

そうは分かつていても、あの日、自分を救つてくれた後、彼と共に引導寺へ歩いた、あの時の光景が脳裏に蘇る……。

そんなある日、やはり彼が巡回に来ていないかどうか、確認のため、ゆきがいつものように河原を散策していたときのことである。

向こうから、盛高が幾人かの放免を連れて、河原の巡回をしていた。

その放免の中に三郎の姿があつた。

「まあ、三郎さんだわ！」

ゆきは、三郎の代わりに盛高の巡回にお供したいものだ、と思つた。

――あら、いやだ。男の人にやきもちを焼いて……。私って馬鹿みたい。

と、そんなことを内心思っていると、ふと三郎と目が合った。三郎は、ゆきに気がつくと手を振っている。

――いやだ、三郎さんったら！ まったく、人の気も知らないで。

と、ゆきが背を向けて、その場を逃げ出そうとしたときである。

「ゆきさん！ ちょっと待って！」

と、三郎の大声がした。振り向くと、三郎が、盛高に何か話して

いる。

「三郎さんたら、何か余計なことを……。」

と、ゆきが内心思ったその次の瞬間であった。

三郎がこちらへ、猛然と駆けて来た。

「あつ」

と、気が付いた時には、もう三郎が、ゆきの手を握って引つ張っている。

「ゆきさん、こっちだ！」

「いや！何するの、三郎さん、手を離して！」

「いいから、来なさいって！」

いやがるゆきを、三郎は盛高の元に引つ張っていった。

気が付くと、ゆきは、盛高の前に引き出されていた。

三郎が、興奮気味に盛高に報告をはじめた。

「盛高様、この者が、以前よりお話しています、ゆきと申しまして、この界限の、若い女子の世話人役をしておる者でございます。一度、お目通りさせておこうかと思ひまして……。この者、この界限の事情に明るく、また、皆から信頼されております。これから先、何かと盛高様のお勤めの役に立つかと存じましたので」

と、ゆきの手を握りながら、勝手にゆきの紹介を始めた。

ゆきは、顔を真っ赤にしながら、穴があつたら入りたい心境で、

何とか、三郎の手を振り解いてその場から逃げようとしたが、三郎はますます強く手を握り締めて、それを許さなかった。

見かねた盛高が、三郎を戒めた。

「三郎、もうよい、手を離してやりなさい」

盛高に命令されてやむなく、三郎は手を離した。

ゆきは、恥ずかしさと、三郎への怒りと、その両方から顔を真っ赤にして、俯いたままその場に立ちすくんでいた。

すると、盛高が徐に口を開いて、

「ゆきさん、と申されますか。お久しぶりでござるな」

と、微笑みながらゆきに声をかけた。



三郎は驚いて、

「えっ、ご存知であられましたか！」

と言うと、ゆきと盛高とを代わる代わる眺めた。三郎の演技であつたことは言うまでも無い。彼なりの知恵で、何とか二人の仲を取り持とうとしたのであつた。

ゆきは、一層恥ずかしさが募り、ただ、黙つて俯いているばかりであつたが、それでも盛高が自分のことを覚えていてくれたことが嬉しくて、心に喜びがあふれて来た。

「ゆきさんと、盛高様と、何と、お知り合いであられましたか！」

再び、大げさに三郎が言うのを、盛高は、

「もうよい、三郎、少し黙っておれ」

と、戒めると、ゆきに向かつて、

「再びお会いできて、たいへんうれしく思う所存……。三郎から話は聞いておる。また、私や、共の者より声をかけることもあるかも知れませぬ。その折は、何卒協力をお願いしたい」

と、言うと、再びゆきに対して、にこりと微笑んだ。

ゆきは、あこがれの人からの呼びかけに、もうすっかり気分が宙に舞つてしまつて、何も言うことが出来ず、ただ立ち尽くすのみであつた。

そんなゆきの心情を察して、盛高は

「では、また、いずれ、ゆるりとお話することも出来よう。それではお元気で」

と、言うと、また最後にもう一度、ゆきに対して微笑むと、そのまま立ち去つた。

ゆきは、一人残されて、河原に立つたまま彼らを見送つた。

すると、三郎が、こちらを振り返つて手を振つてきた。『やりましたね！』と言わんばかりの得意満面の笑みを浮かべている。

「まあ、三郎さんたら」

ゆきも、三郎に向かつて手を振つて、感謝の念を伝えた。――余計なことをしてくれた、と最初は思ったものの、結果的には盛高と

話が出来た。こんな嬉しいことはない。

三郎のおせつかいのおかげであった……。

ゆきは、河原の仲間たちの、温かい思いやりに感謝しつつ、彼らの後姿をいつまでも見送っていた。

## 第二部第十五章

ここ引導寺では、安楽と住蓮が六時礼賛の合間の暫しの休憩を取っていた。今は勤めを大和入道がしているところである。

「なあ、安楽。最近とんと、ゆきさんが差し入れを持ってこんな……」

住蓮が、安楽ににこりと微笑みながら話し掛けた。

「ああ、でも、よいではないか。ゆきさんにも、やっと春が訪れたということではないか。みんなで祝ってやらねば」

三郎がゆきと盛高の間を取り持ったこと、そして、その取り持ちが成功して、その後、二人は河原で、よく散歩するようになったということ、二人はとても仲が良さそうであると言ふことなどは、二人の耳にすでに入っていた。

住蓮は、かつて自分に恋心を抱いていたゆきに、結果的にはあえて冷たい態度を取らざるを得なかったことへの自責の念もあったので、この度のことはまことに嬉しい限りであった。

「ところで、その武者の名は何と言ふのか？」

住蓮は、実はまだ名前を一回も聞いたことが無かったのである。

「さて、私も一度聞いたが忘れてしまった。三郎に聞いてくれ」

「そうか……」

しかし、次郎、三郎も、最近は都の治安悪化に伴い、放免としての勤めが多くなり、彼らの前に姿を表すことが少なくなっていた。

「では、また今度彼らに聞くとしよう」

そう言う、住蓮が、まさかゆきが思いを寄せる男性が、時子の兄、佐々木盛高であるとは夢にも思っていなかったことは言うまでもない。

件のゆきはというと、盛高が鴨の河原に警備の視察に来る日時を、三郎、次郎からあらかじめ聞きだしておいた。そして、その日が来ると、鴨の河原に差し入れを持っていくというわけである。無論、

今や、お目当ては佐々木盛高である。――かつては住蓮会いたさに、引導寺へ弁当を持つての日参であつたのだが嘘のような生活の激変ぶりではあつた。

もつとも、露骨に盛高に弁当を手渡すなどという、そんな大胆なことも出来ないの、名目は三郎始め、放免たちへの差し入れのためと称し、盛高のもとへ参じていたのである。

そんなある日、河原での出来事である。

三郎が差し入れを持参したゆきに愚痴をこぼした。

「ゆきさん、わしらの弁当と、盛高様の弁当はなぜこんなにも大きさが違うのじゃ」

ゆきは、顔を赤らめると、

「それは、だつて、だつて……」

と、ただ口籠もるばかりであつた。

すると、盛高は

「これ、三郎。ゆきさんをいじめるな！」

と、ゆきに助け舟を出すのであつた。

ゆきは、そんな盛高の優しさに、ますます惹かれていった。

盛高は、盛高で、ゆきの純情な性格を好いていた。慈円に仕えた、比叡山、西山では、周囲に女性の姿はほとんど無かつた。また、自身も、仇を求める毎日に、精神が研ぎ澄まされ、女性を見ても、惹かれるものを感じたことは無かつた。

しかし、慈円に佐々木家の再興を促されて、時実へ敵討ちのことが吹っ切れた今、ゆきの純情可憐さはまことに魅力的に思えて、彼はその虜になつた。

あるいは、彼は、ゆきに、湖に身を投げた時子の面影を見ていたのかもしれない……。

――このようにして、二人はいつしか、お互いに相手に恋心を抱くようになっていた。

そんなある日、いつものようにゆきは差し入れを持って、盛高のもとへ来た。

盛高を探して、やっと見つけると、彼はその日は放免を共にせず、従者の六郎と巡回をしていた。

ゆきを見ると、盛高は、

「六郎、ここで分かれて見回るとしよう。そちは北側を頼む」

と言つて、六郎と別れた。

彼も、ゆきと二人きりになりたかつたのである。六郎もすでに事情を周知していたので、

「わかりました」

と言つと、盛高と別れて別行動を取つた。

一人になつたのを確認すると、

「ゆきさん！」

と、大声で呼ぶと、彼は、ゆきを手招きした。

北面の武士と、かつての白拍子の組み合わせは、身分的には、なんとも不釣り合いではあつた。盛高は衣装も立派で、いかにも上皇に仕える北面の武士らしく威風堂々としていた。

一方、ゆきは、かつては白拍子として、後白河法皇の傍で、舞を演じたこともあつたが、今は、すっかり河原の生活が定着して、衣服も粗末で、盛高の身なりに比べ、あまりにもみすばらしく見えた。しかも、都人からは今や『河原者』と蔑まれる下賤の身分である……。

しかし、盛高はそんなことには全く無頓着であつた。

後鳥羽上皇の院所にも、多くの女性がいる。特に側室に迎えられた女性達は、きれいに着飾つて、化粧も施し、上皇の寵愛を我が物にしようと必死に競い合っている。その周囲に仕える女性達も同様であつた。盛高はそんな彼女達を見て、可愛そうにこそ思いはするものの、恋心を抱くようなことは決して無かつた。

そんな、彼女達に比べ、ゆきは……。

盛高は、彼女の作らない美しさに惹かれていた。真の美しさは内面からくるものだ……。彼女の内面、即ち、心の美しさは生来のもの。盛高はそう確信していた。

内面の美しさは、外見にも現れる。

ゆきの見せる笑顔……。盛高はそれを見ているだけで、心満ち足りている自分ときおり、はっと気がついて狼狽することがある。そんな時は、わざと、

「さあ。お勤めじゃ！」

と、大声で自分に言い聞かせると、心の動揺を隠すために、わざとゆきから離れるのだ。

そして、

「では、ゆきさん。またお会いするといったそう」

と笑顔を作って、言いはするものの、内心は、出来ればもっと二人きりで時を過ごしたい、と思っているのである。

そして、この日、二人きりになる機会が訪れた。

河原に腰掛けると、二人はまずは、取り留めの無い話を始めた。

それだけでも、楽しかった。

しかし……。

付き合えば付き合うほど、相手のことが知りたくなってくるのは人間の常である。

この日、盛高は、かねてから一度ゆきに尋ねてみたい、と思っていたことを、思い切って聞いてみることにした。

「ゆきさん」

「はい！」

改まって、自分の名前を呼ばれて、ゆきは気が動転して大声で返事してしまった。あこがれの人と、二人きりになったことだけで、もう既に気分が舞い上がってしまったのである。

盛高はそんなゆきの返事に、思わず声を出して笑ってしまった。

「いや、失礼。ゆきさん。そんな硬くならなくても……。いや、前から一度聞いてみたいと思っていたのだが……。ゆきさんは、どうして……。どうして、ここで暮らすようになったのか。いや、答えたくないなら、答えなくともよい。単なる好奇心じゃ。不躰な質問であろつ。――済まぬ、いらんことを聞いてしまったのかもし

れぬ……」

盛高は独り言のように、そう呟くと、黙ってしまった。

ゆきは、というと、ようやく緊張が取れて、心の動揺も収まって、いつもの自分を取り戻していた。そこで、大きく息を吸って気持ちをさらに落ち着かせると、盛高に話し始めた。

「いいえ。聞いてください。私のような身分の低いものの話、本当につまらないでしょうけど、それでも、聞いてください。いや、聞いてほしいんです！」

ゆきが、真剣に話し始めたので、盛高も戸惑った。しかし、ゆきの真剣な表情を見ると、自らも居住まいを正した。

「では、お聞きするでしょう」

そう言つて、盛高も真剣な表情でゆきを見据えた。

「はい……」

こうして、ゆきは、自らの不幸な境遇を、生い立ちから始まり、ここ河原で仲間達と共に生活をするようになった今に至るまで、盛高に話し始めた。

自分のすべてを知っていてほしい。

思いはただそれだけであった。

それで、嫌われたって構わない。

ゆきの話は続いた。時折、涙ながらに……。

そんな二人の背中を遠くから、橋の袂で、見守る一人の僧衣姿の男がいた。

住蓮である。

ゆきが心配で、身に來たのであった。

この恋、果たして実るものであるのか

そもそも北面の武士と、河原者では、あまりにも身分が不相応だ。また、最近、市中の男が、時にはやんごとなきお方達までもが、色恋事を求めて、河原者の女性を探しに来るとの噂もあった。一度は、上皇様がお忍びで河原に來られた、などという嘘かまことか真偽のほどがつかねるような噂が飛び交ったこともあった。

時代の荒廃がなせる業であつた。

デカダンスというのであろうか……。

ここ平安の都もすでに”平安”ではなくなっていたのである。

住蓮には一抹の不安があつた。

その北面の武士とかいうものの、本当のところは、ゆきさんのこと、単に遊びで……。

そのようなことを考えると、いても立つてもいられなくなって、今日はゆきのあとをつけて来たのである。

しかし、こうして見る限り、身分の不相応は止むを得ないとして、件の男は、ゆきに手を出すことも無く、居住まいを正して、座っている。

大丈夫のようだ。ただの取り越し苦労か！

そう、言い聞かせながらも、住蓮は、二人を見守り続けた。

夕陽が鴨川の水面を照らして、実にまぶしかった。

そのきらめきの中、一瞬、武士が、住蓮の方を向いたように思えた。少なくとも、住蓮にはそう感じられた。しかし、強いまぶしさに目が眩まされて、武士の顔ははつきりと見えなかった。

ゆきの話がようやく終わったようである……。

武士が、ゆきの肩にそつと手を置くのが次に見えた。やさしく抱き寄せているようにも見えた。

そつとしておこつ。

住蓮は立ち去つた。

盛高に優しく肩を抱かれながらも、ゆきの目からは、幾度も幾度も涙が零れ落ちていた。喜びと、悲しみの感情が交錯した結果の涙ではあつた。

二人は、夕陽に見守られながら、時を忘れて、鴨の河原にいつまでもいつまでも座り続けた。



## 第二部第十六章

建仁元年（千二百一年）五月のある日……。

源頼朝の死から二年、鎌倉幕府内の内輪もめは相変わらず激しく、政情は安定しなかった。そのせいもあって、都の治安も改善の兆しは一向に見えなかった。

そんな中……。

ここ吉水の里、法然の庵では、法然一門の中にあつて、法然に近い弟子達が会合を持っていた。

中心には、今年五十七歳になる信空が座していた。彼は、叡山では法然と同門の弟子であり、最も古参の弟子であつた。そこで当然ではあるが、彼を中心に会合は進められていた。

話題は、近日中に執り行なわれる予定となつた、法然と慈円の会談についてである。

慈円から、先日、会談を持ちたいとの手紙があり、法然がこれに応じたのであつた。

慈円は法然の快諾を喜んだが、法然側は、というと、弟子たちが集まつたこの会合の重苦しい雰囲気を見る限り、法然自身の思惑はともかく、弟子たちが当惑していることは間違いないと言えた。

信空がその沈黙を破つて、重い口を開いた。

「上人は何をお考えか。この度の天台よりの申し出に、『ありがたい話、お受けいたします』と、誰にも相談されず、いとも簡単に応じられた。真意を尋ねても、何もお語りになられない。まったく、五年前に大病を患われ、何とか回復をされたものの、お体を大切に、という周囲の進言も果たして耳に届いておられるのかどうか……。

そんな進言を無視するかのように、続いては、一日七万遍に渡る念仏の行を連日行われた。それでも、何とか、この荒行を成し遂げ、念仏三昧発得をされて喜ばしい限りではあるが、それ以後というものの、話をされることもめつきり少なくなつてしまつて、今回の件も、

上人の真意がどこにあるのか、とんと図りかねるのだが……」

一番弟子ともいえる彼が口火を切ったことで、それまで黙していた、他の弟子達も口を開いて、自分の意見を述べ始めた。

まず、信空に続く古参の弟子である湛空が、続いて意見を述べた。「まこと、大原談義の折は、大原勝林院の顕真様は、浄土信仰厚くある意味、我らの味方とも言えましたし、談義中も三日間、我らを始め、多くの念佛者が師の応援に駆けつけることも容易でありました。しかし、この度の会合は……」

この湛空の発言を受けて続いたのは、五年前に九州より上洛、法然の弟子となっていた弁長である。信空、湛空ら古参の弟子が、どちらかという戒を嚴格に守る保守派であり目立った行動、発言が少なかったのに対し、弁長を始め、ここ最近に入門したものは、説法を中心に、念仏布教に情熱を燃やす者が多かった。このため、このような会合が持たれると、彼らは活発に意見を述べる事が多かった。

彼は、こう発言した。

「左様でございます。この度は、この会談、青蓮院で執り行なわれるという話、末寺とはいえ、天台の寺での会談となります。しかも、門主は座主の地位を慈円に譲った真性殿。彼は、慈円の一番弟子でござります。この状況では我ら応援に駆けつけることも叶いますまい。まかり間違えば、叡山の衆徒ども、待ち伏せの上、上人の命を狙うとも限りませぬ」

彼らは、会談の成り行きと共に、法然の身をも案じていたのである。

果たして、生きて青蓮院から出てこられるものかどうか……。法然の身の危険に話が及んだためか、再び、重苦しい沈黙がその場を支配した。

ため息だけが聞こえてくる……。比叡山の衆徒たちの、法然一門への批判は日を追うごとに強まっている。過激な者の中には、法然の身柄を引き渡せと主張するものも多いと言う。

そんな状況下で、天台の寺で会談を持つことが、ある意味どれほど危険であるか、彼らはそれを案じていたのである。

そこへ新たに一人が発言を求めた。四年前に法然の弟子となった幸西である。安樂、住蓮らがその一念義の教えの過激さを懸念していた人物である。

部屋に集まった皆が、巧みな弁舌で知られる彼の発言を注視する中、彼は意見を述べ始めた。

「まこと、叡山の昨今の動き、我らを敵視し、我ら一門を機会あらば根絶せんとするものであること明々白々であります。たとえ、上人が何と申されようと、我らは、この度の会合の裏に隠された天台の計略の恐ろしさをあらためて上人に訴えねばなりませんまい。そして、会談を中止していただくよう、上人にあらためて申し上げねばなりませんまい」

こう、幸西が言い終わると、部屋のあちこちから「左様じゃ、左様じゃ」という声がもれ出てきた。

弁長も幸西も共に、法然上人より、あの門外不出の選択本願念仏集を付与されていたことは周知の事実であった。即ち、法然よりそれなりの信頼を勝ち得ていたと思われる弟子の発言でもあり、他の者もそのことをよく理解していたので、あえて彼らの発言に異を唱えるものはいなかったのである。

もっとも、幸西に念仏集を付与した法然の真の意図は、彼への信頼の結果というよりは、彼の過激な一念義の考えを正そうとしようというものであったのであるが……。

すると、部屋の隅の暗がりですれまで黙っていた一人の僧が、  
「よろしいか」

と、発言の許可を求めた。

「申されよ、ここは自由闊達に議論をする場。集まられた人々の意見を率直に聞きたい」

信空から促されて、その僧が前に進み出た。ろうそくの灯火に照らされて、僧の顔がはっきりと確認出来た。小柄で、細面の顔であ

る。このため暗がりでは全く目立たなかったのである。しかし、今や、その僧が誰であるか分かると、一同はざわめいた。

信空も、その僧の顔を見て、思わず居住まいを正した。

「おお、これは隆寛殿……。ここへおいででありましたか」

そう、彼こそ、あの慈円をして、『長樂寺に彼を派遣したことは、失敗であつた』と言わしめた、長樂寺門主、天台律師の隆寛である。彼は、もともと、慈円から、法然一門の情報収集のために、長樂寺に派遣されたのだが、その結果は、法然の教えに心酔し、いつしか彼の弟子となつてしまつたのである。

「天台に僧籍を置いたままの身分で、信空様始め、上人の直々のお弟子様たちに、このように意見を申すこと、まことに心苦しい限りではありますがお許しください」

左様、彼がこう述べたとおり、彼は未だに天台の僧籍を離れずにいた。即ち、法然の弟子たちの中にあつては外様の弟子であると言えた。

外様の弟子であるがゆえに、遠慮して、場の中心から離れた片隅に座つていたのである。

自らの地位、才能、見識を決して鼻にかけることなく、むしろ常に控えめな態度を取り続ける、このような謙遜さもあつて、彼は多くの者から好意を持たれていた。無論、法然の弟子となつてからの勉強熱心さも人一倍で、浄土經典の緻密な研究など、法然も、彼には一目置いていた。

しかし、一方で「彼は裏では今も天台と通じている。信用ならぬ」として、彼とは距離を持つものいた。

暗がりで囁く声が出た。

「あの方が、天台僧であるにも関わらず、上人が著された、門外不出の『選択本願念仏集』の写本を、近々許されるであらうというお方であるか」

「まことに、上人の信頼も厚く、また、その博学さは、一番弟子の信空様をも上回ると言つ、専らの噂じゃ」

「しかし、妻帯されているということじゃが……」

「だからこそ、天台では、律師以上の出世がなかなか叶わぬのじゃ」  
「なるほど」

そんな、囁き声を遮るかのように、細面のその顔からは想像できないような、隆寛の太く低い声が、室内に響いた。

「私が思いますに、この度のこと、慈円様の、この国を憂う一途な御心から計画されたものと考えます」

一同がどよめいた。

慈円の今回の会談の申し込み……その背後にある天台の悪意は何か、ということを糾明せんと、皆はここに集まっていたからである。信空が、そんな皆の気持ちを代弁するかのように、早速反論した。「隆寛殿、いかにそのように仰せとはいえ、今までの、天台の我らに対する誹謗中傷の数々を見る限り、このたびの申し出、そのように慈円殿の善意から出たものとはとても思えませぬが……」

弁長がこれに同調した。

「まったく、朝廷への度重なる彼らの訴状を見れば、彼らに悪意しか無いことは明々白々であろう。確かに我ら一門の中に過ぎた言動をするものがいるのは事実であろうが、それは、我らの内部の問題。天台内部にもそのような過ぎた言動をいたす者はおろうというものならば、わざわざ、我らが師と会って話しをしようなどは、何かよからぬ魂胆があるとしか言い様がない」

このような反論を、隆寛は黙って聞いていたが、彼らが反論し終わると、再び落ち着いた口調で話し始めた。

「確かに、ここにお集まりの皆様の危惧、十分に理解出来ます。されど、私、比叡山にて慈円様の教えを受けた身、あの方の心の内も、よく理解している者と自負しております」

「あのお方の理想、目指しているものは、究極のところ調和であります。調和を重んじられるお方です。仏の教えを中心とした調和の世界を理想とされておられます。無論、すでに評判をお聞きの通り、確かに一流の策略家でもあります……。それでも、何か、暴力に

訴えるとか、あるいは、法然上人以下、ここ吉水に集う念仏者たちを弾圧しようなどとは決して考えてはおられませんまい」

「もつとも、あの方のことですから、おそらく上人を何とか自らの影響下に置けぬものか、というお考えをお持ちなのでしょう。しかし、それが受け入れられないと知ったとしても、それで暴力的な手を使うなどということを考えられるようなお方ではありません」

隆寛の落ち着いた口調ではあったが、しかし熱のこもった話に、一同はただ頷くしかなかった。

再び重苦しい雰囲気とその場を支配した。

「まあ、上人が承知されたものを、今さら我らが覆すことも出来まい」

信空が沈黙を破って発言した。

もう、十分に議論はし尽くしたであろう、という意味が言外にこめられていたのは言うまでもない。

「二年前に我が子のように可愛がっていた感西を病で失い、昨年には親しくされていた式子内親王を失われた。それからというもの、何かしら上人は元気を失われているように私には思えてしょうがない。あまり外へ出ようともしない。御年七十であられる。無理もない。その上人が、自ら会談を承知されたのだ。深いお考えがあつてのことであろう。我らは事の成り行きをしっかりと見据えていくしかあるまい……。ともかくも、今日はこれにて解散することとしたそう」

最古参の弟子の発言に、これ以上意見を言うものはもはや誰もいなかった。

皆は次々と部屋を後にした。

その中に、安楽、住蓮の姿もあった。当然彼らもこの会合には参加していたのである。

「安楽、貴殿はどう考える」

住蓮の問いに、

「うむ、確かに、選択本願念仏集を口述筆記させられたのは、その

前に大病を患われたことがきっかけではあろう。いつまた病に倒れるやもしれん。人間、そう思えば、自らの考えを正しく後世に残すための方策を考えて当然というものである。であれば、今回の慈円殿との会談、やはり天台との和解を最終的には考えておられるのであるまいか」

安樂の返答に住蓮も頷いたが、

「しかし、天台との和解は、そもそも可能なのか」

と、重ねて安樂に問い掛けた。

「彼らが幸西、行空らの処罰を要求している限り、難しいであろうな……」

安樂はそう返答すると思わず溜息をついた。

比叡山側の非難の最大の予先が、幸西、行空らの一念儀の主張であることは周知の事実であった。

法然は、しかし、そんな彼らを戒めはするものの、破門するようなことはなかった。それは法然の温和な性格のせいでもあったが、そもそも彼が教団の指導者であるという自覚を全く持っていなかったことがその最大の理由であつたろう。

弥陀の本願を信じる者に身分の貴賤、地位の上下の区別なし……これが彼の持論であつた。自分もただの一介の僧に過ぎない。ただの愚痴の法然房なのだ。

むしろ、幸西には正しい念仏のあり方を示さんと、選択本願念仏集を付与したぐらいである。法然は、彼の布教にかける情熱を高く評価していたのだ。――皆が驚いたのは言うまでもない。

さらに、教団内部に、幸西、行空らの一念儀を支持するものも多かった。

その中には、法然が慈円と会談すること自体、天台への屈服だとして、これを實力でも阻止すべし、というものさえいた。

行空がその中心であるとの噂も流れていた。

「行空ならやりかねん。であろう、安樂」

住蓮がぼつりと漏らした。安樂も頷いた。漠然とした不安が彼ら

の心を覆った。

そんな、不安を吹き飛ばすように、努めて明るい声で、安樂はこう言った。

「くよくよ考えてどうなるうか！今は、我らに課せられた勤めを淡々と果たすしかあるまい！であろう住蓮！」

友の励ましに、住蓮も笑顔で答えた。

二人は引導寺へ向かった。いつもの六時礼賛興行のために……。いつもの人々のために……。極楽浄土往生を願う者のために……。そして、何よりも”救い”を求める者たちのために……。



## 第二部第十七章

天台と法然一門の対立がこのようにして一気に先鋭化しつつあったその頃……。

京の都の治安は未だ最悪の状態を抜け切れないでいた。都に設置された右獄、左獄は罪人で満ち溢れていた。

京の都に牢獄が設置されたのはいつごろのことか定かではない。

御所両側に右獄、左獄が設けられた、と歴史書にあるのみだ。

そして、死罪を申し渡された者は、いったん左獄に移されたあと、さらに、鴨の河原に近い、東の京極（今の新京極近辺）にある六角獄舎に移され、そこで、鴨の河原で首を切られる日を待ちつづけていたということである。

そんな罪人達を哀れに思つてのことであろうか……。

平安末期になると、いつ頃からか、この六角獄舎へ念仏聖たちが出入りするようになり、首を切られる運命の罪人たちのために、念仏を唱えていた、と伝えられている。

建仁元年（千二百一年）五月のある日……。

丁度、法然と慈円の会談が秘密裏に行われようとしていたその日のことであつた……。

――そんな念仏聖の中に、あの応水の姿があつた。

彼は、住蓮と時子の再会を見届けると、いつしか彼らの前から姿を消した。中断していた諸国行脚を完遂しようと、また都を離れ旅に出たのである。そしてようやくそれを成し遂げると、再び都に帰つてきて、六角堂の近くに草庵を結んだのであつた。

六角堂……聖徳太子が創建したと伝えられるこの寺へは、太子信仰に篤い大勢の老若男女が、貴賤の別無く、連日参詣に訪れていた。寺の周辺はそんな参詣客で大変な賑わいであつた。

応水はそんな賑わいの中で、連日多くの民衆、参詣客を相手に説法活動をしていたというわけである。

そのすぐ目と鼻の先に六角獄舎があつた。

獄舎に収監された死刑囚のもとを、幾人かの念仏聖が訪れているという噂は、すぐに応水の耳にも入ってきた。

このことは彼の心を強く捉えた。

そこで彼は、獄舎の監督官に近づいた。やがて、彼の好意を得ると、特別に獄舎の中へも出入りを許されるようになった。

このようにして、死罪が申し渡された罪人には念仏を勧め、彼らが罪を悔い改めれば、共に、彼らの極楽往生を願って念仏を唱えることも、日々の説法と共に彼の重要な日課となっていた。

そんな応水の耳にある噂が飛び込んできた。

一人の若い僧が六角堂に籠って、もう二箇月になるといふのである。

それも、色恋ごとで悩んでいるとか……。

「さて、さて、どんな僧であろうか」

応水は強い関心を持った。たとえ、色香に迷った結果としても、あのお堂に二箇月近くも籠るとは、並みの悩み方ではない。

当時、僧が恋愛をすること、さらには妻帯することは決して珍しいことでは無かった。ただ、それを表沙汰にすることはなかった。

- 隠しておきさえすればよい。何も悩むことではあるまい。

それが当時の一般的な考え方であつた。

「よほど、真剣に悩んでいるようだ……。さて、一度、どんな若者が会つて話をしたいものじゃ」

応水は、近江、馬渚の里での住蓮との出会いを思い出した。若者が真剣に悩む姿は美しい。- いつも応水はそう思う。

彼は機会をうかがうことにした。

そんなある日……。

六角堂の近くでいつものように説法をしていた時のことである。

六角堂の方向から人のどよめきが聞こえた。かなりの騒々しさである。説法を聞いている人々も、何かと六角堂へ走り出した。

「何事であろう」

説法の中止を余儀なくされて、応水も已む無く、走る人々に倣つて六角堂へと向かった。

「例の坊主がお堂の中で倒れたらしい！」

誰かが叫んだ。

「死んだのか？」

「いや、死んではいないらしいが……」

「あまりに思いつめて、飲まず食わずの状態だったらしい」

「それほどに恋焦がれている娘御がいるのであれば、裏で囲つておけばよかるうものを」

「まこと、都にはそんな坊主は数え切れぬほどいるではないか」

「ところが、隠すぐらいなら死んでしまったほうがまだ、と悩んでいたらしい」

「馬鹿な。そんなことを公言して、叡山で生きていけるはずがない」

「それなら、還俗すればよかるうものを」

「ところが還俗もいやだと駄々をこねるらしい」

「何とまあ、我俣な坊主じゃ」

「まあまあ、そんなに責めては可愛そうじゃ。ここまで思いつめておるものを」

「まこと、まこと。――それで太子様に答えを求めんと、ここに籠つておつたのじゃろう」

「太子様もお悩みになったということか？」

都人の喧しいこんなやり取りを尻目に、応水は人の波を掻き分けると、六角堂の正面にたどり着いた。

群集の頭越しではあるが、堂の正面から、今まさに、その僧が運び出されようとしているのが見えた。遠目ではあるが、顔面蒼白で、息も絶え絶えという感じである。

「薬師を呼べ！」

「そんな者がここにおろうか！」

人々が叫びあっている。

応水は、前に一歩出て、大きい声でこう叫んだ。

「私が見てみよう！薬師としての心得は多少ある」

彼は、近江の里、長命寺の坂下者の集落にあって、実際、よき薬師として、多くの病人に治療を施していた。

この申し出に応じて、人々が彼を通すために道を開けた。彼は人を掻き分け、さらに前に進み出た。ようやく堂の前の広場に出ると、そこには目の前に、今、中から運び出されたばかりの件の僧が横たえられていた。

――なんとという若さであるか！

これが応水の、まずは率直な感想であつた。やつれてはいるが、凛々しい顔立ちであつた。しかし、眼を閉じたその表情は苦悶に満ちて、この青年の苦悩の深さを物語っていた。

応水は青年僧の脈を取った。次に唇に触れると、口を両手で開けて口の中を覗き込んだ。

「ふーむ」

と言うと、続いて、彼は青年の腹部を抑えた。最後に、指先で起用に閉じられた眼を開けると、その青年の顔を平手で軽く叩いた。

「おい、お主！わしの言うことが聞こえるか！」

こう、問い掛けると、青年は弱弱しく頷いた。

応水は、ここに至って大きい声で周囲の者に命じた。

「すぐに水を持って来られよ！それと、少量の塩が必要じゃ！すぐに準備いたせ！急がぬと、この者の命危うい！」

応水の言葉に呼応して、周囲の動きは速かった。必要なものはすぐに応水の手元に届いた。応水は塩を少しつまんで水に溶かすと、その水を青年の口に注いだ。

「しっかりせえ！」

応水は青年僧に呼びかけた。水を少しずつ口に含ませていくと、青年僧は意識を取り戻して来た。

「うっーん」

呻き声をあげると、青年は目をかすかではあるが開けた。

「よしよし！しっかりするんじゃ！」

応水はそう言うと、その青年僧の上体を少し起こした。

青年僧は意識を取り戻すと、自らの手で、口元に差し出された杯を掴むと、一気に杯の中の水を飲み干そうとした。

「いかん！一気に飲んでは！」

応水はそれを嗜めた。

「ゆっくり、少しずつ飲むのじゃ。失われた体の水分を補えさえすれば、すぐに良くなるう。しかし、急いではいかん。急げば、かえって悪くなる」

応水の説明を聞いて、青年僧は安心したのか、再び眼を閉じた。

青年僧が命を取り留めたことが分かると、群集は口々に

「まあ、何と人騒がせなことよ」

「まったく、まったく」

と呟きながら、三々五々解散し始めた。

気が付くと、応水とその青年僧、及び、六角堂の館主らしき年配の僧だけが、境内に取り残されていた。この頃にはもう青年僧はかなり元気を取り戻していた。

もう話をしてでも良からう、と判断したのであろう――館主とおぼしきその僧が青年僧に呼びかけた。

「範宴殿」

範宴――治承五年（千百九十一年）、彼が九歳の時に、青蓮院において、あの慈円から得度を受け、頂いた名前である。

そして、この出来事のあと、彼は程なく名前を変える。

その名も綽空……。

左様、この青年僧こそが後に、法然の弟子として、あらゆる迫害に耐えながらも、法然の専修念仏の思想を守り抜いたあの親鸞上人その人であった。

## 第二部第十八章

範宴と呼ばれた、その青年僧――年のころ三十そこそこであったろうか――は、弱弱い声ながらも、

「はい」

と、返事をする、体を起こして姿勢を正そうとした。そして地面に正座すると、頭を深く下げた。

「館主様、まことに申し訳ありません。かように迷惑をかけたこと、深くお詫び申し上げます！」

範宴と呼ばれた青年僧は六角堂の館主にこうして謝罪の言葉を告げると、しかし、再びそのまま地面にへたりこんでしまった。六角堂内に飲まず食わずの状態で百日間近くも閉じこもっていたので、体力が消耗しきっていたのである。

「範宴殿、もうよい。無理はせずとも」

「申し訳ありません！」

そのままの姿勢で、重ねて謝罪をすると、彼はわっと泣き出してしまった。

応水が、この青年僧と館主の間に割って入った。

「私は応水と申す者、この近くに草庵を結び、暮らしております。この若者、私がいったん引き取りましょう。体力の消耗もかなり激しい様子でありますし……」

応水の申し出に、六角堂の館主は安堵の表情を露にした。

「いや、それは助かります。まこと、太子様を慕って、来られる方を我らも無碍にはお断りできませんから……。それでもこのようなことがあります、責任が持てませぬ。それゆえ、貴殿が、この者預かっていただけるということであれば、これに勝る妙案はありませんまい。よろしくお願い申し上げます」

そう言う、彼は合掌して立ち去った。

後には応水と青年僧だけが残された。青年僧は泣き崩れたままで

ある。

「ともかく、わしのぼろ小屋へ行くとするか」

応水は青年僧を促した。手を貸すと、彼は青年僧を抱きかかえるようにして、六角堂を出た。

小屋まではそう遠くない……。鴨の河原の手前に彼の草庵があった。そこへ何とかたどりつくと、彼は、青年を床に寝かした。

「必要な水分は取った。今日の所は、あとは寝ることじゃ。明日から少しずつ粥など食べ始めるといたそう」

青年僧はようやく泣き止んだ。涙を拭くと、彼は応水に感謝の念を伝えた。

「ありがとうございます。あなたがいなければ私はもはやこの世にはいなかったかもしれませぬ……。いや、それとも……」

青年僧はそこで口ごもった。

応水は尋ねた。

「それとも、とは？」

青年は答えた。

「このまま死んでしまっても、それはそれで良かったのかもしれない……」

応水は青年をたしなめた。

「何を馬鹿なことを言うか！」

応水は、悲嘆に打ちひしがれているこの青年に、それでもどう声をかけていいものか少し思案したが、

「なに、これも御仏のお導き。そちはまだまだ生きて、この世のために役立たねばならぬ、という仏の命令と考えなされ」

と、まずは青年を励ました。

「この世のために……」

青年僧は、てっきりひどく叱られるものと思い込んでいたので、この応水の激励の言葉に戸惑った。

応水は、そんな青年の戸惑いをよそに、さらに言葉を続けた。

「左様、聞けばまことに青年らしい悩みごとではないか。恥じるこ

とではない。今の時代、恋事に命を懸けるほど悩みぬくことも大切ではないか。そうしてこそ……」

「そうしてこそ……」

青年僧は応水の説教に聞き入っていた。

「左様じゃ。そうしてこそ、今の時代の民の苦しみも理解できようというものじゃ、真剣にな」

「民の苦しみ……」

「そうじゃ。自分のあり方すら真剣に悩めぬ者が、どうして他人のことで悩み抜くことなど出来よう！ 違うか？」

青年僧は応水の説教に心動かされるものを感じたらしい。彼の話の続きを聞こうと、体を起こしたその瞬間であった。

「あつ」

と言うと、彼は気が遠のき、再び蹲ってしまった。激しいめまいに襲われたのだ。

「無理はするな！」

応水はすぐに駆け寄って、介抱した。幸い、一時的なめまいで、青年僧はすぐに意識を取り戻した。

「今日はまずゆっくり寝ることじゃ。話はまた明日に！ お主とはいろいろと楽しい話が出来そうじゃ。ははは」

そう言い放つ応水の快活さに、青年僧は安堵感を覚えた。

「では、お言葉に甘えさせていただきます」

「そうしなさい……。ところで名前は何と言ったかな？」

「範宴と申します」

「そうか、範宴……よい名じゃ」

「はい、この名前、慈円様につけていただいたものでございます」  
応水は驚いた。

「何と、貴殿はあの慈円の弟子であつたか」

「はい、青蓮院にて、慈円様の下で得度いたしました」

「何と！」

「はい、そして、慈円様が座主となり、比叡山に登られたとき、私



もお供し、その後叡山で修行していたのであります」

「左様であつたか……」

皇室にゆかりの青蓮院で、あの慈円から得度を受けたということは、即ち、この青年の出身が、それなりの身分の家であつたということ物を語る。

叡山において、それなりに出世することも出来たであろうに……。

噂には聞いていた、この青年の恋の悩みは、叡山での出世の道を諦めさせるほどのものであつたということである。

この青年の苦悩を何としても救つてやらねば

応水は固く心に決意すると、

「さあ、まずはともかくお休みなされ」

と、優しく彼に言った。

「はい！」

青年の元気な返事に安堵すると、応水は彼を置いて、外へ出た。

夕暮れであつた。

西の方角にきれいな夕焼けが見える。道行く人の中には西の方角に手を合わせて合唱する者もいた。当時は、多くの人が西方に浄土があると素朴に信じていたのである。

「西方浄土か……」

応水は一人呟いた。

「さてさて、阿弥陀仏様は何処におわすか……。西方浄土におわすか、はたまた……。お忙しいことではあるうが、是非とも、この青年の下へお出でいただきたいものじゃ。この応水の願い、聞いてくだされ。あの住蓮を救ってくださつたように。なにとぞお願い申し上げます！」

応水も目を瞑つて合掌した。

夕日がまことに美しかった。すると、何か心が洗われるようで、いつも心のどこかに殺伐とした感情を抱えている自分が何か非常に惨めに思えてきた。

先ほどの青年僧との出会いも影響した。恋に関する純粋な悩みは、この世の凄惨さからは程遠いところにある、ある意味勝手な我侭とも言えた。

しかし、その青年の魂の純粋さは、宝石のごとく煌いている……。こんな感情は久しぶりであった。

「阿弥陀様があの西方浄土におられる……」

ふと、そんなことを思うと、彼は一心不乱に念仏を唱え出した。念仏を唱えつつ、心の中では

『阿弥陀様よ、来てくだされ！そしてこの民を苦しみから救ってくだされ！』

と、叫び続けた。

京極に近いここは、普段から雑踏ひしめくところである。夕方なので人の往来は特に激しい。目を瞑りながらも、人々が脇をすり抜けていくのが感じられる。

あちこちで叫び声すら聞こえる。

応水はそんな喧騒の中、一心不乱に念仏を唱え続けた。

『阿弥陀様よ来てくだされ！』

心の中の叫び声は益々大きくなっていった。

――どれだけ時間が経過したであろうか。

一心不乱にこれほど念仏を唱えるのは久しぶりであった。それも、道のと真ん中で……。

いつしか周囲の喧騒も耳に入らなくなった。

すると、突然、応水の左の頬の横を冷たい風が吹き抜けた。前から後ろに……。正確に表現すれば、それは冷たい風、というようなものではなかった。風ならば、体全体が感じるはずである。それは、頬だけで感じられた。丁度、頬を川の水につけた時のような、そんな冷たさだった。――限りなく心地よい感触であった。

- これは何か？

と、考える間もなく、今度は同じ感触を右の頬に感じた。後ろから前に……。続いて左の頬を前から後ろ、また続けて、右の頬を後

るから前に、……そう、応水の体の周りをその風らしきものはぐるぐると回りだした。

すると、体が恍惚感で満ち溢れてきた。周囲の喧騒は全く聞こえなくなつた。――限りない静寂の世界……。こんな体験は応水は初めてであつた。

応水は念仏を中断した……。

そして、一体自分の身に何が起こっているのか、この感觸の原因を確かめるべく、恐る恐る目を開けた。

するとその瞬間、閃光とも言える強烈な光に照らされた。一瞬目が眩んだ。――ようやく明るさに眼が馴染んで、周囲の光景が目に見え込んできた。

「何と！」

応水は自分の目を疑つた。

目の前に広がっていたのは時間の止まつた世界だつた。全てのものが停止していた。道を歩いている人の中には片足を宙に上げたままの人もいた。――空を飛ぶ鳥も翼を広げたまま宙に止まつている。「何と言うことか！」

そして、気が付くと、応水自身も身動きが取れないでいた。

何とか体を動かさうともがいてみるものの、全く金縛りの状態であつた。

「これは一体！」

無論声は出ない。――心の中で「助けてくれ！」と叫んだその瞬間であつた。

「応水、そちの願い確かに聞いた。安心めされよ……」

美しい、そして限りなく優しい女性の声が耳元で響いた。

「あつ！」

と叫び声を上げると、応水はその場に崩れ落ちて、倒れこんだ。激しい頭痛と眩暈に襲われた。意識が遠のくのを感じた。

――蹲つたまま暫く時が過ぎた。

「大丈夫か！」

見知らぬ男の声に、応水は我に返った。まだ頭痛がしたが、何とかその声の主の男に支えられて立ち上がった。

- 周囲の光景は活気に溢て、いつもの通りであった。

すべては生き生きと活動している。 - 当たり前のことではあるが、応水はそれを確認するため、周囲の物の動きを自らの目で追った。

「大丈夫か！」

再び男の声がした。通りがかりの者らしい。応水は彼に支えられて身を起こした。

「かたじけのうござる。なーに、もう大丈夫じゃ。少し眩暈がしただけのことゆえ……」

応水は男に礼を言った。男が去ると、彼はもう一度周囲を見回した。

すべてはいつもの夕暮れの光景であった……。

何ら疑問の点はない……。

すると、彼は自分の目を何度も擦り始めた。そして、続いて自らの手で自らの頭をこつこつと叩いた。 - 先ほどの不思議な体験が現実だったのか、幻だったのか、自分でもまだ測りかねていたのである。

夕日が西山にかかって、その姿を隠し始めると共に、次第に日差しは弱まっていった。

先ほどの眩しい光は、夕日の光に一瞬目が眩んだだけのことだったのか？

先ほどの女性の声は、念仏に没頭するあまり、自らが作り出した幻の声であったのか？

応水は、答えを見出せぬまま、自分の小屋へと戻った。

「安心めされい……」

という、あの女性の声が頭の中で木霊していた。

「阿弥陀様が……」

と、そこまで呟くと彼は大きく頭を横に振った。

『まさか、そんな！』

そう心の中で叫びつつ、彼は振り向くと西山に沈む夕日をもう一度見やった。

真つ赤な夕日を眺めて立ち尽くしていると、彼の心に何かしら感動が沸き起こるのを彼は感じた。それは、この世の凄惨な現状に常に怒りを燃やし続けてきた彼にとって、そして、その凄惨な現状を改善すべく、ありとあらゆる権威と戦ってきた彼にとって、は、ある意味まことに新鮮なものであった。

そう、今までの彼の生きる力の根源は、『怒り』であった。――常に怒りと共に生きてきた。民を弾圧する力に対する怒り……。

それが、今心に湧き上がる感動は異質のものであった。

怒りの感情とは対極にあると言える……。

そう、それは、何とも表現しがたい安らぎの感情であった。ようやくにして魂が救済されたのだ、と言うような心の平安をもたらしものであった。

自分は念仏布教と言いながら、その実、自らの怒りの力を、人々に振りまいていた、発散していただけのことに実は過ぎなかったのか？

人々が求めているのは魂の平安だ

ちつばけな人の力で何が出来よう！

それなのに、自分はあまりにひとりよがりではなかったか？

念仏を唱えていても、実は怒りをぶちまけているだけではなかったか？

念仏を唱えていても形式的にしか過ぎなかったのではないか？  
人々に念仏を勧めながら、自分はどれだけの時間を念仏に費やしていただろう。

自分は真に阿弥陀様にすべてを委ねたことがあったろうか？  
阿弥陀様の力こそ無量無限であり、それに絶対的に頼ることこそ肝要なのだ……。

応水は、悔い改めるべきは我が身である、とここに悟った。彼は

はつと我に帰ると思わず叫んだ。

「阿弥陀様よ来て下さったのですか！」

突然の叫び声に、道行く人が不審な顔で振り返った。

応水の心はしかし、喜びで満たされていた。

そう、まさか？ではない。絶対的に全ての事柄を委ねる時、阿弥陀様は来て下さるのだ。その人の心の中に来て下さるのだ。そして事実、来てくださったのだ！

応水は目から鱗が取れた感覚であった。

「絶対他力こそが、阿弥陀信仰の真髄なのだ……」

そう呟きながら彼は草庵へ足を向けた。

「今までそんな分かりきったことに気がつかなかったとは！」

そして草庵へ帰ると、彼は念仏を再び唱え始めた。

聞く人が聞けば、その念仏は今までの念仏とは違ったものであることが分かったであろう。

それはひとりよがりの、怒りを爆発させるための念仏ではない。

絶対他力の、魂の平安を求める念仏であった。

彼の念仏の声は、夜更けまで続いた……。そして、それは美しい音楽となって、その夜多くの人の心を魅了した……。

## 第二部第十九章

翌日、青年僧の元気な声に、応水は目を覚ました。徹夜の念仏で、いつしか眠りに落ちたらしい。座ったままであった。

目の前の床には、しかし、その青年僧　即ち、範宴はいなかった。

彼の声は外から聞こえてくる。

応水は目を擦りながら、外へ出た。

見ると、範宴が何か叫びながら嬉しそうに飛び跳ねている。

「どうしたのじゃ？」

応水の問いかけに、彼は満面に笑みを浮かべると、こう答えた。

「夢に、阿弥陀如来様が現れたのです！」

応水は腰を抜かさんばかりに驚いた。

「何と！」

範宴は話を続けた。

「昨夕、応水様に勧められるまま、早くに床について、すこしうとうとし始めた時でした」

「ふむ」

応水も彼の話に聞き入った。

「何と、阿弥陀如来様が私の枕元に現れたのです！」

「何？」

応水は、自分の昨夕の不思議な体験を思い出した。

この青年もかような不思議な幻を見たのであるうか？

そんな応水の心の動揺をよそに範宴は話を続けた。

「すると、如来様がこう私にお話になるのです」

「ふむ」

応水はさらに聞き耳をそばだてた。

「『範宴、そちの悩み、確かに私は聞いた。しかし、今は休みなさい。あとで、私は観世菩薩をそちのところに遣わそう。無量の知恵

をもつて、菩薩は、そちの魂を苦悩から解放してくれるであろう」……そうお話になるのです！」

応水は驚愕のあまり絶句した。

――二人の人間が相前後して、かように不思議な体験をしたのは、単なる偶然か？

応水は、ともかくも興奮しているこの青年僧を宥めようとした。

「範宴殿、ともかく中に入りなされ」

「はい！」

範宴は、応水にそう促されると、嬉々とした表情のまま草庵へ戻った。

「ともかくも、まずは体力を回復させんとな」

応水はそう言つと、棚から、何か薬草を取り出した。そして、それを煎じ始めた。

「数日、ここで過ごしていかれよ。なーに、すぐに元気になるわい。その後、そちをある人物に会わせるとしよう。わしの昔からの友人じゃ。と言つても、年はずっと若いがのう」

応水は、彼を住蓮に引き合わせようとしたのである。

同じように自分の生き方を悩みぬいた住蓮なら、この青年を立ち直らせることが出来よう。

そう、彼は判断したのだ。

「はい？」

突然の提案に範宴は戸惑いを見せた。応水は彼の不安感を取り除こうと、住蓮と自分との関係について語り始めた。

近江の国、馬渚の里での出会いに始まり、今に至るまで……。

時子のこと、すべて……。

範宴は興味深そうに彼の話に耳を傾けた。

「若者は若者同士、悩みを語り合うのが一番じゃ。そうしているうちに、観世菩薩様が、そちの悩み、確かに解決に来てくださるであろう！」

応水の励ましの言葉に、範宴はいたく感動したのか、突然泣き始



めた。

「ありがとうございます！私のような者に、かように心を砕いていただいて、……本当に、本当に有難うございます！」

ひとしきり泣き終えると、彼はようやく冷静さを取り戻したようだった。

「吉水の上人様のことは聞いておりました。一度、教えを請いに行こうかとも考えておりました。しかし、私の悩み、あまりにも身勝手なことあります。そんな身勝手な悩みで、高名な上人様を煩わせることなど出来ましょうか？そんな思いでおりました。まこと、その上人様のお弟子様と引き合わせていただけなのであれば幸い至極。喜んでお会いいたします。本当にかたじけのうございます」

彼は再び深々と頭を下げた。

応水はどこまでも純粋な彼の志に改めて感動した。そしてこう彼に告げた。

「なに、大したことではない。面白い人物じゃ。六時礼賛に全身全霊を打ち込んでおる。それと、もう一つ、犬神人の里での説法、布教にもな……」

「犬神人の里で？」

「範宴は”犬神人”と聞いて、一瞬驚いた表情を見せた。しかし、彼の見せたこの反応は、差別偏見から来る拒否反応ではなかった。

応水にはすぐにそれが感じ取れた。

自分の知らないことを、ありのままに知りたい、そんな純粋な探究心がなせる業であった。この青年の思いは、彼の表情から応水に瞬時に伝わっていた。

「左様、犬神人の里でじゃ……」

と、言うつと、応水はそのまま続けて、住蓮が、かつての恋人との縁で、その里へ出入りするようになったこと、そして、そこで説法をするようになったこと。そして、さらには、安樂をはじめ、それを支援する友人たちのことをざっと彼に伝えた。

「吉水の上人様はかように懐の深い人であられましたか……」

白らいが”仏罰”として考えられていた当時の常識で、範宴が深い感慨を持つてこの話を受け止めたのは当然のことではあった。

応水は彼の反応を確かめると、さらにこう続けた。

「もつとも、上人様門下の弟子の中にも、彼らとの交わりについては距離を保つ者も多いのが事実、いや悲しい話じゃが、それが現実なのじゃ……」

説明を聞いた範宴は悲しげな表情となった。その表情が彼の純粋な心を表していると言えた。

「そうでございましたか」

左様、純粹な心……。それは正義、公正、弱者への労わり、といった言葉で表現出来ようか。

応水はこの青年が希求しているそれらのものを、彼の目から直感的に感じ取った。

一見弱弱しく見える彼の目が、今や真理追求の炎を燃やしていることを、応水は決して見逃してはいなかった。

「そうじゃ。吉水に集う念仏聖達にして、まだ、深い古い偏見から逃れられておれん。情けないことじゃ」

応水はこれらのことをすべて話し終えると深いため息をついた。

暫し沈黙の時間が続いたが、その沈黙は、竈から聞こえる湯の湧き始めの音で破られた。

「おお、煎じ終えたようじゃ……」

応水は範宴に薬を勧めた。

「まことにかたじけのうございます」

範宴は、ぐつと一息に、煎じられた薬を飲み干した。

「これはまことに苦い！」

そう言つて、範宴は少し顔を歪めたので、応水は笑ってしまった。笑わないでください！」

そう言つ範宴も笑い出した。

笑い、そうしばらく笑ったことがなかった。笑うことを忘れていた！

腹の底から笑っている自分に気がつき、応水は何とも不思議な気分だった。

実際、笑いながら、応水は、この青年の純粹さに、忘れかけていた何かを思い出さされたようで、何とも表現しがたい魂の平安を感じていた。

この青年の純粹さから学べ、という阿弥陀様のお叱りであるうか？

二人の談笑はその日、いつまでも続いた。

## 第二部第二十章

しかし時代の奔流は、平安に満たされた彼ら二人の笑い声を完全に流し去ってしまおうとしていた。

朝廷、宗教界、幕府、彼ら支配者階級に属する者達は、敵対、憎悪、策略の中に生きていた。そんな彼らは平安、平和を希求する民の心を決して良しとはしなかったのは当然のことである。

支配に必要なものは恐怖であった。そして実際、恐怖が貧困、飢餓に苦しむ民達を完全に支配していたのである。

そんな流れの中で……。

建仁元年（千二百一年）の師走のことであった。

秘密裏に行われた、慈円と法然の会談は、結局物別れに終わってしまった。

それはこういう時代背景の中、ある意味、当然の帰結であったのかもしれないが……。

会談の詳しい経緯はどの歴史書を紐解いても記載はされていない。従って会談が決裂した理由は今となってはまったく分からない。

そして年は明けて、建仁二年（千二百二年）二月、場所は青蓮院……。

「まったく、あの頑固者め！」

慈円は愚痴をこぼす毎日を送っていた。

慈円にしてみれば、座主就任後、天台衆徒たちに秘密にしてまで、執り行った法然との会談であった。彼なりの覚悟があった。

そして、それなりの覚悟を持って臨むからこそ、法然も折れて来るであろう、との思いがあつたのも事実である。

予想は裏切られた。

「立宗宣言を撤回しさえすれば、天台内部の不満については、このわしがすべてうまく収める！」

法然にこう迫ったが、法然は頑として譲歩しなかった。

「浄土の宗を立てること、これは凡夫のためなり。また兼ねては聖人のためなり」

法然は、こう言つて、立宗宣言の撤回を求める慈円の要求を、拒否したのである。

立宗宣言――それは法然が著述した選択本願念仏集に記されていた。

法然が著した選択本願念仏集の写本は、門外不出とされていたにも拘らず、いつしか南都北嶺の僧達の手にも入っていた。

その冒頭に浄土宗立宗の宣言があった。

即ち、

――問うて曰く、それ宗の名を立つことは、もと華嚴・天台等の八宗・九宗にあり。いまだ浄土の家において、その宗の名を立つることを聞かず。しかるを今、浄土宗と号すること何の証拠があるや。

この質問に答えたものが、上に記した法然の言葉である。

浄土の立宗を高らかに宣言したこの本が叡山や興福寺の衆徒を激怒せしめたのは言うまでも無い。

そして、慈円にとつても、他のことは多少譲歩できても、法然一門を天台の影響力の下に留めて置くためには、この立宗宣言の撤回は必須であつた。

「慈円様の申し出、これを断れば、自らの一門への風当たりがますます強くなることは自明。それにもかかわらず、法然が拒否したのは、全く解せませぬな」

慈円の弟子達も、自殺行為に等しい法然の態度に一樣に首をかしげていた。

いずれにせよ、この会談の決裂の結果、法然一門と天台との関係は、両者の真の思惑がどうであれ結果的には完全に敵対化してしまった。

しかも、かろうじて、法然に対して欺瞞的なやりかたではあつたが、それでも多少の好意を持って接した慈円が、この会談の失敗の

責任を取った形で、座主の地位を退いてしまった。

いや、むしろそれは、匙を投げた、という表現のほうがより適切であるかもしれない。

天台からの弾圧はもはや避けられまい。

会談決裂という結果を受けて、法然門下の弟子達はただただため息をつくばかりであった。

もっとも、一部過激な弟子たちが、この決裂をむしろ歓迎していたのも事実であった。

「天台、何するものぞ！」

そう言つて、辻説法でも、既存の宗派に対する非難をますます強めていた。

一方、匙を投げた形で、座主を退いた慈円は、

「かねてからの願いであつた歴史書の著述に専念したい」

そう言つて、青蓮院に籠つてしまったのである。

丁度、一月には兄の九条兼実も、妻の七十七回忌に、法然を戒師として出家してしまった。

――そろそろ潮時か？

と、思つたのも事実であつた。

思えば長い権力闘争の人生であつた。

彼はしかし、富と名誉を手に入れんがために、この闘争に参加したのではない。

――少なくとも彼自身はそう思っていた。

彼には、彼なりの自負心があつた。

それは、自分こそが、天台を建て直し、そして、その天台を中心に、この日ノ本の国の混乱を収めるのだ、という決意である。

天台と法然一門との対立問題……。

慈円の鋭い時代分析は、この対立問題が、ただの宗派の争いという問題に留まらない、ということを見抜いていた。

法然が率いる念仏者集団の力は、今や無視できぬほどに巨大化していた。

しかも、民衆ばかりではない。朝廷内にも、鎌倉幕府内にも、その帰依者は日毎に増えていた。即ち、法然一門を敵にまわすということは、彼らを支持する、これら無数の民衆を敵に回すということである。

それだけは避けたかった。

「あとは、天狗の目論見が失敗することを祈るのみじゃ……」

そう願う、慈円の耳に、吉水の方から念仏の声が聞こえてきた。いつものことであつた……。

しかし、その日は、その声为天狗の高笑いのように、慈円には聞こえてならなかつた。

「わしに出来るのは、あとは天狗退散のための加持祈祷ぐらいであるな……」

そう呟くと、慈円は勤めのため、講堂へと足を向けた。

講堂へ向かう廊下の冷たさが、今日はいつにもまして厳しく感じられた。

講堂へ着いた……。

――さて。

天狗の大合唱を撥ね付けるために、慈円の選んだ行は皮肉にも念仏であつた。

もつとも、それは観想の念仏であつたが……。

果てしなく無限に広がる宇宙を想いながら、慈円は阿弥陀仏を思い描くために、懇親の力を込めて念仏を続けた。

## 第二部第二十一章

慈円の歴史分析が鋭い面を持っていたことは事実である。

であれば、法然、慈円両者の会談決裂の原因は法然の頑固さであったのか？

しかし、ここでは和解を拒絶した法然の心情を少し代弁しておくと思う。

安樂、住蓮の口を借りて……。

「住蓮、聞いたか？」

安樂が何を聞いているのか、住蓮はすぐに察した。

場所は、鹿ヶ谷のある草庵。 六時礼賛は当初、現高台寺近くにある東山の引導寺で行われていたが、そこが手狭になった関係で、最近場所を変えたのであった。

「ああ、昨日の会談の件であろう。和解はならなかった、と」

安樂は大きく頷いた。

「立宗宣言の撤回、これは譲歩しようと思えば出来たのではないか？ーそう言つて、師を諫める者もあるとのこと。 - 信空様もその一人らしい。一方で、幸西、行空を始め、これで、天台と決裂したことを喜ぶ過激なものもある。 - 住蓮、貴殿はどう考える。私にもよく分からない、というのが本音のところなのだが……」

単刀直入に聞かれ、住蓮は少し戸惑った。しかし、友には率直であるべきだとの思いから、自分の考えを思うままに彼に告げることにした。

「私と思うに、これは、われわれ市井の念仏僧が立つて拠り所としているものと、天台の僧、慈円座主もそうであろうが、彼らが拠つて立っているものとの決定的な違いからくるものだ」

安樂は、友の分析の深さに興味を抱いた。

「ふむ、面白い。聞かせてくれ」

住蓮は、そう言われると、一瞬躊躇した。



法然門下生として、自分は安樂より後輩である。多少の遠慮が働いたのは当たり前のことではあった。

少し、間をおくと、彼は一気に話し出した。

「我らが拠って立つところは、民、民の声、民の嘆き、民の悲鳴であらう」

「うむ……」

安樂は住蓮の言わんとすることがうまく飲み込めないでいた。

住蓮は続けた。

「それに対して、天台が立つところは、朝廷を含め、権威……。であらう？」

「ふむ……。つまり、それが、今回の結果とどう関係があるのだ？」

安樂は単刀直入に尋ねた。

「よいか、我らは民の声を代弁するのみ。我らが物事を決定するのではない。民の声を代弁し、阿弥陀様に届けているのではないか。すべてを決定するのは阿弥陀様の仕事。無量無限の力を持つておられる阿弥陀様に我らは縋るのみ……」

「ふむ……」

安樂はまだ合点がいかないでいた。

「このたびの立宗宣言も、民の声を代弁したに過ぎぬ。民の声の代弁であるものを、どうして師一人の考えで、それを撤回など出来ようか。師ですら、そんな権限をお持ちではないのだ」

「確かに……」

安樂は、住蓮の的確な分析に脱帽した。

「慈円座主を始め天台僧たちは、頭たる権威を維持しようとして肝心の足元にうごめく民を見ていない。そもそも権威さえあれば、すべての物事を順調に問題なく決められる、解決できるというのであれば、どうして今の民の貧困があるのか？頭で体を支えられようか？そうするには逆立ちするしかないではないか。そんなことをしたってそもそもが不安定だしすぐに倒れてしまふ。ましてそれでどうして地面の上の嘆き悲しむ民が見えようか」

「なるほど」

住蓮は友の顔を直視すると、さらに続けた。

「私は思うのだが、大切なのは地面だ。そう、民だ。権威ではない。権威が物事を作っていくのではない。物事を作っていくのは、この地面だ。つまり無数の民達……。多くの民が苦しみの声を上げたことで、上人も叡山を降りる決意をし、また一門も大きくなったのだ。決して我らの意思ではない。阿弥陀様の思いも同じであろう……」

……

理路整然と語る住蓮を見て、安樂は友の成長振りに脱帽した。

「頭が、権威が物事を作っていくのではない。頭は足元の反映にか過ぎぬ。よって立つところによって、頭の中身も変わっていくというもの。地面に足をおいていれば自然にそのことも分かうというもの。ところが……」

「ふむ」

住蓮は、普段多くを語らない友の饒舌ぶりに圧倒されてしまった。「ところが、権威の上に立った天台は我ら一門のことしか見えておらん。足元がしっかりした固い地面で無く、ふわふわした権威などというものだからこういうことになる。我らばかりを見て、我らが寄って立っているところの土台、地面、そこで嘆き悲しむ民を全く見ておらぬ。大切なのは我ら一門が立っている土台、つまり無数の打ちひしがれた民達……。そのことに天台が気がつかぬ限り、和解など、とても叶うまい。いや、そもそも和解等必要もないし、また対立することでもない。我らは我らの道を進むのみ、弥陀の本願を遍く人々に述べ伝える……。それに邁進するのみではないか？」

こう一気に話すと、住蓮は大きくため息をついた。

安樂は、大切なことを忘れていた自分が恥ずかしくなった。

確かにその通り。天台との対立は、ただの宗教上の争いではない！

しかし、ともすればそのことを忘れがちではあった。天台から圧迫されればされるほど、一門の先行きのことばかり考えてしまつて

いた自分が、何やら恥ずかしく思われた。

先行きのことを心配せねばならぬのは、民達のことであつた。

民達の困窮ぶりは一向に改善されない……。

「いや、まいった。住蓮。貴殿成長したな！」

安楽は一本やられた、という感じで頭を掻いた。

住蓮は、少し喋りすぎたかな、という思いからか、俯いて黙ってしまった。安楽はしかし、何とも爽やかな気分になった。友からの助言で、何か吹っ切れた感じがした。空を見上げた彼の表情は、もう、いつもの快活さを取り戻していた。

「よし、やるぞ！」

安楽の威勢のいい声に、住蓮も頭をもたげた。

その住蓮を見て、安楽はさらに氣勢を上げた。

「阿弥陀様は、いずこにおわすか、現ならぬはあわれなり。今宵も来ませや、民の下、往生極楽願いつつ」

今様の調子で謡いだす友を見て、住蓮は思わず笑ってしまった。  
「おいおい、また踊りだすのか？」

安楽はすでに立ち上がって踊り出そうとしていた。

「どうしてだ、俺から、歌と踊りを取ったら何が残る？」

「確かに！」

二人は顔を見合わせると大声で笑い出した。お互いを信頼しきつた笑い声は、豊かな平安さでもって、お互いの心を癒した。

友とはこういうもの……。

口にこそ出さないが、二人は友情を確認しつつ、立ち上がると、六時礼賛興行の準備に取り掛かった。

## 第二部第二十二章

ここ東山、犬神人の里では……。

源太は、もう随分自分も年をとったものだ、いまさらながら思っていた。

もう目は殆ど見えていなかった。見えないだけならまだ何とかなのだが、周期的に痛みが襲う。

しかし、耐えるしかない。

死んでしまえば楽なのだが……。

そう思うこともある。しかし、仲間のことを思うとそれも無理だった。自分が長老として慕われているのは知っていた。仲間内ではよく争いが起こる。この村をまとめるためにも自分はそう簡単に死ねない。後白河法皇という強力な後ろ盾の無い今、仲間の結束が無ければこの村の存続も危ういのは周知の事実であった。

この村は、自分達の終の棲家だ。ここが無くなれば、道端で野垂れ死にするしかない。

穢れた場所と言われようと、なんだろうとここが第二の故郷なのだ。

しかし……。

出来ることなら、生まれた故郷へ帰りたい。そしてそこで死にたい！思い出す、故郷の川、山、そして肉親達、なканずく母の笑顔……。

叶わぬ夢と知りながら、そんなことを思いながら毎日を過ごしている。

いつ死ぬか、いつ死ぬるかと考えながら……。

そんな思いに耽りながら過ごしていた、ある日のことである。

「源太さん！」

小屋の外から呼びかける声に源太はふっと我に返った。

声の主はすぐにわかった。

「安樂殿か？少し待たれい」

そう言いながら、源太は小屋の外へ出た。

ぼんやりとはあるが、見慣れた顔が目の前にあった。

「源太さん、持って来たよ。以前に話していた新しい薬だ！」

安樂は、この集落で定期的に説法をする傍ら、彼らのためにと様々な薬を持ち込んでいたのである。

「かたじけのうござる。安樂殿」

そういう源太も、実は心の中では、『どんな薬も効果はありはしない。新しい薬もどうせ効かないに決まっている』と思っているのだったが、安樂の優しい心尽くしが嬉しかったので、いつも感謝して薬を受け取っていた。

「痛むか？」

眼のことを聞いているのだとすぐに分かったので、源太は大きく頷いた。

すると安樂はたちまち暗い表情となり、大きく溜息をついて、こう言った。

「すまぬ。本当に力になりきれなくて」

それを聞くと、源太は声を一段と大きくして答えた。

「安樂殿、何を仰るか！これほどまでに我ら犬神人のことを気にかけてくれて……。貴殿らの気遣い、我等、ここの集落の者、一同本当に感謝しておるのだから！」

それを聞いて幾分か安堵したのか、安樂は笑顔を取り戻した。

「ところで、源太さん、お願いがある」

「お願い？」

源太は安樂が何を言おうとしているのか、すぐには理解できず困惑したが、安樂は構わず話を続けた。

「法然様の下へ新しく弟子入りしようという者がある。貴殿は応水殿を知っておろう、あの方が一人の青年僧、名を範宴と申すが、を我らの下に連れて来られたのだが……。取り敢えずは、我らに預かって欲しいとな」

「ほお……」

源太はまだ話の要領が掴めないでいた。

「応水殿が、我らのここでの働きについて話されたところ、その若者はひどく、このことに関心を持ったようじゃ。是非、一度見てみたいと……」

安楽の説明に漸く納得した源太であったが、普通なら話をするだけでも疎まれる、この”穢れた”場所の存在に関心を持つその若者にひどく興味を抱いた。

「左様か。こんなわしらの朽ち果てた姿を見たいという者がお前さんら二人以外にいるのか……。よかろう、里の者にはわしが話をつけておく」

安楽の申し出を源太は快く受け入れた。無論次のように釘を刺すのも怠らなかったが。

「ただ、これだけは確認しておきたいが……。興味本位なら、来る必要なし、いや来てもらわんでいただきたいと、伝えて下され」

安楽は、苦笑しながらも、源太を安心させようと答えた。

「源太さん、そのような者我らが連れて来ようか。安心召されい。とても純真で、心の真っ直ぐな青年だ」

源太もにこりと微笑むと応じた。

「ははは、まあ、貴殿らのすることに間違いはあるまい。その青年連れてこられい。楽しみにしていようぞ」

この里の頭格である彼の了承を得たので安楽も一安心であった。

というのも、ここ、犬神人の里には、実は安楽、住蓮の定期的な来訪を快く思わない者もいたのである。

『あんな連中にわしらの真の苦しみが分かつる筈がない！』

『興味本位で来ているだけではないか！』

『説法などいくら聞いても、わしらの腫れ物が消えるわけではない！』

と、愚痴を言う者も多かったのである。

無論、それを”愚痴”と言ってしまうことにも問題がある。

安樂、住蓮は彼らの生活に深く入り込めば入り込むほど、毎日、確実に一歩一歩死に近づいている彼らの心の苦しみが、それはそれは想像を絶するものだということを頭では理解できていた。

しかし、所詮は頭の中だけであつた。

ではそもそも彼らと接するのに必要なのは同情なのか？それとも友情なのか？はたまた哀れみなのか？

答えは出ない……。

いや出せよう筈が無い！

『お前らに何が分かると言つのか！』

彼らの心の呻きを察するたび、所詮は彼らの心の中には入り込めないのだ、という敗北感に支配され、安樂、住蓮は溜息をつくばかりであつた。

そんな彼らの生活の中に、また新たに一人の若者を、土足で足を踏み入れさせようとしている……。

慎重にことを運ばねばならない。

安樂は源太に話を続けた。

「よろしくお願い申す。もう住蓮が彼を連れて、そこまで来ておろう。おお、噂をすれば影……。住蓮があそこに見える。おおい、ここだ、ここだ！」

安樂は大きく手を振った。住蓮は直ぐに源太と安樂の下に到着した。

住蓮は源太にまず挨拶をした。

「源太さん、元気か？」

住蓮の問いに源太は笑つて答えた。

「ははは、元気なはずが無かろう。それより、この半ば死んだも同然の老いぼれに興味を持つ若者は一体どこにおるのじゃ？」

源太はぼんやりとしか見えない目の前のどこかに、その青年がいるものと思つて、必死に目を凝らした。

住蓮は少し躊躇して地面に目を伏せたが、正直に事情を打ち明けようと思つて、源太に視線を向け、こう答えた。

「それが、実は……そこまで来たのですが……、里に足を踏み入れた途端、つまり……、その、何と言うか、その、この里の独特の臭いに吐き気を催してしまったようで……」

源太はそこまで聞くと、住蓮を遮った。

「ははは。まあ、だれでも最初はそうじゃ。最初はな。すぐに慣れよう。直に、口を塞がずとも、鼻も抓まずとも、何より、もう崩れかかったわしの顔を見ても目を背けることもなくなろう。この耐え難い臭いや、この化け物のような顔……。この里の入り口まで辿り着いただけでも立派なものじゃ。ははは！どれ、わしが、その若者を迎えに行くとするか」

そう言つと、源太は、里の入り口の方へ向かつて歩き出した。目こそ不自由であるが、この里の中ならどこへでも、目を瞑つてでも歩けた。

「どれ、新参者を慰めに行くとするか！」

源太の威勢のいい声に引つ張られ、安楽、住蓮も彼の後に続いた。三人は直ぐに里の入り口に達した。そこには、一人の若者が口に手を当てて、座り込んでいる。吐物が足元に見える。憔悴した顔つきであつた。恐らく何度も嘔吐したのであろう。

青年は完全に意気消沈したのか、座り込んで、地面に顔を落とすたまでであつた。

「範宴、大丈夫か？」

住蓮が声をかけた。慰めるつもりであつた。

しかし、声に反応した範宴は、顔を上げたまではよかったが、住蓮の傍らに立っている源太の顔が視界に入った瞬間、顔を背けるや、再び、激しく嘔吐をし始めた。

「範宴！」

安楽が彼のもとに駆け寄つた。

自分の容貌が、この青年の嘔吐の原因であることを源太はすぐに悟つた。彼は、なかなか、青年の嘔吐が治まるような気配が無いのを見て取ると、こう言つた。



「どうも、今日はわしは退散した方がよさそうじゃ。そして、この者は、今日は連れて帰れ。ははは、気にするな。気にするな。安楽、住蓮、そちらも初めてのときはこうであつたろう。まあ、ここまでひどくは無かつたかもしれんが。それが、今や、ここでは大手を振って歩いておる。まるで、この住人のようにな！……」

そう言われても、安楽、住蓮は面目丸つぶれと言わんばかりの情けない顔で、範宴を見つめながら、何とも手の下しようも無く、呆然と立ち尽くしていた。

「源太さん、まことすまん！こら！範宴！失礼であらう！」

源太の心遣いに感謝しながらも、安楽と住蓮は源太に申し訳ない気持ちと、初めてとは言え、範宴の不甲斐無い反応に恥ずかしいやらで、穴があつたら入りたい心境だった。

住蓮も源太に謝罪した。

「源太さん。本当に申し訳ない。今日は、この者、いったん連れて帰ります」

二人は、そう告げると、範宴を抱きかかえて、里を後にした。

源太は、二人を見送ると、自分の小屋へ戻ろうと踵を返した。

歩きながら、彼は自分の顔を手で改めて撫でてみた。ごつごつとした結節、ぶよぶよした触感、針でも刺そうものなら腐った膿が吹き出てきそうだ。

こんな顔を、気にもかけず、覆面もせず晒し者になっている自分の方がおかしいのだ。

源太には青年の反応を責める気持ちは毛頭無かった。

それでも、彼の意気消沈した様を見て、何とも、落ち込んだ気分になった。こんな気持ちは久しぶりだ。

「自分も随分と年取って、弱気になったものじゃ……」

誰に語りかけるといふのでなく、ポツリとこう言つと、彼は小屋へ向かう足を速めた。

いつもの聞き慣れた、真葛ヶ原に生い茂る草木をすり抜ける風の音も、夕暮れの今、心なしか何とも寂しげにも悲しげに呻いている

ようにも聞こえてくるのであった。

## 第二部第二十三章

生まれて初めて、白らいの病者の顔を直接間近で見た……。

その衝撃は彼にはあまりに大きかった。

安楽の庵に連れて帰られた範宴は、漸く落ち着きを取り戻すと、今日のことを振り返った。

「あの顔……」

思い出すたび身震いがした。

犬神人の里の、独特な吐き気を催す臭いも、あの老人の容貌に比べれば、まだ我慢が出来た。

彼の記憶にある白らい病みは、覆面を被り、薄汚れた着物を着た乞食であった。青蓮院に預けられる途中の道であった。確か、父が施しを与えたのを覚えている。

その時父がこう言ったことも。

『松若丸（親鸞の幼少名）、この者たちに施し物をすれば吉が訪れるのじゃ。覚えておけ』

だから、彼らのことを物吉ものよしとの言つのだと……。

穢れてこそいるが、摩訶不思議な力を彼らは隠し持っているのだともいう……。

覆面の下の顔はどんなであろう？

長年思っていた疑問が、今日、いとも簡単に解き明かされた。

「業病……」

彼の頭の中をそんな考えが過ぎった。

体が震えてきた。

それでも、昨日まで頭の中では理解していたつもりであった。

同じ人間なのだ！

仏の前では、すべて生きとし生けるものは、仏性を持った平等な存在なのだ！

安楽、住蓮からあらかじめ教えられてもいたし、自分に何度も言い聞かせていた建前は、目の前の現実により、いとも簡単に吹き飛ばされた。

『ああ、私は駄目な人間だ……』

そんな自分が腹立たしく、また情け無くもあり、落ち込んだ。

「範宴大丈夫か？」

範宴のことを心配した住蓮が安楽の庵を訪ねてきた。

「住蓮様……」

弱弱しく答えながら立ち上がろうとする範宴を、住蓮は制した。

「いいから、寝ておれ！大体が張り切りすぎたのじゃ。休むが一番。話はまたゆっくりしよう」

住蓮はそうして範宴を寝かしつけた。

「ところで安樂はどこかな」

範宴がそれに答えた。

「薬草を取つてくると……」

住蓮はそれを聞くと笑った。

「はははは。さすが名薬師じゃ。                    とは言っても、ちと怪しい時もあるがのう！」

範宴もそれにつられて笑った。

彼の気持ちが少しほぐれたのを見て取ると、住蓮は彼の傍らに座った。

「のう範宴……」

「はい……」

住蓮は今日のことを話題に出した。

「気にすることはない。何も落ち込むようなことでもない。私も最初はそうだった。頭の中の世界と現実の違いについて当たり前だ。彼らの住む世界を自分の目で直接見たい、と思った、その貴殿の思っただけで十分だ、それが最も大切なことなのだから……」

範宴は

「はい……」

と、弱弱しく答えるのみである。

住蓮は彼の傍らに腰掛けると、近江の地での自分の思い出を語り始めた。時子との出会い、楽しい日々、そして別れ……。

範宴は応水からあらましは聞いていたものの、詳しくは知らなかった住蓮と時子の悲しい物語をこうして本人の口から聞くことになった。

「時子が死んでもう何年になるか……」

住蓮はポツリとそう言うと、そのまま押し黙った。悲しみが一気に心に押し寄せたからだ。

範宴も慰める言葉を見出せなかった。

「悲しい物語ですね……」

そう言うのがやっとだった。

悲しい気持ちを押し殺して、住蓮は範宴に言葉を続けた。

「こんな私も、それでも最初はやはりあの里に出入りするたび、吐き気で悩まされたものだ」

住蓮のこの言葉に、範宴の心の緊張が少しずつ解れてきた。

「そうですか……」

そこへ安楽が帰ってきた。

範宴の表情が少し和らいでいるのを見て取ると、彼は住蓮と顔を見合わせて互いに頷きあった。

彼の緊張が解けたのを見て、内心ほっと安堵したのである。

そしてその数日後……。

ここ犬神人の里を歩く四人の姿があった。

安楽、住蓮、範宴、そして源太……。範宴は源太の腕を取って、目の不自由な源太の介助をしている。

先頭に立つ安楽が、後ろを振り向いて範宴に語りかけた。

「範宴、ここに入ったりするだけでも周囲の視線は冷たい。出入りした者まで穢れてしまうということだ。残念なことに法然様の門下の者でもそのように見る者がある。無論、師御自身はそのようなこと

一向に気にはなさらないが……。ともあれ、今日ここへ来たこと、本当に後悔はするまいな？」

範宴は快活にこう答えた。

「無論でございます。私が応水様に希望してのこと。後悔などしようはありません！」

元氣よく答える彼の声を聞いて、傍らの源太が威勢のいい声を上げた。

「では参るか。ざっと案内してみせん！犬神人の里、我らが第二の故郷！」

そう言つて先頭に立たんと、源太はずんずんと進んで行つたが、二三步行くと石に躓き転んでしまった。

安樂がすぐに、彼を助け起こした。

「源太さん、気をつけないと！怪我は無いかい！」

幸い、怪我はなさそうだった。

住蓮も彼を責めた。

「まったく年甲斐も無く……」

源太はすぐに反論した。

「なーに、まだまだ若い者には負けられんて！」



こう言う源太ではあったが、ばつが悪そうに頭を掻き始めた。そして四人は互いに顔を見合わせると、誰からとも無く笑い出した。

四人の元気のいい笑い声に誘われて、他の小屋からも白らい者達が外へ出てきた。

普通にある村の風景。

笑い声に合わせるかのように、鍛冶場から、かーん、かーんと、威勢のいい金属音が響いてきた。

目の前に広がるのは、活気に溢れたのどかな村の風景……。

四人は時を忘れて、いつまでも笑い続けた。殺伐とした時代の背景を暫時忘れて……。

範宴 後の親鸞はこれ以後、ハンセン病患者との関わりを強く持ち続けていく。絶望的な境遇の中、暗い闇で呻吟する彼らと共に苦悩を分かち合った、偉大な仏教者としての、これが最初の一步であった。

## 第二部第二十四章

元久元年（千二百四年）十月、ついに叡山が動いた。建仁二年に慈円と法然の会談が決裂に終わると、法然教団弾圧を求める叡山の衆徒の動きは活発になったが、それでも、その年十二月に法然の熱烈な支持者である九条兼実の次男、良経が摂政となったこともあって、暫くは膠着状態が続いていた。

しかしその両者の睨みあいが続くこと二年、ついに叡山の衆徒の怒りは爆発した。

即ち、慈円の影響下、何とか座主真性に宥められていた衆徒達であつたが、どこからか「選択本願念仏集」の写本を入手するに至るや、彼らは、法然教団を非難し、専修念仏の即刻停止を訴える訴状を座主、真性の下に提出したのである。

そして、この報せは無論すぐに法然の下へももたらされた……。

都人たちもすぐに不穏な空気を感じとつた。無論、戦が始まるわけではない。しかし、すでに多くの民が今や熱心な法然の信者、阿弥陀信者となっている。

叡山に対して、民衆の怒りが爆発すればどうなるか……。

誰もそれを予測出来ず困惑するばかりであつた。

そして、その報せは、ここ後鳥羽院の御所にももたらされた。

その院の御所では……。

「盛高はいるか！」

「盛高をすぐここへ呼べ！」

という、三浦秀能の甲高い叫び声が御所内に響いていた。

暫くすると、秀能の付の者が右往左往する中、

「はは！」

という返事と共に、盛高が姿を現した。

「盛高、参りました」

目当ての人間が現れたことで秀能は安堵の表情を示したが、たちまち緊張した面持ちに戻ると、

「盛高ついて参れ」

と言って席を立った。

御所の中は広い。中には出入りが制限されているところも多いが、盛高は秀能にその能力を買われて、目をかけられていたこともあり、比較的自由に御所内を行き来できた。

ところが、今日は、いまだかつて足を踏み入れたことの無い、奥の間に連れて行かれた。後鳥羽院との接見の間にも近いところである。

「ここで暫く待つように」

そう言い残して、秀能は奥へと向かった。

彼は緊張した。

『なぜ、このようなところまで……』

不審に思っでじつと座っていた。そんな彼の脳裏を、今までの思い出が走馬灯のように駆け抜けた。

佐々木家の再興。

目的の達成は近いと言えた。北面の武士の中で、秀能からの信任が一番であった。実力もあった。院の覚えもめでたかった。

そして恋人との出会い……。

ゆきとの語り合いは彼のすさんだ心を和ました。

そんな感傷に浸っているとところへ、隣の部屋から秀能の声が聞こえてきた。

「盛高、奥の部屋へ入れ！」

「はは！」

盛高は緊張した。院との接見の間までもう僅かである。

一体何の目的で？

そう考えながら隣の部屋へ入った盛高は驚いた。

「これは尊長様に長蔵様！」

そう、部屋には秀能以外にもう二人の人物が座していた。

即ち、一人はかつては叡山で慈円の弟子であったが、後鳥羽院の祈祷僧として召抱えられ、その後出世して院の祈祷所である最勝四天王院の執事となった、あの僧都尊長である。そしてもう一人は、後鳥羽院が度重なる熊野詣を通じて出会い、その強い呪術力から、信任を深めた熊野の修験者の長老、長蔵であった。後鳥羽院は、彼を院の護持僧としてやはり四天王院に召抱えて、那智の検校という官名まで与えていた。

二人とも今や院の側近中の側近である。また、院に召抱えられて後、親交を深めてもいた。今をときめく存在　普段は近くに寄ることすらなかなか出来ない存在となっていた。

「まことに恐れ多きこと、私、若輩の見であるにも拘らず、かような場所へ招き入れていただきまして」

と、言いはしたものの、盛高は、本来なら場違いとも言えるこのような所に、わざわざ招かれた理由が分からず、非常に不安な気持ちになった。

そんな彼の不安感を取り除こうと、尊長が声をかけた。

「盛高、そちの活躍ぶり、目覚ましいものであるらしいな。秀能より聞いておる。北面の武士の中ではその実力一番であると。都の名あ

る盗賊どもも、そちの名前を聞けば震え上がるというではないか！  
いやいや、慈円様のもとよりそちを引き抜いて、ここへ連れてきた  
こと真に正解であったな。院の目もお確かではあったが、わしの目  
もなかなかのものであったということ。ははは

ひどく上機嫌な尊長であった。

「はは。ありがたきお言葉」

盛高はただ頭を下げるしかなかった。

同席していた秀能が本題を切り出した。

「盛高。我ら、そちの目覚しい働きぶりにはまことに感服しておる。  
そこで、そちを見込んで一つ頼みがある」

「頼み？」

盛高は何とも不審な気持ちになった。秀能は自分の上役、しかも  
検非違使にも匹敵する防鴨河使長官である。院の直属の一番の武士  
でもある。彼が『命令』というならわかるが、『頼み』とは何か。  
彼はきな臭いものを秀能の言葉に感じた。

「左様、頼みじゃ」

尊長が例のぎよる目で盛高を睨んだかと思うと、秀能に代わって  
言葉を続けた。

「そちは知っておろう。このたび、叡山の衆徒共が座主真性に専修  
念仏停止を訴えたこと」

「はい……」

都の中は、実際この噂で持ちきりだった。盛高は叡山の衆徒がいに過激か、自らの体験を通してよく理解していたので、彼らが念仏停止を座主に訴えただけで、その怒りが収まることはあるまいとは感じていた。

「後鳥羽院におかれては、此度のことひどく心を痛められておる。何か騒動にもならんとは限らんゆえな」

「は……」

確かに尊長の言うとおりである。

長蔵がそこへ割って入った。

「どのような事態になるか……。考えてもみよ、叡山の衆徒と、法然を支持する民衆が戦えば、都は源平争乱のおりと代わらぬ修羅場と化そう」

「は、まことに」

盛高は、普段から都の治安業務に当たっている関係で、法然を支持する熱烈な阿弥陀信者がいかに多いか、それを自らの肌で感じ取っていた。

叡山から神輿をかついで過激な衆徒が都へ降りてくれば、一部過激な念仏信者たちと衝突するのは目に見えていたし、かといって、叡山の言うがままに念仏停止の宣旨など出そうものなら、無数の民

を敵に回すことになる。民を敵に回して、果たして武士は戦えるのか？盛高も、盗賊を相手に切りつけることは出来ても、一般の民を切りつけることなど想像だに出来なかった。

果たしてどんな事態になるのか……。

内心、漠然とした不安は持ち続けていたのは事実であった。

長蔵が言葉を続けた。

「院におかれては、このような騒動が持ち上がること、これ政の不在のためとお考えである」

彼はそこまで言うとし少し躊躇したが、続けてずばりとうい放った。

「政の不在、特に摂政良経の無策のゆえとな！」

摂政良経の無策 この言葉を聞いて、盛高はひどく不安な気持ちになった。

自分がここへ呼ばれた理由は一体何であろう？

源平の争乱を生き延びた彼であったからこそだろうか、続いて彼はふとこんなことを考えた。

彼らは摂政殿を力ずくで取り除こうとしているのかもしれない！

盛高の心のうちを見抜いたのか、尊長はたださえ大きい目をさ



らにぎよろつかせた。そして長蔵から言葉を継いでこう言った。

「盛高、政の不在が明白な今、都では何が起こらんとも限らん。このような折に、そちのような百戦錬磨の根っからの武者は真に必要な存在である……」

盛高は黙って聞いていたが、彼らの本音は、自分を彼らの仲間に巻き込もうとしているのだということを、ここに至った今、もう十分に悟ってはいた。

しかし、その流れに逆らえよう筈も無かった。

尊長は黙って聞いている盛高を前に、徐に居住まいを正した。そしてこう言い放った。

「ついでには、今後、防鴨河司副長官として、秀能の補佐をいたせ。これは院からの命である」

副長官！

盛高は驚いた。

自分のような者を副長官に！

「ははー！」

ともかくも院の命令である。頭を下げると、

「ありがたきお言葉です！」

と言って、そのままの姿勢でいた。

長蔵が満足そうに言った。

「よいよい、もう頭を上げよ」

無論、盛高は頭を下げたままでいた。

尊長は、そんな律儀な盛高の態度に満足感を示すように頷いた。  
そしてこう告げた。

「よいな、御上と院のためじゃ。無能な摂政が我俣に振舞つておる  
今、このままではこの国は立ち行かん。此度の叡山と法然一門の争  
いにしても、見てみぬふりか、それともそもそも見ておらんのか、  
まるで他人事じゃ。こんなことでは都に大騒動が起らんとも限ら  
ん。院はそのことでひどく心を痛められておる」

強力な院政を希求している後鳥羽院にとって、摂政九条良経はま  
ったく目の上のたんこぶと言えた。

盛高は彼らの本音が別のところにあることを感じていたが……。

こと、ここに至つては、自分は武士として命令されたことを  
実行するしかない！

腹は固まっていた。

「まことに仰せの通りです！」

盛高は頭を下げたまま、そう彼らに伝えた。

「頼むぞ！」

それまで黙っていた秀能も、そう言っただけと溜息をついた。

彼は尊長、長蔵の百戦錬磨の策士ぶりに比べれば、まだほんの青二才にしか過ぎない。ある意味、盛高が副長官として自分の傍らで様々なことの補助をしてくれればまことに有難い話と言えたからである。

「よろしい。よろしい。我らこれで良き同士となれよう。今後はいろいろと話し合いに参加してもらおうこととなるう！」

「はは！」

盛高はさらに深く頭を下げた。従順の意を表すためである。

他の三人も満足げに頷いた。

「ではこれにて！」

という尊長の掛け声で、尊長、長蔵の二人は席を立った。

あとには秀能と盛高が残された。尊長、長蔵の前では小さくなっていた秀能だったが、二人がいなくなると、わざと盛高を威圧するかのように咳払いをするや、あくまでも長官は自分であるぞ！と知らせんがためか、これ見よがしの大きい声で、こう言い放った。

「ところで、盛高。今後都の中もいろいろと緊迫しようというものの治安も悪化しておる。そこで今後、院の周辺の護衛を強化したい。

で相談だが……」

とそこまで言うと、秀能は少し言葉を中断した。そして深呼吸をすると、再びおもむろに語りだした。

「盛高。そちの従者を務めておる六郎がおろう。今後はあの者、院の護衛として院のお傍に置いておきたい。常時な。そちは不便を感じるやもしれんが、これは院のたつてのご希望じゃ」

「六郎を……」

六郎とは長い付き合いだ。しかし、従者としての才能なら認めるが、護衛とは？

盛高は不審な面持ちであったが、秀能は構わず言葉を続けた。

「先日、院の熊野詣の折に、そちと六郎がお供をしたであろう」

「はい……」

「六郎が、その折、見事な吹き矢の技を見せられたのを、院がひどく感心されたのじゃ」

「なるほど……」

確かに六郎は吹き矢の名手である。しかし、武術は人並みである。護衛として役に立つのであろうか？

「ともかくも、院の仰せであれば、私、反対など出来ようはずがありません。どうぞ、院のお側で、お役立ていただければ、六郎も

むしろ喜ぶでしょう」

と、言つと盛高は頭を下げた。

秀能は満足そうに頷いた。

「では、これまで！六郎のことは、追つて沙汰する」

そう言つて、秀能も席を立つた。

あとには盛高だけが残された。      びっしょり汗をかいていた。

一人部屋に残されて、じつと座りながら、盛高は歴史の大きい渦に巻き込まれていく自分を感じていた。

自分の知らないところで、どんどん自分の運命が決められていく……。

非常に不安であつた。      不安ではあつたが、もはや自分の力の及ばないところに自分はいるのは確かで、またどうにもならないことであつた。

流れに身を任せるしかない。たとえ激流が待っているとしても……。

盛高は漠然とした不安感に取り付かれながら、自分の部屋へと戻つて行つた。

## 第二部第二十五章

時は元久二年（千二百五年）九月のある日……。

場所は、鹿ヶ谷にある、とある古びた精舎……。

住蓮と安樂は、その中の一室で仮眠を取っていた。住蓮は、まどろみから目を覚ますと、

「安樂……」

と、傍らでまだまどろみから覚めぬ友に声をかけた。しかし、返事はない。不眠不休が続いていたので無理も無かった。

「安樂！寝てしまったのか……」

重ねて問いかけたが全く返事が無い。

「駄目か……」

ほぼ、ここに缶詰状態の住蓮に比べ、安樂は、時に吉水へ顔を出していたので、最近の情報を知りたいと思ったのであった。あまりに忙しく、二人は話をする機会も殆ど持たないでいたのである。

住蓮は再び目を瞑って、横になった。

眠気が再び襲ってきた。

ゆき、三郎、次郎とも全く顔を合わしていない。

彼らも元気だろうか？

実は、この頃、安樂、住蓮らの六時礼賛興行は、吉水を離れ、場所をこの鹿ヶ谷の精舎に移していた。

参加者が日毎膨らみ、結果、あまりに多くの参加者のため、引導寺では手狭になったのが一番の原因である。

そして、安樂、住蓮は、殆ど他の活動はいったん休止して、全精力をこの六時礼賛興行に注いでいた。

安樂、住蓮が行っていた鴨の河原での辻説法、また犬神人の里で

の奉仕活動、説法などは、綽空<sup>じやくくう</sup>がかわりにこれを行っていた。

左様、綽空……かつての範宴である。彼は、法然に正式に入門が認められたあと、法然からこの名前を貰った。そして研鑽を積み、法然からも高く評価されるほど、浄土經典の勉学に熱心に勤しんでいた。後から入ってきた者が先になった、と陰口を言う弟子もいたが、彼の才能は法然に師事したことで一氣に花開いたと言うべきであろう。今や、教団の中にあつて、誰からも一目置かれる存在になっていた。

ともあれ、あまりの興行の盛況ぶりに、安樂、住蓮は今やこの六時礼賛が彼らの生活の全てと言つても過言ではなかった。

何故、そこまで打ち込めるのか？

人から聞かれても、確固とした答えがあるわけではない。あえて言葉を濁すのだが、住蓮は自分では内心思うところはあつた。

時子に自分は何もしてやれなかった！

その悔恨の念が、今の自分を駆り立てているのは間違いあるまい……。

周囲からは、何もそこまで自分を責めなくても、と言われる。

しかし……。

やらずにはいられないのだ！

このようにして、いつも決意を新たにし、『さあ、頑張らねば！』と、心に誓い、疲労困憊で弱り果てた体に鞭打って体を起こすのである。

今日も例外ではない。　　そうして、体を起こさんとしたその時であつた。

「住蓮様！」

懐かしい声がした。

「その声はゆきさん？」

問い掛ける住蓮に

「はい」

と、答えが帰ってくると同時に、女性の姿が目の前に現れた。

「これは、これは、ゆきさんではないか！」

住蓮は飛び起きた。何よりもまずは、懐かしかった。

「お久しぶりであるな！かれこれもう一年も会っていないのではないのか？」

ゆきは、にこりと笑うと、こう返答した。

「左様です。もう二年近くになるやもしれませぬ」

住蓮は天を仰いだ。

「二年か……。確かにそれ位にはなろう。で、次郎、三郎は元気か？」

「はい、元気ではございますが……。あの方たちも最近放免としてのお勤めが忙しく、私も、殆ど会う機会がありませんので……」

「そうか、都の治安は悪くなる一方であると、噂には聞くが……」。



で、ゆきさんは……」

と、そこまで言うと、住蓮は口籠もった。

――例の北面の武士との仲はどうなっているのか？

と、聞こうとして思いとどまったのである。

住蓮が口籠もったままでいるのを見て、ゆきも黙ったままでいた。かつて、恋心を寄せた人との再会である。何とも気まずい空気が流れた。

住蓮が、このきまずい沈黙を破ろうと、

「で、ゆきさんも元気そうだな！よかった。心配していたからな！」

と、わざと、元気のいい声を出すと、ゆきはまたにこりとして、

「ありがとうございます。お気遣い……」

と言って、頭を下げた。

「何も頭を下げんでも……」

そう言う住蓮も、ゆきと顔を見合わせるとにこりと微笑んだ。

かつての息の合った仲間同士、いや、無論今でもそうではあるから、やはり心は通じ合う。住蓮はゆきが来た目的を見抜いていた。

「それより、何か相談が？」

「はい……」

ゆきは、徐に口を開くと、相談事を語り始めた。

住蓮は黙って最後まで聞いていた。

ゆきが語り終えると、住蓮は大きく溜息をついた。

「さてさて、これは困ったことだ」

「やはり、左様でございましょうね」

ゆきも大きく溜息をついた。

ゆきの相談事とはざっと、以下のような内容のことであつた。

即ち……。

後鳥羽院の御所に実は自分が白拍子だった時の先輩がいるのだという。その先輩が、この六時礼賛に参加したがっているのだ、という。

今は院の御所に女御として召されている、やんごとなきお方が、このような集まりに参加することなど出来るものなのか？また参加出来るとして、安樂、住蓮に迷惑をかけることになりはしまいか？さらには吉水の上人様にも迷惑をかけることにはならないか？

ゆきからあらまし説明を受けた住蓮は困惑した面持ちで、ゆきに質問した。

「で、その女御様もかつては白拍子であったということか？」

住蓮の質問にゆきは答えた。

「はい、共に後白河法皇様に目をかけていただいて……」

「で、その方の名前は？」

「私達は当時『菊さん』と呼んでいました。とても優しくて、私を始め若い人達の面倒をよく見てくれました。その後、どんな縁かよくは存じませんが後鳥羽院様に見初められ、院の御所に召されたと聞きました。今は御所にあつて亀菊、伊賀局亀菊様と呼ばれています」

「伊賀局様が……」

住蓮は天を見上げた。

「さてさて、去年の暮れに、叡山の怒りを静めようと、法然様を筆頭に、我ら一門百九十名の門弟が七箇条の起請文に署名し、これを天台座主に提出したばかり。これにて、今のところ、叡山の怒りもやや沈静化したかと安堵しているところであるのに……」

「やはり、ご迷惑をおかけしますでしょうか？」

「うむ、院様の知られるところになった折、果たしてどのような……」

しばらく天を仰いでいた住蓮であつたが、ゆきを見ると、にこりと微笑んで力強くこう言つた。

「何を、しかし、迷惑などと！少しでも迷いを感じた自分も愚かであつた！だつてそうではないか！弥陀の本願を頼りに来られようという人を、我らがいかなる理由をもつて断れようか。来られればよ

い。確かに大変なことではあるが、なーに、何とかなるものよ」  
思わぬ優しい住蓮の言葉に、ゆきはほっと安堵の溜息をついた。

「ありがとうございます。優しいお言葉。そう言っていたただけで、ありがたい気持ちで一杯です」

住蓮は、傍らで安楽が寝ていることに気が付いた。

「ゆきさん、安楽を起こすと話がややこしくなるう。また誰かに聞かれてもまずかるうゆえ、場所を変えよう」

と言うと、彼は立ち上がった。

「はい」

ゆきは住蓮の言われるままに、後をついて行った。

二人は本堂の脇にある小屋に入った。

「ここなら大丈夫だ」

「はい……」

ゆきは何とも複雑な気持ちになった。何と言ってもかつては恋心を抱いた相手である。二人きりでこのような場所にいることが何となく気恥ずかしく思われたのは当然であった。

――住蓮の胸の内も同様であったのは言うまでもない。

そんな気まずい雰囲気を感じてか、住蓮が努めて明るくい口調で、

ゆきに問い掛けた。

「もう少し詳しく聞こうか」

「はい……」

## 第二部第二十六章

「何の不足も無かろうはずの院の女御様が、何故この六時礼賛にわざわざお出ましになられようというのか？」

「はい、それには深い事情がおりになるのです……」

ゆきの語る所によれば……。

亀菊は、当初こそ後鳥羽院の寵愛を一身に受けて、順風満帆の毎日であった。しかし、次から次へと新しい女御が登用されていく。気が付くと、院の関心は他の女性に移って、自分への関心は薄れ去ってしまっていた。

そんな境遇に置かれているうち、世の無常を感じるようになってきたのだという。

「いつしか、彼女は阿弥陀様におすがりになるようになっていたのです」

「そうか……」

「そして、偶然私と出会ったのでございます。これも阿弥陀様もお導きとしか言いようがありません」

「なるほど」

「話をするうち、この六時礼賛の話題が出まして、是非とも行ってみたいと……。この興行は御所の中でも評判のようです」

「左様であつたか……」

住蓮は事情を聞いて納得はしたものの、さて、そのような身分の人を受け入れるとなると、どうしたらいいものか考え込んでしまった。

無論、この六時礼賛へは、すでに、都の中にあつて身分の高い人々も多く参加している。そして中にはお忍びで来るものもある。しかし、だからといって特別扱いはいらない。それが方針であつた。

仏の前では、皆平等――これがこの興行の大原則でもあつた。

それゆえ、老若男女、貴賤の別無く誰でも受け入れる、これが方針であつたし、たとえ院の女御さまであっても特別扱いはいたくない。

しかし、それでも、後鳥羽上皇の院の女御様である。しかも、かつては寵愛を一身に受けていた方を……。

「ともかくも一度、安樂に相談することしよう」

「よろしくお願いします」

ゆきは頭を下げた。

「どうして、礼など不要。弥陀の救いを求める人を見捨てることなど出来ようものか！」

住蓮はそう言うと、ゆきの肩を叩いた。

ゆきは、わっと泣き出した。

「本当に、本当にありがとうございます」

「相変わらず泣き虫だな！」

そう言つて、ゆきを慰める住蓮であつたが、ゆきが漸く泣き止むと、一つ疑問に感じたことを彼女に尋ねてみることにした。

「ゆきさん……」

「はい……」

落ち着きを取り戻したゆきは、住蓮の呼びかけに応えると、顔を上げて彼を見つめた。思いつめていた表情は消え去り、安堵に満ちた表情であつた。

住蓮は、そんなゆきを見て安心すると、早速その質問を彼女にぶつけた。

「そもそも、その伊賀局様とも、久しく会っていなかったのであるうというもの。偶然とは言え、どのようにして出会つたのであるか？」

いくら顔見知りだつたとは言え、今の互いの境遇は全く違つ……。素直な疑問であつたゆえに、ゆきも気軽に答えた。それが、二人のこれからの運命を大きく変えることになるうとは、無論気がつく由も無かつたが……。



「はい、それが佐々木盛高様とのお話の最中に、彼女の名前が突然出てきたものですから……」

その瞬間、住蓮の顔が引きつるのを、ゆきは見ていなかった。恋仲にある人の名前を出すのが恥ずかしくて、ゆきは下を向いていたからである。

一方の住蓮は、体がわなわなと震えて、言葉が出なかった。次には、体が硬直し、頭に強烈な一撃を食らったような感じで、続いて目の前が真っ暗になり、ゆきの言葉もまったく耳に届いてはいなかった。

## 第二部第二十七章

「住蓮様！」

それまで下を向いていたため、そんな住蓮の様子に気が付いていなかったゆきであつたが、ふと、彼を見ると、その視線の先に彼の顔面蒼白の表情を認めたものだから、彼女も気が動転して思わず叫んでしまった。

「住蓮様！」

その声に住蓮は我に返つた。

「ゆきさん……」

「住蓮様！」

住蓮は我に返りはしたものの、自らを敵と狙うかつての友人の名前を、ゆきの口から聞いたことが、未だに信じがたく、呆然とするばかりであつた。

「住蓮様、大丈夫ですか？どうされたのですか？」

住蓮はその場にしゃがみ込んだ。今の状況を何とか切り抜けようとあれやこれや考えるが、ショックがあまりに大きく、考えの整理がつかなかった。

しかし、冷静に鑑みてみると、納得はいった。

ゆきと付き合っている男性が、近江の国の出身であることは、噂に聞いていたし、名も佐々木ということは知っていたからである。

しかし、佐々木は近江源氏の姓であるし、珍しいものではない。だから気にも留めていなかったのである。

また、その武者が過去の話をやきには語らない、ということも聞いていた。

そして、ゆきとは、ここへ草庵を移してからは会うことは殆ど無かった。会ったとしても、会話を交わす暇も無かった。

今になって気がついたとしても、ある意味当然であった。

起き上がると、彼は、ゆきにいらぬ詮索をさせまいと、気丈夫に振舞いつつも、

「佐々木盛高、と申したか？」

と、何卒、この名前は自分の聞き違いであってほしいと願いつつ、ゆきに確認した。

「はい、盛高様です。あら、私、ひよつとして、あの方のお名前は、住蓮様にはまだ伝えていなかったかしら？初めてでございましたか！それは申し訳ございません！」

「いや、何も謝る必要などない……」

住蓮は、名前に間違いがないと知ると、運命の悪戯を感じながらも、この問題をどう処理すればよいのか、まったく途方に暮れてし

まった。

気がつかなかった自分が愚かだった！

とは考えるものの、気がついていたとしても、それで、二人の恋仲を裂くことなど出来よう筈も無かった。

そんな住蓮の心の葛藤に気がつくこともなく、ゆきは

「あの方はとても無口な方で……。ご自身のことは多くは語ってはくれません。それでも、近江の国の出身であるとは聞きました。ひよっとすると、住蓮様はご存知で？」

と、明るい口調で彼に問いかけてくる。

住蓮は、この場を取り敢えずは何とか凌ごうと考えた。

「ゆきさん……」

「はい！」

「ゆきさん、その武者の件、また後日聞こう。私は、そろそろ次のお勤めがある」

「そうですね、本当にお忙しいのに、無理をお願いしまして……」

ゆきも、住蓮の勤めの厳しさは十分理解していた。

そろそろお暇しなければ。

そう感じたので、

「では、今日は失礼します。伊賀局様の件、よろしくお願いします！」

と言うと、住蓮に深くお辞儀した。

「うん、まずは安楽に相談してみる。詳しくは、また後日……」

住蓮の言葉に、安心したゆきは、にこりと微笑むと、立ち去った。

あとには住蓮が残された。

一人になると、どっと疲労感が押し寄せてきたので、また座り込んでしまった。汗がびっしょりであることにも気がついた。

どうすればよいのだ！

自問しながら、彼は、かつて、心配なあまり、鴨の河原に、ゆきとその武者の逢引の現場を見に行ったことを思い出していた。

あの時、川面に反射する夕日の光が無ければ、彼が盛高であると分かったであろう！

しかし、あの時分かったとしても……。

住蓮は、全くなす術が無い今の状況に、ただ溜息をつくしかなかった。しかし、そうしているうちに、ある考えが心に浮かんできた。すると、絶望的にしか感じられなかった今の状況を、また違う角度から見る事が出来た。

これは、いよいよ、時子に対する償いをする時が来たのだ！  
それも自らの体でもって！

住蓮はそう考えることで、自らの心が軽くなるのを感じた。

「これも、阿弥陀様のお導き！」

彼は、思わずそう呟いた。そして、

私の命が尽きるとも、弥陀の本願に救いを求める民の勢いが、  
願いが尽きることはない！

そう自分に言い聞かせると、ますます不思議と心が晴れてくるの  
を感じながら、彼は足取りも軽く、大勢の参加者の待つ、本堂へと  
向かうのであった。

「安楽、起きたか？」

「当たり前だ！この民の数を見よ。いつまでも寝ていられようか！」

見ると、堂の周りは無数の聴衆でこった返していた。

「よし、始めるとしよう！」

二人は、互いの顔を見つめると微笑みあった。

何の迷いも無い、力強い、いつもの住蓮がそこにいた。

## 第二部第二十八章

数日後、犬神人の里に住蓮の姿があった。      久しぶりの来訪であつた。

時子の墓にお参りに来たのである。

久しく来ていなかった。

法然自身が、供養のことをあまり喧しく言葉にしなかったためか、弟子の中でも若い弟子達は、死者への供養にさほど熱心でなかった。また、年配の弟子の一部はそれを多少苦々しく思っていた。

住蓮は、しかし、時子の供養だけは熱心であつた。当然であろう。しかし、鹿ヶ谷の草庵に移ってから、墓参りの足が遠のいていた。

一通りの供養の読経が終わると、彼は、墓の前に座り込んだ。そこに佇み、しばし時を忘れた。

思い出すのは、近江の地での懐かしい日々、そして、この地での苦痛に満ちた日々、彼女の悲しい死という結末……。

傷はまったく癒えていなかった。

いや……。

――俺は、彼女の死という現実から逃れるために鹿ヶ谷へ逃げ込んだだけかもしれない。

そんなこともふと思つたりした。

・ ・ 会って、すべての決着をつけよう。

今日はその報告にきたつもりであった。

「時子、兄上とどういう因縁か、再会が出来そうだ。再会が叶えば、すべての誤解を解かねばならないと思っている。時間がかかろうが、これは私の使命ゆえな……」

そうして墓に向かって、語りかけていると、そこへ源太が近づいてきた。

「やあ、住蓮殿」

「おおこれは源太さん」

源太は、住蓮の傍らに腰掛けた。

「墓参りか。おときさんも喜んでおろう」

「……」

住蓮は、あえて、ここで時子の兄の話はすまい、と決めた。

・ ・ この問題に他人は巻き込むまい。

そう思ったからである。

彼は話題を変えた。



「源太さん、ところで、昨今の都人の暮し向きや都の治安は如何なものかね」

都大路の清掃に駆り出される彼らの情報は正確にして、かつ最新のものであることを彼はよく知っていた。

「そうじゃな……」

と言って、語りだした源太の言によると……。

摂政九条良経による朝廷からの様々な発令、それとは別に後鳥羽院から下される勅令、そこへ、さらに鎌倉武家政府からの命令が飛び込んでくる……。時にこれらの命令は相矛盾することもあり、現場では相当の混乱が生じていると言う。

都の治安も例外ではない。検非違使の権威は、後鳥羽院創設の防鴨司により低下した。さらに彼らの縄張り意識の煽りで、都の警備も手薄なところがどうしても出てくる。そこへ、悪党共が目をつける。結果は、庶民が被害に会うということである。

「そうか……」

住蓮はため息をついた。噂で聞いていたことは大げさではなかった。源平争乱の折より、治安は悪いと言うものもいた。

源太もため息をついた。

「我らの暮らしぶりも良いとは言えん」

「と、言うത്？」

源太は説明を続けた。

「我ら、そもそも、後白河法皇様の命により、犬神人として組織された。その後白河法皇様はもうおられぬ。後鳥羽院様は我らにそれほど目をかけてはくれぬよってな」

「そうか……」

源太も時子の墓の前に座り込んだ。

「おときさんはいいい時に我らの仲間になった。病のことはともかく、食べるものには苦労せんかったからのう……」

二人は暫し、墓の前で佇んだ。

どこからか、念仏の読経が聞こえてきた。それを聞いていた源太がポツリとこう囁いた。

「あの綽空のお陰で、この里にも念仏信者が増えたわい」

住蓮は、その発言を聞き漏らさなかった。笑いながら彼は源太に語った。

「それは、私と安楽が熱心でなかった、ということかい？ まいったな！」

頭をかくと、彼はさらに言葉を続けた。

「源さんも、そろそろ年貢の納め時かな？」

綽空の熱心な布教の努力もあり、この里に多くの念仏信者が増える中、源太はまだ、阿弥陀信仰に距離を置いていたのである。

「うーむ、それはもう少し考えて……」

今度は源太が頭を掻き出した。

「ははは！」

「わははは！」

二人は顔を見合わせると、ひとしきり笑った。笑いながら、住蓮は思った。

時子は、この源さんにいつも見守られていた。そういう意味では幸せだったのかもしれない。

いかなる境遇でも仲間が必要である。

自分も……。

しかし、この俺は安楽を支えているだろうか？

源さんを支えているだろうか？

多くの、悲嘆にくれている民を支えているだろうか？

自分の念仏は、ひょっとして、時子を救えなかった自分自身を救うためだけの、悔悟の念仏に過ぎなかったのではないか？

そんなことに思いを廻らせているうち、思わず口から言葉が突いて出た。

「ともかく会わねば！」

彼の突然の言葉に、源太は驚いた。

「誰にだね？」

源太にそう問われ、我に返った住蓮は言葉を取り。

「いやなに……」

無論、盛高のことを口走ってしまったのであるが、

「安楽と約束があるのを忘れていた」

と言つて、その場を凌いだ。

「そうか、彼にもよろしく」

二人は別れた。

犬神人の里を後にしつつ、住蓮は、迫り来る、過去との決着の時間を覚え、体の震えをいつまでも感じていた。

## 第二部第二十九章

盛高は、ゆきとの関係が親密になるにつれ、ますます、自身の過去を封印しようとしている自分に時折気がついていた。

それは何とも不可解な感情ではあった。

本当は、愛する人には自分の全てをさらけ出したかった。 実際、ゆきは自らの過去を盛高には包み隠さず、すべて打ち明けていた。盛高も、慈円に近江佐々木家の再興を促され、この人、ゆきとなら、近江の故郷で一から出直しを図れるかもしれない、と淡い期待を抱いてもいた。

自分の全てを知った人であって始めて、将来の伴侶としても考えられよう！

そう思うと、『今度は話そう』と決意するのだが、会つと決まって、その告白を、何かが邪魔をするのであった。

その、何か、とは……。

彼は無論その正体を掴んでいた。

それは、今でも時折彼を襲うあの、悪夢であった。

轟々と音を立て、迫り来る猛火……。

湖から聞こえる妹の叫び……。

彼の肉親を奪い、今も自分を苦しめるこの夢の張本人である、時  
実！

彼を見つけて、この手で切り裂かねば、この悪夢からはやはり逃  
れられないのか！

ゆきと出会った頃は、彼女の可憐さが、自分をこの悪夢から救っ  
てくれるのか？と思った頃もあった。

しかし、実際は違った……。

結局のところ、いくら奇麗事を並べても、この過去と決別で  
きない限り、この悪夢と決着をつけない限り、自分の新しい人生な  
どありえないのではないか！

しかし、敵と狙う、時実の消息は、杳として掴めない。

やはり復讐など諦めるしかないのだ！

そう思っても悪夢はやはり襲ってくる……。

そんな盛高に最近、さらにもう一つの悩みが加わっていた。

ゆきからの手紙である。

「盛高様。お手紙でございます」

盛高に書状を手渡したのは、新しい従者の清兵である。前の従者  
である六郎は、その吹き矢の才能を買われ、後鳥羽院の直属の護衛  
者として召し上げられてしまっていた。

その代わりにあてがわれた従者が彼である。

長年苦楽を共にし、何事も阿吽の呼吸で通じた六郎とは比べようもないが、彼は彼で、盛高に精一杯の忠誠心で仕えていた。また、盛高もそれを評価していた。

「じ苦勞」

と言って、書状を受け取ると、彼は封の裏面を一瞥するや、

「いつものように処理してくれ」

と言いながら、清兵に、それをそのまま返した。

「承知」

と返事をする、彼は書状を携えて盛高のもとを辞した。

残された、盛高はぽつりと呟いた。

「困ったことだ……」

恋人からの手紙に対して、「困ったことだ」と言う、この盛高の呟きには無論理由があった。

実は、手紙は自分宛に来たのではない。後鳥羽院の女御、伊賀局、亀菊に宛てたものである。自分は仲介役になっているだけだ。

決して悪いことをしているのではない、ということは十分理解し

ているつもりであつた。

自分の恋相手が、たまたま院の女御様と知り合いであつただけのことである。その手紙の仲介をしているだけだ。しかも局様も同意の上である。

そう考えれば、責められる行動ではない。

しかし……。

実は、最近、後鳥羽院と、伊賀局様との関係は微妙であるとも噂されていた。

局側にすれば、後鳥羽院がもう若くは無い自分を顧みてくだらない、との言い分を当然持っていた。だからこそ世をはかなんで、敬虔な阿弥陀信者になったのだ、と。

後鳥羽院は、その反対で、伊賀局が阿弥陀信仰に走り、そのため現世の自分への関心を失つたのだ、との不満を口にしていたのである。

そんなことが原因で二人の関係は急速に冷めているとも……。

男女の関係はいつもこんなものであろうが……。

しかし、この二人の関係のこじれは、所詮は男女のありふれた問題、という域を超えてしまっていた。

それは、昨今、伊賀局は阿弥陀信仰の中でも、特に法然の教えにひどく関心を持っていると噂されていたからである。



後鳥羽院自身は、もともと阿弥陀信仰に対して、否定者でも肯定者でもなかったらうと考えられる。叡山と法然一門の対立にも無頓着であったと言えよう。

彼は、熊野詣を幾度と繰り返す敬虔さを持つてはいたが、それも信仰心からというよりは、神秘的力を求めて、と言ったほうがむしろ適切ではないかと思う。

しかし、天皇親政を希求する立場から言えば、朝廷に無理難題を突きつけてくる南都北嶺の力を何とか削ぎ落とせぬか、という思いは、ある意味摂政九条良経と共通であったらう。敵の敵は友、この観点からは、おそらく法然一門にある程度好意的であったと考えて妥当ではないか？ 実際、良経が、叡山、興福寺からの、法然一門への苦情を聞き流していたことを、後鳥羽院自身も見てみぬ振りをしていたふしがある。

一方、後鳥羽院が目指す天皇親政の実現には、鎌倉幕府はまったく邪魔な存在であった。そして、この立場からは、法然の阿弥陀信仰は対立する存在といえた。なぜなら、東国の有力な武士達には、法然の教えに共感して阿弥陀信者となる者が多くいたからである。

彼らの複雑きわまるこの権力闘争にいつしか巻き込まれていつていることを、法然一門も、また対立する南都北嶺も十分には理解していなかった。

そして、そのことが後日の不幸な出来事を生もうとは、誰も予測しなかったであろう。

まさか、自分がその渦中に置かれようとは。

盛高は、ゆきの素朴な阿弥陀信仰には何の反感も持つてはいなか

った。その素朴さにむしろ好感を抱いてすらいた。

しかし、時代は、明らかに、この素朴な信仰心をも押し流そうと  
していた。元久元年（千二百四年）法然並びに門弟らが署名した七  
箇条の起請文が、叡山に提出されたことで、叡山と法然一門の關係  
はいったん小康状態を保っていたが、年が明けると、叡山に代わり、  
南都、中でも興福寺が法然一門への非難攻撃を強めてきたのである。  
彼らはかなり強硬であった。朝廷まで、度々特使を派遣しては、  
専修念仏の禁止を訴えていた……。

「明日にも僧兵を大挙引き連れ朝廷へ直訴に来るらしい」

そんな都人たちの噂を、盛高も耳にしていたし、都を覆うピリピ  
リした空気も直接感じ取っていた。

そして、その緊張感は、ここ院の御所の中にも漂っていた。院の  
御所全体が、都同様、何か重苦しい雰囲気にも包まれていた。

そんな中であって、盛高は、最近、御所の中で六郎とたまに目を  
合わせると、六郎が以前の快活さをすっかり失っていて、自分から  
目をそらすことが何か気になっていた。また声をかけても返答すら  
ないこともあった。

どうしたのだろう？

それがなぜか、原因は何か……。

御上の直属の護衛を命じられて、責任感から重圧に潰されて  
いるのか？

そんな苛立ちを感じつつ、ゆきからの手紙の件の処理を終えた盛  
高は、自分の部屋へ戻った。

一人になると、ゆきのことを考えた。彼女の笑顔を思い起こすこ  
とで、この荒んだ心を少しでも和ませようとするのだが……。

しかし、やはりあの悪夢は襲ってくるだろう！

何とか決着をつけられないものか！

そんな思いで、悶々としていると、そこへ清兵が現れた。

「お手紙、無事に届けました」

「そうか……」

そう言う盛高の表情が、いつに無く険しいのを清兵は見取った。六郎と違い、清兵は盛高の過去については多くを知らされていないかった。噂程度でしか聞いていない。

それでも、彼なりに主人への気遣いの言葉をかけた。

「御気分でも？」

盛高は、清兵が、彼なりに精一杯の忠誠心を示そうとしているのを感じた。

「いや、何、心配ない……」

この者に言ったところで何になるう、という思いもあった。しかし、いらぬ不安は与えない方がよい……。

自分は防鴨河司副長官である。弱気を見せてはいけない。

「清兵、もう一仕事、わしに付き合わんか？」

「はあ？」

「悪人退治に、いま少し、町へ繰り出そう！」

「今からでございますか？」

確かにもう日暮れ近かった。しかし盛高は重ねて言った。

「行くぞ！」

清兵はともかくも主人の命に従うしかなかった。

「すぐ、準備をいたします」

「そついたせ！」

盛高は、仕事に邁進することで、時実への復讐心を何とか封印出来るのを知っていた。

自分は職業軍人、考えることは不要、ただ、都の治安を守るのみ！

彼は身支度を整えると、清兵と共に都大路へ繰り出した。

## 第二部第三十章

元久二年十月、ついにその興福寺が動いた。

今年の、叡山における法然一門への糾弾の動きは、法然が登山状と七箇条起請文を提出することで、すばやく事態を沈静化させるのに成功したが、今回は院の御所に興福寺から直接、奏状が提出された。彼らの要求は専修念仏の禁止、加えて、法然門弟の処罰すら要求している。事態は前回より明らかに深刻化している。

唯一の救いは、院の御所宛に提出された、この奏状であつたが、ひとまずは摂政九条良経のもとに留め置かれたことである。父、九条兼実が強く法然に帰依していたこともあり、彼は、一旦この奏状を手元に留め置いたのである。

この消息は、無論吉水の里にもすぐに伝わった。

「行空が破門されるらしい」

「止むを得まい。彼らの一念義が、南都北嶺の大きい怒りを買っているのは事実であるし、実際、彼らの主張は行きすぎている。

そんな彼らに自由に念仏布教をさせていた上人の優しい性格が災いしたとも言えようぞ」

「確かに……」

行空は破門された。法然にしては珍しい厳しい処分だった。興福寺の怒りを抑えるためには止むを得なかったであろう。

こうした法然らの対応を見て、その年の十二月に九条良経は宣旨を下した。

曰く、「傾年、源空上人、都にあまなく念仏を勧む。道俗多く教化に赴く。しかるに今、かの門弟の中に、邪宗の輩、名を専修にかるを以つて、咎を破戒に顧みず。是れひとえに門弟の浅智より起りて、かえりて源空が本懐に叛く。偏執を禁あつの制に守るといふとも、刑罰を誘諭の輩に加わることなかれ」

良経が作成したとは言え、形式的には無論、後鳥羽院の院宣であ

る。興福寺も一旦は矛先を収めるしかなかった。

こうして、ひとまずは、事態は沈静化に向かったかに見えたが、興福寺は朝廷への圧力を緩めることは無かった。彼らは九条良経の下した宣旨に不満を募らせていたし、中には法然一門を根こそぎ撲滅せよという急進分子も多くいたのである。

連日のごとく、興福寺からの使者が朝廷を訪れた。

こうした彼らの圧力にさすがの九条良経も抗しきれなかった。やむなく、年が明けて、建永元年（千二百六年）二月、彼は安楽と、行空に召し出し状を発することになる。行空については破門は形式的に過ぎぬ、その過激な一念義を完全に封印する必要があるということ、また安楽については、六時礼賛興行はみせかけで、そこを訪れる女人達を相手に女犯をほしいままにしている、厳しく処罰すべきだということであつた。

無論、この報せは、すぐに安楽、住蓮が今や拠点としている鹿ヶ谷の精舎にももたらされた。

しかし、安楽はこの報せを聞いても動揺をまったく見せなかった。

「住蓮、あとのことはよろしく頼む」

楽天的な安楽とは違い、住蓮は動揺が大きかった。

「安楽……」

「なに、大丈夫さ。この六時礼賛興行で、夜な夜な女犯が行われているなどという話、興福寺の連中がでっちあげた作り話ではないか。摂政良経殿がかなうなこと信じておられようはずも無い」

「それはそうだとは思うが……」

「私が行くことで、上人様も安泰、また摂政殿の面子も保たれようというもの。結構な話ではないか」

「……」

「ははは、死に行くわけではない！すぐに帰ってくる。留守中、よろしく頼むぞ！」

「分かった。しかし、やはり納得がいかん。行空は止むをえん。あいつは破戒を恐れるな、という過激な考えの持ち主……。それこそ女犯すら平気でしかねない。しかし、我らは……」

「まあまあ、よいではないか」

「うむ」

「おそらく、我らが取調べを終えた後に、改めて宣言を出され、興福寺を黙らせようと言うことであろう。信空様よりもそのように聞いている……」

「そのようにうまく万事が運べがよいが……」

二人は押し黙った。

安楽も口では強がりを書いてはいるが、内心は不安であろう……。

住蓮は、しかし、いざとなると、友を勇気付ける言葉をなかなか見つけれない自分に苛立った。

長い沈黙が続いた。先に沈黙を破ったのは安楽だった。

「それより、住蓮……」

「うん？」

安楽の眼差しが真剣なのを見て、住蓮はどきつとした。

「貴殿こそ、大丈夫か？」

「大丈夫かとは？」

安楽が語気を強めた。

「隠しても駄目だ。昨年の秋より様子がおかしいのは気づいている。何をそんなに思いつめているのだ」

住蓮はこうして改めて指摘されると、友人には何も隠せないのだ、ということを感じ知らされた。

「表情、言葉遣い、しぐさ、全てが以前の貴殿ではない。そんなことに気付かないでいると思うか？」

こう指摘されて、住蓮は最初はどきまぎしたが、一方、そうして指摘されてしまうと、何故か心が安堵感に満たされてくるのを感じ、何ともほっとした気持ちで、

「やはり、気付いていたか……」

「当たり前だ。黙っていたのは、聞きたかったが、興福寺の此度の騒動でそれどころではなかったからだ」

「うむ……」

住蓮は全てをぶちまけるかどうか思案したが、

「すまぬ、今は言えんのだ。もう少し待ってくれ」

と、答えた。実際、昨年九月、ゆきから思わぬ事実を知らされた後、盛高と会って全ての過去を清算しようと目論んでいたが、昨年十月に興福寺の奏状が出されると、教団全体が大変な混乱状態となり、個人的なことはすべて後回しにせざるを得なかった。

まして、教団の一大事に、自らの命を賭して、厳しい取調べに応じようという友を前に、自らの個人的な問題などあまりにもちっぽけなことに思えたからであつた。

「わかつた。でも、体を大事にしろ。今、そちが倒れたら、弥陀の救いを求めてやってくる多くの老若男女が失望することになるのだから！」

「わかつているとも！」

そう答えた住蓮は、ここに至って、決意を新たにした。

いよいよ盛高に会わねばなるまい、明日にでも！

もう、ぐずぐずしてはいられない。安楽に指摘されて目から鱗が取れた。個人的なことは後回しに、と思っていたが、実は、自分は現実から逃げていただけではないか？

個人的な悩みを決着させられない人間が、どうして人の悩みを聞く資格などあるのか？こんな愚かなことはいつまでも続けられない！

ここに至って、そう悟つたのである。

すると不思議と、それまで重苦しく感じていた心が、妙に軽くなるのを感じた。安楽もそんな友の心の変化を、彼の表情からすぐに感じ取ったようだった。

「そうだ、そうだ、何事も前向きに！ひさしぶりに貴殿のいきいきした表情を見た。これで安心だ！拙者が牢獄に入れられても後のこと大丈夫だな」

「おいおい、そんな縁起でもないことを言つなよ。ただの取り調べであらう！」

「ははは！」

「ははは！」

久しく、腹の底から笑うことも忘れていた二人であったが、今日は久しぶりに笑顔を浮かべて、がっちりと握手を交わした。



## 第二部第三十一章

幸い、安樂は直ぐに釈放された……。

何のお咎めもなしである。彼はすぐに鹿ヶ谷の精舎に戻った。

「よかったな！」

と喜ぶ住蓮に、

「だから、何の心配もいらぬと言ったであろう」

と安樂は答えた。

二人は微笑みあうと、力強く握手を交わした。

そもそも、今回の召還の理由は、六時礼賛で女犯が行われていると言う噂が広まっていたことであるが、吉水周辺では、多くの高貴な身分の女性が、この六時礼賛興行に参加するようになっていたのだ、既存の宗派、中でも興福寺が大いにそれを妬んだのだらうと、分析していた。六時礼賛の影響力はまことに大きなものとなっていたのである。

さらに、かつて安樂は鎌倉行脚により、少なからぬ坂東武者を念仏に帰依させることに成功していたが、彼の説法の巧みさは門弟らの中でもずば抜けており、そんな彼の処罰を求めることで法然教団に一撃をくらわさんと、興福寺が目論んだのであろう、とも……。

九条良経もその辺の興福寺の真意は見抜いていた。

安樂への尋問は厳しかったが、これは興福寺の面子を立てるためであつた。数日の取調べの後に彼は釈放された。

興福寺も、一旦は矛を収めるしかなかった。

しかし、この一連の動きを通して、興福寺の中に、摂政九条良経を朝廷から追放せよという新たな過激な動きが出てきたことを、良経は敏感に感じ取ってはいなかった……。

こうして、表面上は、都を覆った不穏な空気も消え去ったかに見えた。

安楽逮捕のほとぼりも冷めて、三月に入ると、吉水の里からは、前にもまして、日夜、念仏の音が響き渡り……

その声は、鴨川を渡って、対岸の京極から、さらに都の中まで響き渡った。

いつものように鴨の河原の警備に繰り出した盛高主従の耳にも、である……。

彼らは、一通りの巡回を終えて、河原で休息を取っていたところであつた。

一時と比べると、随分死体の数も減った。それでもあちこちに死体が放置されている。

しかし、それが慣れた光景となつてしまつて、何の感慨も抱かなくなつていた。ふと、そんな自分に気づいて、自分が嫌になるときがある。

そんな時思ひ出すのが、故郷馬淵の里での平安に満たされた日々である。

なぜ今の時代はかくも乱れてしまつたのか！　しかし、職業軍人である自分がそんなことを考えたところではいかんともしがたいことである。

彼は目を瞑った。念仏の読経の音が対岸から聞こえてくる。毎日聞いていて、特別な感慨を抱いたこともない。

それが今日はどうしたことであろう！　何故か、読経の声を聞いていて涙ぐんでしまつた。耳を澄まして聞いていると、実に心に染みるその声は何かこの世のものとは思えなかつた。

主人の異変に気づいた清兵が声をかけた。

「盛高様、いかがなされました？」

盛高は、ふと我に返つた。涙を見られたのだろうか？　そんなことを思つとやや恥ずかしくも感じられた。清兵に感ずかれないように涙を拭くと、彼は清兵に尋ねた。

「清兵」

「はい？」

突然声をかけられて、清兵は一瞬戸惑った。

「清兵、お主は実は念仏者であると聞いたが本当か？」

突然の質問に清兵は少し戸惑って、

「はあ……」

と、やむなく曖昧な返事をした。院の御所に念仏に帰依するものは多くいたのは事実であるが、それを公言することはまだまだ出来ないのが実際であった。

「いや、何、隠すことはない。私の元へ手紙を届けにくる、あのゆきさんも熱心な念仏信者だ。私は何の偏見も持っておりません」

と、盛高が続けて言うと、清兵は安心したのか、

「はい、その通りでございます」

と返事した。

「心配するな、誰にも公言はせぬ。ゆきさんの影響を受けたのか？」

と、盛高は清兵に微笑みながら言った。清兵は、

「いえ、決してそういうわけではありませんが……。いずれにせよご配慮かたじけのう存じます」

と言うと、頭を下げた。

盛高もあえてこの話題にはそれ以上触れなかった。二人はしばらく、鴨川から東山へと広がる景色を見ながら、しばらく物思いに耽った。

どれだけ時間が経過したろうか。

盛高は背後に人の気配を感じた。

「何奴！」

反射的に立ち上がり、刀を抜いて振り向くと、そこに一人の僧が立ち尽くしていた。

「何用か？」

僧であると知って安心すると、盛高は刀を鞘に戻した。

俯き加減に下を向いているその僧は、無言のままだった。

盛高は、僧が偶然この場を通りかかっただけのことかと思い、彼を無視してまた河原に腰掛けた。

しかし、その僧はそこに佇んだまま一向に立ち去ろうとはしない。盛高は苛立ちを覚えた。

用が無いならさっさと立ち去れ！ 内心そう思いながら座っていること、数分が経過したろうか？

視線を背後に感じながら、盛高の苛立ちもいよいよ限界に達した。「立ち去れよ！」と、その僧に注意を促すため、振り向いたその瞬間だった。

今まで俯いていたその僧は顔を上げると、口を開いた。

「盛高、久しぶりだ」

その声を聞いた盛高は、一瞬何のことか分からず戸惑った。

比叡山にいた折に、知り合った僧であろうか？などと思いを廻らしながら。彼の顔を眺めているうち、過去の記憶が鮮明に蘇った。明らかだった。 やつだ！

「お前は、時実！」

盛高はそう叫ぶと立ち上がり、太刀を抜いた。

暫く両者は沈黙したまま、睨みあっていた。共に厳しい目つきだった。当然である。

二人の脳裏を、近江での様々の出来事が駆け巡っていた。喜び、悲しみ、怒り、絶望、それらの感情が幾重にも重なり合い、纏れ合い、渾沌としていた。

睨みあつたままでどれだけの時間が経過したろうか？

最初に口を開いたのは住蓮であった。

彼は、ふー、つと溜息をつくとき、盛高に伝えた。

「左様、その名前懐かしい。確かに、私は時実。もっとも今は出家して、住蓮という名前をいただいている。法然様の下で修行に励む身だ」

と、そう言うと、冷静さを保たんと、再び呼吸を整えてこう続けた。

「盛高、いや、今は盛高殿と呼ぶべきか。大いに出世されたいから。ともかく、今はゆつくりと時子殿の身の上に起こったこと、

近江佐々木家に起こったこと、これを私の口から説明させてくれまいか！私を佐々木家の仇として追っているということは知っていた。私を斬って気が済むなら、私を斬ればよい。ただその前に冷静に私の話を聞いて欲しいのだ！真実を知って欲しいのだ！」

と、そこまで言うのと、彼はそこに跪いて、盛高に土下座した。

彼にしてみれば、自分の命と引き換えでも、近江佐々木家に起こったことの真実を、そして時子の最後がどうであったかを、しっかりと彼に伝えたかったのだ。

しかし、住蓮のこの誠意は激高している盛高には所詮通じなかった。

「黙れ、黙れ！時実、時子を死に追い詰め、さらにはわが父母までも憤死させた張本人はお前であろうが！他にどんな真実があるというのだ！」

と、叫ぶや、彼は太刀を持って住蓮に飛び掛った。そして彼をめがけて、思いつきり太刀を振り下ろそうとしたその瞬間だった。

どさっ

と、鈍い音と共に盛高はその場に倒れた。いや、倒された。

もっと正確に言えば、その場にねじ伏せられたのであった。

そして、ねじ伏せたのは、あの放免次郎と三郎の二人であった。

「放せ！」

盛高は必死に叫ぶが、二人に抑えられて身動きが取れない。それでも何とか二人の手を振り解くと、今度はもみ合いとなった。

「盛高様！」

と、突然の出来事に、それまでなす術なく様子を見ているだけであった清兵も、そのもみ合いに飛び込んだ。素手と素手の喧嘩

となった。こうなると、力自慢の放免に敵う者などいようか？彼らの力にはさすがの盛高も敵うはずもなかった。

次郎が盛高を、三郎が清兵を、最後には思い切り投げ飛ばした。しかも運の悪いことに、盛高は投げ飛ばされたはずみで、河原の石にしこたま頭を打ちつけた。

「うつつ」

彼は遠のく意識の中で、敵を討てぬままこのまま死んでいくのか？と自分の運命を呪った。

「盛高様！」

薄れていく意識の中、ゆきの声を聞いたような気がした。それともあれは天女の声か？

心地よかった。

それでも死ぬ前に、ゆきの声を聞けたなら、俺は幸せだ。

そう思うと心が軽やかになった。

「盛高様！」

ゆきの声がいつまでもいつまでも盛高の頭の中で反響していた。

## 第二部第三十二章

「盛高様！」

気がつくとき、盛高の目にはゆきの顔が見えた。

ここはどこだろう。

俺はなぜここにいるのだろう。

粗末な小屋の中にいるようだ。しかしそれ以上は分からない。顔を動かそうとすると激痛がする。体も同じだ。手足を動かそうとするが言うことを聞かない。

俺は、そうか死に損なったというわけだ。

すこしずつ記憶が蘇ってきた。

「盛高様！ああ、よかった！目を覚まされた！」

漸くゆきが自分に抱きついていているのだということが分かった。しかし、その感覚もはつきりしない。

ゆきの両側には次郎と三郎がいた。

次郎は泣きながら叫んでいた。

「盛高様、申し訳ない！許してください！住蓮様を守ろうと、咄嗟のことで、思わず投げ飛ばしてしまいました！どうぞ、お許しを！」  
投げ飛ばされた……。確かにそうだ。さらに記憶が呼び起こされた。事情が少しずつ飲み込めてきた。

しかし、さらに記憶を辿ろうとしても、頭がまったく働かなかった。ひどい頭痛がした。

すると、そこに、一人の男が現れた。僧衣姿だ。

時実か？

盛高はそう一瞬思ったが、住蓮ではなかった。

「これは、これは安楽様」

三郎が彼を迎え入れた。

「よかった、意識を取り戻したか」

「はい」

安楽と呼ばれた僧が、自分を覗き込んでいる。盛高は何とか体を動かそうとするが体が言うことを聞かなかった。安楽は、あちこち彼の体を触ったり、脈をとったりしていた。

それらの診察が一通り終わると、

「ともかくも」

と言うと、彼は体を起こして、傍らのゆきにこう告げた。

「危機は脱したようだ。あと、どこまで回復できるかはゆきさんの看病次第かな……」

そう言われたゆきは

「なんでもします。安楽様、何でも申し付けてください！」

と涙ながらに訴えると、盛高の手を握った。

ゆきの手の暖かさが伝わると、盛高もなぜか泣きそうになった。

自分を愛してくれる人が傍にいてくれる。

それだけで幸せだった。

別に死んでもよい。

不思議と素直になれた。すると、再び意識が遠のくのが感じられた。

ゆきの手の温もりを感じながら、彼は再び眠りについた。



## 第二部第三十三章

この日の事実経過はかくのごとくであった。

盛高との再会をいよいよ決意した住蓮は、斬られてもそれでよし、と覚悟を決めると、彼に会わんと、鹿ヶ谷の草庵から鴨の川原に向いた。盛高が巡回視察に訪れる時間はゆきから予め聞いておいた。その途中、ゆき、次郎、三郎らが拠点としている吉水の救護所に立ち寄った。それは、盛高に斬られればもう彼らとも会えまい、という思いからであった。

救護所には、しかし次郎、三郎しかいなかった。つかの間、彼らと会話を交わした後、鴨の川原へ向かった。死を決意して。

住蓮を見送った二人は、彼の表情からただならぬ雰囲気を感じていた。

これは何事かあるに相違ない！

そう直感で感じた彼らは、住蓮の後をつけて行ったのであった。そして二人の対面を草場の陰から見守っていたというわけである。一方、ゆきはゆきで、盛高に会おうと、いつもの川原の場所に出向いた丁度その時、二人の対面の場に遭遇したのである。

そして結果、住蓮を斬らんとした盛高に向かって、次郎、三郎が突進して、彼を最後には投げ飛ばしてしまったというわけである。

「盛高様！」

投げ飛ばされてしまつて動かない彼に、ゆきは無我夢中で駆け寄った。

「次郎さん、何てことするの！」

横たわつて微動だにしない盛高を見て、はつと我に返った次郎もただうろたえるばかりであった。

住蓮だけが冷静だった。彼はすぐに盛高の脈を取ると、

「大丈夫だ、死んではいない！」

と、叫ぶや、次郎、三郎に、吉水の救護所への搬送を指示した。

「ともかくも、まず運ぼう。もう一人の部下の者も運ばねば」

清兵は、うーうーと唸っていたが、命に別状はなさそうだった。住蓮らは周囲の顔なじみの河原者たちに声をかけ協力を依頼した。皆は快く引き受けてくれた。

こうして、皆で、二人を戸板に乗せ、吉水へと向かった。

住蓮の心情は複雑だった。搬送の道すがら、彼は、ゆき、次郎、三郎にすべての事情を説明した。

ゆきは大きい衝撃を受けた。

まさか自分の愛する人が、かつて愛した人を敵として狙っていたなどとは！

住蓮から事の次第を告げられると、ゆきは大きくため息をついた。盛高様が、もっと自分の過去のことを語ってくれてさえいれば！

「そうであれば、私が、住蓮様との間を取り成すことも出来たでしょうに。すべての誤解を解くことが出来たでしょうに！」

動揺するゆきを慰めながら、一方で住蓮は、事態の処理をどうしたものか思案していた。

院の御所の武者を怪我させたとあってはただでは済むまい！今後の事態の展開に不安を抱きながら、彼らは吉水へと急いだ。

## 第二部第三十四章

吉水では連絡を予め受けていた安楽がすばやく応急処置を施した。その間、傍らでは、住蓮が事態がかくのごとくに展開してしまった事情を説明していた。

「まさかこんなことになるうとは……」

と呟く住蓮の傍らでは、次郎、三郎が申し訳なさそうに頭を下げて俯いている。

安楽も

「確かに困ったことではある……」

と、頭を抱え込んでいた。

と、そのとき、ゆきが、

「あ、清兵さん、気がついたのね！」

と、大声を上げた。

幸い清兵の怪我は軽かったようであった。彼は意識を取り戻すと起き上がるうとしたが、またすぐにめまいがしたのかうずくまってしまった。

「すぐに、起きてはならん！」

安楽の注意に、彼は素直に従って横たわったままだった。その清兵にゆきが声をかけた。

「清兵さん、ごめんなさいね！本当こんな目にあわせてしまって、私、何て言ったらいいか……」

その会話を横で聞いていた安楽は、彼らに尋ねた。

「二人は顔見知りかね？」

「はい……」

ゆきは、清兵もまた実は熱心な念仏者であることを告げた。自分と伊賀局の手紙のやりとりの仲介役をしてくれていたのが彼であった。そんな関係で親しくなるうち、彼が自分から打ち明けてくれたのだとか。

清兵は、この頃には意識を取り戻して、目をすっかり開けて、皆の会話を聞いていた。

「よいか、清兵。今から言うことをよく聞いて欲しい」

安楽は、そう言うと、住蓮と盛高の因縁、時子と父母の死の真相について、そしてすべてのことは盛高の思い込みによるものだ、と言うことを、順を追って説明した。

「ここにいる住蓮が、時子さんの仇だなんてとんでもない！分かるか？」

ゆきも安楽の説明を支持した。清兵は

「私が聞かされていた話とは全く違うものですから……」

と言うと、黙りこくってしまった。

「それにしても、人間の憎しみは一步間違つて暴走すると、その人の心をぼろぼろにしてしまうのですね」

ゆきがぼつりと呟いた。

安楽は事態の收拾には清兵の力を借りるしかないかと悟ると、彼にこう言った。

「清兵、今回のこと、下手をすると、法然様のもとにも責任の追及の手が伸びるやも知れん。そちも念佛者であれば、ここ吉水に集う念佛者達のこといも思いを馳せてほしい。分かるな」

「はい……」

清兵も、まさかこのような事態の展開になろうなどとは予測だにしていなかったので、今後どうしたらいいものかうるたえるばかりであつた。

「貴殿の主人、盛高殿は、我らが介護をいたす。命が助かるかどうか、まだ予断を許さないが……」

「はい……」

「貴殿は、院の御所に帰り、このように報告いたしてはもらえまいか？」

「それは、どのようにでございますか？」

「左様、わが主人盛高様、視察の途中に、不覚にも馬より落馬して

怪我をなされて動けぬようになったところ、通りすがりの僧に助けられ、現在、吉水の草案にて治療を受けているとな」

「なるほど」

「そして、治療は長引きそうだと……。そして、貴殿が毎日様子を見に来られよ。そして、帰って報告してほしい。すれば、しばらく時間が稼げよう」

「しかし、回復されなければ？」

安楽はその質問に顔を一瞬曇らせたが、

「なーに、必ず直してみせる。我ら持てる力を全て出し切ろう。よいな、次郎、三郎、ゆきさん！それに住蓮、お前もだ！」

と言うと、住蓮の肩を叩いた。

安楽の掛け声に一瞬場が和んだ。

「そうだ、そうだ！」

と、次郎、三郎も叫んだ。

「そうよ、皆で力を併せて頑張りましょう！」

ゆきも、彼らに応えた。

住蓮は友情の有難さを改めて噛み締めた。清兵は体に別条の無いことを確認すると、少し休んだ後に、吉水の救護所を後にした。

「では、私は安楽様の言われたとおりにいたしますのでご安心を」  
そう言つて、彼は足早に立去った。

四人は彼の後姿をいつまでも見送っていたが、彼の姿が見えなくなると、お互いの顔を見合わせ、頷きあった。何度も、そして力強く。

## 第二部第三十五章

ゆきの盛高への献身的な看病はここではとても全てを描写できない。まったくそれは不眠不休であつた。そしてその甲斐あつて、盛高の病状は日に日に良くなった。

そして、ゆきは、看病をしながら、盛高にすべての経緯を説明した。住蓮が鳥辺野で倒れていたのを救つたこと、平重衡処刑の際の彼の堂々たる念仏者としての振る舞いに感動して、自らも念仏者となることを決めたこと、法然の下へ弟子入りしたこと、そして、時子との思いもかけぬ再会、さらには彼女の死……。ゆきは住蓮から聞いたこと、また自分が傍にいて見たことをありのままに彼に伝えた。何を省略することなく、何の誇張も無く、何も付け足すことなく……。

盛高は、当初は、ゆきから聞いたそんな話を受け入れられないでいた。それは無理も無い。馬淵の里で、その住民から聞いた話とは全く違う内容であつたから……。

盛高は、当初彼女が住蓮を救うために嘘をついているのだと考えた。しかし、彼女の献身的な看病を受けながら、次第に、ひよつとすると自分の思い違いなのかもしれないという思いを持つようになった。

そんな思いを決定的にしたのは、あの応水の登場であつた。ゆきが呼び寄せたのだ。

「応水様、すぐに来てください」

京極六角獄舎まで訪ねてきたゆきの呼びかけに、彼は直ぐに応じた。

「何と、あの佐々木家のご子息が……。それはすぐに参らねば」

こうして、時子の身投げを現場で阻止した件の人物が登場し、その時の状況、事情をつぶさに語るにいたって、盛高はもはや反論の余地を持たなかった。

「すべては、間違つた住民の話、噂を真に受けた私の思い込みによるもの……。皆を混乱させて、まことに遺憾、としか言いようが無い。許して欲しい」

盛高はゆきに深々と頭を下げた。

「時実、いや今住蓮と名前を変えたのか、彼にも謝罪をせねば」

すべてが明らかになった今、彼の心は清清しく、今まで思いつめていたあの心の緊張感は和らぎ、未だに苦しまされる体の痛みと、ふらつきにも拘らず夜はぐっすりと眠れるようになった。

応水は、安楽と共に彼の治療に当たっていた。

「何とも、人の噂、思い込み、そして怒りと憎しみの感情とは本当に怖いものよ。一人の青年をここまで追い込んだのじゃから」

ゆきは、それでも盛高をかばった。

「無理もございません。頼りと思つて帰つた故郷が凄惨な有様だったのですから……」

盛高はそんなゆきの心遣いが嬉しく、この吉水の救護所での静養の日々も苦痛とはならなかった。

ゆきが傍らで唱える朝夕の念仏も、心に心地よく響いた。

特にゆきの念仏には独特の旋律があつた。かつて白拍子として、歌を吟じた彼女らしい、まことに優雅な節回しであつた。

誰かがそれにあわせて踊れば、まこと優雅な舞となるであろう、そんな上品さがあつた。

ある日、盛高は思い切つて聞いてみることにした。

「ゆきさん。なぜ、ゆきさんは念仏信者となつたのかね」

「はい？」

「いや、一度聞いてみたかったのだ。そちの念仏があまりに美しく、心を打つものだから……」

「では、うまく言えるかどうか分かりませんが、お話してみましよう」

ゆきは少し間をおくと、ゆっくりと語り始めた。

「私は、今のこの瞬間をととても大切に生きていたいのです。そして、

念仏はそれを実現させてくれるのです」

「今を……」

「はい、今が大事なのです。今を大切に生きれない人が、果たして極楽往生など出きるものでしょうか」

「確かに、そう言われれば……」

由緒ある近江源氏の血を引く佐々木家の御曹司も、ゆきの説法の前にたじたじだった。

「そもそも、往生とて、往きて生きん！という意味ではありませんか。私は、安楽様や、住蓮様からそのように学びました。私達の念仏は、死ぬための念仏ではありません。生きるための念仏です。こんな時代だからこそ、絶望することなく、今を一日一日しかつり人間らしく生きて生きたい、そのために阿弥陀様におすがりするのです！」

盛高は自分が恥ずかしかった。いつも鴨川の右岸、東山から念仏が聞こえてくるたび、その調べを美しいと思う反面、それは彼の耳には、何かしら、この社会の敗者のうめき声のようにも聞こえて、念仏者に対して哀れみの心を持つことも多かったからである。

それが今覆された。

盛高は、この社会の底辺で辛酸を極めている人々が、せめて来世での救いを、と念仏を唱えているのだ、と思っていた自分の考えが、実は未熟であったことを思い知らされることになった。

人間らしく生きるための念仏

確かに、ここ吉水に集う念仏者の集団は、貧しい人も、病気の人も、皆晴れ晴れとした表情をしていて、自分が想像していたような、今を生きること絶望した人々の集団ではなかった。

であるからこそ、あの時、あの鴨の河原巡視の際、東山から聞こえてくる念仏の読経に心を動かされたのではないか……。

であれば、それは絶望の念仏でなく、希望の念仏ではないか……。

盛高はここにいたってすべてを理解した。

「ゆきさん」



「はい？」

突然の盛高の問いかけにゆきは戸惑った。

「どうされましたか？私の話、少しお説教みたいに感じられたのでしょうか。そうであれば謝ります。決してそんなつもりで……」

「違う、違う、ゆきさん」

盛高はゆきの話を遮ると、体を起こした。体はもうかなり回復していた。めまいもほとんどしなくなっていた。

「実はお願いがある」

「お願い？」

ゆきは不審そうな目で盛高を見つめた。盛高の真剣な眼差しを見て、何かひどく思いつめているように感じたからである。

「何でしょう？」

盛高はここで二、三度大きく息を吸った。そしてゆきの手を取ると、こつゆきに告げた。

「時実に会わせてくれ！」

「えっ？」

戸惑うゆきに、彼はもう一度、力強く、ゆつくりと告げた。

「時実に会わねばならぬ！会わせてほしい！」

盛高の真意を測りかねて、ゆきはただ茫然とするのみであった。

## 第二部第三十六章

「時実に会わせて欲しい！」

重ねて訴える盛高に、ゆきは当惑した。

盛高の誤解が既に解けたことは分かっていたが、住蓮は、それでもまだ盛高と再会を果たすのは時期早々、と考えて顔を見せないでいた。周囲も同意見であった。それは、いくら口では「誤解だった」と言っただけでも、心の整理がつかない状態で顔と顔を合わせれば思わぬ事態が生じないとも限らない、と皆が考えたからである。

盛高が心に育んできた復讐心は、そう簡単には消えないのではないか、と誰もが不安に思っていた。至極当然のこととは言えた。

ゆきも例外ではない……。

「盛高様、もう少し時間を置いて……」

ゆきがそう言いかけたのを、盛高は首を横に振って、遮った。そして落ち着いた口調でこう言った。

「違う、違う……。直接本人に会って謝りたいのだ。心の底から！ 本当に、私の勝手な思い込みで、彼を追い詰めたことを。それに……」

ゆきは、これを聞いてほっとした。

ゆきの表情が緩んで、笑顔が戻ったのを見て、盛高も表情が和らいだ。

彼は続けた。

「それに、妹、時子の面倒を最後まで献身的に見てくれた御礼も言わねばならぬ……」

ゆきは答えた。同時に涙が頬を伝って流れ出した。

「分かりました……。分かりました。盛高様、本当に誤解を解いてくださって有難うございます。盛高様と住蓮様が顔と顔を合わせ、正式に和解されれば、時子様もきっと喜んでくださるでしょう！」

盛高も頷いた。

「時子の墓参りもせねばならんしな……」

「まことに」

盛高も涙顔になっていた。時子のことを思いだすと、心が痛んだ。彼女の一番辛い時期に自分は傍にいてやれなかった。思えば、自分が家を出るとき、すでに妹は発病していたのだろうか？ 様々な思いが脳裏を駆け巡るたび、盛高は若気のいたりで家を飛び出してしまった自分を責めるしかなかった。

「時子は、最後は、最後は苦しんだのか？」

盛高のこの問いに、ゆきは、一瞬天を見上げた。この質問にはどう答えたらよいのだろうか？ 真実を伝えることが果たして……？

少し間をおくと。彼女はこう盛高に答えた。

「おときさん……、いえ、時子さんは、最後は住蓮様の腕の中で、安らかに息を引き取られました」

これを聞くと、盛高はため息をついた。そして目を瞑って黙ってしまった。

おそらくは、嘘をついてるのだろう。そんなことは分かっている。最後は苦しんだに違いない。いや苦しんだに決まっている。それは断末魔にも似た苦しみであつたろうか……。いやそんなことは分かっていることなのに、あえてこんな質問をした自分に気兼ねをして、ゆきは自分を慰めようと嘘までついているのだ！ いや、自分が嘘をつかせているのだ！ そう考えると、盛高は自分の愚かさにも腹が立つてきて、手をぐっと握り締めた。そしてただ黙っているしかなかった。

そんな盛高の心情を察してゆきは、こう慰めの言葉をかけた。

「盛高様、時子さんは、本当つらい日々を過ごされたと思います。でも……」

「でも？」

ゆきは盛高に手を差し伸べると、労わるように彼の手を優しく握った。そして続けた。

「彼女は、本当、多くの仲間を支えられていました。あの里の中で

も人気者でしたし……。血を吐いて倒れてからというものの、皆が代わる代わる寝ずの看病を続けました。彼女のためなら、と皆が必死で頑張りました。臨終のおりも、皆に見守られ、息を引き取られました……。」

「そうか……」

盛高は天を仰いだ。

「盛高様、盛高様にはお願いがあります。時子さんのために……」  
ゆきは、盛高の目をしっかりと見据えると、続けた。

「時子さんは、生前故郷のことを思い出しては、よく涙しておられました。私たちもよく彼女から聞かされました。馬淵の里の話……。盛高様、どうか彼女の遺灰を故郷へ持ち帰り、その地に埋めてあげてください。住蓮様が、いつかはと、常々仰っておられますが、お勤めに忙しく、近江まで行くことが叶いませぬ。あなた様の手で、馬淵の里に葬ってあげて下さいませ」

ここまで言うと、ゆきはわっと泣き崩れた。盛高も貰い泣きで、顔はくしゃくしゃとなった。

「分かった。分かった。それが時子のためになるなら……」

あとは言葉にならなかった。二人は手を握り合い、時子の思い出に浸りながら、いつまでも泣き続けた。

## 第二部第三十七章

もう数日もすると、盛高はすっかり元気になり、しっかりと歩けるようになった。

安楽に指示されたとおり、従者の清兵が院の御所への報告をぬかりなく行ったので、今回の騒動について、次郎三郎らにお咎めが降りる心配も無くなった。

盛高は、御所へ帰る決心をした。

「そろそろお勤めに戻らねば……」

「もう少し静養されてもよろしかと……」

そついうゆきの本音は、彼ともっと多くの時間を過ごしたいということであつたのは言うまでも無い。

そこへ、住蓮と安楽がやって来た。

「盛高、帰ることに決めたか」

住蓮の問いに盛高は大きく頷いた。住蓮と盛高は、すでに和解を済ませており、もはや二人の間には何のわだかまりもない状態だつた。

「うむ、時実……。いかん、いかん、どうしても昔の名前で呼んでしまふ、許してくれ。今は住蓮と名を変えたのだったな、本当お世話になった」

盛高はこう言つて、住蓮に一礼すると、続いて、傍らの安楽にも礼を述べた。

「安楽殿も、まことにかたじけのうござつた。貴殿の薬がまことによく拙者の体を癒してくれたのは間違いないゆえ……」

安楽と、住蓮はお互いを見つめあつて大きく頷いた。防鴨河司副長官を傷つけたのだから、本来一大事であつたはずだが、皆の力で全て、ことがここまですましく運ばれたことで、二人の心が安堵感に包まれていたのは言うまでも無い。

ともかくも御所へ帰らねば……。

そう決めたからには早い方がよい。あまり休養が長引けば、御所からいらぬ詮索が入るやもしれん　盛高は、これ以上彼らに迷惑をかけることは出来ない判断した。

明日、ここを立去ることしよう。

次の日、彼は吉水の里を去ることを決めた。

「明日、ここを立去ることにしよう！」

盛高の言葉に、安楽と住蓮は手を差し出した。三人はがっちりと手を握り合った。

「達者で！」

「また機会あらばお会いいたしましょう！」

そんな男達の会話を尻目に、ゆきは複雑な心境だった。また、別れねばならない。ずっとそばにいたいのに！幸せな数日だった。片時も離れず看病をしていたのだから、それも殆ど二人きりで！

そうして、うらめしそうな目をして、男達の会話を眺めているゆきに、盛高は気づくと、

「ゆきさん！」

と、彼はゆきに声をかけた。

「はい？」

突然、声をかけられてゆきは動転した。

「ゆきさん、大事な話がある。よいか？」

「大事な話？」

「二人きりで」

「二人きりで？」

住蓮と安楽は場の空気を察知すると、

「それでは、我らはここで……」

と言つて、小屋を出た。後には二人が残された。

「ゆきさん……」

盛高はゆきの両肩に手を置いた。ゆきは体の震えを感じた。

「ゆきさん、　私は、今まで復讐心を糧に、この人生を生きてきた。そして、癒えぬ心の傷を癒すために、悪人退治をしては悦に浸

つておつた……」

「はい……」

黙つてきているゆきに、盛高は話し続けた。

「ところが、ある日、鴨の河原に座つて耳を澄ましていると、まことにこの世の思えない美しい念仏の旋律が聞こえてきた。住蓮と再会したあの日だ。私は未だに、仏を信じる身ではないが、それでも、あの日のことは、何か仏の導きがあつたのだろうか、そう思われて仕様が無いのだ」

「盛高様……」

ゆきは、突然の盛高の真剣な告白に戸惑つて黙つていた。

「もう、今までの生き様を踏襲しても何になるう。私は今の役職を辞して、故郷、近江の馬渕の里へ戻ろうと思う。そこで……」

「そこで……」

と言葉を返すゆきであつたが、さすがに失望の色を隠せなかつた。

いよいよ私達二人、別れようつてことなのね

と、思つたその次の瞬間、ゆきは盛高から強く手を握り締められた。そしてこう告げられた。

「ゆきさん、拙者と一緒に故郷に帰ってくれんか。自慢するわけではないが、とても良い所だ。きつと……」

と言う、盛高の言葉を、ゆきは最後まで聞くことは出来なかつた。

これは夫婦になつてくれ、という……。

そう考えが及んだ瞬間、頭の中は真っ白になり、考えが定まらなかつた。目からは止めどなく涙が溢れて来た。ただ泣きじゃくるしか出来なかつた。

「ゆきさん、いいんだね、いいんだね……」

盛高は優しくゆきを抱き寄せた。

「新しい生き方を始めよう、人間らしい生き方を！仏の道を歩まねばならぬのなら、それもよし。ゆきさん、生きることを私に教えてくれ！いや、もうすでに教わつたか、それでも、もっと教えてくれ！そして、二人で幸せに暮らそうではないか！」

ゆきは、漸く泣き止むと、今度は盛高の顔をしっかりと見据えて、大きく頷いた。

「はい！」

「ありがとう！」

二人はいつまでも、抱き合っていた。時のたつのを忘れて……。

（第二部終わり）



### 第三部第一章

建永元年（千二百六年）3月、摂政九条良経逝去の知らせが都中を駆け巡った。突然の死であつた。

「いや、殺されたのだ、という専らの噂だ」

「興福寺の僧兵の策略らしいというのは本当か？それは九条殿が念佛者たちの味方をしたからか？」

「興福寺の九条殿への怒りは並々ならぬものとは聞いてはいたがまさか……」

「いや、わしは、九条殿は単に病で倒れたのだと聞いたが……。朝起きて来られないので様子を見に行つたところ、すでに虫の息であつたと聞いたが」

「それが、お休みのところを遠くから吹き矢で刺されたのだと専らの噂なのだ」

「しかし仮にそうだとしても、いくら荒くれで有名なあの興福寺の僧兵と言えど、そんな大胆なことが出来ようか？」

喧しい都人たちの噂は、都中を駆け巡った。

その噂の真相はともかく、吉水の里にもたらされたこの消息は、法然一門にとつては、まことに重たくのしかかった。

「九条殿が、我らの盾となつてくれていたからこそ……」

多くの門弟が悲嘆にくれていた。

「これで、興福寺からの圧力はますます厳しいものとなるう」

「ああ！」

一方、良経死去の消息は、すぐに院の御所にもたらされた。

「盛高、参るぞ」

「はは！」

秀能に命じられて、盛高は後に従つた。病死ではなく変死の疑いがあるということで、良経の死体の検分に行くのである。この頃、実質上の都の治安担当の最高責任者は、防鴨河使長官三浦秀能であ

ったので、彼らが検分の役割を果たすことは当然であつたが、それでも長官自らが検分に赴くのは異例であると言えた。

それが今回のこの事件の深刻さを物語っていた。

ところが……。

盛高は驚いた。 供の者が全くいない。二人きりなのである。

盛高は不審に思った。

我ら二人きりで、この大事件の検分を、落ち度なく出来るのであろうか？

秀能がいたつて平静を保っているのも不思議であつた。普段は落ち着きのない態度を取ることが多い彼が、今回は、まるでこうなるのを予期していたかのような冷静な対応を朝からとり続けている。

それに……。

実は、ここ一週間ほど御所の中に張り詰めた空気が漂っていたのを、彼は感じていた。長蔵、尊長、秀能が連日のごとく密会を重ねていたことも感じていた。

それにあわせるかのように、六郎の姿をまったく見なくなったことも気になっていた。

今回の良経の死に関しても、実はそれは興福寺の僧兵の策略で、何者かが吹き矢を使って毒殺したのだ、と都人が噂しているのも彼の耳に入っていた。

まさか……。

と、盛高が不安な気持ちで、いろいろと考えを廻らしていると、突然、

「盛高！急ごうぞ！」

と、秀能から呼ばれた。考え事をしているうちに少し遅れたのである。

「はい！」

と、返事をする、盛高は馬を急がせた。 追いつくと、盛高は頭をぶるぶると振るわせ、自分に言い聞かせた。

自分は一体何を考えているのだ！ありもしないことを！

盛高の表情が険しくなっているのを、秀能はすぐに見抜いた。

「どうした？大丈夫か」

「はは、少し考え事を……」

盛高がそう返答すると、秀能は笑った。

「はははは！」

そしてこう続けた。

「何、すぐに終わるであろう。変死などとは、ただの噂であるぞ」

「はい……」

九条良経の屋敷の検分は、秀能の言った通り、すぐに終わった。それは全くの形式的なものだった。

屋敷内での秀能の振る舞いが全てを物語っていた。

彼は、現場の視察を軽く済ませると、その後、屋敷の数人から簡単な事情聴取を行った。それも、すべて、秀能が自ら済ませた。盛高の出番は全く無かった。

自分は利用されただけだ。

盛高はすぐに悟った。いくら形式的な検分とはいえ、一人ではまずい。そこで副長官の自分を同行させたということであろう。

その日のうちに、秀能自らの手で、後鳥羽院に検分の報告がなされた。

良経殿逝去は病死によるもので間違いございません

これにて表面上は一件落着となった。

しかし……。

その夜、秀能がぼつりと漏らした次の言葉が、盛高の心を騒がせていた。

「これにて、面倒な興福寺の連中も、暫くは我らに頭が上がるまい。まあ、恩を売ってやったというところかな。そもそも坊主が政

に口を挟むから、いらぬ疑いをかけられることになるのだ。奴らは、寺でお経だけ唱えていればいいのだ、のう、盛高！」

真相は分からない。

いや分らずともいい

盛高の頭を占めていた最大の関心事は、ゆきとの婚姻だった。そして、願わくば、故郷での新しい生活も！　それが、今回の摂政殿逝去という事態の発生で、先行きが不透明となってしまった。とても今、職を辞すなどという話を持ち出せるような状況ではないことは明らかだった。

しばらくは我慢するしかあるまい

などと考えを廻らしているうちに、夜も更けてきた。

庭に出ると、梅の花が蕾を膨らませて、今にも咲かんばかりである。

春が待ち遠しい……。

そんな感慨に浸っていると、背後から声がした。

「盛高様、秀能様、お呼びでございます」

「そうか」

「はは、尊長様のお部屋まで来るように、とのお達しです」

「法印殿の？」

盛高は、こんな夜更けに何事か、と不審に思いつつ、言われるままに二位法印尊長の控える部屋まで急いだ。

## 第三部第二章

「お呼びでしょうか」

盛高は尊長の部屋の前で入室の許可を求めた。

「入れ」

尊長に促されると、盛高は襖を開け、部屋に入った。部屋には尊長一人しかいなかった。

慈円に仕えていた頃から比較すると、大出世であった。盛高も叡山にいた頃何度か顔を合わせたこともあるが、彼の知る限り、叡山では、祈祷に秀でていること以外、特に目立った存在ではなかった。それが、慈円から後鳥羽院の加持祈祷僧として推挙されるや、めきめきと頭角を現し、今や二位法印である。

「実は頼みごとがある」

「頼みごとと申されますと？」

盛高の返答を聞くと、目をぎよろつかせながら、尊長はにやりと笑った。威厳に欠ける……常日頃から盛高は尊長のことをそう評価していた。

この笑いも自らの威厳を保たんがためのものであろうが……。しかし、この笑いが逆に威厳を貶めていることに、今や後鳥羽院の側近たる、当の本人が気付いていないことが、この院の御所の不幸な問題でもあったろう。

「実はだな……」

「はい」

「このたび、ありがたいことに、御上より、莊園を賜ることとなった」

「は……」

盛高は話の要点が掴めず当惑した。それと、私と何の関係があるのか？

しかし、次に尊長の口から出た言葉に、盛高は驚きのあまり声を

失った。

「その莊園が、実は……、近江の地、馬淵の里なのだ」  
そう言うと、尊長はまたにやりと笑った。

盛高の脳裏を様々な思いが交錯した。彼は言葉を失ったままだった。

「で、実は頼みと言うのは……」

「はい」

ようやく冷静さを取り戻した盛高は返事をする、居住まいを正した。

尊長は続けた。

「聞くところによると、かつて馬淵の里の莊園管理をしていたのが、貴殿の父君であつたらしい。つまり貴殿はそこで育つたということであらう？」

「まことにその通りでございます」

返答しながら、盛高は運命のいたずらを感じた。 何というめぐり合わせか！

「そこで、頼みたいのじゃ。馬淵の土地のことは誰よりもよく知っているであらう」

「はい、まことに」

「では、月に一度程度でよい。視察に赴いてくれんか。そうしてもらうとありがたい。実は現地で管理を任せるものはもう親族の中から選んでおる。しかし、土地勘のある貴殿の助言があれば、鬼に金棒ではあるまいか！ 噂に聞けば、何でも、良い土地らしいのう、馬淵の里は」

尊長の話を聞きながらも、懐かしさが込み上げてきて、盛高は思わず涙ぐみそうになるほどだったが、

「はい、まことに、良き所にございます」

と、返答すると、さらに続けて、

「この盛高、ご命令の通り、尊長様のお役に立てるのであれば、まことに幸せというもの。お勤めに精進させていただきます！」

と、力強く締めくくった。何であれ、故郷へ帰れる口実が出来て  
ともかくも嬉しかったのだ。

「うむ、結構。さがってよろしい」

「はは！」

退室して、自分の部屋に戻りながら、盛高は運命のいたずらを感じて  
いた。

ゆきを誘って早速故郷へ赴くとしよう！

しかし、この運命のいたずらが、この先、さらに悲しい廻り合  
わせをもたらす序曲に過ぎないことを、盛高はまだ知る由もなかった。

### 第三部第三章

祇園舎の裏手、犬神人の里に初めて入ったときは、さすが百戦錬磨の盛高でも緊張した。

この臭いは？

思わず手で鼻を摘んだ。ただ、物が腐った、とかいう単純な臭いではない。多くの屍を乗り越えて戦った勇者だけに、さすがに吐くようなことには至らなかったが、それでも少々気分が悪くなった。

何度か足を運ぶうちにそれも気にならなくなった。無論、目的は時子の墓参りである。

と言っても、立派な墓があるわけではない。それは一般庶民でも同じではあったが、犬神人には死んでも差別、隔離が待っている。即ち、庶民たちの葬祭場である、鳥部野、化野、紫野などへは葬れない、自分たちが隔離されたこの里の一角で茶毘に付し、粗末な墓を作るのである。

以前は適当に屍を埋葬していただけだったが、都の内外に屍が無数に放置されていた平安末期ごろから、遺骸を茶毘に付す葬送法が念仏層らによつて広められていたのである。ここ犬神人の里においても、住蓮、安楽らが出入りするようになってから、彼らがこの葬送の儀式を教えた。そして、名を善信へと改めた（元久二年）綽空がそれを受け継いで今に至っていたのである。

「時子、来たぞ」

今日は住蓮も一緒だった。すでに住蓮と盛高は和解を済ませて、時に連絡を取り合っていた。

「今日はいい報告が出来そうだな、盛高」

「うむ」

盛高は馬淵の里の視察に近々出かけるつもりであった、その報告に来たのである。



「それにしても、運命のめぐり合わせと言つべきか……」

住蓮のこの言葉に、盛高は大きく頷いた。

「まったく、こんな形で故郷に帰ることになるうとは」

「でも、良かったではないか。どんな形にしろ！」

「それは、分かっているが……」

と、そこまで言つと、盛高は口を噤んでしまった。

複雑な盛高の心境を思いやると、住蓮も黙っているしかなかった。そこへ、源太がやってきた。

「やあ、今日は北面の武士殿もおいでか」

「これは源太殿。いつも妹の墓の墓守を任せてまことに申し訳ない」  
盛高は頭を下げて礼をした。

「何を他人行儀な！」

今の源太は目が不自由ではあつたが、気配からすべてを感じ取つていた。

「礼など無用。本当におときさんのお陰で、わし等はどれだけ元気付けられたか……。いつも明るく、笑顔を絶やさず、……礼を言わねばならぬのはわしの方じゃ」

盛高は、源太にも、近々視察のため故郷へ立ち寄ることを告げた。今日は時子にその報告に来たのだと。

「そうか……」

源太も感慨深げになつて黙つてしまった。そして少し天を見上げていたが、暫くすると彼は再び口を開いた。

「どんまもんじゃろ、すぐには無理であろうが、……盛高殿、おときさんのお墓を故郷に作つてあげることは出来ぬものか？」

「墓を作る？」

「そうじゃ！」

突然の提案に盛高は驚いたが、言われてみれば、さもありなんではあつた。

「われら、この里に来たのは、やむを得ぬ事情によるもの。家族、友人から引き裂かれ、あるいは見捨てられ、ここへ連れられて来た

のじゃ。当初は皆、故郷の夢を狂おしいほど見る。毎晩、毎晩……。無論、帰ることなど出来ようはずもない。そして結局ここで死ぬ……」

「おときさんは、いつも笛を吹くと故郷の話をしてくれた。良いところらしいの……。いつも自慢をしておった。美しい山、湖、川、すべてにぎつしり思い出が詰まっていると……。是非とも、骨だけでも連れて帰ってやりなされ。普通ならそんなことすら叶わぬ我々の身分だが、貴殿なら出来るであろう。おときさんを、あれほど帰りがつていた故郷へ連れて帰ってやりなされ」

住蓮もこの源太の提案を聞いて大きく頷いた。

「そうだ、まことに源太さんの言う通り。本来なら私がその役目をするのが筋かもしれないが、この通り、勤めがありそんな余裕はない。ここは是非とも、貴殿がその役目果たされるが良からう」

盛高も頷いた。

「わかった、すぐには無理だろうが……。それでも、必ずそのようにいたすでしょう」

三人が墓標に手を合わせ終わったところに、ゆきが遅れてやってきた。

「すいません、遅れて……」

ゆきも持参した花を墓標に手向けた。四人は暫し、墓の前で佇んだ。長い沈黙の時が続いた。四人の思い、それぞれに時子を偲んでの供養となった。

盛高がその沈黙を破った。

「ゆきさん……」

と、ゆきに語りかけると、盛高は、続けて、時子の遺骨を故郷の地に持ち帰ってそこで埋葬しようと言う計画を、ゆきに伝えた。

「とても、素晴らしいことですわ！」

と、ゆきも賛同の意を表した。

「此度の馬淵の里の視察、ゆきさんにも来てもらいたかったが……」  
二位法印様からの依頼である。その視察に、軽々しく、恋人を同

伴させることは出来ない。盛高が口籠ったので住蓮が助け舟を出した。「また、いずれ、我ら三人で行こうではないか！」

すると、ゆきが快活に応じた。

「そうよ、その時は、源太さんも一緒に行こう！」

源太は自分の名前が出たので驚いたが、

「こんな、目の見えぬ老いばれがどうやって……」

と、言うのと、快活に大声で笑い始めた。

この里の外へ出られるのは、役目の時のみだ。どうして旅になど出れよう。そんな暗い話題になるのを避けようと、わざわざ大声で笑ったのだ。

しかし、ゆきは真顔になった。

「私は本気よ。源太さん！」

場が緊張した。ゆきは構わず話し続けた。

「だって、おかしいわ。どうして、他の皆のように自由にどこへでも行けないの？ どうして、皆は源太さんたちを、ここへ閉じ込めるの？ どうして……どうして？……源太さんだって故郷に帰りたいはずだわ！」

と、ここまで言うと、ゆきはわっと泣き崩れた。そしてさらに叫び続けた。

「こんなことって、絶対におかしいわ！ おかしいわ！」

男三人はただ黙っているしかなかった。ゆきの思いに誰が反論できようか？

盛高がゆきの手を取って慰めた。源太も目から涙が溢れてきた。

「ありがとう、ゆきさん、その思いやり、本当にありがとう」

故郷、盛高は自分だけが不幸な故郷の思い出に、心を痛めているのだと長らく思っていた。

しかし、同じように不幸な思い出に、心を痛めながら苦悶の日々を送っている人々がここにいます。かつては親しかった故郷の人々、そんな彼らから忌み嫌われ、故郷を追い出され、そして、この隔離された里で望郷の念に日々涙する毎日。

時子の遺骨を故郷へ持ち帰ることは、そんな彼らのためにも成し遂げねば！これは自分の使命だ！ 盛高はそんな決意を心に秘めつつ、犬神人の里を後にした。

### 第三部第四章

「これにて、面倒な興福寺の連中も、暫くは我らに頭が上がるまい。まあ、恩を売ってやったというところかな。そもそも坊主が政に口を挟むから、いらぬ疑いをかけられることになるのだ。奴らは、寺でお経だけ唱えていればいいのだ、のう、盛高！」

良経死去の際に実施された、居宅検分のおり、三浦秀能が盛高に漏らしたこの言葉どおり、興福寺の法然教団糾弾の動きはやや影を潜めた。

興福寺の陰謀で九条殿が暗殺されたとの噂の広がり、止むところを知らなかったからである。興福寺としては当面怒りの矛先を収めるしかなかった。

その九条良経の死去から一月あまり、四月二十七日には元号が元久（三年）から建永（元年）に改められた。

そして五月になって……。

ここ後鳥羽院の御所では、尊長、長厳、秀能の三人が秘密裏に会谈を持っていた。

「長厳様、予測していた通りの成り行きとはなりましたな」

秀能の発言に長厳は満足そうに大きく頷いた。

「うむ、これにて、暫くは興福寺はおとなしくしておろうというものの。それにしても、まこと、我らの思惑通りの動きとはなった。満足じゃ！」

長厳はそう言う、続いて傍らの尊長に問いかけた。

「ところで、あの者の始末はついたのであろうな？」

尊長はにやりと笑うと答えた。

「抜かりはござらん」

長厳は、それを聞くと安心したのか大きく溜息をついた。

「では、真相を知る者は我らのみ、ということじゃな」

「左様に……」

秀能が割って入った。

「もはや死人に口無し、でございます」

長蔵が続けた。

「わしの配下の者にも吹き矢を良くする修験者は多いが、あとあのことを考えれば面倒……。此度はまことに身近に、かくも上手く利用できる者がいたとは、よき巡り合わせであつた！」

尊長が答えた。

「まことに」

長蔵は、ここで話題を変えた。

「興福寺は何とかこれで抑えることが出来たとして、叡山はどうだ。叡山の動向は貴殿が詳しかろう。かつての住処なのだから」

尊長はそう言われると、頭を掻いた。

「いやはや、いくらかつての住処であるとはいえ、しかし、山を離れてかなりの年月、今の山の詳しいことは分かりかねるが……。ただ、慈円様、座主のおり、政への介入を厳しく戒められた結果、昨今の叡山の衆徒にはかつて平家と対峙したような力はもはやないようには思われますな」

長蔵は再び満足げに大きく頷いた。そしてこう言い放った。

「残るは、あの狂信的念仏者共のみ、というわけか！」

厳しい表情であつた。尊長も大きく頷いて同意を示した。

秀能が、ここで口を挟んだ。

「しかし九条殿という大きい後盾を失った連中も、もはや恐れるには……」

と、そこまで言うと、長蔵がそれを遮った。

「いや、侮るでない！連中の影響力は広まりこそすれ、衰えることはない！」

長蔵の強い口調に、場は静まり返った。秀能は強く叱責されたため、ただ黙って俯いていた。尊長は何か言いたげな表情であつたが、彼も長蔵の気迫に押されて、ただ黙っているしかなかった。

長蔵が言葉を続けた。

「特に厄介なのは、伊賀局様じゃ……」

伊賀局、と聞いて、尊長と秀能の表情は強張った。

「まことに……」

と、秀能が相槌を打った。

伊賀局が熱心に念仏信仰に没頭していることは、院の御所ではもはや周知の事実であつた。

「御上は、あの通り、天衣無縫の性格。しかし悪く言えば、天真爛漫、周囲の影響を受けやすいお方でもある。最近では、局様が熱心に説く念仏信仰によく耳を傾けておられると聞く。このままでは、下手をすると、我らも御上の下から遠ざけられぬ、とも限らぬ」

長蔵の発言に尊長が補足した。

「法然門下の者達は政には全く関心を持つておらん。その点は南都北嶺の輩とは違い安心できる。問題なのは、彼らが祈祷、呪法を頼りたくないことだ。ただ阿弥陀仏のみを頼りしようとする。そんな信仰に御上が関心を持たれると、まことに事態としては厄介なこととなる。我らの居場所が無くなってしまう」

秀能も後に続いた。

「それに、阿弥陀信仰は東国武者どもの間にすでにかなりの勢いで広まっております。御上がもし、局様の言いなりに、念仏信仰を受け入れるなどということが万一でもあれば、鎌倉幕府の調伏は沙汰止みとなりましょう。それどころか和解すらしかねない……。そうなれば、我ら西面の武士も用なし、ということになりましょうな」

長蔵が語気を強めて言った。

「受け入れることはあるまい、自分には無限、無量の力があると信じておられるお方だ。そんなお方が何かに縋る信仰など受け入れまい。しかし、あれほど愛しておられた局様の信心にある程度同情の心は持たれんとも限らん。それだけでも、東国武者との関係は微妙となる。確かに、東国武者内での念仏信仰の広がり是我らの想像を超えるものがあるからな……」

長蔵はここで二・三回大きく息をついた。そしてさらに言葉を続けた。

「我らが目指す鎌倉幕府の調伏、摂関政治の排除はすべて天皇親政実現のためである。御上こそがそれを求められておられたのだ。そして、そのために、御上は我らを側近に引き立て、最勝四天王院という立派な祈祷所まで作って下さった。そして、東国武者の思ひ上がりもはやここまで、という所まで頑張ってきたのではないか。それを、局様といえど、我らの今までの努力を水の泡にするような振る舞いは止めていただかねばならぬ、いや阻止せねばならぬ！」  
場が再び静まり返った。

しかし、一体どうやって？

かつてほどの猛烈な男女の愛情関係は薄れたとはいえ、そもそも、それが、伊賀局が念仏信仰に走った理由でもあったが、後鳥羽院と伊賀局との関係は依然、強い絆で結ばれていた。伊賀局の一方的愛情ではあったかもしれないが、後鳥羽院もある程度はそれに応えていたのである。

そのお局様を院からどうすれば遠ざけられるのか？

尊長が口を開いた。

「考えが無いわけでもない……」

長蔵と秀能が尊長の顔に見入った。

「聞かせて欲しい」

長蔵の催促に尊長は大きく頷いた。そして重々しく口を開いた。

「その考えと言うのは、ほかでもない……」



### 第三部第五章

建永元年九月、九条良経の供養法会が九条家の別邸で営まれることとなった。

法然は七月にはこの別邸の近くの、小松御堂 かつての平重盛の屋敷跡である に居を移していた。九条兼実の招きに応じたのである。

3月に良経が死去した後、政治的には大きい後ろ盾を失った法然一門であったが、一方の興福寺も、良経死去との関わりを噂されて表立った抗議運動を控えざるを得なかった。こうして両者の間には膠着状態が続いていた、そんな中での供養法会であった。

その法会に向かう人々の群れの中に、慈円の姿があった。自分の甥の法要であるから、当然と言えば当然であるが、実はもう一つの目的があった。 法然の一番弟子、信空との会談である。

「安楽、聞いたか。供養が終わったあとに、慈円様が、信空様と会談をもたれるそうだ」

同じく法会に参加するため足を運んでいた安楽と住蓮は、噂を聞いて、複雑な心境であった。

かつて、慈円と法然の間で持たれた会談は決裂した。慈円の目論んだ山の念仏への、専修念仏の吸収統合計画は一度頓挫した。

「また、同じことの目論見であろうか？」

住蓮が答えた。

「噂であるが……。此度は信空様が、慈円様に呼びかけたらしい」「何！」

安楽は驚いた。なぜ、我らの側からそのような呼びかけをする必要があったのか、彼には理解できなかった。興福寺側の糾弾の動きもかつてほど活発ではない。それなのに、我らが譲歩する必要がある時点であるのか？安楽には理解できなかった。

安楽の疑問に答えんと、住蓮は話を続けた。

「信空様は、専修念仏の停止を受け入れることで、どうやら、ことの決着を図るお考えであるらしい」

「何！」

それでは、自殺行為ではないか！ 安樂は思った。自分達が、全勢力を傾けて六時礼賛興行を執り行っているのも、専修念仏を広めんがためである。

「しかし、師がそれを受け入れるはずがなかるう。すでに先の慈円様との会談で、山の念仏との和解話は決別しているはずではないか！」

安樂が興奮するのを宥めるように、住蓮は穏やかに話を続けた。

「安樂、しかし、考えてもみよ。あの時から、我らを取り巻く情勢は明らかに悪化しておる。九条殿死去の報を聞いた折は、もはやこれまでか、と皆落胆したではないか。幸い、興福寺による陰謀の噂が出て、興福寺側の勢いが削がれたから、今まで事なきに至っていると言っても過言ではあるまい。違うか？」

「確かに、それはそうだが……」

安樂は、血気盛んで、ともすると勇み足がちになる自分と違って、この友の冷静さに学ばされることが多い。

今回の事態もそれなりに止むを得ないことなのだろうか？

「先日、院の御所で持たれた宗論の話は聞いておるう」

住蓮に問われて、安樂は答えた。

「うむ、善信と善綽、それに性願らが、参加したあの論議のことであるな。まことにあれは冷や汗ものだったという話だが……」

興福寺の圧力に反発する善信ら、法然門下の若手の急進派が、ある日、院の御所に興福寺の使者が訪れると聞き、彼らを途中で阻止せんと、院の御所へ赴いたのであった。丁度、御所の手前で出くわした双方が、激しい言いあいを繰り返していたところ、そこへ御所内より法印尊長が現れ、彼らを御所へ招き入れたのであった。

彼らは、尊長よりこう告げられた。

「かねてより双方の主張をこの耳で直接聞きたいと思っていた。今日は絶好の機会といえよう。是非、私の前で、忌憚無く各々、自らの主張を述べるが良い。自力聖道門と他力浄土門、果たしてどちらが正しいのかこの耳でしかと確かめたい」

善信らにしてみれば、意外な展開となった。ともすれば乞食坊主と揶揄されることの多い境遇であるのに、御所の中へ招きいれらるとは！

これは我ら、師の教えの正しさを御上に訴える絶好の機会！そう、考えたのも無理はない。若い三人は意気揚々と御所内へと入っていった。招き入れられるままに……。

結果は善信が興福寺の僧の言い分を一方的に論破する展開となった。

「善信と申したか、貴殿の弁舌まことに見事であつた。またこのような場を設けるとしよう。今日はこれまで！」

尊長がそう締めくくって、この論戦はとりあえず幕を閉じた。善信らは意気揚々と帰路に着いたが、これが、この怪僧の陰謀の一端であると気付くには彼らは若すぎたと言えようか……。

「あの論戦はそもそも御上自らが公に主催されたものではない。法印殿が気まぐれで催したものと聞いておる。それゆえ、興福寺を熱弁で打ち負かしたところで、御上が専修念仏を認めたことになるわけではないのだから何の意味も無いのだが……」

「まことに……」

二人は溜息をついた。沈黙が続いた。

「いずれにせよ信空様は師を説得出来まい！」

安樂が沈黙を破って住蓮に言つた。

「そうとも、出来るはずがないし、師が受け入れるはずもない！」

住蓮も力強く同意すると、さらに言葉を続けた。

「我らが依つて立つところは民の思いではないか！そして民の思いはただ専修念仏にある！真に教団の存続を願うのであれば、中途半

端な妥協をしてはいけない。それは自殺行為だ！」

安楽も領いた、とはいふものの……。

「しかし厳しい試練の時だな……」

順風満帆な時は過ぎ去っていた。二人にはそのこともよく分かっていた。

「だからこそ乗り越えなければ！民の上にしっかりと立つてな！」  
二人は手を握りあつた。

この絶望が支配する時代を生きる、民の思いを考えればどのような試練も乗り越えられようというもの！

そんな決意が二人を奮い立たせた。二人は力強い足取りで、残暑の厳しい中、都大路を進んでいった。

### 第三部第六章

故郷、馬淵の里の視察を終えて、盛高は京の都への帰途に付いていた。逢坂の関を越えて、さらに蹴上まで来ると、眼下には都の町が広がっていた。

しかし、彼の思いは、京の都でなく、故郷馬淵の里に向いていた。

故郷は昔の姿そのままだった。

視察の日々、懐かしさに時を忘れた。前回の帰郷の折は追っ手に追われていたこともあり、さらに帰郷するや佐々木館の黒焦げの姿を見て、冷静さを失ってしまった。

そして、その後の更なる逃亡生活、そして……。

自らの数奇な運命を噛み締めながら、今回は、故郷の山を、川を、湖を、馬で駆け巡った。今回は心に余裕があった。幼少時の思い出を手繰りながら、あちこちと巡り歩いた。

時子の墓は是非ともここに作ろう！

時子の墓を作る場所も目星をつけた。

帰郷の目的はほぼ達した。

尊長の所領地となったため、佐々木家復興がたとえ成ったところで、自分がここを直接治めることはもはやない。

しかし、いずれ、ここの管理を任されることもあるかもしれない。

「いや！自分から申し入れてみよう！」

実は、盛高は、今回帰京して、尊長に視察報告をする際には、出来れば自分を、この所領地の管理役として、現地で働かさせて欲しいということを申し入れるつもりでいた。

ゆきと、ただ平凡な生活を送りたかったのである。      今回、故郷の美しさに触れて、ますますその思いは強くなった。

そのためにはいよいよゆきと祝言も挙げなければ

かねてより考えていたことを実行に移す、良い機会ではないか！

自分にそう言い聞かせると、旅の疲れも忘れて、少し元気が出てきた。彼は、従者の清兵に声をかけた。

「清兵、いよいよ京の都だな！」

「はい」

「どうだ、そちも我が故郷、馬淵の里が気に入ったか？」

「はい……」

「そちは、何を聞いてもはい、はい、とばかり。まこと手応えのない奴ではあるな！ははは！」

清兵をそうしてからかうと、盛高は馬の歩みを早めた。一刻も早くゆきと会いたくなつたのである。

暫く主従は無言のままであつたが、突然清兵が口を開いた。

「盛高様、実は……」

そこまで言うのと、しかし、彼は躊躇したのか口を摘むんでしまったので、盛高は聞き返した。

「何だ、どうした？」

盛高に促されて、清兵は、吹っ切れたようだ。彼は言葉を続けた。

「実は気になる話を耳にしたのです」

「気になる話……」

「はい」

清兵の語るところによれば……。

馬淵の里で、ある村の者から、それはたまたま耳にしたらしい。

「盛高様が視察の息抜きにと、お一人で三上山に行かれた折でございます。残された私は、里にあります首洗い池のあたりを、一人、そぞろ歩いておりました」

「ふむ……」

首洗い池 物騒な名前だが、源平争乱の折、多くの落人達が捕えられ、その池で首を刎ねられたので、そんな名前で呼ばれるようになったのだという。

「その池なら知っているが、それがどうしたのだ？」

盛高の小さい頃は、当然そんな物騒な名前は無かった。いつも水

遊びをしていた近くの池である。あの頃のことを懐かしく思い出される……。そんな美しい田舎の風景も、この戦乱のもたらす血生臭い影響から免れなかったというわけである。盛高は、首洗い池、という名前で呼ばれていると、初めて知った時、何とも複雑な思いに駆られたことを思い出した。

清兵は話を続けた。

「そこで、たまたま一人の老婆と出会ったのですが、その老婆がとても話し好きで、私にいろいろと話しかけてくるのです」

そこまで、話すと清兵は大きく溜息をついた。これ以上話を続けていいものかどうか躊躇いがあるようだった。

「清兵、どうしたのだ？その老婆がどうかしたのか？」

盛高は清兵に話を続けるように促したので、彼はさらに話し続けた。

「その老婆が話すには……」

桜の散る頃であつたと言う。ある日、都から幾人もの武者達が、ある一人の罪人を連れてきたと言う。きらびやかな装束に都言葉の武者達は、その日のうちに、この池の辺でその者の首を刎ねたのだと……。

「そんなことがあつたのか……」

盛高は、自分の故郷で今もそんな罪人の処刑が行われていることを知って驚いた。

「しかし……」

と、盛高が言葉を続けようとするのを、清兵が遮った。清兵は、自分の抱いた疑問を、主人も抱いていることをすぐに悟ったのである。

「盛高様、さようでございます。おかしな話ではありませぬか？」

どうして、わざわざ都から、はるばるあの地まで罪人を連れて行かねばならなかったのでしょうか？」

清兵の問いに、盛高は黙って頷くだけだった。

まったくその通りである。何故わざわざ？

盛高にも合点のいかない話であった。

「武者達のいでたちもまことに立派であったとのこと。都から来たということも間違いは無いとのことでありました。一体何事があったのでしょうか」

清兵のさらなる問いかけに、盛高はその重い口を開いた。

「清兵、このこと、都に戻っても口外するでないぞ！」

「はっ？」

盛高の厳しい口調に清兵は戸惑いを見せた。盛高はそんな清兵に事の重大さを認識させるべく、さらに言葉を続けた。

「よいか、今の都に源氏も平氏もおらん。その都から武者姿の者がやってきたと言うことは、それは、どういふことかわかるであろう！」

清兵の顔が曇った。

確かに。彼らは北面の武士か西面の武士に違いない！

盛高は、事の重大さに気付いた清兵に、さらに言い聞かせるように言葉を続けた。

「よいな、普通なら、都の治安に関係することならば、処刑はすべて鴨の河原で行われようもの。それをわざわざあの地まで連れて行つてということ、それなりの理由があるということ。このことにはこれ以上関わらぬのが、身のためというものだ！」

「はい！」

「よいな、この話はなかったことにしろ。聞かなかったことに！」

「はい！」

清兵に強く口止めを約束させると、盛高は清兵の身の安全については、ひとまず安心したが、心の中では、さらに不安が大きくなっていくのを感じていた。

桜の散る頃と言えば、馬淵の里は、すでに尊長様の所領地となっていたはず。そこへ都から武者が現れたのであれば、それは北面の武士ではありえない。尊長様の許可を頂いたに違いないのだから、それは、我らと同じ院の御所に仕える西面の武士に違いない！



盛高は防鴨河師副長官ではあるが、ほとんど名目ばかりである。副長官ではあっても、院の御所の西面の武士がすべて彼の支配化にあるわけではない。そもそも、西面の武士集団全体に指揮命令系統がはっきりしない、というより、はっきりさせなくしている、誰かが意図的に　すべて、尊長、長蔵、秀能の思惑によるものであるが、彼らの直属で働く武士の集団がいくつか作られているのが現状であった。

盛高は秀能の下で動いているわけだが、秀能の直属で、盛高の知らないところで多くの武士が動かされていることを知っている。

自分は、その武術の能力を買われて副長官に抜擢されたが、気がつく、最近は何しろ疎まれているようにも感じる。今回の馬淵の里の視察にしても、都の治安から自分を一步退かせようとするための策略かもしれない。念仏者であるゆきとの交際が深まるにつれ、彼はそのような感触を大きくしていた。尊長、長蔵らが御所内に広がる専修念仏信仰の動きを快く思っていないのは明らかであったからである。

そろそろ、役職を辞するときだろうか？しかし、そうすれば、馬淵の里に帰れる機会を逃してしまうことにはなるまいか？

揺れる心に不安は高まった。すると目の前に広がる都の景色に一瞬暗雲が立ち込めたように、盛高の目には映った。

職業軍人としての直感が働いた。

何かよくないことが都に……。

と、そこまで考えると、盛高は頭をぶるぶると振るわせた。

考えるまい！

そう、今は、ゆきとの幸せを考えるのみ！

そう、心に言い聞かせると、再び、彼は都への駒足を速めた。

一方、後につく清兵は清兵で、自分に言い聞かせていた。

やはり、盛高様には言うまい。老婆から聞いた罪人の名前だけは……。

老婆が首洗い池の辺で、清兵に語った内容は次の通りである。

「確か、立派な身なりの武者の一人が、その罪人の者、六郎と呼んでいたような……。まあ、はつきりとせんかったがのう、何でも吹き矢で誰かを殺めたと言ってたようじゃが……」

### 第三部第七章

建永元年十月末、ここ院の御所では、尊長、長蔵、秀能の三者が秘密の会合を持っていた。

「貴殿が言っていた、『良い考え』とやらだが、その後の展開はどうなっているのか？是非とも聞かせて欲しいものだが……」

長蔵が尊長に尋ねた。この3者は誰が指揮官であるというのではない。それぞれ、二位法印、那智検校、防鴨河司長官、と役職名があるが、いずれも、後鳥羽上皇が勝手に与えた役職名である。朝廷の昔からの秩序を無視し、自由奔放に自分の生き様、考えを天真爛漫に押し通そうとする後鳥羽上皇らしい人事が作り出した、怪しげな”院の側近”達である。

尊長は答えた。

「まあ、もう少し待ってほしい。うまく行けば、あの念仏信者の一団を根こそぎ退治できようというもの。しかし、いま少し、最後の根回しが必要だ。ことは慎重に運ばねば……。のう秀能」

呼びかけられた秀能がこれに応じた。

「あの善綽なる者、今や、我らの思うが儘であります。いつでも計画は実行に移せるかとは思いますが……」

これには、直接答えることはなく、尊長はただ頷いて同意を示した。

長蔵は、

「左様か……」

と、言うところ、そのまま押し黙っていたが、おもむろに口を開くと「まあ、謀は貴殿らの得意とするところ。私は黙って貴殿らのお手並みを拝見するといったそう」

と、語った。

すると、秀能が思い出すように話し始めた。

「それにしても、傑作でありましたな。あれは今年の春、桜の花の

散る頃、この御所で、興福寺の連中に食って掛かる、あの青二才の念仏僧たちの姿……。我らがまともに話を聞いていると信じ、一心に自説を主張し……。まったく滑稽というか、何と言うか……」

この発言を長蔵が遮った。

「しかし、見くびるでない！特にあの者、名を何と言ったか、確か善信と申したか、あの男は要注意じゃ。興福寺の連中もやり込められて舌を巻いていたではないか」

尊長もこれに同意するべく、大きく頷いた。

「確かにあの者には気をつけねばなるまい。六時礼賛興行の連中と同様、いや、あるいはそれ以上の処罰を与えねばなるまいて」

「うむ……」

長蔵もこれに同意して頷いた。彼は続いて尊長、秀能の方を見やると、

「ともかくも、最後の詰めを急ぐことじゃな。一刻も早く、あの狂信的念仏集団の息の根を止めねばなるまい」

と、告げた。尊長に代わって、秀能がこれに答えた。

「長蔵様、お任せください……」

秀能はこう返事すると、次いで、思い出したようにこう付け加えた。

「今後は、副長官の盛高は、この謀からは遠ざけようと思います」

「ほお、それはいかがですか？」

長蔵の問いに、今度は尊長が代わってこれに答えた。

「あの者、念仏者と交わりがあることが判明しましたがゆえに、のこと……」

「何とあの者までもか……」

長蔵の驚いた表情を見て、尊長がこう付け加えた。

「長蔵殿、今や、念仏者の勢いたるや、この御所の中にまで相当深く入り込んで来ておりまする」

長蔵は溜息をつくと、

「そもそも、お局様が……」

と、言いかけたが、尊長がこの長蔵の発言を遮った。

「ご心配無用、今回の謀にはお局様のご協力も頂くことになりました  
ようから……」

と、言つと、尊長は、秀能と顔を合わせて、にやりと笑った。

長蔵はこの発言を聞いて、あきれてしまった。

悪知恵ではこの者にはかなわない。

「貴殿ら、何やら、相当、悪い計略を廻らしているようじゃない」

と、言つと長蔵は思わず、からからと大声をあげて笑ってしまった。  
た。

尊長、秀能もつられて声を立てて笑った。

秋の夜更け、院の御所の一室で、かくして、この三人の怪しげな  
会合は遅くまで続くのであった。

### 第三部第八章

九条良経の供養法会の後持たれた、慈円と信空の会合は短時間で終わった。専修念仏の停止、これしか、今の危機を乗り切る方法は無。両者の思惑は一致していた。

しかし……。

「師は、信空様の助言を退けられたようだ」

「うむ、止むを得まい……」

弟子達は、以前に慈円と法然との直接対話が決裂していたことを既に経験しているので、今回はこの成り行きを冷静に受け止めていた。

もはや、誰にも止められない歴史のうねり……。

しかし、それは一方で、住蓮がかつて安楽に言ったように、民衆が望むべくして望んだ当然の歴史の帰結でもあった。

一人、二人の高僧の話し合いで歴史は作られない。歴史を作るのは民衆である。貧困と病、圧政に苦しむ民衆の声なき声こそが、歴史を導いていくのだ。

そして時は十二月……。

ここ、鹿ヶ谷のとある精舎では、いつものように六時礼賛興行が行われていた。

しかし、安楽、住蓮はいつもと違った緊張した面持ちであった。

無理は無。ついに、今日、伊賀局様がやって来られることになった。

当然お忍びではある。後鳥羽院が熊野詣に旅立ったのである。その留守を狙って、かねてより所望されていた六時礼賛興行への参加を果たされたのだ。

お忍びで来られるので、いつ来るのか、いつ帰られるのかまった

く検討がつかない。

「ともかく、いつものようにお勤めするのみだな」

ゆきから、今日、と聞かされても、二人は動揺することも無く興行に取り掛かった。しかし、やはり緊張はする。いつもと違う固い表情の二人ではあったが、ゆき以外には誰も知らせていないので、周囲の者もそれとは気付かなかった。

それに、普段からここには公家の奥方など、高貴な身分の女性がよくお忍びで訪れていた。だから、院の御所からお局様が来られるとしても、誰もそれには気付かなかったであろう。

そして、その日の興行も、いつものように恙無く、ともかくも、終わった。いらぬ心理的重圧を避けるため、この人がそうです、という報告は無用、と、ゆきにあらかじめ伝えておいたので、安樂、住蓮も、誰が伊賀局であったか結局のところ分からなかった。

「安樂」

「ん、何だ住蓮」

勤めが終わって、二人は短い休息を取っていた。

「お局様は満足して帰られたかな？」

「うむ……」

鹿ヶ谷の十二月は寒い。二人はぶるぶると震えながら、庭を歩いていた。

「我々は誰をも拒まぬ、その理屈を通しただけ。ただ、そうは言っても……」

と、安樂はそこまで言うと言葉を濁した。

院のお局様がお忍びで来られたということ、もし院の耳に入ったら、院はどのような反応を示されるだろうか？

まったく予想出来ないだけに不安がないと言えば嘘になったろう。

「安樂、心配無用、心配無用だ！心配は阿弥陀様がしてくださる。

そうではないか？我らは我らのお勤めをまた、今から精一杯果たし、明日に希望を持てぬ多くの民の声を、阿弥陀様にお届けせねばなら

ぬ、そうであろう!」

「確かに……」

二人はがっちりと握手をした。力強い、希望に満ちた握手を……。

しかし、二人は知らなかった。

この同じ頃、院の御所で、二位法印尊長が、してやったりという表情でほくそえんでいたのを……。



### 第三部第九章

十二月、伊賀局のお忍びでの六時礼賛興行参加が実行されるや、すぐに尊長らの謀はついに決行される。

慈円の影響力を利用し、比叡山を黙らせ、また、九条良経の死をきっかけに興福寺を黙らせた。こうして、代々、朝廷に横槍を入れたきた南都北嶺を政治の舞台から遠ざけた。

最後の目標は、上皇と敵対する鎌倉武士団、その彼らに着実に浸透しつつあった、第三の勢力、専修念仏教団であった。彼らには、弾圧という強硬手段で、その影響力を排除にかかったのである……。

十二月十五日、藤原定家の明月記に曰く、

「天晴れ。雪飛ぶ。院に参ず。留守殊に沙汰ある由、人々称す」

「専修念仏の停止が院宣として出されるとのことだ！」

「いや、念仏すべてが禁止されるわけではないらしい。高声念仏の禁止であろう」

「ともかくも、もはや、口に出して、南無阿弥陀仏とは言えないのか！」

都人たちの驚きは相当な者だった。

都人たちから見れば、南都北嶺の荒くれ僧兵と違い、法然の専修念仏教団はまことに民衆に友好的で、病に、飢えに苦しむ人々に無償で薬を与え、食事を与えてくれる、とても善良な僧の集団であった。

「そもそも、何故、そのような沙汰が御上から突然出されたのだ？」

「それが、何でも、六時礼賛で女犯が行われたのが、その理由だそうだ」

「それも、ただの、女犯ではない、何と驚くべき無かれ！相手は伊賀局様というからびっくりではないか！」

「そんなことがあるはずはあるまい」

「いや、事実らしい。大胆なことをするものじゃ。所詮はただの色坊主であつたということか」

そんな都人たちの前を、安樂、住蓮、善綽、性願の四人は縄をかけられ、都大路を晒されながら、引つ立てられていった。

向かうは京極の獄舎……。

善綽、性願は安樂、住蓮を補佐するため、伊賀局が六時礼賛興行に参加した折、鹿ヶ谷の精舎にいた。

その精舎で、こともあるうに、伊賀局とお供の女官達が、この四人から女犯にあつたというのである。

そこで、この四人を引つ立てよ、という命令が出されたのである。

「そんな馬鹿な！」

京極の獄舎で奉仕活動をしていた応水の耳にも、すぐにこの情報は飛び込んだが、彼は知らせを聞いて、一笑に付した。安樂も住蓮もそんなことをするはずが無い、そのことはよく分かつていた。

「しかし、あとの二人は？」

法然門下にもいろんな弟子がいることは、ゆきから聞いて知つてゐる。中には弟子と称して、よからぬことを企てる者もいるとか……。とすれば、女犯もありえない話ではない。

「しかし、かりそめにも院の女御様を……」

全く納得が行かなかつた。

いずれにしても何かの間違いであつて欲しい！  
ただそう祈るばかりであつた。

知らせは、法然の下にも届いた。

「そうか……」

ただ、一言、そう呟くと、彼はそのまま押し黙つた。周囲を取り巻く門弟達もただ溜息をつくばかりであつた。

こうして、法然教団に、ついに「死」の宣告が下された。  
この日、京の都には一晩中しんと雪が降り積もった。

こ

### 第三部第十章

ゆきは知らせを聞いて、一目散に応水のもとへ走った。京極の獄舎と聞いて、彼なら何かの力になってくれるかもしれない、と思ったからである。

「応水様！」

涙ですでに目を真つ赤にしていたゆきは、応水の顔を見ると、またもや、「わっ！」と泣き出し、彼に縋りついた。

「ゆきさん、辛かろう……」

応水も慰める言葉が無かった。悲嘆にくれるゆきを抱きしめながら、しかし一方で、彼は、この事態を、何かの間違い、というよりは、もつと陰謀めいたものではないのか？、と何かしら感じ取っていた。

漸くゆきが落ち着いたのを見ると、彼はゆきに問うた。

「一体何があったのか、詳しく話してほしい」

「はい」

ゆきは、自分と、伊賀局の関係、そして今に至るまでの経緯を簡潔に彼に説明した。

「そうか……」

偶然のなせる業か？しかし、善意で動いたことが、友人を結果的に苦しめている。

「私が悪いのです。いらぬ頼みごとをしたばかりに！」

ゆきはまた泣き出した。

応水は泣きじゃくるゆきを慰めた。

「阿弥陀様の本願に縋ろうと、そちを頼りに訪ねられたのであろう。であれば、ゆきさんは何も悪いことをしておらん。自分を責めてはいかん」

「それはそうですが……」

応水は自分に言い聞かせるように言った。

「さて、どう対策を立てたのか……」

二人がこうして頭を抱えているところに親鸞（この年、善信より改名を済ます）がやってきた。息を切らしている。

「応水様、それにゆきさんも！」

「おお、善信……。いや、今は親鸞というのであったな。本当にたいへんなことになったのう」

「はい……。私は早速京極の獄舎に行こうかと思ってやってきました。抗議をせねば！」

実力で抗議行動に出ようという彼を、応水は嗜めた。

「今はいかん！此度は院宣として専修念仏の停止が近々申し渡されとの由……。そんな折に、押しかければ、そちも獄舎に押し込められようものを！」

親鸞は、しかし、応水の言葉に耳を傾けなかった。

「反対されるとは思っていました。しかし、彼らはあの獄舎で厳しい取調べを受けているのでしよう！確かに、前回の安楽様取り調べの折は、そう心配はしませんでした。九条様が、朝廷の体面を保つべく、その指示で、検非違使を動かしてされましたことゆえ……。しかし、此度は事情が違います。上皇様直属の西面の武士達が、鹿力谷の精舎を急襲して四人を捕らえたとの由……。事態は深刻です。まして女犯などとは！　全くのでっちあげに他なりませぬ！」

親鸞の真摯な訴えに、応水もゆきも何の反論も出来なかった。

親鸞は涙ながらに、最後にこう訴えた。

「彼らへの責めは苛酷でありましょう。我らが傍にいてあげねば！一人でも多く！友として、また同じ念仏者として！」

こう話し終えると、親鸞は二人に頭を下げた。そして表へ出ようとした。たとえ自分が逮捕されても構わないという強烈な意思が表情にありありと出ていた。

「待て！」

応水が、彼を呼び止めた。

呼び止められて、親鸞は足を止め

た。その後姿を見ると、肩がわなわなと震えている。

応水は落ち着いた口調で続けて言った。

「おぬし一人を行かせるわけにはいかん。わしも行く！」  
すると、ゆきも共鳴した。

「私もよ！死ぬんなら皆一緒。私一人を残さないで！」

そう言うつと、ゆきは立ち上がって、後ろから親鸞に抱きついた。  
そしてわつと泣き出した。

親鸞も、目に涙をためながら、

「ありがとう、ありがとう……」

と、言いつつ、ゆきの肩を叩きながら彼女を慰めた。

三人は外へ出た。 四人が閉じ込められた獄舎までは歩いてすぐである。

「覚悟は出来ているか？」

応水の問いに、残りの二人は黙って頷いた。

「では、参ろう」

足元を襲う、師走の京の底冷えに体を震わせながらも、悲壮な覚悟の三人は、互いを見つめつつ、しっかりと足取りで、仲間のいる獄舎へと歩を進めた。

### 第三部第十一章

安楽、住蓮らの逮捕はすぐさま、犬神人の里にも伝えられた。親鸞によつてである。

親鸞は、六時礼賛の席に院の御所の女御が幾人が参加したこと、その中には伊賀局様もいたこと、そして、安楽、住蓮たちは彼女らへの女犯の罪に問われて捕らえられた、ということ、そしてさらには、ついに専修念仏が禁止されそうだということなどを厳しい表情で彼らに伝えた。獄舎まで出かけ、抗議行動を起こしたが実力で追い払われてしまったことも、である。

「なんとということだ！」

「こんなことがあつてもいいものか！」

安楽、住蓮を慕う者たちが悲嘆にくれたことは言うまでもない。泣き崩れるものもいた。そんな彼らを見て、親鸞は、彼ら二人がここに撒いた種の大きさを改めて思い知らされた。

人間以下の扱いを受けていた彼らに、信仰を通じてこんなにも生きる希望を与え続けていたのだ……。

「我らが助けに行こう！」

そんなことを叫ぶ者もいた。

「そうだ、そうだ！」

「今から京極の獄舎に押しかけようぞ！」

「おーっ！」

親鸞は、こうして逸る彼らに、冷静を保つようと語りかけた。彼らの釈放運動は我らが既に行っていると、彼らに丁寧に説明した。

「また、報告する。だから、早まった行動に出ないように！」

くれぐれも、と念を押して、親鸞は彼らを解散させた。

親鸞は広場に一人残された。疲れがどつと出てくるのを感じた。彼らの逮捕以後殆ど寝ていなかったのであるから無理も無かった。しかし彼にはまだもう一つ確認すべき仕事が残っていた……。

「源太さんの姿が見えない……」

親鸞は、集まった村人たちの中に彼の姿が見えないのに気がついていた。どんなに体の不調を訴える日でも、親鸞の説法に姿を見せぬ日は今までに無かったのである。

そこで、村人達に一通りの報告を終えたあと、親鸞は源太の小屋を訪ねた。案の定、彼はそこにいた。

「源太さん……」

親鸞は言葉をつまらせた。彼は犬神人の白装束に着替えを済ませて、そこに座っていた。彼を見た親鸞は、その後姿から発せられる並々ならぬ気配にただただ圧倒されて、その場に立ち尽くした。

「おう、善信殿、いや、今は親鸞殿であつたな、よう来られた」

親鸞に気付いた彼は声をかけた。

「源太さん、これは一体、どういう……、まさか、今からお勤めがあるわけでもなからうに……」

真意を聞かれた源太は、ゆるりと立ち上がると、振り返った。そして、しっかりした口調でこう答えた。

「ははは、わしは死に行くことに決めたのじゃ」

「えっ！」

親鸞は驚きのあまり、思わず、手にしていた数珠を落とした。

「驚くことはない」

源太は諭すように善信に語り続けた。

「のう、親鸞殿……。貴殿がここへ初めて来られた折のこと覚えておられるか」

「はい」

「あの時の貴殿の顔、今でも忘れん……」

「はあ……」

親鸞はばつが悪かった。確かに今でこそ、ここにようやく馴染んだが、最初は大変だった。この数年の出来事が走馬灯のように頭によみがえった。

「自分をここまで育ててくれたのはもとより上人様ですが、きつか



けを作ってくれたのは、応水様、そして安楽様、住蓮様です。いや、さらにはこの里の皆、源太さんも無論、皆が私を支えてくれました。このご恩を今返さなければ、いつ返せるというのでしょうか。私は命を賭して戦います。このたびの安楽様、住蓮様に対する……」

と、そこまで親鸞が言っていると、源太が後の言葉をさえぎった。

「親鸞殿、貴殿の気持ちじゅうじゅう承知しておる！」

「はい……」

いつもと違う、力強い気迫に親鸞は一瞬圧倒された。

源太は身ずまいを整えると立ち上がった。眼が衰えてからというもの、一気に老け込んだ感のある彼だったが、今日は違った。彼の体からあふれ出る怒り　親鸞はそう感じた　が、彼を圧倒した。「わしは今から出かける！この里の者たち有志を募つてな。あの二人を助けに、そうじゃ、今頃どのような責め苦に喘いでおるうか、気の毒じゃ、女犯など濡れ衣以外の何者でもない。今から獄舎に押しかけてあの二人を取り戻すのじゃ！」

そこまで一気に言っていると、彼は小屋を出た。

「源太さん！」

親鸞は彼の後を追った。源太はいつもにない早い足取りで、歩きながら大声で有志を募り始めた。

「わしについて来る者はおらんか！」

親鸞は後から追いかけた。

「源太さん！」

親鸞は、漸く彼に追いつくと、彼の前に立ちはだかった。

「源太さん！少し私の言うことも聞いてくれ！」

親鸞に前を阻まれ、源太は已む無く口を噤んだ。

「源太さん！」

「親鸞、わしは、わしは、くやしゅうて、くやしゅうて……」

「それ以上何も言わないで！それより、今無茶しては駄目だ！この里が取り潰しにでもなったらどうする？せつかく、源太さんが築いてきたこの里のお陰で、どれだけ多くの人が救われてきたか！」

親鸞の目に涙が溢れた。そして、源太の目にも……。

「今は、我慢するしかない！お願いだ！」

「……」

源太はその場に座り込んだ。そしてわっと泣き出すと、ついには泣き崩れた。親鸞もそこに座り込んだ。彼の顔はもう涙でくしゃくしゃだった。二人は抱き合うつと、いつもでもいつまでも大声で泣き続けた。

### 第三部第十二章

盛高は、安樂、住蓮らの逮捕の折は近江にいた。馬渕の里の二回目の視察である。尊長に命じられたのだ。

しかし、都へ帰って彼を迎えたゆきから事情を聞くと、彼は茫然自失となった。

「なぜ、このようなことに！」

しかし、冷静に振り返ってみると、最近の院の御所の動きはまさに、これを狙っていたのであろうか？

先の所領地視察の折に妙な話を聞いて以来、御所内での動きがすべて何か陰謀の一環のように見えて、盛高は實際心が落ち着かない日々を送っていた。

これは何かの間違いなのか？それとも誰かの謀なのか？

安樂、住蓮は勿論、六時礼賛に関わる法然の弟子達が女犯などという行為をするはずは無い、ということは誰よりも彼が承知していた。無論、弟子と称するものの中に、そのような不埒な行為をするものもいたであろう。しかし、それは念仏者でなくとも、かねてより都にはそのような破戒僧は多くいた。

「ましてやお局様に……」

とすれば、やはり誰かの企みなのであろうか？盛高は真つ先に

尊重、長嚴、秀能の顔を思い浮かべたが何の確証も無い。しかし、自分が念仏者に近い者であると分かつて、最近は彼らの会合から遠ざけられたのであれば、話は説明できる。この度の視察命令も、わざと自分を都から遠ざけたものとも考えられた。

「念仏者に大弾圧を加える気であつたか？」

すべては推測であるが、大いにありそうなことであつた。鎌倉幕府と本気で戦おうかと考えている彼らにとって、東国武士に急速な勢いで広がりつつある念仏信仰は根絶やしにすべき存在に間違いなかった。

自分が何か出来なかったのか？ ゆきとの将来のことには  
目が行き、大切なことを何か見逃していたのではないか？

しかし、いずれにせよ、もう遅かった。すべては院の命令で行  
われている。誰も止めることは出来ないのだ。

「何とかならぬものでしょうか」

ゆきの懇願にも、

「いかんともしがたい……」

と、ただ溜息しか出なかった。

ゆきはゆきで、自分を執拗に責めていた。

「私が、お局様のこと、住蓮様にお願ひしていなければこんなこと  
には……」

盛高はゆきを慰めた。

「ゆきさん、自分を責めてはいかん。 それより、今、何が出来  
るか考えよう。 よいな」

「はい……」

何としても、安楽、住蓮を助きたい。たとえ御上に反逆したと言  
われても！ 盛高はある重大な決意を心に秘めつつ、ゆきを慰め

続けた。

### 第三部第十三章

周囲の反対を押し切って、親鸞と応水は連日、京極の獄舎に押しかけ、釈放の嘆願を行った。

しかし、年が明けて建永二年（千二百七年）の一月二十四日、ついに、その親鸞も捕らえられた。かねてより僧としての資質に問題ありと、たびたび叡山より指弾されてきた行空と共に、彼もまた京極の左獄に閉じ込められた。

「抗議行動が行き過ぎたのだ」

と都人たちは噂した。

そして法然自身も「追って沙汰あるまで」の間、九条兼実の別邸小松邸に幽閉されることとなった。

まだ正式には専修念仏の禁止は宣旨として出されてはいなかったが、事態がここまで来ると、もはや、都で念仏を口にする者は一人もいなくなった。

残された弟子達もただ沈黙しているよりほかなす術が無かった。

厳しい寒さが続いた。

無論、獄舎では、連日のごとく、安楽、住蓮らへの厳しい取調べが続いていた。

安楽、住蓮は当然女犯を否定した。

「そんなことがあるはずがない！」

彼らは当然無罪を強く主張した。何かの間違いだと分かってもらえるに違いない！　そう信じて懸命に意見を述べたのである。

ところが、捕らえられて数日たったところである。

「安楽、住蓮、もう言い逃れは出来ないぞ！」

取調べに現れた、三浦秀能が声高に言い放った。

庭に引っ立てられた二人は、連日の厳しい取調べ　それは半ば拷問に近いものだったが　のため、もはや精も根も尽き果てていた。

このような苦しみが続くのであれば、いつそ、嘘でも、女犯を認めてしまえば楽になるだろうか、と思ったりもしたこともあった。しかし、そんなことを思う都度、心に「南無阿弥陀仏」と唱え、すべてを阿弥陀仏に委ねて、ここまで頑張ってきたのだ。

ところが……。

「共に捕らえられた善縛、性願がすべてを明らかにした。彼らは罪を認めたのだ！もはやこれまでだ、観念いたせえ！」

二人は茫然自失となった。

「……」

驚きのあまり言葉もでなかった。

力を失い、うなだれ、二人はその場に倒れこんだ。警吏が二人を獄舎に連れ戻した。

しかし、一体何故こんなことに？

二人は連日の拷問で疲弊しきつた体を横たえながら、いつしか眠りに落ちた。しんと降り続く雪を窓から見ながら……。

### 第三部第十四章

「さて、あのあらずじをいかがいたしましたでしょうか？」

秀能の問いに、尊長はにやりと笑うと、その質問には直接答えず、こう言った。

「安楽、住蓮の二人が未だに抵抗しているのであるな？」

秀能は頭を掻きながら答えた。

「はい、左様でございます。あれだけ責め立てれば普通は嘘でも自白するものでございますが……。彼らは頑として抵抗を続けて……」

尊長が秀能の言葉を遮った。

「まあ、よい。あの二人の自白があればそれで事足りよう。

御上へは私が報告する。そろそろ決着をつけるといたそう」

秀能は「承知いたしました」と言々と、席を立った。

場所は院の御所、奥まった所にある、いつもの部屋である……。

無論、いつもの顔ぶれでの秘密の会合であるのは言うまでも無い。

部屋には尊長と長蔵の二人だけが残された。すると、今まで黙っていた長蔵が徐に口を開いた。

「しかし、貴殿の悪知恵には脱帽した。御上の熊野詣の隙を狙って、六時礼賛興行に参加しようとしたお局様の計画を知って、それを見て見ぬふりをするばかりか、さらにはそれを利用して……、女犯の被害があったとは、まあ、見事な策略じゃ」

尊長が答えた。

「あの善綽なる者、命の保証と引き換えという条件で、言葉巧みにこちらへ寝返りさせることが出来た時点で、この度の計画はほぼ成功したものと踏んでおりました」

「なるほど……」

尊重はさらにこう付け加えた。

「あとは、女犯にあったということで、松虫、鈴虫の両名を出家させれば話は完結と……。またお局様も暫くは謹慎なさりましょう」

ここで彼はいつものようにやりと笑った。長蔵もほくそえんだ。  
「もはや、この御所内でお局様の念仏を聞くことはないということか」

尊長が答えた。

「お局様どころか……。あの二人の始末が終われば、次には高声念仏の禁止の宣旨を出す予定。そうなれば、もはやこの都では念仏の声を聞くことはありませんぬ」

顔を見つめあった二人は次には声を立てて笑い出した。

「はははは！」

「これで、あの厄介な念仏狂信者どもも終わりということか！」

「ははは！」

二人の笑い声は暫く、雪の降り積もる院の御所の中に響き続けた。



### 第三部第十五章

慈円は、安樂、住蓮らへの処罰がいよいよ出されるという情報を耳にすると、自らの情報網を駆使して、正確な処罰の内容を知ろうとした。

それでも、なかなか情報が入手できないもどかしさに、彼はついに尊長に会見を申し入れたが、尊長からは「多忙のゆえに……」と、断りの返事が来た。

「あいつめ、馬鹿にしおつて！」

慈円は怒りをあらわにしたが、いかんせん、現状での力関係は彼の方がはるかに上ではあった。

それでも、何とか、後鳥羽院に近い人々に近付き、情報を手に入れた。その結果、専修念仏、高声念仏の停止が発表されるということと、法然自身も流罪になる見通しだということが分かった。

彼は密かに法然の一番弟子信空に使者を送った。「会って、

法然の今後のこと話し合いたい」

最後まで、仏教界の調和を目指した慈円にとって、このような結果は不本意であった。いや、それよりも、法然の念仏教団にこのような措置を取ったところで、庶民の念仏信仰が無くなるわけではない、かえって御上への反発心が燃え上がるうというものであることを、よく認識していたのである。

法然の念仏を、山の念仏に戻す最後の機会であろう。

何とか高声念仏を思いとどまらせ、流罪だけは免れさせようと思つたのだ。そうすれば、朝廷への民衆の反発も最小限となろう。また、信空以下、法然の弟子達をそのまま叡山に取り込んでしまうことも不可能ではない。叡山にとっても将来的にはそれは良いことではないか？

夜遅く、人目を忍んで、信空は慈円のいる青蓮院を訪れた。

二人の話し合いは短時間で終わった。

信空は最後にこう慈円に言った。

「私も同じ気持ちです」

慈円も頷きながら答えた。

「そうか、そなたの説得にすべてがかかっている、頼むぞ！」

青蓮院を後にした信空はその足で、法然が幽閉されている九条兼実の別邸小松殿に向かった。

そして、その深夜……。

小松殿を後にする信空の足取りは重かった。

「師自らが専修念仏の停止を宣言さえすれば、おそらく此度の流罪の処置も取り消されましょう。慈円様が、あとの面倒は見ようと仰ってくださいいます。念仏の伝道教化はうちうちにも出来ましよう。どうか賢明なご判断を！」

懸命に説得する一番弟子の進言に対して答えた法然の返事を、信空は絶望的な溜息と共に思い起こしていた。

曰く……。

「流刑、さらに怨みとすべからず。辺鄙に赴きて田夫野人に念仏を勧めんこと、季来の本意なり」

時は建永二年二月二日、その翌日に加えられた、法然の流罪のみに止まらない、法然教団への決定的打撃の中身を、しかし、信空もまだこの時点では予測はしていなかった……。

### 第三部第十六章

安楽、住蓮、善綽、性願の四名に死罪を申し付ける　二月三日、都大路に立て札が掲げられた。防鴨河司長官三浦秀能の名により布告とある。

罪名は、院の女御、松虫、鈴虫兩名への女犯、処刑日は二月九日とあった。

「たいへんなことになったわい」

「本当にそんなことがあったのか？信じられん」

「当の女人は出家させられたと言うのだから本当であろう」

「松虫、鈴虫という名前だとか」

「やはり、坊主と言えど所詮は人の子であったということか」

「これ、何と言うことを！吉水の上人様のお弟子様であるぞ！濡れ衣に違いない！」

「しかし、もはやこうとなつては……」

都人たちの噂は尽きることが無かった。

この知らせは、祇園舎のはずれの犬神人の里にももたらされた。

「もう、黙つてはおれん！」

源太が立ち上がった。

彼は、集落の中心にある水汲み場の井戸の傍らに立った。そして大声で村人達に呼びかけた。

「皆の衆！集まれ！集まるのじゃ！」

渾身の力を振り絞つて叫んだ。

何事か、と村人達がめいめいの小屋を出て、水汲み場に集まりだした。

「皆の衆！」

広場が一杯になったのを見て、源太はさらに声を振り絞つた。

「安楽、住蓮に死罪が申し渡されたことすでに皆の衆は承知である

う！)

集まつた皆が頷いた。場は重苦しい雰囲氣に包まれた。源太は言葉が続けた。

「このまま、黙っていいいいのか、安樂と住蓮は身を粉にしてこの里のために尽くしてくれたではないか！」

広場に集まつた者たちは頷きながら、源太の言葉に耳を傾けていた。

「人間以下の扱いしか受けていなかった我々を、人間らしく扱ってくれたのは彼らが初めてだった。生きること絶望していた我らに、生きるこの大切さを教えてくれたのも彼らではなかったか！」

源太はさらにこう言つて、自らの演説を締めくくつた。

「その恩に報いるときが今でなくて、一体いつだというのだ？」

源太の熱弁が終わると、暫し沈黙が続いた。すると一部の者が源太の呼びかけに応じてこう発言し始めた。

「そうだ！」

「その通りだ！」

すると、続いて立つた者が声高にこう叫んだ。

「我ら、もはや半分は死んだ身、生きていても死んだも同然のこの体だ。いまさら命が惜しい者もおるまい。彼らを我らの手に取り戻しに行こう！殺されても本望、どうせ長くは生きられない！彼らのために死んでこそ、彼らに恩を返せるというものではないか！」

その者がそう言い終わると、皆が一斉に叫びだした。

「行こう！彼らを取り返しに！」

「死んでこそ生きる道があるというもの。我ら、どうせ死ぬ身、どうせ死ぬなら人の役に立つことを一度でもしようぞ！」

「おー！」

広場は熱氣に包まれた。怒りの感情が渦巻き今にも爆発寸前の感だった。ここに至つて、源太はすくつと立ちあがると皆に大声で呼びかけた。

「さあ、白装束に着替えようぞ！我ら装束に身を包み、彼らの捕ら

えられている獄舎まで都大路を練り歩こうぞ！堂々とな！」

「おー！」

こうして湧き上がった声は、地を震わさんばかりであった。

源太は、安樂、住蓮、そしてさらには親鸞が撒いた種の大きさを、今また思い知らされた。ここに住む皆が熱心な念仏者というわけではない。中には安樂らの教化説法を快く思っていなかったものも多い。

しかし、そんな彼らでも、安樂らの持っていた情熱には脱帽していたということである。さらには感謝の念を持っていたということである。それほど彼らの献身ぶりは見事だった。言葉ではとても言い表せないほど……。そんな彼らの恩に報いるのは今をおいてほかにはない！

待っている！

心に念じつつ、自らの死をも覚悟して、源太は、装束の帯をきりと再び締めなおした。

### 第三部第十七章

犬神人らの決起　ゆきからこの知らせを聞くと、盛高はすぐに馬を祇園舎へと走らせた。

無論、彼の下にも安楽らの死罪については消息が既にもたらされていた。

とんでもないことになった。

何とかせねば、とは思うが、名前ばかりは副長官であつても、すでに秀能からは疎まれ、自分の知らぬ間に物事がどんどん決められ、進められていく。

焦る心に、この死罪の知らせは最後の止めを刺すに等しいものだった。

もはや、これまで。

絶望のどん底に打ちひしがれていたところに、ゆきから知らせが入ったのであった。

馬を走らせながら、彼はこの数年の出来事を振り返っていた。自分の妹が過ごした村の人々が、今、命を賭して戦おうとしている……。

時子が生きていれば、やはり立ち上がっていただろうか？

そんなことを考えているうちに、彼の心にはいつしか、絶望感に代わって、勇気、と呼ばれるべき感情が少しずつ湧きあがってくるのを彼自身も感じていた。

時子が生きていたなら、したであろうことを、俺が時子に代わってしてあげねば！

鴨川を越える頃には、彼の心はかなり晴れ晴れとしたものとなっていた。彼の心の中にある重大な決意が湧き上がっていた。

見ると、橋の向こうにゆきが待っている。

「ゆきさん！」

馬を止めると、彼は馬から下りてゆきと抱き合った。

ゆきは大粒の涙を流して泣いている。

「すべて私のせいです。私が、お局様を六時礼賛に是非にと、お願いさえしていなければ、このようなことには、このようなことには……」

そう言うゆきは盛高にすがりながらも、自責の念で胸は張り裂けんばかりであった。

一方、盛高は慰める言葉を見出せなかった。

二人はただ黙って暫く抱き合っていた。

ゆきがようやく落ち着いたのを見て、盛高が声をかけた。

「ゆきさん、泣いてばかりでは駄目だ！」

「……」

今、この有様で一体何が出来るといふの？ 不審そうに見つめるゆきの目をじっと見据えて、盛高は言葉を続けた。

「今こそ立ち上がらないと！」

彼のただならぬ気迫に押されて、ゆきは押し黙っていた。

立ち上がるって、どういうこと？

ゆきは、盛高に源太らを何とか止めてもらおうと思って、彼を呼んだのあった。

「盛高様！」

ゆきはようやく声を出すと、盛高に尋ねた。

「立ち上がるって、一体どうなさるおつもりですか？」

不安に満ちた眼差しで、ゆきは盛高を見つめた。

盛高は徐に口を開いた。

「ゆきさん……。時子の受けた恩を私は今こそ返そうと思う」

「恩……」

「そうだ、安楽に住蓮、そして、源太さんたち犬神人の仲間から我が妹が受けた恩 人間として生きていく尊厳を奪われかけた我が妹に、再び生きる希望を与えてくれたその恩……」

「つまり、どうなさるおつもりですか？」

盛高はそこで言葉を止めた。ゆきも黙っていた それ以上聞く

のは怖かったのである。盛高の決意はすでに言葉にならなくとも伝わっていた。しかし口にするのも恐ろしい。

御上に逆らうなんて！そんなことが、そんなことが！

「そうだ、ゆきさん。私は許されないことをしようとしているのだ！」

盛高が声高に叫んだ。

「たとえ、我がこの命、落としても彼らを救わねば！」

ゆきは、必死の決意の盛高を前にして、ただ泣くことしか出来なかった。愛する人が命を失うかもしれない、かつて愛した人を救うために……。

盛高はそんなゆきの思いを察して、再びゆきを強く抱きしめた。

そんな二人の背後から、突如威勢のいい声が響いた。

「盛高様！」

「ゆきさん！」

声の主は次郎、三郎であった。彼らも知らせを聞いて駆けつけたのである。

「まあ、次郎さんに三郎さん……」

驚いたゆきが戸惑っていると、次郎が言葉を続けた。

「死ぬときはわしらも一緒でさ！」

すると、三郎が次郎をたしなめた。

「馬鹿者！盛高様を死なせるわけにはいかねえ。ゆきさんを泣かせるわけにはいかねえ！わしらを命を賭して、安楽様らを救うのじゃ！」

ゆきは二人の話を聞きながら、あまりの感激にさらに大粒の涙を流した。

「ありがとう、ありがとう！」

声を詰まらせながら返事をするゆきに、次郎がやはり涙声で応えた。

「ゆきさん、わしら河原者、人間以下の扱いを受けて、馬鹿にされて、ののしられ、時には石まで投げられ、　　そんなわしらと寝食



を共にして、苦樂を共にしてくれた方に、たとえ命を失つても、わしらは恩返しをする義務があるうというもの！そうでございますよ  
う」

盛高も大きく頷いた。そして手を上げると叫んだ。

「次郎、三郎、ありがとう！共に戦おうぞ！」

次郎、三郎も応えて、威勢のいい声を上げた。

「えい、えい、おー！」

しかし、どうやって？ ゆきは仲間が結束してくれるのを有難

く思いながらも、不安に心を苛まれるのであった。

### 第三部第十八章

処刑日は九日、あと五日しかない。

盛高は、次郎、三郎を連れて、犬神人の里をとにかくも訪ねるところとした。彼らは決起して、今にも左極の獄舎に押しかけんとしているという。

盛高は一先ずそれを思いとどまらせようとしていたのであった。

百戦錬磨の職業軍人である彼の目には、獄舎に押しかけるという彼ら犬神人の行動は、自殺行動にしか見えなかったためである。

どうせ命を落とすのであれば、作戦を立てて、必ず成功させなければ！

その思いを、源太に伝えて、彼らを一旦落ち着かせねばならない。祇園舎の裏手の彼らの里に到着すると、すでに彼らは全員白装束に覆面の姿で、源太を中心に広場に集まっていた。

「源太さん！待った！」

盛高は大声で叫んだ。

犬神人らが振り返った。盛高が広場の中心に駒を進めた。源太が盛高に歩み寄った。

「盛高殿、いかがなされた？よもや我らの出陣を止めに来たのではあるまいな！」

場に緊張が走った。盛高は御上に仕える身であることは周知の事実である。御上の命を受けて来たなら対峙せざるを得ない……。

盛高の周囲を若い屈強な犬神人達が囲んだ。手には各々、ありあわせの武器を持っている。鋤、鍬、斧、鉋などだ。

盛高が、あらためて彼らを見てみると、白装束に覆面、赤い手袋という彼ら独自の正式な衣装を纏い、ありあわせの武器を片手に整然と並んでいる。その姿は恐ろしくもあり、威圧的で、東国武士ならいざ知らず、院の御所の西面の武士達では、ひよっとすると恐怖感から逃げ出してしまう者も多いのではないかと、ふとそんなこ

とを感じた。

であれば、それは好都合。作戦さえ綿密に立てれば、安楽らの命、救うことも不可能ではない！

盛高は、彼らから受けた威圧感により、逆に勇気付けられたことが何か可笑しくもあり、つい笑ってしまった。

「ははは！」

突然の笑い声に、盛高を囲んだ犬神人らはひるんだ。源太がその間をぬって前に進み出た。

「盛高殿、用件を申されよ！」

盛高は笑うのを止めると、真顔になって源太を見据えた。

「源太さん、やろっ！やれるとも！」

源太は、突然そう言われて何のことか、その真意が掴めず、立ちすくんでいた。

しいんと静まり返る犬神人らを相手に、盛高がさらに言葉を続けた。

「安楽、住蓮を救いに行こう！私も行く、共にな！」

思わぬ、盛高の発言に源太は耳を疑った。自分らはもう死ん

だも同然の身、いまさら命など惜しくも無い。しかし、この若者は……。

源太の目に涙が溢れた。

「盛高殿、かたじけのうござる……」

「なーに、どうということはない」

そう言つと、彼は馬を下りた。そして源太を強く抱きしめると、続いてこぶしを振り上げた。

「みんな、やろっ！」

一同がそれに答えた。

「おー！」

興奮した皆の熱気が広場を覆った。

盛高はその熱気を味わうかのように、ゆっくりと呼吸を二、三回すると言葉を続けた。

「しかし、皆、今はまだ早い！」

源太が尋ねた。

「早い、とは？　どういうことじゃ。早ければ早いほどよかるう！」  
周囲の者もそれに同調した。

「そうだ、そうだ！」

盛高は、広場の一段高いところに立つと、皆に聞こえるように大きな声で皆に呼びかけた。

「今、獄舎に駆けつけても、彼らを助けるのは困難だ！　獄舎はいわば要塞のようなもの。守りは固く、西面の武士が役立たずとは言え、腕の立つ放免らも多数警護してある。下手をすれば、皆討ち死にの運命！　命を捨てる覚悟であれば、必ず彼らを救出できる計画を立てねばならんであるう！」

一同が静まり返った。彼の言うとおりであつたからである。

盛高は皆が冷静さを取り戻したのを見ると、あらためて源太に言葉かけた。

「源太さん。信頼できる若者を何人が集めてくれ。計略を練らねば！」

源太は大きく頷いた。

「承知！」

源太もあらためて皆によびかけた。

「皆の衆！　盛高殿、応援に駆けつけてくれた今、もはや怖いものは無い！　頑張ろうぞ！」

「えいえいおー！」

一同が声を揃えて関の声を上げた。盛高はそれを聞きながら感慨に耽っていた。

俺も何度か死に掛けた身。でも、もし死んでいたら犬死であつたらう。

しかし、今、この仲間と共に死ねるなら、喜んで死ねる。それに……。彼は声高に叫んだ。

「時子も喜んでくれようというもの！」

盛高は天を仰いだ。その顔は晴れ晴れとして、悔恨など微塵も感じられない、清しい笑顔であった。

### 第三部第十九章

「何ということだ！」

秀能の報告を聞いて、尊長は語気を荒げて言い放った。

犬神人が安楽、住蓮らを助けんと決起した。秀能の配下にある放免の一人が、いち早くこの情報を嗅ぎ付け、秀能に報告したのであった。

「まことに」

秀能にとつても意外な展開だった。事の厄介さは彼にも分かった。ある意味、東国武士が乗り込んでくる方が話は簡単だった。しかし、犬神人の反乱となると、まったく先が読めなかった。

「彼らは、死ぬことは当然覚悟しておりましようから……」

秀能は、尊長が黙ったままでいるので言葉を続けた。

「西面の武士達も、さらに放免たちも、とても不安がっております。彼らを切れば、その者、必ずたたりを受ける、と……」

苛立ちを隠せず、尊長は普段の冷静さを完全に失っていた。

「わかつておる、事の重大さは！」

普段では考えられない、激しい言葉だった。強い苛立ちが現れていた。手練手管に長けた彼ですら、この事態の展開にはどう対応したものか、よい考えが浮かばなかったのである。

しかも、もう京極の獄舎を安楽、住蓮の二人は後にしている。その報告がつい今しがたあったばかりである。

これで、あの厄介な念仏集団も終わり！

そう思つてほくそえんでいた矢先の、この秀能の報告であつた。無論、彼らが反乱を起こせば、御上に対する謀反である。朝敵として罰せられる。しかし、彼らはそんなことは承知で決起したのである。

もつとも、御上の軍勢が、無論、力では彼らに負けるはずが無い。問題は士気である。彼らに斬り付けければ、何らかのたたりがあ

ること必定。皆がそう思っている。

さらに、厄介な問題は、それを見守る民への影響である。

犬神人が彼らの命を賭してまで守ろうとする安楽、住蓮は、民衆さらには東国武士の間でも、殉教者として英雄となろう。そうなれば、法然一派の影響力の一掃を策して行った、今までの一連の計略は無に帰する……。

さらには犬神人の崇りが院の御所にまわりつく……。

当時は崇りを本気で信じ恐れていた。そんなことがあれば天皇親政の実現など論外である。

東国武士らは却って勢いづくであろう……。

「このままではいかん！すべてが台無しじゃ！」

尊長が再び強い口調で言葉を発した。しかし秀能は黙ったままだった。秀能自身も、自分が犬神人に切りつけることなど、想像しただけでおどましかった。

二人は暫く押し黙ったままだった。

何らかの手を早急に打たねば。

尊長が口を開いた。

「ともかく、すぐに二人を連れ戻せ！早急にじゃ！処刑を一旦延期せねば！」

秀能がそれに応じた。

「分かりました。すぐに遣いの者を走らせ……」

と、言う秀能の言葉を尊長が遮った。

「何を言っておる！この重大事に！そち自らが馬を走らせよ！兵をさらに引き連れよ！相手は手強いぞ。護送の役立たずの兵だけではとても敵うまい！」

と怒鳴ると、尊長は秀能を睨みつけた。

「はは！」

秀能は、そう返事をするや部屋を飛び出た。

「馬を準備せよ！」

「御所内にいる兵をすべて集めよ！出陣じゃ！」

供の者にそう命令しながら、彼は出陣の準備を整えると、廊下を駆け抜けて中庭に出た。一群の兵もすでにそこに待機していた。

「出陣じゃ！」

彼は用意された馬に飛び乗ると、兵を引き連れ、勢い良く御所の外へと飛び出した。

犬神人だけとは関わりたくない。斬りたくない。

馬を走らせながらも、彼らの白装束、覆面姿を思い起こして、彼は身震いした。

斬れば、この身、さらには子孫代々まで穢れが降りかかろうと言つもの。

そこまで思いつめると、身震いが止まらなくなった。

何とか間に合えばよいが……。

見ると、雪がちらついてきた。寒々とした心に追い討ちをかけるように、冷たい風が、京の都の冬の底冷えとあいまって、彼の体を襲った。



### 第三部第二十章

安楽、住蓮の処刑の日を迎えて、その日の早朝、盛高は源太、次郎、三郎と最後の打ち合わせを源太の小屋で行った。

この日の決起に犬神人のみならず、多くの放免、また河原者が加わることになったため、次郎、三郎がその代表として打ち合わせに参加したのだ。

「我らも立ち上がろう！」

「我ら放免も、もともと死罪に当たる者、一度は死んだ身！命が惜しかろうか？そんな人間の屑のような我々に光を当て、人間として人間らしく扱ってくれた、あの二人のために、この命捨てようぞ！」  
次郎、三郎らの呼びかけに多くの放免が同調した。

「あの、役立たずの西面の武士共め、いつもわしらを馬鹿にしおつて、目に物見せてくれようぞ！」

「おーっ！」

「やつら、身なりだけは立派だが、所詮はひよっ子。あんな連中一捻りじゃ！」

こうして、みるみるその数は増えた。ふと気がつくと、放免のみならず多くの河原者達も決起に参加せんと駆けつけていた。

「いいか、かねてからの打ち合わせどおりに」

盛高の言葉に一同は頷いた。

「それでは、皆、仲間を率いて、出陣するといったそう！」

盛高が立ち上がった。源太の小屋を出ると、犬神人の里の広場にはもう犬神人らが出陣の準備を整えていた。

盛高は皆に呼びかけた。

「では、犬神人の諸君！君達は打ち合わせどおり処刑場へ向かってくれたまえ。そして鴨の河原で待機していてくれ。向こうでまた会おう！」

そう呼びかけ終わると、今度は次郎、三郎に言った。

「次郎、三郎も、かねての予定通り仲間の放免らを連れて、五条の橋の西側の袂に待機するように！」

盛高の言葉に彼らは元氣良く返事した。

「承知！」

「合点！」

盛高は彼らを見送ると、従者の清兵に尋ねた。清兵は盛高と共に、安樂、住蓮を馬に乗せて救出する役目を引き受けたのである。犬神人と放免らが、騒ぎを起こし混乱を与えた隙に……。

「清兵、本当に良いのか。いやなら今からでも止めればよい。私に義理立てする必要は全く無い。何故なら、逆賊になるのだから！本当にその覚悟でついて来てくれるのか？」

清兵は清々しい顔で答えた。

「盛高様、逆賊ではございませぬ！我らは弥陀の本願のために戦うのでございます。嘘の証拠を基に、安樂、住蓮様を死罪にしようという彼らこそ、弥陀に対する逆賊ではありませんか！」

盛高はからからと笑い声をあげた。

「その言葉、気に入った。御仏に対する逆賊とな！我ら、それではその逆賊退治に出陣じゃ！」

そう言つと、盛高は馬を走らせた。

「清兵、ついて来い！」

「はい！」

清兵も馬を走らせた。

時子、やつとお前に対して罪滅ぼしが出来る日が来た。

盛高は目を潤ませながら、決戦の場所、五条の橋へ馬を向かわせた。

### 第三部第二十一章

安樂、住蓮はいよいよ処刑の日を迎えても、心の動揺は無かった。念仏の功德を説いて、死罪に処せられるのであれば、むしろそれは喜ぶべきこと。

二人の思いは一緒だった。弥陀の本願に自らの身を委ねた、絶対他力の念仏の世界で、二人はすでに死の世界を超越していた。

往生とは、往きて生きることなり。

また輪廻を断ち切ることなり。

そう信じて、六時礼賛興行に全てを捧げた。

女犯　まったく根拠の無い罪で死罪に処せられることも、彼らには苦痛ではなかった。

弥陀は全ての真実を見抜いておられる。

嘘の供述をした仲間の二人に怨みも持たなかった。

彼らも辛かったであろう。

むしろ、彼らのことを思いやった。

白装束が準備された……。いよいよである。

「安樂、住蓮、覚悟いたせい！」

二人は縄を打たれ、牢の外へ出された。厳重な警護の下、都大路を引っ立てられた。

向かうは六条河原

多くの都人の目は同情的であった。しかし、中には、

「この色坊主め！」

と叫びながら、石を投げつける者もいた。

五条の大路に差し掛かると、しかし、雰囲気は一変した。

安樂、住蓮の耳に念仏の大合唱が聞こえてきた。

「……？」

二人は耳を疑った。次に目に飛び込んできたのは、手に数珠を持つ、数え切れない群集の姿であった。　皆が、念仏を唱えている。

「えーい、やめんか！」

西面の武士達がたしなめるが、群衆はまったく怯むことは無かった。この時点ではまだ、専修念仏の停止の宣旨は出されていなかったのである。

安楽、住蓮は涙ぐんだ。

みな、ありがとう！

声にこそ出せないが、頭を下げ、皆に感謝した。すると、群衆の一部が騒ぎ出した。

「二人の縄を解け！」

「二人は無実だ、自由にしてやれ！」

中には、護送の兵に石を投げつける者も出てきた。通りは騒然となった。五条の橋に到着する頃には、興奮した群衆が処刑に向かう隊列を囲んで、安楽と住蓮は動けなくなった。

騒然とした雰囲気の中で、ふと気がつく、二人は離れ離れになっていた。護送の隊列は前後に分断されてしまった。護送の兵達も混乱していた。後方の、住蓮を囲む隊列は全く動けなくなった。

先頭の安楽らの隊列は何とか五条の橋に辿り着いたが、橋の中央まで来ると、そこで動けなくなった。

大混乱となった……。どうなるのか、皆が冷静さを失って、もはやどうにもならない状況に陥ろうとしていた。

その時である。

「おーっ！」

「あれを見よ！」

どよめきが起こった。一人の男が指差す方向を皆が見やった。

「何と！」

「あれは！」

それまで騒然としていたのが嘘のように、静寂がその場を襲った。安楽も、自分の目を疑った。

「源太さん……」

安楽がぼつりとそう漏らした。

群集の目にもその異様な光景が飛び込んできた。 白装束に覆面、赤手袋の一団が鴨の河原を占領している。その犬神人の一団の先頭に源太の姿があった。

「……」

皆が、その異様な光景に口を閉ざしたままであった。

そして次に、その静寂は、その異様な装束の一団の関の声によって破られた。

「えいえいおー！」

「おー！」

何が起こるのであろう。

関の声が終わると、再び静寂が襲った。

そして異様な緊張感がその後続いた。

群集は固唾を呑んだ。誰もが次に何が起こるのか検討が付かず、緊張感の中、ただ黙っているよりほか無かった……。

## 第三部第二十二章

思いも寄らぬ展開に、盛高の安楽、住蓮奪還計画は完全に頓挫してしまった。

当初の計画では、安楽、住蓮らの護送の集団が五条の橋を渡り始めたところで、橋の東側を源太を中心とする犬神人ら、また西側を次郎、三郎らを中心とする放免、河原者の一団、が占拠することになっていた。そうすることで、彼らの護送を妨げ、混乱に陥ったところを、盛高らが急襲し、二人を奪還するというものだった。

しかし、民衆の暴発により事態は思わぬ展開となってしまうた。

三郎が、橋の西北側の河原で待機していた盛高のところに駆けつけた。

「盛高様！ いかがいたしまししょうか？ 安楽様はもう橋の真ん中で身動き取れぬ状態、また、住蓮様は一体どこにおられるものやら、姿が確認できません。多くの民衆が道に溢れ、たいへんな騒ぎで、まったく検討が付きませぬ！」

「うむ……」

盛高も、あまりの事態の急展開にいい知恵も浮かばなかった。

すると、橋の西側で突如民衆が騒ぎ出した。

「御上の軍勢だ！」

「逃げる！」

「かなりの数だぞ！」

「捕まったら大変だ！」

群集は散り散りになった。見ると、西の方向から、馬に乗った一群の兵団がこちらへ向かってくるのが見える。

群集がいなくなつて、見通しが良くなった。見ると、そこに住蓮の護送の一団がいた。

「住蓮様！」

三郎が叫んだ。

今なら助けられるかも。

盛高も、そう思つて、通りに飛び出そうと思つた次の瞬間であつた。

「あつ！」

既に遅かつた。住蓮の姿は、そこへ駆けつけた西面の武士の一団に囲まれて見えなくなつた。しかもかなりの数である。

「ああ、連れて行かれる！」

三郎が再び叫んだ。周囲をさらに幾人の兵にも囲まれて、住蓮の護送の一団は西へと方向を変えた。おそらくは獄舎へ引き返すのであろう。

盛高は地団太を踏んだ。その盛高の目に、秀能の姿が飛び込んできた。残りの兵を引き連れると、彼は群集を蹴散らしながら、橋を渡り始めた。

「えーい、御上に反逆するのか！皆、死罪であるぞ！」

群集も、一時の興奮状態から脱したようだ。新たな西面の武士達の登場に橋からも民衆は撤退を始めた。

もはや安楽の救出も難しくなつたのは誰の目にも明らかであつた。しかし、盛高は三郎を見据えると、しっかりした口調でこう尋ねた。

「三郎、覚悟は出来てるな？」

三郎も、はつきりとそれに答えた。

「当たり前でさ！」

盛高は言つた。

「少し作戦変更となるが、こうなつては、もはや突入するしかあるまい！三郎、持ち場に戻つて、次郎に伝えよ！私の合図を待てと」

「承知！」

運があれば、この命永らえて、住蓮をも助けられよう。

まずは、安楽を救出せねば！

盛高は鉢巻を締めなおすと、清兵に命じた。

「行くぞ！」

「はい！」

清兵も素直に応じた。

「御仏のために死ぬるなら本望です。盛高様は、しかし死んではな  
りませぬ。生きて、住蓮様をも必ず助けてあげてください。お願い  
します！」

「わかった、任しておけ！」

見ると、橋の東側で、犬神人の一団と、西面の武士集団が対峙し  
ている。源太と秀能がそれぞれの先頭に立って、黙ったまま睨みあ  
っている。

しかし、睨み合っではいたものの、士気の優劣は明らかであつた。  
犬神人らは死を覚悟していた。安楽護送の護衛兵たちはすでに、  
覇気を失っていた。うずくまるか、ただおろおろとするばかりの有  
様であつた。

崇りを恐れたのである。

あとから来た秀能、また彼率いる西面の武士集団も事情は同じで  
あつた。対峙はしていたものの、実際は足と手ががたがた震える者  
ばかりであつた。

彼らを切れば、崇りは必定。

時が止まつたようにも感じられた。睨みあいはずっと続いた。  
おそらくこの睨み合いが長く続けば、それだけで、犬神人たちの勝  
利に終わったかもしれない。秀能たちは尻尾を巻いて、逃げ帰った  
であろう。

盛高も両者の対峙している状況を見て、すぐにそう感じた。

これなら勝てるやもしれん！

「清兵、少し待て！」

盛高は、今にも飛び出さんばかりの勢いの清兵を押しとどめた。  
「我らが出番は必要無いかもしれぬ……」

異様な静寂と緊張が漂う中、ついに源太が右手を上げて、橋を指  
し示した。犬神人の一群は「おー！」と言つと、源太に続いて、河  
原から橋へと移動を始めた。



西面の武士は、手を刀にやってはいたが、抜く気力は持ち合わせていなかった。彼らは後ずさりを始めた。

と、その時であった。

「駄目だ！駄目だ！止めるんだ、源太さん！」

安楽が、突如大声をあげた。その声が静寂の中を響き渡った。

「安楽……」

盛高は声のするほうを見た。安楽が手に縄をされたままの姿で立っていた。表情は清清しく、盛高の目に、それは、一瞬、美しい仏像の表情のようにも見えた。

### 第三部第二十三章

皆が安楽を見た。安楽は前へ進み出た。縄を打たれてはいたが、護送の兵は、既にその場にうずくまってがたがたと震えるばかりで、安楽は、束縛を受けることも無く、橋の袂へと進み出た。落ち着き払った態度と、その表情の神々しさに、秀能以下の西面の武士らも圧倒されていた。彼らは、安楽を捕らえるでもなく、ただ成り行きを見守るばかりであった。

安楽の姿を認めると、源太が声を上げた。

「安楽殿、無事か？」

安楽は久しぶりに聞く仲間の声を懐かしく思ったのか、にこっと笑った。

「源太さん、ありがとう、元気だ」

そう答えると、安楽はさらに一歩前に進み出た。そして言葉を続けた。

「気持ちはずれしい、源太さん。しかし、どうか、このまま見守って欲しい……」

予期せぬ言葉に源太を始め周囲の犬神人らは驚きの表情を呈した。

「安楽殿……」

安楽はさらに言葉を続けた。

「私の往生を見守って欲しい。皆で……。仲間に見守られて往生を遂げられれば、こんな幸せがあるうか」

源太は反論した。

「安楽殿、馬鹿を言うでない！我らこうして安楽殿を……」

助けに来たのに！　　と言いたかったのだが、安楽の言葉がそれを遮った。

「源太さん！」

安楽はそう叫ぶと、源太にさらに近づいた。

秀能は、本来ならそれを止めるべきことは分かっていたが、犬神

人に近づくのは恐ろしく、ただ成り行きを見守っていた。

安樂は言葉を続けた。

「源太さん、気持ちはうれしい。されど、今はこうして御上の軍勢も手も足も出ない状態だが、このままでは源太さんらは謀反人となる。私は今日は助かつて、所詮いつまでも逃げられまい。いずれまた捕まるであろう。その時には、死罪となるのは私のみではない。源太さんらも全員死罪となろう。逃げられるものではない、御上に弓を引いたとなれば……。それだけは避けなければ！」

安樂の説得に源太は押し黙ったままだった。

「源太さん、今ならまだ大丈夫。西面の武士らと一戦交えればもはや謀反人、そんなことになる前に、どうか、お願いだ。皆を連れて帰ってくれ！そうすれば、秀能殿も、そちらを後日追及することはあるまい」

安樂の気迫に押されて黙っていた源太であつたが、ここに至つてその重い口を開いた。

「安樂殿、我ら命は惜しくは無い。ただ悔しいではないか！女犯などという濡れ衣で……」

安樂は源太の言葉を再び遮った。

「源太さん、私はそんなことを気にはしていない。弥陀は真実を知つて下さっている。こうして死罪を申し渡されても、誰に何の恨みも持つておらぬ。弥陀が分かってくださればそれだけでいいのだ」

「……」

安樂はさらにこう言つて、彼の言葉を締めくくった。

「人間いつかは死ぬ。しかし私は生きる。いや、弥陀が生かしてくださる。それこそ往生、往きて生きる、そして弥陀は悪しき輪廻を終わらせる。何と素晴らしいことではないか。それを皆で見守ってくれ！」

源太は、安樂からこう告げられ、暫く下を向いたまままでいたが、漸く頭を上げると、はっきりした口調でこう言つた。

「承知した！」

二人は抱き合った。誰も止める者はいなかった。二人の目からは涙が溢れ出した。

他の犬神人も泣き始めた。また、多くのそれを見守る群衆も涙を流した。

盛高は遠くからではあったが二人のやり取りを聞いて、大きい感動に包まれていた。

生きるとは何だろう。

そして、死ぬとは何だろう。

自分自身は、今まで念仏信者に囲まれて、彼らの生き方にある種の感銘を覚えていたことは事実である。しかし、自分の生き方と言うと……。

確かに自分も何度も死ぬ思いを乗り越えてきた。そのため死に対する恐怖をそれほど感じていなかった。

しかし、今、安楽の言葉を聞いて、自分が恥ずかしくなった。彼が崇高な信仰心で死の恐れを克服しているのと比し、何と己の心の貧しいことか！

私も念仏者となろう。

見かけの強さではない、心の強さ。それを持ちたい。念仏は人を強くする、生きる力を与える。今、安楽の言葉を聞いて、漸くそれを悟った。

泣き声がいつまでも続く中、安楽は源太から離れると、今一度源太にお辞儀した。次に後ろを振り向くと、橋の上にいる騎乗の秀能に向かって声をかけた。

「秀能殿、もう大丈夫です。何の心配もございません。彼らは私に最後の別れを告げに來ただけ。他意はありません。今、その挨拶もすませました……。どうぞ、秀能様、決められたとおりにお勤め果たされよ！」

秀能は突如声をかけられどぎまぎした。拷問で責め苦を与えた張本人である自分に向かって、何と言う心の余裕であるか！

秀能はどう答えていいものか分からず、暫く黙っていた。

安樂がそれを見て、彼を促した。

「さあ、どうなされた？お勤め果たされよ……。ただ、一つお願いがござるのだが」

秀能は漸く言葉を発した。

「願いとな？」

安樂は頷くと、しつかりとした口調で答えた。

「左様、願わくば、念仏数百篇の後、最後に十念を唱えさせていた  
だきたい。その後に我が首刎ねられよ」

「……」

秀能は内心困ったことになったと思った。正式にはまだ高声念仏  
専修念仏の禁止の宣旨は出されていなかったが、いずれ宣旨が出さ  
れることを承知していたからである。そんな状況で、念仏百篇を認  
めるのはどうか……。

しかし、今の彼がそれを拒否出来る立場ではないことも分かつて  
いた。拒否すれば、折角おさまりかけた犬神人の怒りが爆発するで  
あろう……。

「承知した」

短く答えると、秀能は護送の隊列を整えて、再び処刑場へと行進  
を始めた。犬神人の隊列がそれを追った。噺り泣きの声がそこかし  
こで聞かれた。

漸く一行は六条河原に到着した……。

処刑の準備が淡々と進められた。多くの群集も集まった。河の対  
岸にも人が溢れ、鴨川に多くの人が弾き飛ばされんばかりであつた。  
処刑の準備が終わると、安樂は川辺に引つ立てられた。対岸の群  
集への見せしめとして、わざとその場所に立たせるのである。処刑  
場の他の三方は犬神人らによって完全に包囲されていた。

ふと右横を見ると、源太の姿が最前列に見えた。安樂は大きくお  
辞儀をした。次に左を見た。するとゆきの姿が見えた。安樂は続け  
て彼女にもお辞儀をした。

群集の噺り泣きの声は、一段と大きくなった。泣き叫ぶ者も出て

きた。源太も大声で泣いていた。

そんな雰囲気の中、秀能は約束どおり安楽に最後の念仏を許可した。

「よろしいぞ、安楽殿」

安楽は秀能にも深々とお辞儀をした。

「かたじけのうござる」

そう言くと、安楽は前を向いた。すると対岸の群集が目飛び込んできた。彼らにもお辞儀をした。

あれは、三郎、次郎、それに盛高殿も……。

友の姿が見えた。彼は彼らににこりと微笑んだ。

ありがとう、見守ってくれて！

大きな安堵感に包まれ、彼はいいよいよ覚悟を決めると、合掌し、目を瞑って念仏を始めた。

それを見守る群衆も彼の念仏に唱和した。後世の記録によれば、この日、この念仏唱和の声は都中に響き渡ったという……。それはとてもこの世の物とは思えぬ響きであったとも……。

こうして、どれだけ時間が経過したであろうか。短いと感じた者もおろつ、長すぎると感じた者もおろつ……。

そして弥陀はこの瞬間を果たして見ておられたであろうか……。

何処におられたであろうか……。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

安楽が最後の十念を終えて口を閉ざした。次に彼はその場に正座すると頭を垂れた。我が首刎ねられい、という合図であった。首切り役の放免が背後から近付くと刀を振りかざした。と、もう次の瞬間であった。彼の打ち下ろした刀が鈍い音を立てた。

「あつ！」

人々の叫ぶ声が響き渡った。一瞬の静寂の後、その声の多くは直ぐに泣き声に変わった。

鴨の河原が血に染まった。

「安楽様！」

多くの人の叫び声と、鳴き声、そして怒号が刑場に響き渡った……。

偉大な仏教者がこの日、かくして往生を遂げた。今様を愛し、常に笑顔を絶やさず、民衆と共に歩み、日の当たaraぬ世界の人々、多くの河原者達、そして犬神人らの中に入り、彼らと苦楽を共にし、彼らの救いを求めて、ただひたすら弥陀の本願を継り、六時礼賛興行にその人生の大半を捧げた、偉大な信仰の人……。

かくして、彼の首は死して地に落ちたが……。

しかし直ぐに、その首は種となった。やがて芽を出し、何百、何千もの多くの新しい命を生みだすために……。

左様、弥陀の本願に継った人は、こうして死して後も生き続けることを、秀能始め、この弾圧を目論んだ人々は理解する術を持つていなかった。

### 第三部第二十四章

盛高は、安楽の処刑を見届けると、意を決し、馬にまたがると五条の橋を渡った。清兵もその後を追った。群集が騒然としている中を、かき分けると前へ進み出て、処刑場の河原に躍り出た。

興奮冷めやらぬ犬神人たちが、処刑の後も依然として刑場を取り囲んでいた。そして刑場の中では怯えた様子の護送兵、また後から応援に駆けつけた西面の武士達が刀に手をやって犬神人と対峙していた。

処刑は何とか実行したものの、秀能はどう事態を収拾していいものか全く途方に暮れてしまった。本来なら安楽の首を晒すべきだが、それが出来るような雰囲気では無かった。

おそらくそんなことをしようものなら、折角、安楽の説得で沈静化した彼ら犬神人らは再び攻撃的となり、我らに刃向かってこよう。しかし、このまま……。

と思案していたところへ、盛高が姿を現した。

「盛高殿！」

まずは驚いて声をあげたのが源太であった。

その源太とは顔を見合わせただけで、言葉を交わさず、盛高は、さらに馬を進めると、秀能を見据えてこう言い放った。

「このまま帰られよ、秀能殿！」

「……」

秀能は咄嗟のことにすぐに言葉が出なかった。

盛高が、四人の逮捕の後行方をくらましていたのは知っていた。彼が念仏者たちと親交を持っていたため、わざと遠ざけていたこともあったが、おそらくは、念仏者への弾圧が始まったのを知って、洛外へ逃げたものと思っていたのである。

「盛高、そちが拙者に命令を出来る身分か！」

秀能は必死の思いで、声を震わせながらそう反論した。彼には彼



なりの意地があつたのである。

盛高はしかし冷静であつた。

「よいから、今日はこのままお引取りになられよ。命は奪わぬ。それは安楽が望まぬこと、我ら安楽の意思を踏みにじろうとは思わん！源太さん、そうであるな？」

傍らの源太も、その言葉に頷いて同意を示した。一方秀能は沈黙を守つたままだつた。体はがたがたと震えている。

「……」

秀能がもはや反論できぬのを見て、盛高はさらに言葉を続けた。

「安楽の遺骸、彼ら犬神人に任せよ。彼らが手厚く葬るであらう。それとも、どうしても、彼の首、晒しものにしたいと仰るか？であれば……」

と、言つと、盛高は刀に手をやつた。

「どうしても、というのであれば、この盛高を斬られてからになされ！」

「……」

二人の睨み合いが続いた。秀能は、しかし対峙しながらも、もう足腰ががくがくと震えて心臓は動悸が激しく、今にも口から飛び出そうな勢いだつた。

暫くすると、秀能は目を逸らした。彼は、周囲の者に目配せすると、

「退散するといたそう」

と言つと、自分も馬にまたがつた。安楽の遺骸はそのままに、彼らは、犬神人の囲みを通つて、刑場からやつと抜けだした。

その後姿を見やりながら、盛高は秀能に大声で呼びかけた。

「伝えられよ！尊長殿、長蔵殿に！この盛高、あきらめませぬと！」

秀能の駒の歩みが一瞬止まつた。

盛高はその背中に向かつて、再び呼びかけた。

「是非とも伝えられよ！この盛高、必ずや我が友、住蓮の身をいた

だきに参りますとな！必ず！」

盛高の宣戦布告はこうしてなされた。御上への公然たる反逆の宣告であつたが、彼の心に悔いは無かつた。安楽の死によつて得られた大切な何かに比べれば、自分の運命、行く末などどうということはないと、何故か余裕を持つて感じられた。

また、念仏者となろう、と心に思ったことが誇らしく感じられた。迷いは全く無かつた。

「清兵」

「はい」

秀能らの姿が見えなくなると、彼は清兵に尋ねた。

「私も念仏者になれるか？」

「はい？」

予想外の質問に清兵は驚いたが、すぐに、はっきりとこう答えた。

「勿論でございます！」

盛高は清しい顔で清兵に微笑みかけた。

「ありがとう！住蓮の命、今度は失敗の無いように、何としても救おうではないか！我ら力を合わせて！」

「はい！」

安楽の遺骸を片付け終わると、犬神人らは行列を作つて、彼の遺骸の搬送を始めようとしていた。目指すは鳥部野、そこで茶毘に付そうというのである。

源太が盛高に声をかけた。

「一緒に来られるか？」

「勿論」

気がつく、ゆき、次郎、三郎も傍にいた。皆涙顔である。

源太が呟いた。安楽の遺骸に語りかけるように。

「安楽殿、皆が来てくれた。皆がな……」

ゆきは盛高に抱きつく、とさらにいっそうの涙を流し始めた。すると、そこへ突如聞きなれた声がした。

「わしも行くぞ！」

ゆきが声を上げた。

「あれは応水様！」

確かに、応水であった。彼も今日一日、事の成り行きを遠くから見守っていたのである。

「安樂の遺骸、私が茶毘に付そう」

応水は皆の輪に加わると、そう言った。

「応水様に見送ってもらえば、安樂様も安心でしょう」

涙ながらのゆきの言葉に皆は頷いた。

こうして準備が整うと一行は出発した。

成り行きを見守っていた対岸の群集から、念仏の唱和がまた始まった。その声に見送られて、鳥部野へ向かう行列は、ゆつくりとゆつくりと進んでいった。

多くの命の種を蒔きながら……。ゆつくりと、ゆつくりと……。

何故なら、その日、盛高のみにとどまらない、新しく念仏者となったのは……。安樂の堂々たる往生の姿に感銘を受けて念仏者となった者の数、それは、数百、数千とも噂された。左様、新しい命の誕生である……。

そして彼ら名も無き民衆の一人一人が心の信仰をしっかりと保ち、その後も続く念仏者への弾圧にも屈せず戦ったからこそ、専修念仏の火は絶えることなく守り続けられたのである。

### 第三部第二十五章

院の御所の動きが活発になった。

秀能は帰ると早速安樂処刑の前後の様子をつぶさに、尊長、長蔵に報告した。

「犬神人の反乱が無かったのは不幸中の幸いではある……」

報告を聞いた尊長がぼつりとそう漏らした。

「しかし、残る一人をどうなさる？ また犬神人らが騒ぎを起こすことは十分考えられようというもの」

長蔵の問いに、尊長は暫く口を閉ざしていたが、徐に口を開くところ答えた。

「然るべき場所へ連れて行き、そこで始末するしかあるまい……」

秀能も長蔵もこの提案の全てを理解した。長蔵が早速賛成した。

「それがよからう」

秀能も賛意を示した。

「仰せの通りかと……。確かに、本来なら、都人へ見せしめにするところ、しかし、今日の有様を見ても逆効果でございます。民衆は熱狂し、安樂はまるで英雄でありました」

秀能のこの発言に尊長は眉をひそめた。

「それはならん。あの者どもを英雄になど！ 恐怖の念を与えねばならぬ！」

尊重はそう言うのと、続いて秀能に命じた。

「早速、残る一人を馬淵の地まで引つ立てよ。そしてそこで首を刎ねい！」

秀能はそう言われると、「はは」と短く返事はしたが、戸惑いの表情を見せた。

「今日、今よりですか？」

もう暗い。夜道を、囚人を護送せよ、と言うのか？ 素朴な疑問だった。

尊長が秀能を睨みつけた。

「何をのんびりとした事を言っておる！盛高に脅されたのであろう。あの者、手強い。彼奴が策略を廻らす前にさっさと始末してしまうのじゃ！」

「はは！」

秀能は尊長に一喝されて、勢い良くそう返事すると、部屋を後にした。

それを見届けると、長蔵がぼつりと漏らした。

「うまく始末がつけばよいが……。しかし、当初の目論見通りにはいかんようだな」

尊長が答えた。

「な」に、もう数日で院宣が下される。それで大元締めの方然は土佐へ、あの弁舌の立つ親鸞は越後へ流される。この二人がいなければ、念仏教団はあつという間に瓦解する。もう心配は要らぬ」

長蔵も同意した。

「確かに、あの親鸞こそが要注意とは言える。あの、弁舌、聡明な頭脳、あの者こそ本当は何とか死罪にすべきだったが……」

尊長がにやりと笑った。

「心配御無用、ははは、生きて都へは帰れますまい。それは私が保証します」

長蔵は呆れた顔で答えた。

「本当に貴殿の悪巧みには頭が下がろうというもの、ははは！」

二人はひとしきり笑った。笑い終わると、最後に尊長はこう長蔵に告げた。

「左様、これで、あの東国武士の勢いも何とか抑えられるというもの。すれば、御上の目指す親政政治の実現はもうかなったも同然でありますよう！」

「まことに！」

しかし、歴史を作るのは偉大な人物でもなく、またその時代の有

力者達の陰謀でもない。

その時代時代に底辺で苦しみの声をあげている民衆である……。

であれば、念仏教団の指導者を幾人死罪に処せようが、幾人流刑に処せようが、時代の流れは止められない。

安楽の蒔いた命の種が、都の民衆の間では、この瞬間も大きく大きく膨らんでおり、もはやこの新しい仏教の流れ、時代の流れは止められないのだ、ということに、二人の策略家は気付くことなく満足げに各々の部屋へ戻るのであった。

### 第三部第二十六章

安樂処刑の翌日、盛高、清兵、次郎、三郎、ゆき、源太の五人は犬神人の里で、住蓮奪還の計画を練っていた。

しかし名案は無かった。敵は今度は大勢の軍勢を引き連れてこよう。勝ち目はあるまい。いや、そもそも六畳河原を処刑場には選ばないかもしれない……。

「応水様が朝一番より獄舎を見張っておられます」

ゆきが、そう報告し終えた、その時であつた。遠方より、その応水の叫び声が聞こえた。

「大変じゃ！大変じゃ！」

皆が小屋を飛び出した。見ると、息を切らせて、応水がこちらへ走ってくる。

「どうした！」

盛高が問うと、漸く小屋に辿り着いた応水が答えた。

「先を越されてしまった！もう住蓮は獄舎におらん！」

「えっ！」

一同が絶句した。

「わしの油断じゃ。昨晚から見張っておれば良かった。まさか……」

一同は黙りこくってしまった。

一体どこへ？

応水が言葉を続けた。

「何とか、獄舎にいる顔見知りの者に尋ねてみたが、きつく命令されておつて、何も喋ろうとせんのだ……。獄舎の近くに住む者にも聞いてみたが、誰も何もみていないと。おそらく深夜のうちに移送したのである」

清兵が沈黙を破った。

「私に心当たりがあります」

盛高が言つた。

「どこだ、清兵、その心当たりとは？」

清兵が答えた。

「近江の地、馬渕の里であります」

「えっ！」

盛高は絶句した。

盛高の驚きを見て、清兵はその根拠をゆつくりと話し始めた。

「以前に、盛高様と馬渕の里を視察したときのことでございます。かつて盛高様も小さい頃遊ばれたという美しい池がございました。今は『首洗いの池』と地元の人が呼んでいまして、多くの平家の落ち武者の首がそこで刎ねられ、また晒されたそうです」

一同は黙って聞いていた。清兵は続けた。

「盛高様にも以前お話ししたと思いますが、そこである老人より気になることを聞きました。最近、この池で一人の若者の首が刎ねられたと……」

盛高の視線が鋭くなった。清兵はさらにこう付け加えて、発言を締めくくった。

「その折には盛高様には内緒にしていたのですが……。老人によればその若者の名前は六郎と申したそうです……。恐らくは盛高様の以前の従者のお人ではありませんか？」

盛高の体がかくかくと震えだした。

「間違いない！」

盛高は立ち上がった。皆は事の意外な急展開にただおろおろするばかりであったが、彼は意を決してこう言い放った。

「面白い！我が故郷が決戦の場所となろうとは！行こう、今すぐに！清兵お前も来るか？」

清兵も立ち上がって返事した。

「勿論でございます！」

すると、今まで成り行きを見守っていたゆきが盛高の手を掴んだ。そして言った。

「盛高様、行くな、とは申しません。されど、されど、なにとぞ生



きて帰ってくださいませ！お願いでござります！」

盛高もゆきの手を握り返した。

「ゆきさん、私は昨日、安楽の死に様を見て感じたことがある……」

ゆきは、ただ悲しくて黙って聞いていた。

「安楽は自分の死を通じて多くの人に語りかけた。私にも……。それは、自分にとって大切な物は、自分の命を賭して守らねばならぬということだ。彼は自らの信仰を守った。また、源太さんら犬神人の皆を反逆と言う罪から救った。さらには多くの人に新しい命を、希望を与えた……」

皆は大きく頷いた。

「だから、私も自分の命をかけねばならん。住蓮を救うことは私にとつて何よりも今一番大切なことなのだ！分かってくれ！」

そう言つと、彼はゆきの手を振り解いた。

「行くぞ！清兵！」

「はい！」

二人は小屋の外へ出ると、各々馬にまたがった。そして次の瞬間には、「どお！」という掛け声と共に馬を走らせていた。

「盛高様！」

皆がその姿を見送った。ゆきは二人の姿が見えなくなると大

きい声で泣き始めた。

「ゆきさん、大丈夫だよ」

「そうとも、あの盛高様が死ぬはずがない！」

次郎、三郎がゆきを慰めた。すると、それまで黙っていた応水が突然言葉を発した。

「どうだ、我らもともかくも行つてみぬか？わしは馬淵までの道を知つておる。長く住んでおつたからのう」

応水のこの突然の提案に皆は驚いたが、お互い顔を見合わせると、皆が頷いた。決断は早かった。

「確かにここでじつとしててもどうなるものでもない。仰るとおり

！ともかくも行ってみましょう」

すると、それまで黙っていた源太が言葉を発した。

「わしは、この通りもう目が不自由なゆえお供は出来ん。されどお手伝いをしよう。馬を二頭準備しよう。次郎、三郎は馬を操れるであらう？ゆきさんと応水殿を乗せて、直ぐに近江の地へ向かわれよ！」

次郎が返事した。

「それはありがたい！源太さん、急いで頼む！」

「承知した」

と言うと、源太は外へ出た。皆も外へ出た。いても立つてもいられなかったのである。暫くすると馬の鳴き声が聞こえてきた。

「では行こう！」

次郎がゆきを、三郎が応水を後ろに乗せた。

「源太さん、吉報を待っていてくれ！」

次郎、三郎は勢い良く馬を走らせた。源太は彼らを見送りながら、住蓮の身の上を案じた。どんなに急いだところでもう間に合わないかもしれない……。いや間に合ったところでそもそも助けられるのであろうか？

不安に心を苛まれながらも、源太はひたすら住蓮の、そして救出に向かった仲間達の無事を祈り続けるのであった。

### 第三部第二十七章

処刑のため池の辺に座らせられると、住蓮は何故か、清々しい気分になった。

ここで往生叶うなら幸せというものの……。

この池は時子との思い出の場所でもあった。あの幸せな日々、何度、この池の辺で二人だけの時間を過ごしたことだろう。

ここへ連れてこられた事情は聞いていない。しかし前日の混乱振りを間近で見ているので、それを避けるためだろうということは容易に想像できた。

これも弥陀のお計らいか、有難い！

しかし、いつまでも感傷に浸ってはいけない。周りでは処刑の準備が淡々と進められている。

住蓮は過去への回想を潔く断ち切ると、大声で念仏を唱えだした。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

誰も止める者はいない。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

静寂さの中を、住蓮の念仏を唱える声だけが池の水面に響き渡った。

どれだけの時間が経過したろうか？

刀を手にした兵が住蓮の傍らに立った。

「覚悟はよいか？」

しかし住蓮は念仏に没頭して、その者の声も聞こえぬようであった。

住蓮にとって、死を前にしてのかってない体験だった。不思議だった。目を閉じているのにもかかわらず、その目の前に突然、

大空が開けた。すると、体の浮遊する感覚と共に、目の前に次から次へといろんな光景が飛び込んできた。山、海、川、町、人……。こんなことは念仏を唱えて初めて体験することだった。

自分は鳥になったのだ！

すぐに分かった。今までに味わったことの無い恍惚感だった。見慣れた山が目飛び込んできた。

あれは三上山だ……。

その頂上に時子の姿が見えた。こちらへ来いと手招きしている。美しい笑顔がはつきりと見える。

時子！

と、住蓮が心の中で叫んだ瞬間であつた。

「では覚悟めされい！」

兵の聲がした。と、次の瞬間、刀が振り下ろされる鈍い音と共に、念仏の聲が途絶えた。

そして、池がみるみる血で染まった……。

見守っていた多くの人々の嗚咽の聲が馬淵の里に響き渡った……。

こうして、安楽に続き、民衆救済のため、その青春の全てを費やした偉大な仏教者が、また一人ここ近江の地で壮絶な殉教死を遂げた……。

盛高ら一向は、結局、住蓮の救出には間に合わなかった……。

彼らが馬淵の里に到着したときには、もう処刑は既に終わって護送の兵員も全員引き上げていた。

残されていたのは首洗いの池に晒された住蓮の首と、池の辺に無残に放置された彼の胴体だけであった。

「住蓮！」

「住蓮様！」

カラスの泣き声に混じって、彼らの絶望に満ちた鳴き声が響いた。

暫く……。

そして、彼らの悲嘆の涙も枯れてしまった頃であろうか……。突然、二羽の美しい白鳥が彼らの目の前に舞い降りた。

「あれは……」

茫然自失としている彼らの前で、二羽の白鳥は楽しそうに舞を舞うかのように戯れあっている。それは、まるで悲嘆にくれた彼らを励ますかのようでもあった。

暫く、池で舞を舞った後、二羽の白鳥は飛び立った……。

彼らは白鳥の姿を見送っていたが、やがてその姿が見えなくなると、ゆきがぼつりとこぼれ漏らした。

「あれは、住蓮様と時子さんに違いありません」

誰も、あえてそれに反論しなかった。

「浄土へと旅立ったのでございます……。ようやく二人、永遠の幸せを手に入れたのですね」

凄惨な処刑場に立って、しかし、彼らは何とも表現しがたい安堵感と満足感に満たされ、白鳥の飛び立った方向をいつまでも見やっていた。

応水が、住蓮の遺骸を茶毘に付した。それが終わると、彼は皆に告げた。

「私は都へは帰らぬ」

次郎が尋ねた。

「それは、また、どうしてですか？」

応水が答えた。

「また諸国行脚の旅に出ようと思う。

安楽、住蓮の遺志を継いでいくためにはそれしかあるまいて！」

すると、次郎、三郎が声を合わせて叫んだ。

「応水様、私も連れて行ってください！」

「お願いします！」

「むしろ、安楽様、住蓮様からいただいた恩を返すにはそれぐらいのことはしないと！」

応水は、笑いながら彼らに答えた。

「足手まといにならんらつて来られよ！わしは一向に構わぬよつてな」

そのやりとりを黙って聞いていた盛高が、続いて応水に尋ねた。

「応水殿、私もその仲間には加えてもらえまいか？」

「えっ？」

思わぬ盛高の提案に皆は驚いた。応水はさすがに即答をしなかったが、暫く考えた後、こう彼に告げた。

「思っているよりも、実際はかなり辛いものであるぞ！」

「覚悟は出来ております」

「それでは、来られよ。ただし条件がある」

「条件……」

応水は、ゆきの顔を見るとにこりと笑った。そしてこう告げた。

「このゆきさんと夫婦になることじゃ。わしの条件とはな！」

「まあ！」

ゆきは、突然の応水の提案に顔を真っ赤にした。そのゆきの手を

盛高はしつかりと握り締めた。

「無論、私一人で行くつもりはありません……。ゆきさん、来てくれるよね？」

ゆきは黙って頷いた。次郎が清兵に問いかけた。

「勿論、清兵さんも行くよな？」

清兵は笑いながら答えた。

「私だけ置いていくつもりですか？そんなことは許しません」

「じゃあ、話は決まった！」

一同は声を上げて笑った。

こうして諸国行脚への旅立ちを決めた一同の姿を、はるか高く天上の空より、二羽の白鳥が見守っていたことを、彼らは気がついていただろうか？

### 第三部第二十八章（最終章）

近江の地、馬渕の里に住蓮の墓が作られたのは以上のような経緯による……。

そして、その墓は今も滋賀県近江八幡に存在する。例の首洗いの池の近くに。今に至るまで、この偉大な念仏者の墓は地元の人によって管理され、守られてきたわけである。

六条河原で、また馬渕の里で、千年以上前に、地に落ちた二粒の麦の種が、こうして死した後、また命を得、多くの人により育まれ、数百、数千、数万、いや数え切れないほどの新しい命の実を、実に今に至るまで結んできたのだ。

そして、この名も無き多くの実の一つ一つが、流罪となった法然、親鸞らを支え、結局は新しい日本の仏教史を作る源となったことを、きつと住蓮も安樂も喜んでいるに違いない。

繰り返して言いたい、偉大な仏教者が歴史を作ってきたのではない。これら多くの名も無き仏教者が偉大な仏教者を生み、育ててきたのである。

繰り返して言いたい、彼ら名も無き民衆こそが実は歴史の主人公であり、歴史を作ってきたのである。

さて……。

実は地元住民の間に伝わる、この墓にまつわる言い伝えがある。それによれば、この墓に住蓮と共に、彼の恋人の遺灰が、共に埋葬されているのだという。

残念ながらその真偽を確かめる術は無い。

もう一つ言い伝えがある。二月十日、毎年必ずその日にどこからか二羽の白鳥が首洗いの池に舞い降りるのだ、と。

そして、何とも美しい舞を踊るのだ、と……。



この真偽のほどを確かめたければ、一度その日にこの地を訪ねられればよい。

一方で、美しい白鳥の舞とは別に、二月のその時期、馬淵の里では、風が強ければ、女性の悲鳴にも似た風のうねり声を聞くことがある。

その時は、ハンセン病というだけで故郷を追われ、異郷の地で非業の死を遂げた一人の娘の物語を思い出して欲しい。

そしてさらに思いを馳せて欲しい……。

未だに多くのハンセン病患者が、故郷の地に帰りたい思いを抱きつつ、結局は人々からの言われのない差別のために、その帰郷が許されず、望郷の念に心を掻きまわられながら、今も異郷の地で孤独な死を迎えなければならぬ、という現実を……。

（完結）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5114c/>

---

阿弥陀仏よ何処に

2010年10月8日13時04分発行